東京藝術大学大学院音楽研究科 2021 年度 博士学位論文

東京音楽学校におけるオルガン演奏の変遷 ~近代日本におけるオルガン専門教育の成立過程を中心に~

2017年度入学音楽研究科音楽専攻鍵盤楽器研究領域(オルガン)

2317905 千田寧子

凡例

- 1. この論文で扱う「オルガン」は広義であり、リード・オルガン、ハルモニウム、パイプ・オルガンを含む。東京音楽学校で用いていた表記に拠るため、初期のものは一段鍵盤の足踏み式リード・オルガンを指していることが多い。楽器の別および一段鍵盤、二段鍵盤、ペダルの有無などについて特に指定する場合はその旨を付す。
- 2. 楽譜の整理番号は〔〕内に記す。

Org-Ped 分類楽譜… [Org-Ped No.]

OH, Org-sol 分類楽譜…〔OH No.〕〔Org-sol No.〕〔OH-sol No.〕

中田章所蔵楽譜…〔中田所蔵楽譜 No.〕

真篠俊雄所蔵楽譜…〔眞篠所蔵楽譜 No.〕

直篠文庫: 直篠俊雄関連楽譜群··· 「直篠文庫 No. 〕

3. 曲名、楽譜名の表記

東京音楽学校での表記をそのまま用いる場合は「曲名」『楽譜名』と表記する。

現存楽譜の出版情報を用いる場合は、

〔整理番号〕作曲家名:個々の曲名

[整理番号] 作曲家/編者:楽譜名(曲集など)

と表記する。

4. Peters 版のバッハオルガン全集 全 9 巻 (Johann Sebastian Bach (1685-1750): Johann Sebastian Bach's Compositionen für die ORGEL) [Org-Ped 1 1/1~1/9] は頻出するため [Org-Ped No.] Peters 版バッハ全集、と略記する場合がある。[Org-Ped 1 1/1~1/9] の版の変遷については、本文第一章第一節 1-1 「明治期受入れの Org-Ped 分類楽譜」13 頁に示した。

凡例	Î
----	---

目	1	ď

序論・・・	
第一章 明	月治期の東京音楽学校におけるオルガン演奏(1887-1912)・・・・・・・ 8
第一節	明治期の東京音楽学校で受入れた楽譜・・・・・・・・・・・ 10
1 - 1	明治期受入れの Org-Ped 分類楽譜・・・・・・・・・・・ 12
1 - 2	明治期受入れの OH、Org-sol 分類楽譜・・・・・・・・・・18
第二節	明治期の東京音楽学校で受入れた楽器・・・・・・・・・・ 28
2 - 1	明治期受入れのオルガン・・・・・・・・・・・・・・・29
第三節	明治期の東京音楽学校におけるオルガン履修生と教師・・・・・・・ 42
3 - 1	明治期のオルガン履修生と受持・・・・・・・・・・・・・43
3 - 2	明治期のオルガン受持教師・・・・・・・・・・・・・・・61
3 - 3	明治期オルガン受持教師の変遷・・・・・・・・・・・・・・64
3 - 4	島崎赤太郎の活動と留学・・・・・・・・・・・・・・・・66
3 - 4 -	- 1 東京音楽学校学生時代 1889 (明治22年~1902 (明治35) 年・・・・ 66
3 - 4 -	- 2 ライプツィヒ留学時代 1902 (明治35) 年~1906 (明治39) 年・・・ 69
第四節	明治期の東京音楽学校におけるオルガンの課題の変遷・・・・・・・ 72
4 - 1	1889 (明治 22) 年~1894 (明治 27) 年・・・・・・・・・・ 72
4 - 2	1894 (明治 27) 年~1901 (明治 34) 年・・・・・・・・・・ 77
4-3	1901 (明治 34) 年~1906 (明治 39) 年・・・・・・・・・・ 79
4-4	1906 (明治 39) 年~1912 (明治 45) 年・・・・・・・・・・ 85
第五節	明治期の東京音楽学校におけるオルガン演奏の記録・・・・・・・・ 98
5 - 1	1890 (明治 23) 年~1893 (明治 26) 年・・・・・・・・・ 100
5 - 2	1894 (明治 27) 年~1901 (明治 34) 年・・・・・・・・・ 103
5 - 3	1902 (明治 35) 年~1907 (明治 39) 年・・・・・・・・・・ 110
5 - 4	1906 (明治 39) 年~1912 (明治 45) 年・・・・・・・・・ 120
第六節	まとめ・・・・・・・ 127

第二章	大正期の東京音楽学校におけるオルガン演奏(1912-1925)・・・・・・・ 12	9
第一節	大正期の東京音楽学校で受入れた楽譜・・・・・・・・・・・・・ 13	0
1 - 1	大正期受入の Org-Ped 分類楽譜・・・・・・・・・・・・ 13	0
1 - 2	大正期受入の OH、Org-sol 分類楽譜・・・・・・・・・・ 13	2
第二節	大正期の東京音楽学校で受入れた楽器・・・・・・・・・・ 13	8
2 - 1	大正期受入れのオルガン・・・・・・・・・・・・・・・13	8
第三節	大正期の東京音楽学校におけるオルガン履修生と教師・・・・・・・ 14	5
3 - 1	大正期のオルガン履修生と受持・・・・・・・・・・・・・14	5
3 - 2	大正期のオルガン受持教師の変遷・・・・・・・・・・・・ 16	0
3 - 3	中田章の活動と関連資料・・・・・・・・・・・・・・・ 16	2
3 - 3	- 1 中田章の演奏活動・・・・・・・・・・・・・・16	2
3 - 3	- 2 中田章の所蔵楽譜・・・・・・・・・・・・・・・16	6
第四節	大正期の東京音楽学校におけるオルガンの課の変遷・・・・・・・・17	5
第五節	大正期の東京音楽学校における演奏の記録・・・・・・・・・18	1
第六節	まとめ・・・・・・・・・・・・・19	2
第三章	昭和期の東京音楽学校におけるオルガン演奏 (1925-1952)・・・・・・19	3
第一節	昭和期の東京音楽学校で受け入れた楽譜・・・・・・・・・19	4
1 - 1	昭和期受入の Org-Ped 分類楽譜・・・・・・・・・・・19	5
1 - 2	昭和期受入の OH、Org-sol 分類楽譜・・・・・・・・・・・20	0
第二節	昭和期の東京音楽学校で受け入れた楽器・・・・・・・・・20	5
2 - 1	昭和期受け入れのオルガン・・・・・・・・・・・・20	6
第三節	昭和期の東京音楽学校におけるオルガン履修生と教師・・・・・・・21	2
3 - 1	昭和期のオルガン履修生と受持・・・・・・・・・・・・21	2
3 - 2	昭和期のオルガン受持教師の変遷・・・・・・・・・・・24	0
3 - 3	眞篠俊雄の活動、留学、関連資料・・・・・・・・・・・・24	2
3 - 3	- 1 真篠俊雄の活動・・・・・・・・・・・・・・・24	2
3 - 3	- 2 真篠俊雄の留学・・・・・・・・・・・・・・・・24	7
3 - 3	- 3 真篠文庫:真篠俊雄関連楽譜群・・・・・・・・・・・25	8
第四節	昭和期の東京音楽学校におけるオルガンの課題の変遷・・・・・・・27	9

界ユ即	昭和期の東京首架字校における演奏の記録・・・・・・・・・・286
第六節	まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・297
結論・・	
参考文献	304
謝辞	
付録資料	
資料①-1	「現存楽譜リスト〔Org-Ped〕分類楽譜」
資料①-2	「現存楽譜リスト〔OH、Org-sol〕分類楽譜」
資料②	「東京音楽学校購入オルガンリスト」
資料③	「東京音楽学校オルガン演奏リスト」
資料④	「島崎赤太郎ライプツィヒ時代オルガン関係演奏会プログラム」
資料⑤	「中田章所蔵楽譜リスト」
資料⑥-1	「眞篠俊雄所蔵楽譜リスト」
資料⑥-2	「Staatliche Akademische Hochschule für Musik in Berlin 1920-1921 演奏会プログラム」
資料⑥-3	「眞篠俊雄ベルリン時代オルガン関係演奏会プログラム」
資料⑦	「眞篠文庫:眞篠俊雄関連楽譜群」

序論

本研究は、「東京音楽学校におけるオルガン演奏の変遷」について、オルガンに関わる楽譜、楽器、教育の調査をもとに明らかにするものである。

日本の西洋音楽受容史において、東京音楽学校が果たした役割は大きい。これは、日本で唯一の官立音楽専門機関として日本の音楽家を多く輩出していることや、日本の西洋音楽の基盤となる小中等教育に携わる教員を養成したことからも明らかである。オルガンはその中で初期から科目に組み込まれた。東京音楽学校でオルガンに求められたことの一つには、「学校教育用楽器」としての需要があった。近代日本の音楽教育の中で、オルガンは早くに国産化量産化され全国に普及したことから、各地での音楽教育において音楽教師がオルガンを弾くことは必須となった。この「学校教育楽器としてのオルガン」は、簡易な鍵盤楽器という位置づけであったと考えられる。いずれ音楽教師を教える立場となる師範科学生の多くは、必修としてオルガンに取り組んだ。明治期をピークとして、大正、昭和期に至るまで、オルガン履修生の数は師範科学生によって一定数以上が保たれている。

一方で、オルガン演奏を専門として東京音楽学校で学ぶものが初期の段階からいたのもまた事実である。最初期の専科オルガン専攻生を指導したのは外国人教師のルドルフ・ディットリヒ Rudolf Dittrich (1861-1919) である。彼は、音楽の専門家として東京音楽学校の音楽全般を担当したが、実は母国オーストリアでオルガニストをしていた実績があった。また、東京音楽学校の前身である音楽取調掛の時から、所蔵楽譜には「パイプ・オルガン」を想定したペダル付きのオルガン曲のものが既に存在していた。それらは東京音楽学校の初期に前述のディットリヒによって使い始められた。彼は、それらの楽譜を用いてオルガン専攻生に対して課題を出している。1899 (明治 32) 年には東京音楽学校に二段手鍵盤ペダル付のリード・オルガンが設置され、本格的なオルガン曲を演奏できる環境になった。器楽の専攻生の中でオルガンを選択するものは、少数ながら明治、大正、昭和期を通して存在し、前述の師範科生の中にも、オルガン演奏に傾倒するものがあった。彼らが受けたオルガン教育は、専門教育と呼べるものだったと考えられるが、その中で行われたオルガン演奏の実態とはどのようなものだったのだろうか。

近代日本におけるオルガンに関する研究史

日本のパイプ・オルガン黎明期についての研究には、1932(昭和 7)年発行の小冊子 『パイプオルガンに就いて』「をもとにした、金子純子「わが国におけるオルガンの歩み」 (1980)²、志村拓生「日本のオルガン小史」(1985)³、があり、明治初年から昭和初期に かけての日本におけるパイプ・オルガンの設置状況を調査している。ただし、東京音楽学 校では明治期大正期にパイプ・オルガンが存在しなかったので、これらの調査から外れて いる。

リード・オルガンについては、佐藤泰平「日本の古いリード・オルガン-現存する明治・大正・昭和初期のリード・オルガンをたずねて――」(1994) ⁴、赤井励『オルガンの文化 史』(2006) ⁵の中で、東京音楽学校のものについてふれている。佐藤は、現在東京藝術大学大学美術館が所蔵する三台の現存楽器を調査し、東京音楽学校所蔵の「楽器器械原簿」「楽器監守簿」「楽器機械出納帳」から、1917 (大正 6) 年 8 月までに東京音楽学校が購入したオルガンの(1)製造会社別、(2)納入者別、(3)売却、(4)他学校へ譲渡、(5)関東大震災で焼失、(6)東京芸術大学大学資料館にて保存、(7)不明の台数を明らかにした。ここには、東京音楽学校における運用状況は含まれず、現在東京藝術大学音楽学部に現存するペダル付リード・オルガンにも触れていない。赤井は、国産リード・オルガン製造の歴史を追う中で、才田オルガン、山葉オルガン、西川オルガンの初期の楽器製造と東京音楽学校との関連について、また、輸入オルガンのメーカー、メーソン&ハムリン社の出資者と東京音楽学校(音楽取調掛)の要人との関わりついて述べているが、購入の経緯を推測したもので、東京音楽学校内での実際を追ったものではない。

東京音楽学校でのオルガン演奏と教授については、東京藝術大学オルガン科教授であった秋元道雄が「日本のオルガンの黎明」(1976) 6と、著書『パイプオルガン 歴史とメカニ

¹ 『パイプオルガンに就て』東京:日本楽器製造株式会社、1932年(『日本のオルガンⅠ』東京:日本オルガニスト協会、1985年、202~249頁掲載)。

 $^{^2}$ 金子純子「わが国におけるオルガンの歩み——明治初年から昭和 22 年まで——」『オルガン研究』第 8 巻、1980 年、61~73 頁。

³ 志村拓生「日本のオルガン小史」『日本のオルガン I 』東京:日本オルガニスト協会、1985 年、13~25 頁。

⁴ 佐藤泰平「日本の古いリードオルガン――現存する明治・大正・昭和初期のリードオルガンをたずねて――」『立教女学院短期大学紀要』第26号、1994年、12月、91~138頁。

⁵ 赤井励『オルガンの文化史』東京:青弓社、2006年、53~57、68~72、74~77頁。

⁶秋元道雄「日本のオルガンの黎明」『Organist』第3巻、1976年、13~15頁。

ズム』(2002)の「[IV] 日本のオルガニスト教育」の項7で東京音楽学校のオルガン教育の系譜について記述している。ディットリヒから真篠俊雄(1893-1979)に至る概略的な流れを記述したものであるが、資料的な裏付けが示されていない。

東京音楽学校でオルガンに関わった人物については個々の研究が行われているものもある。菊池武信 (1856-1916)、ディットリヒ、ノエル・ペリー Noël Peri (1865-1922)、島崎赤太郎 (1874-1933) については個別に研究が行われている。東京音楽学校でのオルガン教授に言及したものには、小野亮祐の「ドイツのオルガン教授と洋楽黎明期日本との接点についての試論——島崎赤太郎の「オルガン留学」を通しての検討——」(2013) 8がある。ここで小野は、島崎が留学によって修得してきたことは、帰国後のオルガン教授に反映されていないとの見解を示しているが、調査対象の資料が島崎帰国直後の1907 (明治40) 年度に限られており、その後の教授内容の発展、そこにみられる留学の影響に言及していない。

他に、人物についての研究には以下のようなものがある。

田邉祐司「本邦初の英語音声書の著者・菊池武信の足跡」(2007) 9

田邊祐司「日本英語音声教育史—『英語発音秘訣』の著者 菊池武信の足跡を求めて」 (2009) 10

安部規子「修猷館の英語教師・菊池武信の履歴について」(2010) 11

安部規子「修猷館の英語教育―明治時代の英語教師(3)柳河での菊池」(2011) 12

平沢博子「西洋音楽の真髄を伝えたお雇い外国人の生涯 ルドルフ・ディットリヒ物語」 (1998~2003)¹³

中村理平「ノエル・ペリー神父と日本の洋楽」『キリスト教と日本の洋楽』(1996) ¹⁴

 $^{^{7}}$ 秋元道雄『パイプオルガン 歴史とメカニズム』東京:ショパン、2002 年、(〔IV〕 日本のオルガニスト教育」、254~257 頁)。

⁸小野亮祐「ドイツのオルガン教授と洋楽黎明期日本との接点についての試論——島崎赤太郎の「オルガン留学」を通しての検討——」『関西楽理研究』30号、2013、46~56頁。

⁹ 田邉祐司「本邦初の英語音声書の著者・菊池武信の足跡」『英語青年』通号 1901、2007 年、39~41 頁。 ¹⁰ 田邊祐司「日本英語音声教育史——『英語発音秘訣』の著者 菊池武信の足跡を求めて」『日本英語教育 史研究』24 号、2009 年、23~43 頁。

¹¹ 安部規子「修猷館の英語教師・菊池武信の履歴について」『日本英語教育史研究』25 号、2010 年、23~48 頁。

 $^{^{12}}$ 安部規子「修遊館の英語教育—明治時代の英語教師 (3) 柳河での菊池」『有明工業高等専門学校紀要』 47 巻、 2011 年、 5 20 頁。

¹³ 平沢博子「西洋音楽の真髄を伝えたお雇い外国人の生涯ルドルフ・ディットリヒ物語」『おんかん』東京:音楽鑑賞教育、1998年10月~2003年3月。

¹⁴中村理平『キリスト教と日本の洋楽』東京:大空社、1996年、28~56頁。

赤井励「島崎赤太郎の一生」『オルガンの文化史』(2006) 15

鈴木治「島崎赤太郎研究序説:唱歌・音楽教育からのアプローチをこころみる」(2011) ¹⁶ 鈴木治「島崎赤太郎研究(2) ―島崎作曲作品試論―」(2012) ¹⁷

鈴木治「島崎赤太郎研究 (3) ―ライプツィヒ留学時代に聴いた演奏会―」(2013) 19 鈴木治「島崎赤太郎研究―留学の足跡――」(2013) 20

これらの資料では、各人物が東京音楽学校でオルガン教師として何を教えたのか、オルガン教育にどのような貢献をしたのかについては、具体的に触れていない。大正期、昭和期の東京音楽学校のオルガン演奏、オルガン教授で大きな役割を担った中田章 (1886-1931)、真篠俊雄については先行研究がない。

本研究の方法と対象資料

幸いにも東京音楽学校の上野校地は震災戦災を免れ、現在東京藝術大学には東京音楽学校当時の資料が多く残されている。それらの資料を用いて執筆した筆者の修士論文「明治期東京音楽学校におけるオルガン演奏をめぐって」(2016年度)²¹では、楽譜、楽器、教育という三つの観点から、明治期東京音楽学校(1887~1912)におけるオルガン演奏の実態を探った。本研究はその調査対象を明治・大正・昭和期と拡大し、東京音楽学校でのオルガン演奏の変遷を網羅的に捉えようとするものである。

「東京音楽学校で受入れた楽譜」については、東京音楽学校の楽譜受入れに関する帳簿 『楽譜原簿』『圖書出納簿』『圖書出納帳』²²と、現在東京藝術大学附属図書館に現存する

¹⁵ 赤井励『オルガンの文化史』東京:青弓社、2006年、108~142頁。

 $^{^{16}}$ 鈴木治「島崎赤太郎研究序説:唱歌・音楽教育からのアプローチをこころみる」『礼拝音楽研究』 11 巻、 2011 年、 15 ~ 23 頁。

¹⁷ 鈴木治「島崎赤太郎研究(2) ―島崎作曲作品試論―」『礼拝音楽研究』12 巻、2012 年、35~46 頁。

¹⁸ 小野亮祐「ライプツィヒ時代の嶋崎赤太郎-ライプツィヒ音大に残された史料を中心に――」『音楽文化教育学研究紀要』24巻、2012年、39~45頁。

¹⁹ 鈴木治「島崎赤太郎研究 (3) ―ライプツィヒ留学時代に聴いた演奏会―」『礼拝音楽研究』13 巻、2013 年、27~36 頁。

²⁰ 鈴木治「島崎赤太郎研究―留学の足跡――」『音楽教育史研究』16 巻、2013 年、1~12 頁。

²¹ 千田寧子「明治期 東京音楽学校におけるオルガン演奏をめぐって」修士論文、東京藝術大学、2016 年度。

²² 『楽譜原簿』『圖書出納簿』『圖書出納帳』の概要については、本文第一章第一節「明治期の東京音楽学校で受入れた楽譜」、10~11 頁参照。

当時の楽譜の調査を行う。「東京音楽学校で受入れた楽器」では、東京音楽学校の楽器に関する会計資料『楽器器械原簿』『楽器機械出納帳』『楽器監守簿』『寄附関係』²³と、当時の楽器掛による楽器調査の記録²⁴、および現存する楽器の調査を行う。「東京音楽学校におけるオルガン履修生と教師」「東京音楽学校におけるオルガンの課題」は、東京音楽学校関係公文書(教務関係)文書綴に含まれる「成績関係資料」を中心に、『東京音樂學校一覧』も併せて調査を行う。オルガン教師の中で明治期、大正期、昭和期のそれぞれで重要な役割を果たした島崎赤太郎、中田章、眞篠俊雄についてその活動をまとめ、遺っている資料について調査を行う。「東京音楽学校における演奏の記録」は『東京芸術大学百年史演奏会編』からのオルガン演奏のリストアップを行い、「楽譜」「楽器」の状況との照合からその実態を探る。

東京音楽学校におけるオルガンの表記と種類

東京音楽学校においてオルガンははじめ「風琴」という科目名であった。初期に使われた楽器は、かつての小学校でよく弾かれていたような一段鍵盤足踏み式の「リード・オルガン」であった。この頃の演奏記録をみると演奏形態は「風琴獨奏」あるいは「オルガン(演奏)」と記されており、明確な使い分けはない。初期の「風琴」「オルガン」は「手鍵盤のみのリード・オルガン」のことを示している。

明治30年代になると、リード・オルガンの中でも「二段鍵盤・ペダル付き」という特殊な機構を備えたものが導入され、それはパイプ・オルガンの代用として使われた。この楽器を用いた演奏時に「大風琴」と示されたこともあるが、ほとんどの場合は「風琴」「オルガン」に含まれたままであった。大型の「ハルモニウム」の受入れもあり、導入後の演奏記録には「ハーモニウム、ハルモニューム、ハルモニューム」といった表記が多くみられるが、やはり「風琴」「オルガン」の名称との使いわけは明確ではない。

「パイプ・オルガン」が設置されたのは 1928 (昭和3) 年のことで、以降の演奏では「パイプ・オルガン」の表記がみられるが、「オルガン」も使われており、両方の表記に厳密な使い分けがされているわけではない。

²³ 『楽器器械原簿』『楽器機械出納帳』『楽器機械出納簿』『楽器監守簿』『寄附関係 自明治二十四年 至昭 和九年』、東京藝術大学音楽学部演奏企画室楽器係所蔵。概要は本文第一章 第二節「明治期の東京音楽学 校で受入れた楽器」、28 頁参照。

²⁴ 『楽器品目員数表(付 オルガンリスト No. 1~83)』明治 43 年 [40 年] 9 月。東京藝術大学附属図書館所蔵。同上参照。

楽譜の受入れの面では、ペダル付か否かによって分類が行われているが、そのいずれも大きくは「オルガン」というくくりでまとめられている。手鍵盤のみで演奏できるものについては「オルガン」「風琴」「リード・オルガン」「ハルモニウム」が同列に扱われている。実際に東京音楽学校で使われた「オルガン」のうち、数の上で大部分を占めるのは一段鍵盤のリード・オルガンであり、「風琴」「オルガン」という表記は概ね手鍵盤のみのリード・オルガンを指しているが、一部ではペダル付の楽器やハルモニウムのことを指している場合があった。東京音楽学校において「オルガン」という表記が示すものは、次第に変化し様々な側面をもった。小型のリード・オルガンしかなかった時期には、簡易な鍵盤楽器としての需要が大きかったが、一部ではパイプ・オルガンの代用としても用いられた。また、リード・オルガンおよびハルモニウム独自の専門性をもつ場合もあった。オルガン履修生はその中で、楽器の事情やおかれた環境に応じて、オルガン演奏を行っていたと考えられる。

東京音楽学校でのオルガン演奏を明らかにすることは、近代日本におけるオルガン演奏の変遷史を探るうえで重要な意味を持つ。ただし、東京音楽学校内での事象は、必ずしも日本におけるオルガン演奏変遷のすべてを表わすものではない。オルガンは教会との関わりが強く、日本においてもキリスト教の伝播とともにその文化がすでに入ってきている。最初期は戦国時代にまで遡ることになるが、禁教によっていったん影をひそめる。明治維新によってキリスト教が解禁されると居留地を中心に教会が建ちはじめ、それに付随した設備としてオルガンも導入された。東京音楽学校のオルガン履修生の中には教会でオルガンを弾く機会を持ったものもあり、1890(明治 23)年に本郷の中央会堂にはハルモニウムをパイプ・オルガンに改造したものが据え付けられ、島崎赤太郎がこれを演奏していたという25。東京音楽学校で明治期から大正期にかけてオルガンを教授した下村(中村)芳子がそうであったように、ミッションスクールでオルガンを学ぶ機会もあった。昭和期には東京音楽学校に入学する前に、すでにミッションスクールでパイプ・オルガンの演奏を経験しているものも少なくない。

このような、教会の活動とともにあるオルガンの演奏も、日本のオルガン演奏変遷を追 う上では大切な事象であるが、本研究ではそこまで対象を広げず、東京音楽学校を中心と することにした。今後の研究で対象が広げられるうえでも、東京音楽学校での事象がまと

²⁵ 赤井励『オルガンの文化史』東京:青弓社、2006年、114~119頁。

められているべきだと考えるからである。日本の西洋音楽の受容史において東京音楽学校が果たした大きな役割を考えると、本研究が持つ意義は大きいといえる。東京音楽学校におけるオルガン演奏の実態に迫り、近代日本におけるオルガン専門教育の成立過程の一端を明らかにしたい。

第一章 明治期の東京音楽学校におけるオルガン演奏(1887-1912)

1872 (明治 5) 年に学制が発布され近代日本の教育体制が整えられる中、東京音楽学校の前身である音楽取調掛は、1879 (明治 12) 年 10 月に文部省内に設置されたが、音楽取調掛でのオルガンはどのような存在だったのだろうか。

1880 (明治 13) 年 6 月「伝習生募集案伝習科目」の中に「奏楽の初歩」として早速オルガンが登場している²⁶。1883 (明治 16) 年 6 月「音楽取調掛規則」の時点では必修科目の一つであり、三年、四年次の履修科目になっているが、唱歌教授に付随するものであった²⁷。

次に楽器の面を見てみると、『學事年報』によれば、1887 (明治 20) 年時点で 12 台のオルガンを所蔵していた²⁸。これには外国製のものが含まれるが、総じて小型の楽器であった。また、音楽取調掛の事業には「楽器試作」があり、オルガンはその対象になっている²⁹。

楽譜は、1883 (明治 16) 年までに手鍵盤のみのリード・オルガンのものが 4 件、1885 (明治 18) 年 6 月までにさらに 7 件、そしてペダル付のものが 2 件受入れられている 30 。

音楽取調掛の鍵盤の教授は、外国人教師のルーサー・ホワイチング・メーソン Luther Whiting Mason (1818-1897) が担当していた³¹。メーソンから手ほどきをうけた伝習生の中には、東京音楽学校の初期のオルガン教授に関わったものもいる³²。

²⁶ 東京芸術大学音楽取調掛研究班編『音楽教育成立への軌跡』東京:音楽之友社、1976、14頁。

 $^{^{27}}$ 東京芸術大学百年史刊行委員会編『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第一巻』東京:音楽之友社、1987 年、 $45\sim51$ 頁。

²⁸ 『學事年報 自明治二十年度至明治三十年度』中、「東京音楽學校明治二十年々報」 書籍楽器の項、「楽器等表」。東京藝術大学大学史史料室所蔵。

²⁹ 東京芸術大学百年史刊行委員会編『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第一巻』東京:音楽之友社、1987 年、113~114 頁。

³⁰ 関根和江「音楽取調掛から東京音楽学校への軌跡——音楽取調掛時代楽譜受入れ・所蔵状況」『近代日本における音楽専門教育の成立と展開』平成 17~19 年度科学研究費補助金・基礎研究 (B) 研究成果報告書課題番号 17320026、2008 年、35~39 頁。

³¹ 東京芸術大学百年史刊行委員会編『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第一巻』東京:音楽之友社、1987 年、229~245 頁。

³² 東京芸術大学音楽取調掛研究班編『音楽教育成立への軌跡』東京:音楽之友社、1976、16頁。

演奏の記録をみてみると、音楽取調掛では鍵盤楽器はピアノが主に使われていた。オルガンが登場するのは 1881 (明治 14) 7月期末試業演奏会での唱歌の伴奏と、1882 (明治 15) 年1月音楽取調掛成果報告演奏会におけるメーソンによる唱歌伴奏の 2 件のみである³³。

以上のことから、音楽取調掛におけるオルガンは、楽譜、楽器の面での環境を整えはじめたところではあるが、その演奏実態は唱歌伴奏にとどまっていたことがわかる。

1887 (明治 20) 年、東京音楽学校が始動した。オルガンはそのはじめから、「風琴」という名称で科目に組み込まれた。音楽取調掛からの流れを受けて唱歌との関わりが強く、初期のオルガン教育は唱歌の演奏を目標点とするところから始まっている。

 $^{^{33}}$ 東京芸術大学百年史刊行委員会編『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第一巻』東京:音楽之友社、 1987 年、 197 ~ 228 頁。

第一節 明治期の東京音楽学校で受入れた楽譜

東京音楽学校で所蔵した楽譜については、楽譜に関する帳簿である『楽譜原簿』『圖書出納簿』『圖書出納帳』³4に記録がある。また、ほとんどの楽譜は「旧分類楽譜」として現存しており、現在も藝術大学附属図書館に所蔵されている。それらの調査と照合をおこなうことで、東京音楽学校でのオルガン楽譜がどのように蓄積されていったのかを追うことができる。

楽譜原簿と圖書出納簿は継続する帳簿であり、楽譜の受入れ日、タイトル、部数、価格などを記してある。1895 (明治 28) 年から記載が始まっている。

- ① 『楽譜原簿』には 1895 (明治 28) 年 4 月 1 日~1905 (明治 38) 年 10 月 9 日まで、受入れ番号 1~1755 番までが記載されている。このうち受入れ番号 1~618 番までは 1895 (明治 28) 年 4 月 1 日付となっているが、実際にはそれ以前の音楽取調掛時代のものを含むことがわっている³⁵。
- ② 『圖書出納簿 自明治三十八年度 至同四十四年 洋書及び樂譜の部』は、1905(明治 38)年4月1日~1912(明治 45)年2月9日まで、受入れ番号1~3306番までの記載であるが、1663番までは『楽譜原簿』からの繰越である。
- ③ 『圖書出納帳 自明治四十五年度以降 洋書及び樂譜/部』は、1912 (明治 45) 年 4 月 1 日~1929 (昭和 4) 年 3 月 27 日まで、受入れ番号 3307~5853 番までの記載である。

³⁴ 東京藝術大学附属図書館所蔵。

_

³⁵ 関根和江「音楽取調掛から東京音楽学校への軌跡――音楽取調掛時代楽譜受入れ・所蔵状況」『近代日本における音楽専門教育の成立と展開』平成17~19 年度科学研究費補助金・基礎研究(B)研究成果報告書課題番号17320026、2008年、10~39頁において、『楽譜原簿』以前の資料として、明治18年記入開始の『楽譜假名目録』の存在が示されている。『楽譜假名目録』と『楽譜原簿』の対照については、関根和江「音楽取調掛から東京音楽学校へ――2つの楽譜原簿から見る資料の継承」『東京音楽学校の諸活動を通してみる日本近代音楽文化の成立――東アジアの視点を交えて』平成20~23 年度科学研究費補助金・基礎研究(B)研究成果報告書課題番号20320030、2013年、6~45頁、に詳しい。

④ 『圖書出納簿 自昭和四年度 至同二十六年度 楽譜』は、1929(昭和 4)年 4 月 1 日~1952(昭和 27)年 3 月 24 日まで、受入れ番号 5854~8759 番までの記載である。

以降の受入れについては、年度毎の楽譜台帳に記載が続く。「旧分類」に属する楽譜は 1953 (昭和28) 年の途中受入れ番号9000番台前半までであった。

当時の楽譜は、そのほとんどが現在も東京藝術大学附属図書館に所蔵されている。楽譜は受入れ当初から楽器別の用途に応じた分類を付記されているが、オルガン楽譜はペダルのあるなしによってさらに二系統に区分されていた。「Org-Ped」はペダル付の曲を対象としている。一方「OH」あるいは「Org-sol」では、手鍵盤のみの曲を想定している。この区分には多少の混同がみられ、明らかにペダル付の楽譜に「OH」「Org-sol」の分類が付記されているものもあるが、概ねこの分類は適用され東京音楽学校の期間中はこの二つの分類系統1.「Org-Ped」、2.「OH、Org-sol」での受入れが続いた。

これらの帳簿と実際の楽譜調査をもとに、現存楽譜リストを作成した。以下、各楽譜の詳細な書誌情報については〔分類番号〕をもとに、資料①-1「現存楽譜リスト〔Org-Ped〕分類楽譜」、資料①-2「現存楽譜リスト〔OH、Org-sol〕分類楽譜」を参照のこと。

1-1 明治期受入れの Org-Ped 分類楽譜

明治期受入れの Org-Ped 分類楽譜は 62 点 [Org-Ped 1] ~ [Org-Ped 27] だが、うち 8 点 は除籍されており現存するのは 54 点である。

音楽取調掛時代の受入れは、Peters 版バッハオルガン全集 全 9 巻 Johann Sebastian Bach (1685-1750): *Johann Sebastian Bach's Compositionen für die ORGEL* [Org-Ped 1 1/9~9/9] と、Peters 版メンデルスゾーンのオルガン曲集 Felix Mendelssohn Bartholdy (1890-1847): *Compositionen für die Orgel* (Drei Praeludien und Fugen Op. 37 / Sechs Sonaten Op. 65 を収録) [Org-Ped 2] であった。いずれも本格的なオルガン曲であり、現在でもよく演奏される重要なレパートリーである。



写真 1-1 [Org-Ped 1 1/9] 中表紙 [東京藝術大学附属図書館蔵]



写真 1-2 [Org-Ped 2] 中表紙 [東京藝術大学附属図書館所蔵]

[Org-Ped 1 1/9~9/9] Peters 版バッハ全集全 9 巻のうち、2 巻、3 巻、5 巻の三冊は消失している。9 巻は帳簿上消失となっているが、1912 (明治 45) 年に [OH223 1/3] として再び受入れられ現存することがわかった。



写真 1-3 [OH 223 1/3] 中表紙 [東京藝術大学附属図書館所蔵]

4 巻は Hermann Keller (1885-1967) による改訂後の版であり、何等かの理由で音楽取調 掛時代のものが失われ、後から補填されたと考えられる。当初からの巻は 1900 年以前の版 である。

現存する 1 巻、6 巻、7 巻、8 巻、9 巻は、Peters の 1900 年版のカタログ³⁶の掲載内容と一致している。消失した 2 巻、3 巻、5 巻および補填される以前の 4 巻についてもおそらく同様だったと考えられる。1900 年版のカタログ掲載内容は、9 巻を除いて現行の 1940 年版と変わらない。9 巻は掲載曲の相違がみられる。[Org-Ped 1 9/9] にあって現行版にはないものは Fuga D-dur BWV580、Ach Gott und Herr BWV692、Jesu Leiden, Pein und Tod Anh. 57、Christ lag in Todes Banden BWV695a である。一方で、現行版に掲載されている Fantasia conimitazione h-moll BWV563、Trio G-dur BWV1027a、Trio G-dur BWV586、Pedalexercitium g-moll BWV598、Allein Gott in der Höh sei Ehr BWV715、Herr Jesu Christ, dich zu uns wend BWV726、In dulci jubilo BWV751、Nun freut euch liebe Christen g'mein BWV755、Vater unser im Himmelreich BWV762、Wie schön leuchtet der Morgenstern BWV739 は〔Org-Ped 1 9/9〕に掲載されていない。

-

³⁶ Katalog der Edition Petes. Leipzig: C. F. Peters. 1900

東京音楽学校となって、以下の Org-Ped 分類楽譜が受入れられた。

1895 (明治28) 年

[Org-Ped 3 1/2 2/2] Christian Heinrich Rinck (1770-1846): Practische Orgelschule Op. 55

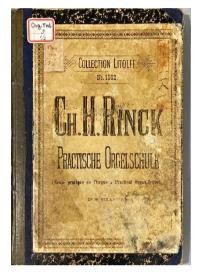


写真 1-4 [Org-Ped 3 1/2] 表紙 [東京藝術大学附属図書館所蔵]

1900 (明治33) 年

[Org-Ped 4 2/2] August Gottfried Ritter (1811-1885) : Ritter Orgel-Schule, Band II

[Org-Ped 5] Johann Gottlob Schneider (1789-1864): 25 Pedal-Studien, Heft I Op. 67

[Org-Ped 6] Adolph Hesse (1809-1863): Ausgawälte Orgelstücke für 2 und 4 Hände

[Org-Ped 7] Alexandre Guilmant (1837-1911) : Concert historique Orgue

[Org-Ped 4 1/2] は除籍されており現存しないが、おそらく Ritter : Orgel-Schule Band I である。

1901 (明治34) 年

[Org-Ped 8 1/2] Jacques-Nicolas Lemmens (1823-1881) : Ecole d'Orgue

[Org-Ped 9] Georg Friedrich Händel (1685-1759) : LARGO (Aria) Große Orgel, G-dur

[Org-Ped 10 1/2 2/2] Rudolph Palme (1834-1909) : Sonate Op. 12 / Sonate Op. 27

[Org-Ped 11] August Gottfried Ritter: Sonate Op. 11

[Org-Ped 12] Camille Saint-Saëns (1835-1921) : *Trois Préludes et Fugues pour Orgue Op. 99* [Org-Ped 13] César Franck (1822-1890) : *3 Pièces pour le Grand Orgue*

[Org-Ped 8 2/2] は現存しないが、おそらく [Org-Ped 8 1/2] と同本の Lemmens: *Ecole d'Orgue* であった。

1902 (明治35) 年

[Org-Ped 14] Eugene Gigout (1844-1925) : Six Pièces d'Orgue avec pédale obligée

[Org-Ped 15] César Franck: Trois Chorals pour Grand Orgue

[Org-Ped 17] Clément Loret (1833-1909): Exercice Journalier

[Org-Ped 18] L. A. Bourgault-Ducoudray (1840-1910) : Adagio pour Orgue

[Org-Ped 16] は除籍されており、現存しない。『楽器原簿』の記載によれば Charles-Marie Widor (1844-1937) の Symphonie だったようである。

1904 (明治37) 年

[Org-Ped 19] → [OH 19 1/3] Alexandre Guilmant: L'Organiste pratique 6me Liv [Op. 50]

[Org-Ped 19] → [OH19 2/3] Alexandre Guilmant: L'Organiste pratique 9me Liv Op.56

[Org-Ped 19] Alexandre Guilmant: L'Organiste pratique 10me Liv. Op. 57

[Org-Ped 20] Camille Saint-Saëns: Six Préludes et Fugues pour Orgue

[Org-Ped 21 1/2] Moritz Brosig (1815-1887) : 5 Präludien und eine Fantasie Op. 21 Heft I

[Org-Ped 23 1/12-12/12] Wilhelm Volckmar (1812-1887) : Orgelmagazin, $I \sim X$

[Org-Ped 24 1/6] Alexandre Guilmant: L'Organiste pratique 1re Liv. Op. 39

[Org-Ped 24 2/6] Alexandre Guilmant: L'Organiste pratique 2me Liv. Op. 41

[Org-Ped 24 3/6] Alexandre Guilmant: L'Organiste pratique 3me Liv. Op. 46

[Org-Ped 24 4/6] Alexandre Guilmant: L'Organiste pratique 5me Liv. Op. 49

[Org-Ped 24 5/6] Alexandre Guilmant: L'Organiste pratique 11 me Liv. Op. 58

[Org-Ped 24 6/6] Alexandre Guilmant: L'Organiste pratique 12me Liv. Op. 59

[Org-Ped 19] 全 3 冊中の 2 冊は、帳簿上は焼失となっているが、[OH19 2/3 3/3] として現存する。欠番の [Org-Ped 21 2/2] は Moritz Brosig: *5 Präludien und eine Fantasie Op. 21 Heft II、*除籍となった [Org-Ped 22] は Alexandre Guilmant: *L'Organiste pratique 4me Liv. Op. 47*である。

1907 (明治41) 年

[Org-Ped 25] Edvard Grieg (1843-1907): Compositionen für Orgel Übertragen

1908 (明治42) 年

[Org-Ped 26 1/4-4/4] Johann Sebastian Bach: Bach-Album für Orgel Band $I \sim IV$ [Org-Ped 27 1/2 2/2] Christian Heinrich Rinck: Practische Orgelschule Op. 55



写真 1-5 [Org-Ped 26 4/4] 中表紙 [東京藝術大学附属図書館所蔵]

[Org-Ped 27] の二冊は同本で、[Org-Ped 3] と同じものである。

明治期の Org-Ped 分類楽譜には、Bach の曲集が 2 集 (Peters 版バッハ全集、Peters 版 Album) Mendelssohn の曲集があるほか、Rinck、Schneider、Guilmant のオルガン教本、Ritter、Guilmant の編纂による選集、Volckmar の全集、そして 1901 (明治 34) 年から 1904 (明治 37) 年にかけて、Guilmant、Lemmens、Saint-Saëns、Franck、Gigout、Widor、Loret、

Bourgault-Ducoudray といった、フランスの作曲家によるものが多くみられるのが特徴である。フランスのものの受入れは、1899 (明治 32) 年から 1904 (明治 37) 年まで東京音楽 学校に招聘されていたフランス人教師のノエル・ペリー Noël Péri (1865-1922) の影響と考えられる。

1-2 明治期受入れのOH、Org-sol 分類楽譜

明治期の OH、Org-sol 分類楽譜は受入れ冊数が非常に多い。1895 (明治 28) 年の帳簿の記載開始から 1912 (明治 45) 年 5 月 [OH 241] までに 734 点の楽譜が受入れられているが、これは 1949 (昭和 24) 年まで受入れが続く「OH、Org-sol 分類楽譜」全 962 点のうち7割以上を占める。

明治期における「OH、Org-sol 分類楽譜」受入れ冊数について、年単位の推移を以下の表に示す。 $[Org-sol 1] \sim [Org-sol 8]$ までは音楽取調掛時代の受入れである。

表 1-1 明治期における「OH, Org-sol 分類楽譜」受入れ冊数

	·	
音楽取調掛期	$[Org-sol 1] \sim [Org-sol 8]$	12 冊
1895 (明治 28) 年	$[Org-sol 9] \sim [Org-sol 33]$	40 冊
1896 (明治 29) 年		o ∰
1897 (明治30) 年	$[Org-sol 34] \sim [Org-sol 39]$	16 ∰
1898 (明治31) 年	-	0 冊
1899 (明治32) 年	$[Org-sol 40] \sim [Org-sol 41]$	10 冊
1900 (明治33) 年	$[Org-sol 42] \sim [Org-sol 45]$	7 ⊞
1901 (明治34) 年	$[Org-sol 46] \sim [Org sol 50]$	28 冊
1902 (明治35) 年	[OH 51] ∼ [Org-sol 68]	98 冊
1903 (明治36) 年	$[OH 69] \sim [OH 73]$	74 ∰
1904 (明治 37) 年	$[OH 74] \sim [Org-sol 124]$	150 ∰
1905 (明治38) 年	$[Org-sol 125] \sim [OH 143]$	30 ∰
1906(明治39)年	$[Org-sol 144] \sim [Org-sol 157]$	59 ∰
1907 (明治40) 年	$[Org-sol 158] \sim [OH 176]$	20 ∰
1908(明治41)年	[OH 177] ∼ [OH 206]	50 ∰
1909(明治 42)年	$[OH 207] \sim [OH 218]$	47 ∰
1910 (明治 43) 年		0 ∰
1911(明治44)年	-	0 ∰
1912(明治 45)年	$[OH 219] \sim [OH 241]$	80 冊

受入れ冊数が 1901 (明治 34) 年から増え始め、1904 (明治 37) 年に一番のピークがきていることがわかる。この時期の受入れ内容をみてみると、同じ楽譜を複数受入れているのが目立つ (以下副本³⁷とする)。それらは教本として積極的に使われたと考えられる。次の表は明治期の副本の多い楽譜である。標題は『楽譜原簿』の台帳表記による。

³⁷ 副本:同一の図書が2部以上ある場合、最初に受入れられた正本以外の図書(大辞泉)

表 1-2 明治期「OH, Org-sol 分類楽譜」のうち副本の多い楽譜

	II, Org-sor 为规未相」。	
音楽取調掛時代	ベンダ: ハーモニアム [Org-sol 9]	1 ∰
	ベートーベン風琴譜 [Org-sol 14]	1 ∰
	シューベルト風琴譜 [Org-sol 15]	1 ∰
	(ビーブル): ハーモニユーム [Org-sol 23 1/2, 2/2]	1Set
1895 (明治28) 年	ビーブル: ハーモニーム [Org-sol 33 1/10-10/10]	1Set
1900 (明治33) 年	島崎赤太郎編:オルガン教則本 壹 〔Org-sol 42〕	1 冊
1901 (明治34) 年	島崎赤太郎編:オルガン教則本 弐 〔Org-sol 46 1/3-3/3〕	3 ∰
	島崎赤太郎編:オルガン教則本 壹 〔OH 47 1/20-20/20〕	20 ∰
	ラインハルド:ハルモニヨムソナチ子ム〔OH 48 1/3-3/3〕	1Set
	レメンス:ヅーズ、モルソー [OH 49]	1 ∰
	メルケル: ヅーズ、リリッシュ [Org-sol 50]	1 ∰
1902 (明治35) 年	島崎赤太郎編:オルガン教則本 巻弐〔OH 51 1/20-20/20〕	20 ∰
	メルケル:リリッシェ、ブラッテル [Org-sol 53, 54]	2 ∰
	メルケル:12 リリッシェトンスツッケ〔Org-sol 57〕	1 ∰
	島崎赤太郎編:オルガン教則本 第弐〔OH 60 1/15-15/15〕	15 ∰
	島崎赤太郎編:オルガン教則本 第一〔OH 61 1/20-20/20〕	20 ∰
	東京音楽學校:小學唱歌用オルガンピアノ楽譜	13 ∰
	[Org-sol 62 1/13-13/13]	
	ベンダー:メトード [OH 65 1/10-10/10]	10 ∰
	ベンダー:12モルソー (Liv. 1) [OH 66 1/3, 3/3] [OH67 2/3]	3 ∰
	ベンダー:12モルソー (Liv. 2) [OH 66 2/3] [OH67 1/3-3/3]	3 ∰
1903 (明治 36) 年	ベンダー:メトード [OH 69 1/7-7/7]	7 ∰
	東京音楽學校:小學唱歌集用オルガンピアノ楽譜	
	[Org-sol 70 1/40-40/40]	40 ∰
	ベンダー: オルガン教則 [Org-sol 71 1/8-8/8]	8 冊
	ベンダー:オルガン教則続篇 第一巻 [OH 72 1/9-9/9]	9 冊
	ベンダー:オルガン教則続篇 第二巻〔OH 73 1/10-10/10〕	10 冊
1904(明治 37)年	ラインハルト:スチュヂエン [Org-sol 75-77]	3 ∰
	ラインハルド:ステュデン [OH 78 [1/20-20/20]]	20 ∰
	ベンダー: オルガン教科書 [OH 82 1/6-6/6] [OH 83 1/7]	7 ∰
	ベンダー: (12 モルソー) 38 (Liv. 1) [OH 83 2/7-7/7]	6 ∰
	ベンダー: (12 モルソー) (Liv. 2) [OH 84 1/5-5/5]	5 ∰
	レーマンス:オルガン教則本第一篇 [OH 85 1/15-15/15]	15 ∰
	メルケル: 風琴 12 曲 [Org-sol 88]	1 ∰
	諸大家:ハーモニームアルバム [OH 89-98]	1 Set
	ペリー:オルガン・ピアノ練習書	49 ∰
	[OH 103 1/50-50/50] うち [OH 103 4/50] を除く	. mr
	東京音楽學校:小學唱歌集用オルガンピアノ楽譜	1 冊
	[OH 103 4/50]	10 24
	諸大家:ハルモニューム、アルブム [Org-sol 105-114]	1Set 1Set
	ラインハルド:ドライ、ソナチネン 〔Org-sol 122〕	1561

_

 $^{^{38}}$ 台帳表記は「ベンダー: オルガン教科書」となっているが、前出の「ベンダー: 12 モルソー」の副本である。

1905 (明治38) 年	ハルモニユームアルブム	[Org-sol 127-136]	1 Set
	メルケル:第七十八号十二曲	[Org-sol 140]	1 ∰
	メルケル:第九十九号十曲	[Org-sol 141]	1 ∰
	瓜生繁:進行曲	[OH 143 1/10-10/10]	10 ∰
1906 (明治39) 年		[OH 154 1/6-6/6]	6 ∰
	ビーブル:ハルモニユームオプス廿九	[Org-sol 152 1/2 2/2]	1Set
1907 (明治40) 年	レマンス:オルガン教科書	[Org-sol 159 1/3-3/3]	3 冊
	レメンス:オルゲルシューレ 第一	[OH 176 1/9-9/9]	9 冊
1908 (明治41) 年	ラインハード:ドライソナチネン	[OH 206 1/6-6/6]	2Set

これらの副本は受入れ冊数の推移に大きく影響している。副本の多い楽譜のうち主だったものについての詳細を、「邦語タイトル(台帳表記)」/楽譜名/内容/整理番号の順に以下にまとめる。

『ベンダ:ハーモニアム』『ベンダー:メトード』『ベンダー:オルガン教則本』

Ernst Felix Benda (?-?): Méthode Théorique pratique pour Harmonium [Theorethische-practische Harmonium-Schule]. Paris: Schott.

Benda 作曲による 22 番までの練習曲からなる。音楽取調掛時代受入れの [Org-sol 9] は消失しているが、おそらく同本である。

[Org-sol 9] [消失] [OH 65 1/10-10/10] [OH 69 1/7-7/7] [Org-sol 71 1/8-8/8] [OH 82 1/6-6/6] [OH 83 1/7]

『ハーモニューム』『ビーブル:ハーモニーム』『ビーブル:ハルモニュームオプス廿九』

Rudolf Bibl (1832-1902): Harmonium Sammlung von Tonstücken, Op. 29 Leipzig: Breitkopf.

Bibl による、様々な作曲家の作品からのオルガン(手鍵盤のみ)編曲選集。オーケストラ曲、室内楽曲、ペダル付のオルガン曲、ピアノ曲など多彩なジャンルから編曲されている。2巻あるいは10巻のセットからなる。編者のBiblは、東京音楽学校でオルガンを教えていたDittrichが、帰国後に就任するウィーン宮廷オルガニストの前任者であった³⁹。

[Org-sol 23 1/2, 2/2] [Org-sol 33 1/10-10/10] [Org-sol 152 1/2 2/2]

³⁹ 平沢博子「西洋音楽の真髄を伝えたお雇い外国人の生涯 ルドルフ・ディットリヒ物語」、『おんかん』東京:音楽鑑賞教育、2002 年、10 月号、27 頁。

『東京音楽学校:小学唱歌集用 オルガンピアノ楽譜』

東京音楽学校編『小學唱歌集用オルガン ピアノ楽譜』、東京:大日本図書株式會社、1899 (明治32)年

文部省音楽取調掛が編纂した『小學唱歌集』全三巻に対応している。東京音楽学校初代校長である伊澤修二(1851-1917)が、東京音楽学校に外国教師として招聘されていたRudolf Dittrichに命じて唱歌に和声をつけさせたものである。第一に唱歌の伴奏第二にオルガンとピアノの練習、第三に四声部合唱を目的としていた40。

[Org-sol 62 1/13-13/13] [Org-sol 70 1/40-40/40] [OH 103 4/50]

『島崎赤太郎編:オルガン教則本 壹/第一』

島崎赤太郎編:『オルガン教則本 壹』、東京:共益商社書店、1900(明治33)年

巻号表記は旧字であるが、壹は一巻のことである。片手練習、指練習から始まり、ごく小規模の練習曲が掲載されている。編者の島崎赤太郎は、1894 (明治 27) 年に東京音楽学校を卒業し、卒業とともに母校でオルガンを教えていたが、1900 (明治 30) 年当時はオルガン履修者のほとんどを受持っていた。

[Org-sol 42] [OH 47 1/20-20/20] [OH-51 1/20-20/20] [OH 61 1/20-20/20]

『島崎赤太郎編:オルガン教則本 弐/巻弐/第弐』

島崎赤太郎編:『オルガン教則本 弐』、東京:共益商社書店、1900(明治33)年

巻号表記 弐は二巻のことである。上記 壹 の続編である。重音(三度)練習に続き、各調の音階とそれぞれの調に属する小曲が載っている。Jacques-Louis Battmann (1818-1886)の March、Bachの Gavotte、 Home sweet home (埴生の宿)、各国国歌などが練習用曲に含まれている。

[Org-sol 46 1/3-3/3] [OH 60 1/15-15/15]

⁴⁰ 東京音楽学校編『小學唱歌集用オルガン ピアノ楽譜』序文

『ラインハルド:ハルモニヨムソナチ子ム』『ラインハード:ドライソナチネン』

August Reinhard (1831-1912): Drei Sonatinen Op. 38 Berlin: Carl Simon.

Nr. 1 C-dur、Nr. 2 F-dur、Nr. 3 a-moll の、それぞれ 3 楽章からなる。Nr. 1 \sim Nr. 3 の 3 曲 が 3 冊の一組となって、複数のセットが受入れられている。

[OH 48 [1/3-3/3]] [Org-sol 122] [OH 206 1/6-6/6]

『レメンス:ヅーズ、モルソー』『レメンス作品集』

Jacques-Nicolas Lemmens: Morceaux pour Orgue-Mélodium. Mayence: B. Schott's Söhne.

Lemmens による 12 のオルガン曲を収録。

No. 1 Invocation / No. 2 Nocturne / No. 3 Fuguette / No. 4 Cantabile / No. 5 Romance sans Paroles

No. 6 Fanfare / No. 7 Mélodie facile / No. 8 Hélène-Polka / No. 9 Communion / No. 10 Sortie

No. 11 Marche Triomphale / No. 12 Finale

[OH 49] [OH 154 1/6-6/6]

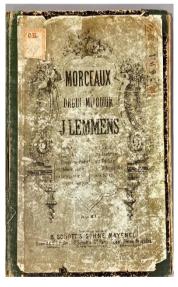


写真 1-6 [OH 49] 表紙 [東京藝術大学附属図書館所蔵]

『ベンダー:12モルソー』『ベンダー:オルガン教則本 続編一』

Ernst Felix Benda: 12 Vermischte Stücke für das Harmonium Liv. 1 Paris / Bruxelles: Schott.

Benda の作曲による 12 の小曲。Liv.1 には標題付の 1 番から 6 番が収録されている。

No. 1 Betrachtung: Meditation / No. 2 Reue: Régret / No. 3 Abendempfindung: Heure du soir

No. 4 Hirtengesang: Pastorale / No. 5 Trauermarsch: Marche Funébre

No. 6 Ländliches Glück: Bonheur Champêtre

[OH 66 1/3 3/3] [OH67 2/3] [OH 72 1/9-9/9] [OH83 2/7-7/7]

『ベンダー:12モルソー』『ベンダー:オルガン教則本 続編二』

Ernst Felix Benda: 12 Vermischte Stücke für das Harmonium Liv. 2 Paris / Bruxelles: Schott.

Benda の作曲による 12 の小曲。Liv. 2 には標題付の 7-12 番が収録されている。

No. 7 Die Erwartung: L'Attente / No. 8 Gebet: Prière / No. 9 Im Tempel: Au Temple

No. 10 Dramatische Scene: Scene Dramatique / No. 11 Romanze: Romance

No. 12 Sonntags Morgens: Dimanche Matin

[OH 66 2/3] [OH67 1/3-3/3] [OH 73 1/10-10/10] [OH84 1/5-5/5]

『レーマンス:オルガン教則本第一篇』『レマンス:オルガン教科書』

『レメンス:オルガンシューレー第一』

Jacques-Nicolas Lemmens: Ecole d'Orgue I. Mayence: B. Schott's Söhne.

指の練習曲 1-23 と、Prèlude、Fuga、Offertoire、Élévation、Pastorale、Sortie、などの小曲が掲載されている。

[Org-Ped 8] [OH 85 1/15-15/15] [Org-sol 159 1/3-3/3] [OH 176 1/9-9/9]

『ペリー:オルガンピアノ楽譜』

ノエル・ペリー編: 『ピアノ・オルガン練習書』、東京: 共益商社書店、1904 (明治 37) 年Noël Péri (1865-1922) の編纂による練習曲集。序文に「参考書としてプレディ (Plaidy)、

ロシホルン (Loeschhorn)、チェルニー (Czerny)、レベルトとスタルク (Lebert und Starck)、ローレ (Loret)、レメンス (Lemmens) を用いた⁴¹、基礎的な指の練習書である」とある。

⁴¹ Louis Plaidy (1810-1874)、Carl Albert Löschhorn (1819-1905)、Carl Czerny (1791-1857) はそれぞれ、Sigmund Lebert (1821-1884) と Ludwig Stark (1831-1884) は共著でピアノのメソッド、Clément Loret (1833-1909) と Jacques-Nicolas Lemmens (1823-1881) はオルガンのメソッドを書いている。

Péri は、1899 (明治 32) 年から東京音楽学校に招聘され、1904 (明治 37) 年までオルガン、和声、作曲の授業を行っていた。

[OH 103 1/50-50/50] (50 冊) のうち [OH 103 4/50] を除く。

『ラインハルト:スチュヂエン』『ラインハルド:ステュデン』

Augst Reinhard: Zwanzig Harmonium-Studien Op. 13 Berlin: Carl Simon. /

Reinhard は多くの練習曲集をのこしている。[Org-sol 75-77] は Op. 13 であった。[OH 78] の「ラインハルド:スチュデン」は 20 冊受入れたものの、そのすべてが関東大震災で失われた。1926(昭和 2)年に 10 冊購入された [OH 358] は、*Studien 50 Übungs und Vortragsstücke Op. 74* であった可能性がある。

他に、Reinhardの教本では「Org-sol 32」「Org-sol 104」「OH-sol 160〕 *Harmonium-Schule Op. 16* の受入れもあった。

[Org-sol 75-77] [OH78 [1/20-20/20]]

『ベートーベン風琴譜』『シューベルト風琴譜』『諸大家:ハーモニームアルバム』 『諸大家:ハルモニューム、アルブム』『ハルモニユームアルブム』

Ernst Stapf (?-?) / Rudolf Bibl: Harmonium Album Leipzig: C. F. Peters.

10 巻からなるオルガン編曲集。 I ~IV巻が Stapf 編、V~X巻を Bibl 編である。各巻ごとに A. 歌曲 B. 器楽曲からの編曲をまとめている。 I ~IV巻には様々な作曲家のものが掲載されている。 V巻以降はそれぞれ V. Mendelssohn、VI. Beethoven、VII. Schubert、 VII. Mozart、IX. Bach / Händel、X. Chopin / Schumann の作品からの編曲である。

[Org-sol 14] [Org-sol 15] [OH 89-98] [Org-sol 105-114] [Org-sol 127-136]

『瓜生繁:進行曲』

瓜生繁 (1862-1928) 編:『進行曲』、東京:十字屋、1899 (明治32) 年様々な作曲家の作品からの抜粋による39の行進曲集。 [OH 143-1/10-10/10] 『メルケル:ヅーズ リリッシュ スチュッケ』『メルケル:12 リリッシェ トンスツッケ』

『メルケル:第七十八号十二曲』

Gustav Merkel (1827-1885): 12 Lyrische Tonstücke Op. 78 Berlin: Adolph Fürstner.

メルケルによる12曲の曲集。

[Org-sol 50] [Org-sol 57] [Org-sol 140]

『メルケル:リリッシェブラッテル』『メルケル:風琴12曲(実際には10曲)』

『メルケル:第九十九号十曲』

Gustav Merkel: Lyrische Blätter 10 Stücke für Harmonium Op. 99 Mainz: B. Schott's Söhne.

メルケルによる 10曲の曲集。

[Org-sol 53] [Org-sol 54] [Org-sol 88] [Org-sol 141]

多くの副本を受入れたこれらの楽譜は、いずれも教本か曲集である。明治期のこれらの教本の増加は、1900 (明治 33) 年の東京音楽学校改編時以降のオルガン履修者増加に伴う需要に応じたものである。

東京音楽学校は 1900 (明治 33) 年に規則が大幅に改正され、学科編成が変わった⁴²。それまで二年制であった「師範科」は、三年制の「甲種師範科」に移行し、一学年の在籍者数がそれまで最高で 12 名であったところから 30 名前後、最大で 40 名へと増加した。初等教員の養成を目的とした一年制の「乙種師範科」も新設された。師範科学生にはオルガン履修生が多く、在籍者数の増加に伴いオルガン教材が不足したと考えられる。

島崎赤太郎編『オルガン教則本』には同じ書込みが複数の副本にみられる。これは授業 内容を書きとったものとみられ、この本が実際に教科書として使用されていたことを示し ている。また甲種師範科何某と記名されているものもあり、甲種師範科生に対し貸し出さ れていたことがわかる。

1901 (明治 34) 年以降に「OH、Org-sol 分類楽譜」が教則本を中心に大きく増加した背景にはこのような需要の変化があった。

⁴² 東京音楽学校における科の変遷については、本文第一章第三節「明治期の東京音楽学校におけるオルガン履修生と教師」、42 頁参照。

明治期受入れの「OH、Org-sol」分類楽譜のうち、フランスの教本及び曲は 1901 (明治 34) 年以降、Lemmens の教本を中心に受入れがあった。

1902 (明治35) 年

[Org-sol 55] Alexandre Pierre François Boëly (1785-1858): Prélude et 2 Fantasie

[Org-sol 63] Clément Loret: 24 Etude

1904 (明治37) 年

[OH 116 1/2 2/2] César Franck: Cinq Pièces pour Harmonium

[OH 118] César Franck: L'Organiste

1907 (明治39) 年

[OH 147] César Franck: L'Organiste

これらのフランスの教本及び曲集の受入れは、Org-Ped 分類楽譜と同様にペリーの影響が考えられる。その他、明治期の OH、Org-sol 分類楽譜は、巻数の多いシリーズものの曲集も多く受入れられた。特に冊数の多いものは以下である。

Heft. I ~ Xまでの 10 冊からなる。〔Org-sol 39 3/8〕は三冊に分かれており、〔Org-sol 39 3/8 二ノ一〕〔Org-sol 39 3/8 二ノ二〕はIVとVに相当する内容だが、手書きの筆写譜で補われている。Joseph Haydn(1732-1809): Thema und Variationen aus dem Kaiserquartett、Mendelssohn: Adagio aus der Orgel Sonate Op. 65 No. 1 の緩徐楽章、Mendelssohn: Praeludium G-dur、Bach: 平均律のフーガ部分などが掲載されている。

[OH 209-213] Henri Delépine(1871-1956): Archives de L'Organiste(40 冊) 1巻、3巻(12 冊)、4巻、5巻(12 冊)、6巻(12 冊)、7巻、8巻からなる。 [OH 241 1/42-42/42] Josef Löw (1834-1886) : Drawing Room Pieces Fantasies & Transcriptions

様々なオペラからの編曲シリーズ (40冊)。

第二節 明治期の東京音楽学校で受入れた楽器

東京音楽学校時代に使用された楽器は、現在東京藝術大学内に数点しか残っていないが、 楽器に関する会計資料から購入履歴を追うことによって、その推移を知ることができる。

楽器関係の会計資料には、『楽器器械原簿』『音楽機械出納簿』『楽器監守簿』があり、いずれも東京藝術大学音楽学部演奏企画室楽器係に保管されている。

『楽器器械原簿』は 1893 (明治 26) 年 11 月時点での在籍楽器の記録から始まり、1905 (明治 38) 年 3 月までの楽器購入、譲渡、売却の記録が記載されている。

『楽器機械出納帳』は『楽器器械原簿』の後続資料である。

『楽器監守簿』は 1924 (大正 13) 年から、『音楽機械出納簿』は 1928 (昭和 3) 年から 記載があり、楽器の所蔵状況、会計への返付記録、売却の記録が記載されている。

『寄附関係 自明治二十四年 至昭和九年』も、東京藝術大学音楽学部演奏企画室楽器係の 所蔵である。寄附に関する事務資料の綴りであり、オルガンに関するものが含まれている。

『楽器品目員数表(付オルガンリスト No. 1~83)』から、1907(明治 40)年当時に在籍していたオルガンの状況を知ることができる。『楽器品目員数表』は、当時楽器掛主任であった楠美恩三郎(1868-1927)によって行われた1907(明治 40)年9月11日時点のオルガン所蔵調査の記録である。付属のオルガンリストには、当時東京音楽学校が所有していたオルガンの台数、種類、状態、設置場所の記載がある。東京音楽学校時代文書〔東音文26-2〕として、東京藝術大学附属図書館に所収されている。

2-1 明治期受入れのオルガン

東京音楽学校のオルガンの受入れについて、『楽器器械原簿』『楽器機械出納帳』『楽器機械出納簿』をもとに受入れ順に表を作成した。ここでの「オルガン」は、「リード・オルガン」および「ハルモニウム」を指している。1907 (明治 40) 年まで在籍していたものについては、『楽器品目員数表』から、1907 (明治 40) 当時の使用状況を追記した。付属オルガンリストの室欄には、「教室番号」あるいは「分校」43の表記があり、そのオルガンがどこの部屋に設置されていたかを知ることができる。備考欄によれば、1室は奏楽堂、16室は男子教員室、23室は女子研究生用、29室は島崎赤太郎教授の教室、56室は中村芳子助教授の教室、57室は楠美恩三郎助教授の教室であった。備考欄が空欄の2~15、18、19、22、49、50、52~55、58~61室は練習室あるいは教室であったと考えられる。

『楽器器械原簿』の記載は、1893 (明治 26) 年 11 月から記載が始まっているが、楽譜と同様にはじめの記載はそれまでの在籍記録である。受入れ時期を 1893 (明治 26) 年 9月 11 日以前として 1 号から 17 号までが記載されている。

表 1-3 1893 (明治 26) 年までに受入れのオルガン

楽器器械原簿		楽品目員数表		
号数	摘要(納入)	価格	[製]	室・備考
1	オルガン	60 円	Carpenter	16 室で使用
2	オルガン	60 円	George Woods	10 室で使用
3	オルガン	50 円	II .	保管状態
4	オルガン	60 円	-	-
5	オルガン	20 円	-	-
6	オルガン	55 円	-	-
7	オルガン	55 円	-	-
8	オルガン	40 円	-	-
9	オルガン	50 円	George Woods	50 室で使用
10	オルガン	25 円	西川	55 室で使用
11	オルガン	40 円	-	-
12	オルガン	40 円	-	-
13	オルガン	25 円	才田	保管状態
14	オルガン	25 円	-	-

⁴³「分校」とは分教場のことである。神田一橋通にあった分教場では主に選科の教授が行われていた。選 科は、「洋琴、風琴、バイオリン、唱歌」などの実技科目を選択し、受講することができた。

29

15	オルガン	25 円	-	-
16	オルガン	45 円	-	-
17	オルガン	45 円	-	-

『楽器品目員数表』によれば1号は Carpenter Organ、2号、3号、9号は George Woods 社製、10号は西川製であった。価格からはいずれも小型のものだったと察することができる。

13 号は現存し、現在東京藝術大学美術館の収蔵になっている。一段鍵盤 61 (F-f³)、6 ストップ (左より ギアバリン、ビヲラ、フレムラント、メローア、ボイクステレステ、セラホン) である。前面のストップの上部には「東京文部省音楽取調所大日本製造任西久保才田光則」、譜面台には「紀元貮千五百四十壱年十二月造第壱號」と記されている。側面の焼印は「東京音樂學校 二 一三」(「二」はオルガンの分類番号、「一三」は受入れ番号) となっている。1881 (明治 14) 年に才田光則によって製造されたオルガン、ということになるが、リードとそれに関する部分は除いて組み立てられたもの、とみられている⁴。



写真 1-7 13 号 才田オルガン

[2015年7月23日千田寧子撮影東京藝術大学所蔵]

^{44 『}音楽取調掛特別展目録』、[東京]:[東京芸術大学音楽学部]、1971年、14頁。

1894 (明治 27) 年 受入れなし。

表 1-4 1895 (明治 28) 年受入れのオルガン

18	風琴 (文部省交付)	70 円	山葉	61 室で使用
19	風琴 (文部省交付)	30 円	1	-
20	風琴 (共益商社)	70 円	山葉	49 室で使用
21	風琴 (西川寅吉)	80 円	西川	55 室で使用
22	風琴 (佐藤正三)	90 円	Wilcox & White	6室で使用

18号、19号は納入者欄に文部省交付と記入されているが、詳細は不明である。

共益商社⁴⁵は山葉オルガンの販売元であった。西川寅吉⁴⁶は西川オルガンの製作者である。 20 号は山葉製、21 号は西川製であったことが、『楽器品目員数表』でも確認できる。『楽器品目員数表』によれば 18 号も山葉製、22 号は Wilcox & White 社製であった。

表 1-5 1896 (明治 29) 年受入れのオルガン

23	風琴	(西川寅吉)	60 円	-	-
24	風琴	(西川寅吉)	60 円	西川	分教場使用
25	風琴	(西川寅吉)	60 円	-	-
26	風琴/山葉製	(共益商社)	60 円	山葉	分教場使用
27	風琴/山葉製	(共益商社)	60 円	山葉	7室で使用
28	風琴/山葉製	(共益商社)	60 円	-	-

26 号以降、摘要欄にオルガンの種類に関する備考が付記されるようになる。

23~25 号の西川製3台、26~28 号の山葉製3台の受入れがあった。

1907 (明治 30) 年

受入れなし。

⁴⁵ 共益商社:攻玉社 (海軍の予備教育機関) の出版部が独立したものである。文部省発行の教科書販売で成長した。音楽部門へ進出し楽譜出版に早くから関わっている。山葉と提携して楽器販売も扱った。

⁴⁶ 西川寅吉 [虎吉、乕吉] (1846-1920): 『東京音樂學校一覧 従明治二十四年至明治二十五年』東京音樂學校、17 頁に、嘱託職員として記載されている。学校所蔵の楽器の修理点検等に関わっていたと考えられる。

表 1-6 1898 (明治 31) 年受入れのオルガン

29	風琴/山葉製第8号型	(共益商社)	分教場用	75 円	-	-
30	風琴 / 西川製第 13 号型	(倉田範太郎47)	分教場用	88 円	西川	分教場使用
31	風琴/山葉製第8号型	(共益商社)	分教場用	75 円	山葉	分教場使用
32	風琴/山葉製第3号型	(共益商社)	分教場用	30 円	山葉	分教場使用

4 台のオルガンはすべて最初から分教場用として受入れられたことが『楽器器械原簿』 の記載でわかる。分教場は1898 (明治31) 年5月に神田区一橋通にあった高等師範学校附 属地に設置され、主に選科学生の教授を行っていた。

29 号、31 号の山葉製 8 号型オルガンは 61 鍵 7 ストップ、32 号の山葉製 3 号型は 49 鍵ストップなしのオルガンであった。

表 1-7 1899 (明治 32) 年受入れのオルガン

33	オルガン / ペダル付 (白井銈造48)	350 円	1	-
34	オルガン / 米国ニューヨーク、メーソンハーミルン会	1450 円	メーソン	1室
	社製 ツゥーマニアル、ペタルバス、リジットオルガ			[奏楽堂]
	ン(白井銈造)			合奏用

この年、ペダル付オルガンが 2 台受入れられた。ペダル付のオルガンの受入れは東京音楽学校で初のことであった。33 号は受入れ後わずか 2 年で破損により売却してしまったので楽器の詳細はわからないが、共益商社代表の白井銈造が扱っているので山葉製だった可能性がある。

34 号は唯一のペダル付オルガンとしてその後のオルガン演奏に大きく寄与する重要な楽器となった。現在も東京藝術大学音楽学部オルガン科で使用されている⁴⁹。製造者の「メーソンハーミルン会社」とは、Mason & Hamlin 社⁵⁰のことである。

⁴⁷ 倉田範太郎は十字屋書店[東京京橋銀座三丁目]の店主であった。十字屋書店はキリスト教系の書籍、楽譜の販売のほか、西川オルガンを扱っていた。

⁴⁸ 白井銈造(?-1903)共益商社楽器店代表。共益商社の創業者白井練一(1846-1924)の娘婿。

⁴⁹ 東京藝術大学音楽学部第六ホールの片隅に長らく眠っていたが、廣江理枝『日本のオルガン演奏黎明期の楽器研究』2015 年~2017 年度科学研究費補助金・基礎研究 (C) 課題番号 15K02164 により、横田宗隆オルガン研究製作所にて修復され演奏可能となった。現在東京藝術大学音楽学部 2-1-8 教室で練習に使用されている。この修復以前よりすでに電動の送風装置がついており、現在もその形であるが、本来は手動の送風装置がついていた。大正期の写真にはそのレバーが写っている。本文 第二章 第二節 2-1 「大正期受入れのオルガン」、144 頁に掲載。

⁵⁰ Mason & Hamlin 社: 1854 年、Henry Mason と Emmons Hamlin により創業。現在もピアノメーカーとして存続している老舗楽器メーカーである。創業当時はオルガン製造が主であった。

表 1-8 34号 Mason & Hamlin 社製 2 段鍵盤ペダル付リード・オルガン仕様

2 段手鍵盤 C-c⁴、ペダル C-f¹、 19 ストップ

Great Organ	Swell Organ	Pedal Organ
Gt Clarinet. 16Ft Gt Voix Celeste 8 Ft Gt Diapason 8 Ft	Sw Wald Flute 4Ft Sw Keraulophon 8Ft Sw Viol D'Amour 8Ft	Ped Open Diapason 16Ft Ped Bourdon 16Ft Ped Violoncello 8Ft
Gt Flute 4Ft Gt Corno. 4Ft Gt Gamba 8Ft	Sw Eolian Harp 8Ft Sw Flute Dolce 4Ft Sw Dolce Tremulant. 8Ft	Great to Pedals Swell to Pedals Swell to Great
		Octave Coupler

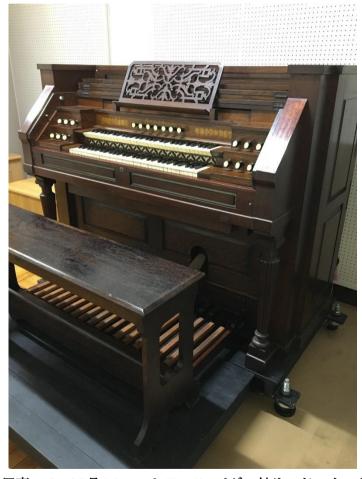


写真 1-8 34号 Mason & Hamlin ペダル付リード・オルガン

[2018年10月11日千田寧子撮影 東京藝術大学音楽学部 2-1-8 教室]

表 1-9 1900 (明治 33) 年受入れのオルガン

35	オルガン / 米国ニューヨーク、メーソンハ	ーミ 250円 メーソン 57室[楠美]
	ルン会社製 (白井銈造	<u>=</u>)
36	オルガン / 米国ニューヨーク、メーソンハ	ーミ 250円 メーソン 分教場
	ルン会社製(白井銈造	<u>=</u>)
37	風琴/メーソン型8ストップ (白井銈造	f) 130 円 山葉 分教場
38	オルガン/同文館製造 (同文館主安井津	f) 80 円 同文館 23 室
		[寄贈] [女子研究生]

Mason & Hamlin 社製のオルガンが続けて受入れられた。年をまたいでいるが、34 号と ほぼ同時期の受入れである。以後、「メーソン型」という名前の国産オルガンも見受けられるようになる。

38 号同文館51製のオルガンは、寄贈されたものである。61 鍵、7 ストップであった52。

表 1-10 1901 (明治 34) 年受入れのオルガン

39	オルガン / 山葉製 7 号型	(白井銈造)	65 円	山葉	54室
40	オルガン / 山葉製 7 号型	(白井銈造)	65 円	山葉	11 室
41	オルガン/山葉製7号型	(白井銈造)	65 円	山葉	15 室
42	オルガン / 山葉製 7 号型	(白井銈造)	65 円	山葉	22室
43	オルガン/山葉製メーソン型	(白井銈造)	130 円	山葉	58室
44	オルガン/山葉製メーソン型	(白井銈造)	130円	山葉	分教場
45	オルガン/同文館製8号型	(安井清)	80 円	同文館	分教場
46	オルガン/同文館製8号型	(安井清)	80 円	-	-

8台のオルガンが受入れられた。

39~42 号は、山葉製 7 号型は 61 鍵、4 ストップであった。45、46 号の同文館製 8 号は前年 度寄贈の 38 号(61 鍵、7 ストップ)と同型である。

この年の受入れ数の増加には、オルガン履修生の増加が関係していると考えられる。第一章 第一節 1-2 「明治期受入れの OH、Org-sol 分類楽譜」の項でも述べたように、東京音楽学校のオルガン履修者は 1900 (明治 33) 年の学科編成を期に増加している。練習楽器の不足に伴い、オルガンの受入れ数が増えたものとみられる。

⁵¹ 同文館:同文館楽器工具店(東京市神田亀錦町2丁目6番地)、店主安井清。

^{52 『}寄附関係 自明治二十四年 至昭和九』中、「献納願 明治 31 年 6 月 28 日受付第 156 號」に記載。

表 1-11 1902 (明治 35) 年受入れのオルガン

47	オルガン / 西川製 12 号型 (倉田範太郎)	85 円	西川	分教場
48	オルガン/同文館製7号型(安井清)	70 円	同文館	分教場
49	オルガン/同文館製7号型(安井清)	70 円	1	-
50	オルガン / 山葉製新型 (白井銈造)	80 円	山葉	17室
51	オルガン / 山葉製新型 (白井銈造)	80 円	山葉	18室
52	オルガン / 山葉製 7 号型(白井銈造)	65 円	山葉	分教場
53	オルガン / 山葉製 7 号型(白井銈造)	65 円	山葉	分教場
54	オルガン / 山葉製 8 号型 (白井銈造)	75 円	山葉	9室
55	オルガン / 山葉製 8 号型(白井銈造)	75 円	山葉	2室

この年は9台のオルガンの受入れがあった。50、51号 山葉製新型は61鍵7ストップ、52、53号 山葉製7号型は61鍵4ストップ、54、55号 山葉製8号型は61鍵7ストップである。49、50号 同文館製7号型は8号型(61鍵7ストップ)より小さい型だったと考えられる。

表 1-12 1903 (明治 36) 年受入れのオルガン

56	オルガン / 同文館製改良第 11 号型 腰排	附属 (安井清)	135 円	同文館	分教場
57	オルガン/東洋社製デスク型7号	(石川正作)	62 円	東洋社	分教場

56号 同文館製改良 11 号型は 8 号型(61 鍵 7 ストップ)より大きい型だったと考えられる。57 号 についてはわからないが、東洋社が普通型 14 種、デスク型 10 種を製造し、それらの鍵数が $39\sim61$ 、ストップ数が $4\sim15$ であった記述がある53。

表 1-13 1904 (明治 37) 年受入れのオルガン

58	オルガン / 米国ドヘッテー社製造 腰掛一個附属	250 円	W. Doherty	52室
	(内藤文六郎54)			
59	オルガン / 佛国ルドルフ社製 第 28775 号 腰掛附属	700 円	ルドルフ	1室
	(内藤文六郎)			[奏楽堂]
60	オルガン / 佛国ルドルフ社製 第 28779 号 腰掛附属	510 円	ルドルフ	57 室
	(内藤文六郎)			[楠美]

35

⁵³ 山根硯洲『オルガン使用法及修理法』東京:東洋社、1903年、58頁。

⁵⁴ 内藤文六郎: 共益商社楽器店代表。

34 号に引き続き、共益商社の仲介で外国製オルガンの受入れがあった。58 号、米国ドヘッテー社とは W. Doherty 社55のことである。

59 号、60 号の佛国ルドルフ社は、Rodolphe Fils & Debain 社56である。59 号は現存し、東京藝術大学美術館に収蔵されている。73 鍵 19 ストップの大型のハルモニウムである。鍵数が多いのはスライドして音域を変えられる造りの為である。1 オクターブはスライド用で、実質 61 鍵の標準的な音域であった。本体にはキャスターが付き、可動式である。

ストップは左より、O Forte ③ et ④ / V Violoncelle / E Eolien / 4 Basson / 3 Clairon / 2 Bourdon / 1 Cor Anglais / E Euphone / E Expression / 5 Musette / T Tremolo / H Harpe Eolienne / 1 Flute / 2 Clarinette / 3 Fifle / 4 Hautbois / b Baryton / V Voix Humaine / O Forte ③ et ④



写真 1-9 59号 Rodolphe Fils & Debain 社製ハルモニウム (全景)



写真 1-10 59号 Rodolphe Fils & Debain 社製ハルモニウム (鍵盤分)

[2015年7月23日千田寧子撮影東京藝術大学所蔵]

⁵⁵ Gellerman, Robert R., Gellerman's International Reed Organ Atlas Second Edition Lanham: Vestal Press, 1998, p.

⁵⁶ 東京芸術大学芸術資料館『東京芸術大学芸術資料館 蔵品目録 音楽資料』東京:第一法規出版株式会社、1994年、44頁。

表 1-14 1905 (明治 38) 年受入れのオルガン

	61	オルガン / メーソン製 13 ストップ 附属腰掛付	350 円	メー	56室[中村]
		(内藤文六郎)		ソン	
Ī	62	オルガン / 山葉製第一号型 附属腰掛付(内藤文六郎)	130 円	山葉	29室[島崎]

- 61 号は、再び Mason & Hamlin 社のオルガンであった。
- 62 号、山葉製第一号型 は61 鍵、10 ストップである。

ここまでが『楽器器械原簿』の記載である。1906 (明治 39) 年受入れ分より『楽器機械 出納帳』の記載となる。

表 1-15 1906 (明治 39) 年受入れのオルガン

楽器	B機械出納帳			楽器品目	員数表
63	オルガン / 松本製デスク	第8号(長谷川哲治)	75 円	松本	保管
64	オルガン/池内製第8号	(高尾武治)	75 円	池内	4室
65	オルガン/山葉8号	(内藤文六郎)	75 円	山葉	1室[奏楽堂]
66	オルガン/山葉8号	(内藤文六郎)	75 円	山葉	分教場
67	オルガン / 西川 11 号	(倉田範太郎)	75 円	西川	5室
68	オルガン/前川製4号	(前川善兵衛)	寄贈	前川	分教場
69	オルガン/山葉製8号	(内藤文六郎)	75 円	山葉	分教場
70	オルガン/山葉製8号	(内藤文六郎)	75 円	山葉	8室
71	オルガン/山葉製8号	(内藤文六郎)	75 円	山葉	13室
72	オルガン/山葉製8号	(内藤文六郎)	75 円	山葉	14室
73	オルガン / 西川製 11 号	(倉田範太郎)	75 円	西川	59室
74	オルガン / 松本製	(松本楽器合資会社)	寄贈	松本	3室

74号、松本オルガンは61鍵、7ストップ57であった。

表 1-16 1907 (明治 40) 年受入れのオルガン

75	オルガン/ 山葉製 14 号	(内藤文六郎)	130円	山葉	29室[島崎]
76	オルガン/ 山葉製 11 号	(内藤文六郎)	80 円	山葉	分教場
77	オルガン/ 山葉製 14 号	(内藤文六郎)	130 円	山葉	分教場
78	オルガン/ 山葉製 11 号	(内藤文六郎)	80 円	山葉	16室 [男教員室]
79	オルガン/ 山葉製 11 号	(内藤文六郎)	80 円	山葉	19室
80	オルガン/ 山葉製 11 号	(内藤文六郎)	80 円	山葉	12室

⁵⁷『寄附関係 自明治二十四年 至昭和九年』中、「風琴献納願」寄附楽器受理の件付録 [明治 39 年 11 月 14 日起案] に記載。

81	オルガン/ 山葉製 11 号	(内藤文六郎)	80 円	山葉	53室
82	オルガン/ 山葉製 11 号	(内藤文六郎)	80 円	山葉	60室
83	オルガン/ 山葉製特製大型	(内藤文六郎)	650円	山葉	1 [奏楽堂] 演奏用

75号、77号は、山葉製14号で61鍵、8ストップ。

76号、78~82号は、山葉製11号で61鍵、7ストップ。

草川宣雄著『オルガン奏法の研究』(昭和4年)には、東京音楽学校の楽器として「山葉特製オルガン」の仕様が紹介されている。楽器の会計資料の中では、山葉製オルガンで「特製」という記載のあるものは83号だけであったので、草川の紹介する「山葉特製オルガン」は83号だったと考えられる。草川の著書では、「山葉特製オルガン」のストップ数、およびストップ名が記載されている58。これは現在信濃町教会に現存するオルガンと一致する。信濃町教会にある楽器が83号であった可能性が高いが、残念ながら信濃町教会の楽器に所蔵印の跡などは確認できなかった。



写真 1-11 信濃町教会蔵 山葉製大型オルガン

[2016年2月5日千田寧子撮影信濃町教会]

_

⁵⁸ 「Coupla / Corno Inglese / Corno Ingrese Dolce / Harpe Eolienne / Bourdone / Forte / Diapason-Dolce / Diapason / Claribella / Viola / Fagotto / Vox Humana / Oboe / Violino / Voix- Celeste / Melodia / Melodia Dolce / Forte / Clarinette / Violon cello / Flauto Dolce / Flauto / Copula」 草川宣雄『オルガン奏法の研究』東京:京文社、1929 年、44~46 頁。

表 1-17 1908 (明治 41) 年受入れのオルガン

84	オルガン/獨國ホーフベルグ社製	(小立鉦四郎)	900 円
85	オルガン / 山葉製	(内藤文六郎)	300 円
86	オルガン / 山葉製	(内藤文六郎)	300 円

84 号 獨國ホーフベルグ [Hofberg] 社製は現存し、東京藝術大学美術館に収蔵されている。 61 鍵の 2 段鍵盤、19 ストップである。2 段の鍵盤を持つ楽器は、34 号に続いて 2 台目であった。





写真 1-12 84号 Hofberg 社製 オルガン全景 写真 1-13 84号 Hofberg 社製 オルガン **鍵盤**部

[2015年7月23日千田寧子撮影東京藝術大学所蔵]

ストップは左より、Manual Koppler / Bourdon 16 Ft / Diapason 8 Ft / Principal 4Ft / Fagott 8 Ft / Aeolus Harfe 8Ft / Cello 8 Ft / Dulcet 8Ft / Forte II Manual / Vox Humana / Forte I Manual / Echo 8Ft / Viola 8Ft / Aeolus Harfe 8Ft / Oboe 8Ft / Piccolo 4Ft / Seraphone 8Ft / Clarionette 16Ft / Oktav Koppler

表 1-18 1909 (明治 42) 年受入れのオルガン

87	オルガン / フィルハモニックオルガン 腰掛付(西川乕吉)	304 円
88	オルガン/西川製(倉田範太郎)	80 円
89	オルガン/西川製(倉田範太郎)	80 円
90	オルガン/山葉製(内藤文六郎)	350 円
91	オルガン/山葉製(内藤文六郎)	80 円
92	オルガン/山葉製(内藤文六郎)	80 円
93	オルガン/山葉製(内藤文六郎)	80 円
94	オルガン/山葉製(内藤文六郎)	80 円
95	オルガン/山葉製(内藤文六郎)	80 円
96	オルガン/山葉製(内藤文六郎)	80 円

87 号は、東京音楽学校で受入れた西川製オルガンの中で最大のものである。このオルガンは 1933 (昭和 8) 年 3 月 16 日に売却59された。昭和 7 年から東京音楽学校に在籍していた牧野俊成の回想によれば、「試験の時にもう一台、ペダル付きの西川のリード・オルガンがあって、小使いさんがふいごを押してくれました」60とある。西川オルガンの中でペダルがつくとすれば、この 87 号の可能性が一番高いと思われるが詳細はわからない。牧野の回想が 34 号 Mason & Hamlin 社製と混同している可能性も否定できない。

1905 (明治 38) 年から徐々に、東京音楽学校で使用していたオルガンの譲渡、売却が進んだ。そのことが1906 (明治 39) 年以降にみられる受入れ台数の顕著な増加につながっていると考えらえる。

表 1-19 1910 (明治 43) 年受入れのオルガン

97	オルガン/西川製((倉田範太郎)	80 円
98	オルガン/西川製((倉田範太郎)	80 円
99	オルガン/山葉製((内藤文六郎)	339円50銭

表 1-20 1911 (明治 44) 年受入れのオルガン

100	オルガン / 西川製 腰掛付(西川虎吉)	80 円
101	オルガン / 西川製 腰掛付(西川虎吉)	80 円

^{59『}音楽機械出納簿』に記載。「昭和8年3月16日広田米太郎へ売却」とある。

 $^{^{60}}$ 谷根千工房編『よみがえれ!パイプオルガン―永遠に響け上野の杜に―』東京:谷根千工房、1985、10頁。

表 1-21 1912 (明治 45) 年受入れのオルガン

102	オルガン/西川製(倉田範太郎)	80 円
-----	-----------------	------

以上の 102 台が、明治期の東京音楽学校に受入れられたオルガンである。1905 (明治 38) 年に 65 号を受入れるまで、保管轉換 3 台、破損による売却 1 台を除いて増加の一途をたどった⁶¹。1905 (明治 38) 年から、それまで使用していた楽器の売却、譲渡が相次いだが、同時に受入れ数の増加もあり、1911 (明治 44) 年まで受入れ数と売却数とが拮抗した。最も在籍台数が多かったのは 1909 (明治 42) 年で、75 台であった。楽器の仕様としては、一段鍵盤、61 鍵、7 ストップの楽器が最も多かった。

演奏用としては、34号 Mason & Hamlin 社製二段鍵盤ペダル付オルガン、59号 Rodolphe Fils & Debain 社製ハルモニウム、83号 山葉製特製大型オルガンがあり、奏楽堂にはその他 に65号 山葉製オルガンも置かれていた。

教授用としては、29室(島崎赤太郎教授) に 62号 山葉製オルガン (61 鍵 7 ストップ) と 75号 山葉製 14号型 (8 ストップ)、56室 (中村芳子助教授) に 61号 Mason & Hamlin 社製 (13 ストップ)、57室 (楠美恩三郎助教授) に 35号 Mason & Hamlin 社製と 60号 Rodolphe Fils & Debain 社製 ハルモニウムがおかれ、レッスンに使用されていたとみられる。

分教場には、1907 (明治 40) 年時点で 20 台のオルガンが配置されていた。中には山葉 製 14 号型 (8 ストップ) や、Mason & Hamlin 社製のものがあり、練習環境としては整っていたようである。

_

⁶¹ 付録 資料②「東京音楽学校オルガン購入リスト」参照。

第三節 明治期の東京音楽学校におけるオルガン履修生と教師

東京音楽学校は、前身である音楽取調掛から移行する形で 1887 (明治 20) 年に設立、「善良なる音楽教員及音楽師を養成すること」を目的とし、1890 (明治 22) 年に東京音楽学校として初めての卒業生を輩出した。1894 (明治 26) 年 9 月から高等師範学校附属音楽学校となったが 1899 (明治 32) 年 4 月に再独立した。

『東京音樂學校一覧 従明治廿二年至明治廿三年』によれば、科は「豫科」「本科」「選科」があり、本科は「専修部」と「師範部」に分かれていた。「豫科」は「音楽普通の学科」で「修業年数は一年」であった。東京音楽学校に入学するものはまずこの豫科を経て「卒業の上試験を行い、特別の才能を有するものは専修部に入らしめ、音楽教員に適当なるものは師範部に入らしむべし」とされ、進級あるいは「何れの学部にも入学許可を與へ難きものは此際退学せしめ又は選科に転ぜしむること」もあった。師範科は「音楽教員たるべき学科を修めしむるものにして其修業年限は二か年」、専修部は「各科専門の音楽を修めしむるものにして其修業年数は三か年」であった。選科は「洋琴、風琴、バイオリン、唱歌の中特に一科目若くは二三科目を選びて学習」するものであった。

1890 (明治 23) 年の専修部卒業生の中には研究生として残るものが現れ、1895 (明治 27) 年からは、東京音楽学校が前年より高等師範学校附属となったのに伴い、小学唱歌講習科ができた⁶²。

1900 (明治 33) 年に編成が大きく変わり、本科が「聲楽部」「器楽部」「楽歌部」に分かれた。師範科は本科から独立し、「甲種師範科」と「乙種師範科」になった。修業年数は甲種三年と乙種一年であった。また、小学唱歌講習科がなくなった。

1909 (明治 42) 年に再び学校規定が改正された。本科の修業年限が三年以上五年以内、選科が一科目につき五年以内との規則が加わり、聴講科が新たに加わった。

この枠組みのなかで、多くの学生がオルガンを履修した。初期の「豫科」「専修部」「師範部」「選科」「研究科」「小学唱歌講習科」でオルガン履修が行われたほか、改編後の「本科・器楽部」「甲種師範科」「乙種師範科」「聴講科」にもオルガン履修生がいる。

42

⁶² 東京芸術大学百年史編纂委員会編『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第一巻』東京:音楽之友社、1987年、429~471頁。

3-1 明治期のオルガン履修生と受持

『東京音楽学校関係公文書(教務関係)文書綴』⁶³の中の成績に関する書類からは、オルガンを履修した学生とその受持⁶⁴を特定することができる。『東京音樂學校一覧』の教科担任の記載と合わせて、年度毎のオルガン履修生とその受持教師をまとめた。表の下部に典拠となる〔資料番号〕と『資料タイトル』を付した。教務関係資料は手書きのため、仮名の別のほか、同じ読みの違う漢字を充てるなどの表記のゆれが多数みうけられたが、ここではそれらを統一することはしていない。

表 1-22 1889 (明治 22) 年~1890 (明治 23) 年オルガン履修生と受持

師範部一年	高木武子 高田夏子 福長竹男 皆吉我亮	菊池
選科	岩井智海 鈴木ミト子 平松フミ子 土屋カズ子 柴田コウ子	木村

[003] 『明治二十三年七月 學年末試験書類綴 東京音楽學校』

師範科一年の受持は助教諭の菊池武信、選科生の受持は木村作であった。

オルガン履修の記録はないが、師範科二年に楠美恩三郎がいる。豫科には、のちにオルガンを履修する石原重雄、島崎赤太郎、野村成仁がいるがこの時は洋琴で試験を受けている。

表 1-23 1890 (明治 23) 年~1891 (明治 24) 年オルガン履修生と受持

専修部二年	石原清信	Dittrich
専修部一年	太田タツ 島崎赤太郎 小関鷹松 野村成仁	Dittrich
師範部二年	福長竹男 高木タケ 津田タキエ	菊池
選科乙	土屋カズ 平松フミ 岩井智海	木村
選科丙	三上寛治 石井ワカエ 日埜アヤコ 横山フサ	遠山

[005] 『明治二十四年三月 期末試験書類綴 東京音楽學校』

専修部二年、専修部一年の受持はRudolf Dittrich、師範部二年は菊池武信、選科乙:木村作、選科丙:遠山甲子 であった。オルガン履修は未確認だが、豫科に飯田三々雄、清水ヒデ、大畠サダ、富田ヒサ、北村勉がおり、翌年から師範部でオルガンを履修している。

⁶³ 東京藝術大学大学史史料室所蔵。植村幸生「東京音楽学校公文書(教務関係)資料の概要」『近代日本における音楽専門教育の成立と展開』平成17~19年度科学研究費補助金・基礎研究(B)研究成果報告書課題番号17320026、2008年、111~187頁、により〔資料番号〕が付され、請求記号を兼ねている。

⁶⁴ 受持:担当教員のこと。『東京音楽学校公文書(教務関係)文書綴』の中での表記。

表 1-24 1891 (明治 24) 年~1892 (明治 25) 年オルガン履修生と受持

専修部二年	石原重雄 島崎赤太郎	Dittrich
専修部一年	小関鷹松 野村成仁	Dittrich
師範部一年	清水ヒデ 大畠サダ 冨田ヒサ 飯田三々雄 北村季晴[勉]	木村
選科(甲)	土屋カズ 横山フサ 日野[埜]アヤコ	木村
選科 (乙)	澁江マツ 成田タミ 川嶋	木村
	東琢	瓜生

[006] 『明治二十五年七月 學年大試験成績 生徒掛』

専修部二年、一年の受持はRudolf Dittrich、師範部一年を木村作、選科(甲)を遠山甲子の代理で木村作、(乙) は木村作と瓜生繁であった。

表 1-25 1892 (明治 25) 年~1893 (明治 26) 年オルガン履修生と受持

専修部三年	島崎赤太郎 石原重雄	Dittrich
専修部一年	鈴木重太郎 小関鷹松	能勢
師範部二年	北村季晴 冨田ヒサ 飯田三々雄 大畠サダ 清水ヒデ 戸田忠義	遠山
師範部一年	田村乕藏 吉田信太 立花季太郎 林甚藏 玉川瓶也 池上長廣	小山
豫科	米野鹿之助 高橋二三四 今野大膳 桐ケ窪之七	小山
選科	横山フサ 櫻井モト 関根 大塚 桂川	能勢

[008] 『明治二十六年七月 學年試業成績書類 生徒掛』

専修部三年の受持は Rudolf Dittrich、専修部一年と選科は能勢作 (=木村作)、師範部二年は遠山甲子、師範部一年と豫科は小山作之助であった。

表 1-26 1893 (明治 26) 年~1894 (明治 27) 年オルガン履修生と受持

専修部二年	田村乕蔵 牧野成次 高橋タミ 鈴木重太郎	Dittrich 能勢
専修部一年	永井幸次 高橋二三四 米野鹿之助 福田この	能勢
師範部二年	林甚藏 野村成仁 玉川瓶也 立花基太郎 池上長廣	Dittrich
師範部一年	関根琢 野村成仁	Dittrich
	宮部フジ 松山若拙 河原林吉利 今野大膳 大塚オト	小山
豫科	伊藤喜左衛門 佐々木一 浦木トキ 高井徳蔵 安田俊高 椿ノブ	遠山/能勢
	林ヤヘノ 天谷秀 黒部峰三 三宅末吉	
選科	櫻井モト	小山

[009] 『明治二十七年 學年試業成績』

この年は、専修部だけでなく師範部の一部もディットリヒが受持っている。師範部の二年生と一年生は全員がオルガンを履修した。師範部一年には、のちに楽器の納入に携わることになる高井徳蔵がいる。

表 1-27 1894 (明治 27) 年~1895 (明治 28) 年オルガン履修生と受持

研究生	島崎赤太郎	-
専修部三年	高橋タミ 田村虎蔵 鈴木重太郎	島崎
専修部二年	永井幸次 高橋二三四 米野鹿之助	島崎
専修部一年	三宅末吉 天谷秀	島崎
補修科	吉田信太 立花季太郎 玉川瓶也 林甚藏 池上長廣	島崎
師範部二年	野村成仁 関根琢 大塚おと 河原林吉利 今野大膳 牧野成次	島崎
師範部一年	伊藤喜左衛門 松山若拙 高井徳蔵 佐々木一 安田俊高 黒部峰三	山田
	島村吉門 浦木トキ 小林ヤヘノ 由利サク 宮部フジ	遠山
豫科	吉田恒三 石井シゲ 近森出来治 石井テル 關寛治	不明
選科	美添イネ 和田幸二郎 小林ふさ	島崎
	米久保喜雄 渡邊森蔵	能勢
小学唱歌講習科	14名	不明

[011] 『明治二十八年 試業成績 生徒掛』

師範部二年を超えた学生が補修科に残り、小学唱歌講習科の全員がオルガンを履修すなど、オルガン履修生の数が増加している。オルガンに関わる教師の布陣は、助教授:遠山甲子(洋琴、風琴)、嘱託教員:能勢作(洋琴風琴)、島崎赤太郎(風琴)、山田源一郎(洋琴、風琴)であった。 島崎は研究生に籍を置きながら、多くのオルガン生の指導をはじめた。この急激な変化について、この時補修科に在籍していた吉田信太はのちに以下のように回想している。

自分が島崎氏を知ったのは學校に入って間もなくで氏が本科二年の頃であった、・・・其當時からオルガンが達者で色々な曲を弾いて聴かされたものだ。氏が卒業して研究生となって暫くするとヂツトリヒ先生が帰國せられ、其後任としてオルガンを擔當する事になった。自分等も一年位氏の教授を受けた。友人の先生だが教授の時は生れ變つた様に厳格な顔をして極めて懇切に教へて呉れた事を記憶して居る。65

45

⁶⁵吉田信太「友人として島崎君」『學校音楽』學校音楽研究會編輯、1934年4月、島崎赤太郎先生追悼號、 16~17頁。

表 1-28 1895 (明治 28) 年~1896 (明治 29) 年オルガン履修生と受持

研究生	島崎赤太郎	-
専修部三年	永井幸次 高橋二三四 米野鹿之助	島崎
専修部二年	三宅末吉 天谷秀 小林ヤヘノ	島崎
師範部二年	早川(伊藤)喜左衛門 黒部峰三 島村吉門 安田俊高 宮部ふじ	島崎
	由利サク 松山若拙 佐々木一 高井徳蔵	
師範部一年	近森出来治 吉田恒三 山本静乃 石井テル 石井シゲ	島崎
豫科	川添安蔵 渡邊森蔵 入江好次朗 植村いし 石黒ムツ	能勢
選科	米久保喜雄 丹羽すが	能勢
小学唱歌講習科	11名	不明

[013] 『明治二十九年 學年試験成績』

次年度からオルガン履修の太田勘七が専修部一年にいるが、この時は洋琴を履修していた。島崎赤太郎は研究科に籍がある。教師は、助教授:山田源一郎(唱歌、風琴)、講師:能勢作(洋琴、風琴)、島崎赤太郎(風琴)であった。小学唱歌講習科の受持は山田源一郎であったかもしれない。

表 1-29 1896 (明治 29) 年~1897 (明治 30) 年オルガン履修生と受持

研究生	島崎赤太郎 高橋二三四	-
専修部三年	神山末吉 天谷秀 小林ヤヘノ	島崎
専修部二年	太田勘七	島崎
専修部一年	渡邊森蔵 植村イシ 石黒ムツ	島崎
師範部二年	近森出来治 吉田恒三 山本シズノ 石井シゲ 石井テル	島崎
	高井徳蔵 佐々木一	
師範部一年	川添安蔵 入江好次郎 竹中小春	山田
豫科	永井うめ	能勢
選科	巌本捷治 市川和十郎 木戸 渡邊鹿児丸	能勢
小学唱歌講習科	8名	小山

[014] 『明治三十年 學年試業成績』

教師は、助教授:小山作之助(唱歌、唱歌教授法、音楽理論)、山田源一郎(唱歌、風琴)、講師:能勢作(洋琴、風琴)島崎赤太郎(風琴)であった。小学唱歌講習科のオルガン指導は、唱歌指導ともに小山作之助が担当したようである。小山は「風琴科」という表記を用いている。

表 1-30 1897 (明治30) 年~1898 (明治31) 年オルガン履修生と受持

研究生	島崎赤太郎 神山末吉 天谷秀	-
専修部三年	太田勘七	島崎
専修部二年	渡邊森蔵 石黒ムツ	島崎
専修部一年	三上タケ 植村イシ	島崎
師範部二年	川添安蔵 入江好次郎	島崎
師範部一年	永井カメ 佐藤ミチ	山田
豫科	植松延毘 萩原太郎	山田
選科	八島谷五郎 中川コウ	能勢
小学唱歌講習科	6名 (13名中)	不明

[015] 『明治三十一年七月 學年試業成績』

この年、小学唱歌講習科のオルガン履修生は約半数であった。オルガン教師は、助教授:山田源一郎(唱歌、風琴)、講師:能勢作(洋琴、風琴)、島崎赤太郎(風琴)である。山田源一郎が「オルガン科」という表記を用いている。前年の小山の「風琴科」表記とあわせて、このころからオルガン履修者を科としてとらえる傾向があったのかもしれない。

表 1-31 1898 (明治 31) 年~1899 (明治 32) 年オルガン履修生と受持

研究生	島崎赤太郎 神山末吉	-
専修部三年	石黒ムツ 渡邊森蔵 太田勘七	島崎
専修部二年	三上タケ 植村イシ	島崎
師範部二年	鈴木毅一	不明
	永井カメ 佐藤ミチ	島崎
師範部一年	植松延毘	島崎
豫科	矢野盛雄 島長代 新清次郎	島崎
	山本恭三 泥堂菊代 樫尾トク	不明
選科	中川コウ香川実	島崎
	久木田喜之介 山下乕雄	不明
	志水操 田原カメ 司馬エツ	天谷

[016] 『明治三十二年七月 學年試業成績』

小学唱歌講習科の履修がなくなり、履修生の数は一旦落ち着いている。教師は、講師: 島崎赤太郎(風琴)、高木武(風琴)、天谷秀(風琴)で、唱歌や洋琴と掛け持つことなく、 風琴だけを教えている。

表 1-32 1899 (明治 32) 年~1900 (明治 33) 年オルガン履修生と受持

研究生	島崎赤太郎 渡邊森蔵	-
専修部二年	三上タケ	島崎
師範部二年	植村イシ	島崎
師範部一年	齋藤左右田 矢野盛雄 新清次郎 山本恭三	島崎
豫科	志水操 真保伸	島崎
	木場政雄 仙波あい 田原かめ 川添しげ	不明
選科	島長代 和田トシ	島崎
	香川実 前田トミヱ 須藤	不明

[017] 『明治三十三年七月 學年試業成績』

教師は、助教授:田村虎蔵(唱歌、風琴)、授業嘱託:島崎赤太郎(風琴)、天谷秀(風琴)であった。

表 1-33 1900 (明治 33) 年~1901 (明治 34) 年オルガン履修生と受持

研究生	島崎赤太郎 天谷秀 渡邊森蔵	-
専修部三年	三上タケ	不明
師範部二年	齋藤左右田 矢野盛雄 太田勘七 新清次郎 山本恭三	島崎
	巌本捷治	不明
師範部一年/	志水操	島崎
甲種師範科二年		
甲種師範科一根	高島キョ 豊島ミツ	島崎
乙種師範科	後藤宗次郎 飯塚ツナ 譽田アイ 寺町六郎 冨永フク 石黒ツタエ	-
	藤田龍 兼重トラ 仁科タマ 島だ俊明 江口瑞枝 加藤英	
選科	島長代 真保伸 村田ミイ 仙波アイ 和田年 佐藤みち 川崎いさ	島崎
	山越三郎 木場政男	高木
	服部コト 中沢ふじ	天谷

[018] 『明治三十四年七月 學年試業成績』

豫科に、のちに本科でオルガンを履修する三浦トメがいる。この年より乙種師範科の履修がはじまり、必修としてオルガンが課された。オルガン履修生の増加に伴い、オルガン教師が増加している。教師は、講師:Noël Péri (オルガン、和声学、作曲)、助教授:高木武(唱歌、オルガン)、兼任:田村虎蔵(唱歌、オルガン)、吉田信太(唱歌、オルガン)、授業嘱託:島崎赤太郎(オルガン)、天谷秀(オルガン)、野村成仁(オルガン)であった。

表 1-34 1901 (明治34) 年~1902 (明治35) 年オルガン履修生と受持

研究科	島崎赤太郎 天谷秀	-
専修部三年	三上タケ	Péri
甲種師範科三年	志水操	不明
甲種師範科二年	村田ミイ 豊島ミツ	Péri
甲種師範科一年	遠藤トヨ 須藤ハル 関タキ 布村ウタ 新渡戸ハマ 芝村政子	齋藤
	大熊シン 平川千代 岩倉一野 吉岡キイ 賣間キク 石黒キエ 遠藤淑	齋藤
	松園郷美 大門トク 渡邊弥藏 長沢光治 田原美喜 和田タメ	下村
	宗像オシエ 赤埴芳江 篠崎トク 松江秀	下村
	山中サダ 赤尾寅吉 長谷部巳津次郎 村岡重任 南能衛	太田
	内藤俊二 吉田マキ	太田
	清水壽榮蔵	不明
乙種師範科	片山イチ 和志武フク 前田ワセ 皆良田潔 藤武信千代	不明
	日々野チエ 田中フミ 佐藤甫 香山ミネ 二ノ文弥十 田沢一	
	葦原法忍 渡邊格之助 築山ケイ	
選科オルガン科	木田アドロフ 石原傳枝	田村
	辻美亞 島地あつ	島崎
	堀志ん	天谷
	岩井のぶ 佐々木壽 松岡孝 須貝八重	不明

[019] 『明治三十五年七月 學年試験成績』

甲種師範科一年は全員がオルガンを履修している。本科一年に次年度からオルガンを履修している三浦トメがおり、豫科には次年度から本科でオルガンを履修する福智院孝徳がいるがこの年のオルガン履修に関する記録はない。選科生の数が多くなってきているが、履修記録は乏しい。上記のほかにも選科生のオルガン履修生がいた可能性はある。

教師は、講師: Noël Péri (オルガン、和声学、作曲)、高木武 (オルガン)、兼任:田村 虎蔵(唱歌、オルガン)、授業嘱託:島崎赤太郎 (オルガン)、天谷秀 (オルガン)、渡邊森 蔵、太田勘七、齋藤左右田であった。『東京音樂學校一覧』66では、下村芳子の担当はピア ノになっているが、実際には師範科学生のオルガンも担当している。

表 1-35 1902 (明治 35) 年~1903 (明治 36) 年オルガン履修生と受持

研究生	天谷秀 齋藤左右田 三上タケ	-
本科器楽部二年	三浦トメ	Péri
本科器楽部一年	松井壮吉 古澤きみ 福智院孝徳	Péri
豫科	久保哲 加藤ブン	不明
甲種師範科三年	村田ミイ 豊島ミツ	不明
甲種師範科二年	南能衛 渡邊弥蔵 松園郷美 赤尾寅吉 村岡重任 大門トク	下村

^{66 『}東京音樂學校一覧 従明治三十四年至明治三十五年』東京音樂學校、26頁。

49

	杉江秀 長谷部巳津次郎 田原美喜 宗像オシヱ 長沢光治	下村
	清水壽榮蔵 赤埴良枝	下村
	内藤俊二 遠藤とよ 山中サダ 新渡戸はま 岩倉一野	天谷
	平川千代 賣間きく 布村ウタ 関タキ 芝村政子 須藤はる	天谷
	大熊しん 吉岡キイ	天谷
甲種師範科一年	松本徳蔵 小田島豊治 八木錦 小笠原良造 吉村りう	野村
	田口隆二 澤田なを 與田甚二郎 君塚正志 田中銀之助	
	田渕はつ 釜萢前作 日下部千穂 徳田とく 青木シノ 渋谷大	
	八郎 藤田コト 小川すみ 江澤清太郎 八木原通三 由布キミ	
	小串信太朗	
乙種師範科	馬塲鈴美 服部サルイ 西見貫一 上條其次 中山カナ	不明
	平田エリ 山口恭三 植石富美 明石まつ 荒井年 秋山千登勢	
	相澤うめ 君嶋淑人 北村茂八 岩澤勇義 保科寅治 加地たき	
	森田玉吉 杉江金之助	
選科	岩井なみ 島地あつ	三上
	木田アドルフ	田村
	秋元きく堀進	天谷
	赤星國清 須貝八重 三須きく 辻美亜 水原道子	不明

- [021] 『明治三十六年七月 學年試験成績』
- [020] 『明治三十六年三月 甲種師範科 學年試験成績』

甲種師範科に関する資料が別口となっている。前年度同様、選科生に関する記述は少ない。教務資料から確認できたのは上記の履修だが、オルガン履修生が他にもいた可能性がある。甲種師範科二年の数人はピアノを履修しているが、乙種師範科の全員がオルガンを履修している。

教師は、教授:島崎赤太郎(独逸留学中)、講師 Noël Péri (オルガン、和声學、楽式一班、作曲)、助教授:楠美恩三郎、下村芳子(ピアノ、オルガン)、兼任:田村虎蔵(唱歌、オルガン)、授業嘱託:天谷秀(オルガン)、野村成仁(オルガン)、渡邊森蔵(オルガン)、太田勘七(オルガン)、という布陣であった。

表 1-36 1903 (明治36) 年~1904 (明治37) 年オルガン履修生と受持

研究生	三上タケ	-
本科器楽部三年	三浦トメ	Péri
本科器楽部二年	古澤きみ 松井壮吉	Péri
本科器楽部一年	加藤ブン久保哲	Péri
(旧) 甲師二年	関タキ 吉岡キイ	天谷
	吉田マキ	下村
[甲種師範科三年]	南能衛 渡邊弥蔵 内藤俊二 遠藤とよ 松園郷美 赤尾寅吉	不明
	村岡重任 大門トク 杉江秀 長谷部巳津次郎 山中サダ	

	田原美喜 新渡戸はま 岩倉一野 平川千代 賣間きく	
	布村ウタ 関タキ 宗像オシヱ 芝村政子 長沢光治 大熊しん	
	吉岡キイ	
[甲種師範科二年]	松本徳蔵 小田島豊治 八木錦 小笠原良造 吉村りう	不明
	田口隆二 澤田なを 與田甚二郎 君塚正志 田中銀之助	
	田淵はつ 釜萢善作 日下部千穂 増田とく 青木シノ	
	渋谷文八郎 藤田コト 江澤清太郎 大野すず	
[甲種師範科一年]	草川宣雄 八木原道三 大島常治 鈴木善野 島村藤尾	不明
	松岡保 平林たみ 大槻貞一 浅尾ハツネ 小串信太朗 黒木寛	
	秋山昇 高橋チカエ 木村キセエ	
乙種師範科	久保島裕 稻澤りう 出口昇 矢野勇雄 小河白治 南傳	不明
	張せん 香取文子 菊池武弥 黒杭カメ 林よね 岩井米子	
	木村豊吉 田邊志ん 秋山都 無門照子 原田末蔵	
選科	赤星國清 島地あつ 須貝八重 辻美亞 三須きく	不明
	木田アドロフ 宇津木卿子 岩井のぶ 秋元きく	

[023] 『明治三十七年七月 學年試験成績』

この年は甲種師範科生の試験記録が欠落しているため、『東京音樂學校一覧』がより補った。 前後の年の履修状況から、上記甲種師範科の学生はオルガンを履修していたと考えられる。教師は、教授:島崎赤太郎(独逸留学中)、助教授:田村虎蔵(オルガン)、楠美恩三郎(オルガン)下村芳子(ピアノ、オルガン)、講師:Noël Péri(オルガン、和声學、楽式一班、作曲)、授業嘱託:天谷秀(オルガン)、野村成仁(オルガン)、授業補助:渡邊森蔵(オルガン)、齋藤左右田(オルガン、研究生)、三上タケ(オルガン、研究生)であった。

表 1-37 1904 (明治 37) 年~1905 (明治 38) 年オルガン履修生と受持

研究生	三上タケ	-
本科器楽部三年	古澤きみ 松井壮吉	Heydrich
本科器楽部二年	加藤ブン	Heydrich
甲種師範科三年	釜萢善作 吉村りう 松本徳蔵 田渕はる 日下部千穂	楠美
	與田甚二郎	楠美
	田口隆二 小笠原良造 江澤清太郎 澤田なを 水野富未	下村
	藤田コト	下村
	田中銀之助 小田島豊治 君塚正志 青木シノ 増田とく	天谷
(旧) 甲師三	吉田マキ 宗像をしへ	下村
	関タキ 吉岡キイ	天谷
甲種師範科二年	草川宣雄 八木原道三 大島常治	天谷
	鈴木善野 島村藤尾 松岡保 平林たみ 大槻貞一 浅尾ハツネ	楠美

^{67 『}東京音樂學校一覧 従明治三十六年至明治三十七年』、東京音樂學校、70-72 頁。

_

	小串信太朗 黒木寛 秋山昇	楠美
	高橋チカエ 木村キセエ 大野すず	下村
甲種師範科一年	田中寅之助 中田章 栢森亨 森田友次郎 小部卯八	楠美
	中島かつ 堀千里 井上イシ 尾崎ヒデ 山本さだ	下村
	望月清 原田彦四郎 増山きぬ	天谷
乙種師範科	稻田きん 秩父浪 岡崎伴治 渡邊よう 亀井直 高畑常元	渡邊
	龍野良平 竹原ちよ 中村ユウ 浦山十太郎 窪田寛 山本ふさ	
	山下于喬 山縣ゆき 松村ひさ 藤井朝野 小菅つた 後藤長助	
	江間てう 寺塚原壽知 三木雅江 東野多嘉	
選科	須貝八重 田中いち 秋元きく	天谷

[025] 『明治三十八年六月 各科學年試験成績』

[024] 『明治三十八年三月甲種師範科學年試験成績』

乙種師範科は、渡邊森蔵による試験課題が残されているののみであったため、『東京音樂學校一覧』 68より補った。教師は、教授:島崎赤太郎(独逸留学中)、助教授:田村虎蔵(オルガン)、楠美恩三郎(オルガン)、天谷秀(オルガン)、下村芳子(ピアノ、オルガン)、授業補助:渡邊森蔵(オルガン)、大門トク(オルガン)であった。『東京音樂學校一覧』 69では Hermann Heydrich (1855-?) の担当はピアノ、和声學、楽式一班となっているが、実際にはオルガンも教えている。

この年、甲種師範科の小田島豊治は東京音楽学校改称祝賀會記念奨学資金賞品として、 乙種師範科の山縣ゆきは故白井銈造奨学記念として、それぞれメトロノームを授与されて いる⁷⁰。

表 1-38 1905 (明治38) 年~1906 (明治39) 年オルガン履修生と受持

研究生	三上タケ 松井壮吉 古澤きみ	-
器楽部三年	加藤ブン	Heydrich
豫科	冨田静女 平尾勇 福家辰巳	不明
甲種師範科三年	栢森亨 黒木寛 田中寅之助 秋山昇 森田友次郎 鈴木善野	楠美
	高橋チカエ 木村キセエ	下村
	草川宣雄 大島常治 八木原道三 大槻貞二	天谷
甲種師範科二年	原田彦四郎	天谷
	中田章 浅尾ハツネ 島村藤尾平林たみ 小串信太朗	楠美
	松岡保	楠美

^{68 『}東京音樂學校一覧 従明治三十七年至明治三十八年』、東京音樂學校、73頁。

^{69 『}東京音樂學校一覧 従明治三十七年至明治三十八年』、東京音樂學校、64頁。

⁷⁰ [304] 『特待生書類 賞品授与書類 教務課』、明治 38 年 3 月 24 日。学校側の記録が見つかっていないが、 小田島と同学年の釜萢善作もメトロノームを授与されており、現在もご子孫がお持ちである。

	中島かつ 堀千里 井上イシ 尾崎ヒデ 山本さだ 谷とし	下村
	望月清	下村
甲種師範科一年	矢追壽賀 松本あい 上野外喜尾 窪田志げ 新谷八太郎	楠美
	大西正直 小部卯八 岩淵きやう 市原たき 本田ひろ	楠美
	星澤とし	楠美
	浅野志ん 清水いく 阿部はつみ 河野靖之 野口米次郎	天谷
	須川政太郎 河田靖之	天谷
	吉田なを 中川コト 上野モモヨ	下村
選科	三須きく	田村
	飯田隆健 山崎謙太郎	天谷
	辻美亞 宇津木喬子 稻澤りう	不明
	末田ユリヨ 長沼サキ 風富たま 福田ます 中澤駒 渡こと	
	丸山マサ 三浦俊治 西千里 田原てい 山下于喬 朱少屏	
	嗎開擲 三木稚枝 米倉栄子 西村きしへ	
乙種師範科	萩原美代三郎 西山ステ 小田美雄 大木ふさ 岡崎キク	不明
	加川才助 川村四郎 安田規矩子 百瀬只雄 浦山十太郎	

- [028] 『明治三十九年七月本科豫科乙種師範科學年試験成績』
- [027] 『明治三十九年三月 甲種師範科學年試験成績及問題』
- [540] 『明治三十三年九月以降 生徒入退学通知』

選科生の末田ユリョ以降は、[540] 『明治三十三年九月以降 生徒入退学通知』の入学の部 [明治 38 年] に記載がある。

教師は、教授:島崎赤太郎(独逸留学中)、助教授:田村虎蔵(オルガン)、楠美恩三郎(オルガン)、天谷秀(オルガン)、下村芳子(ピアノ、オルガン)、授業嘱託:渡邊森蔵(オルガン)、授業補助:青木シノであった。

この年、甲種師範科の鈴木善野は東京音楽学校改称祝賀會記念奨学資金賞品として、同じく甲種師範科の草川宣雄は故白井銈造奨学記念として、楽譜三部を授与されている⁷¹。 乙種師範科の百瀬忠雄は故白井銈造奨学記念として、唱歌集四部とオルガン・ピアノ楽譜を5部授与された⁷²。

72 [304] 『特待生書類 賞品授与書類 教務課』、明治 39 年 7 月 7 日。オルガン・ピアノの授与楽譜は「一、オルガン教則本(島崎赤太郎撰)、一、ピアノ、オルガン練習書(共益商社)、一、オルガンの友(ペリー)、一、オルガン、ピアノ楽譜、一、唱歌重音譜」であった。

^{71 [304] 『}特待生書類 賞品授与書類 教務課』、明治 39 年 3 月 23 日。授与楽譜は「一、ホーマン、バイオリン教則本、一、ベンダー、ハーモニューム教則本(正編一、続編一)一部、一、ラインハルド、ハーモニューム教則本(巻一、二)一部であった。

表 1-39 1906 (明治39) 年~1907 (明治40) 年オルガン履修生と受持

研究生	三上タケ 松井壮吉 古澤きみ	_
器楽部一年	富岡静女 平尾勇 福家辰巳	島崎
豫科	張福興 高野釣雄 山崎道三	中村
甲種師範科三年	原田彦四郎 堀千里 尾崎ヒデ 栢森亨 田中銀之助 中田章	島崎
	中島かつ 山本さだ 黒木寛 秋山升 望月清	
甲種師範科二年	市原タキ 岩淵きやう 本多ひろ 星沢とし 小部卯八 大西正直	楠美
	上野外喜尾 窪田志げ 矢追壽賀 松井あい 浅野シン 新谷八太郎	楠美
	清水いく	楠美
	河田靖之 野口米次郎	天谷
	吉田なを 中川こと 上野モモヨ	中村
甲種師範科一年	石黒キミ 徳増春三 釜萢清藏 高橋哲 竹澤貞次郎 野村スミ	天谷
	伴ひで 大立目うめよ 太田松江 窪田たか 安田規久子 藤巻志う	中村
	今ゆき 鈴木 窪川	中村
	戸田つるこ 小笹ミサホ 片岡ともゑ 吉山アヤコ 高橋タカ	楠美
	野口ちよ 工藤富次郎 古瀬紋吉 古川シヅエ 須川政太郎	楠美
乙種師範科	池田阿隻 大石政 鈴木ひさ 高澤隆 古賀紘一 冥井キミ	不明
	吉地正之助 香山峰子 沖とめ 島内ミナ	
選科	北村初女	青木
	櫻井とみ 辻美亞 三木稚枝 米倉栄子 西村きしへ	不明
	秋元キヨ 伊藤武彌 上野ゆり 中村音次郎 臺志げ 張福興	
	鳥潟豊 仁瓶藤一 柳川恒作 佐川チャウ 上生八重子 岡村芳枝	
	田中秀 本山知香 山本まつ 牧山むる 吉田とき 松田光二 舟越	
	弥平太 岡崎キク	
	沙土久 週間イク	

- [029] 『明治四十年三月 各科學年試験成績』
- [540] 『明治三十三年九月以降 生徒入退学通知』

甲種師範科三年生は、オルガン、ピアノ、ヴァイオリンからの選択制であった。選科の 秋元キョ以降は、[540] 『明治三十三年九月以降 生徒入退学通知』、入学の部 [明治 39 年] による。

教師は、教授:島崎赤太郎 (オルガン 和声學 楽式一班)、助教授:楠美恩三郎 (オルガン)、田村虎蔵 (オルガン)、天谷秀 (オルガン)、中村芳子 (=下村芳子) (オルガン)、授業嘱託:渡邊森蔵 (オルガン)、授業補助:青木シノ (オルガン) であった。

この年、乙種師範科の池田阿隻は故白井銈造奨学記念として、唱歌集七部とオルガン楽 譜三部を授与された⁷³。

54

^{73 〔304〕 『}特待生書類 賞品授与書類 教務課』、明治40年3月23日。

表 1-40 1907 (明治 40) 年~1908 (明治 41) 年オルガン履修生と受持

研究生	中田章 松井壮吉 古澤きみ	-
本科二年	富岡静女 平尾勇 福家辰巳	島崎
本科一年	張福興 高野釣雄	島崎
豫科	山田ふく	不明
甲種師範科三年	松井あい 上野外喜尾 大西正直 吉田なを 野口米次郎 本多ひろ	島崎
	上野モモヨ 清水いく 新谷八太郎 小部卯八 星沢とし 窪田志げ	
	市原タキ	
甲種師範科二年	高橋テツ 石黒キミ 古川シヅエ 野口ちよ 小笹ミサホ 藤巻志う	中村
	岩渕きやう 太田松江 大立目うめよ 今ゆき 窪田たか 野村スミ	中村
	須川政太郎 徳増春三 河田靖之 竹澤貞次郎 高橋たか	楠美
	工藤富次郎 古瀬紋吉 釜萢清蔵 矢追壽賀 戸田つるこ	楠美
甲種師範科一年	園山民平 長橋熊次郎 為貝節子 地脇たつ 園部チョ 冨田小芳	楠美
	橋村その 早川長 小幡静江 荒木栄次郎	楠美
	鈴木ミツ子 大谷ハツエ 中西フミ 鈴木あや 山本けい	中村
	須階とき哉 宮内薫 伴ひで 村田ミネ	中村
	會沢はつ 塩田シゲリ 島田ムメ	青木
	宮西又一 内藤雅忢 荒木	中田
乙種師範科	亀井順 増田うた 小成なか 石塚直男 渡辺初 北村泰三	不明
	福沢以と 田中久能 松平信博 二見ハナ 加藤泰子 千年イネ	
	小田越男 野津シユン 季變義	
選科	望月すみ 稻澤りう	田村
	宇津木喬子 水原みち	不明
	横倉嘉代 村野きく 緒方章代 高橋八重 筧ヒデ 大槻源治 草川	
	宜雄 勝山義行 鈴木ひさ 大石政 川村四朗 千野治(女)川崎た	
	ず 張康 山北けい(男)大林小繁 小島僊吉 加藤やす 伊賀薫	
	(女) 濵かつ 黄瓚(女)左國聰(女) 王詩 徐竹素 徐竹筠	
	張振鑾 東泰 宇賀園 馬場鈴美	

[030] 『明治四十一年三月 各科學年試験成績』

[540] 『明治三十三年九月以降 生徒入退学通知』

甲種師範科全学年の全員、乙種師範科全員がオルガンを履修している。選科の横倉嘉代以降は、[540]『明治三十三年九月以降 生徒入退学通知』入学の部 [明治 40 年、明治 41年] に記載がある。教師は、教授:島崎赤太郎(オルガン、和声學、楽式一班)、助教授:楠美恩三郎(オルガン)、田村虎蔵(オルガン)、天谷秀(オルガン)、中村芳子(オルガン)、授業嘱託:渡邊森蔵(オルガン)、授業補助:青木シノ(オルガン)、中田章(オルガン)であった。

この年、甲種師範科の松井あいは故白井銈造奨学記念として、楽譜六部とメトロノーム、 乙種師範科の亀井順は故白井銈造奨学記念として、唱歌集一部、オルガン楽譜一部とメトロノーム、乙種師範科の増田うたは東京音楽学校改称祝賀會記念奨学賞品として、唱歌集三部と楽譜三部を授与された74。甲種師範科の松井あいはさらに、松本楽器合資会社寄贈奨学賞品としてオルガン一台を授与されている75。

表 1-41 1908 (明治 41) 年~1909 (明治 42) 年オルガン履修生と受持

研究生	松井壮吉 古澤きみ 多久寅 中田章	-
本科器楽部三年	富岡静女 福家辰巳 平尾勇	島崎
本科器楽部二年	張福興 高野釣雄	島崎
本科器楽部一年	山田ふく	島崎
豫科	池田阿隻 小原知孝 吉田トキ 矢野花	不明
甲種師範科三年	高橋テツ 古川シヅエ 工藤富次郎 野口ちよ 古瀬紋吉 藤巻志う	島崎
	戸田つるこ 小笹ミサホ 釜萢清蔵 河田靖之 窪田たか	
	久保田きやう 矢追壽賀 大立目うめよ 今ゆき 徳増春三	
甲種師範科二年	園山民平 長橋熊次郎 為貝節子 片岡ともゑ 冨田小芳 橋村しの	楠美
	地脇たつ 岡部チョ 伴ひで 荒木栄次郎	楠美
	山本けい 大谷ハツエ 小幡静江 鈴木あや 中西フミ 宮内薫	中村
	須階ときを 鈴木ミツ子 早川長 村田ミネ 野村スミ	中村
甲種師範科一年	山部幸恵 宮田ミヨ 山田フミ 大谷サワ 菅原秀 江中ムメ	中村
	渡邊イツ 里見ゑつ 今しげ 鹿野キヨ 天野ヨシ 塩田シゲリ	中村
	小泉つね 松井ヒロ 南セイ(内田ふき)	中村
	井上初枝 伊達愛 小澤威 林みつ 川下秋 小木曽佳苗 武井ノブ	楠美
	大島八尾 沼田ジユエ 橋村正夫 岡田シゲ 竹村秀子 谷澤とめ	楠美
	渡邊常藏 上村なつ	楠美
	中村鹿之助 小岩井久平 小菅頴治郎 寺順孫七郎	島崎/
	山内常光 猪瀬久三 青柳善吾 青木久	南/中田
乙種師範科	飯野勝次郎 鴨脚秀孝 頓野サタ 加藤みよ 児玉花 新井悌之助	不明
	佐藤喜代 關口保琥太郎 瀧本岩太郎 園田博 村田セイ	
	宇佐美まさ 鈴木正 大越修 黒岩靜 牧田理代 丸山ひなじ	
	古澤マク 鈴木榮七	
選科	辻亜美 竹内茂 土屋静 湯本寿賀子 大野政子 貫喬子 亀井順	中田
	土方田鶴 八代とよ 石島志げる 牧山静子 和田滋子 森純一	不明
	内田ふき 岸上愛子 松平信博 小池きく子 仁科ヨネ 可児ミサキ	
	牧山静子 千頭クニ 渡辺菊次郎 日下ともよ 飯村ちか 松田キイ	
	角岡富恵 東雅□	

[031] 『明治四十二年三月 學年試験成績』

[540] 『明治三十三年九月以降 生徒入退学通知』

56

^{74 〔304〕 『}特待生書類 賞品授与書類 教務課』、明治41年3月25日。

⁷⁵ 同上、明治 41 年 3 月 31 日。

甲種師範科三年生、二年生と、乙種師範科の全員がオルガンを履修している。[540]『明治三十三年九月以降生徒入退学通知』には、豫科の池田、吉田、選科の竹内茂以降の記載がある。

教師は、教授:島崎赤太郎(オルガン、和声學、楽式一班)、助教授:楠美恩三郎(オルガン)、田村虎蔵(オルガン、分教場勤務)、天谷秀(オルガン、分教場勤務)、中村芳子(オルガン)、講師:渡邊森蔵(オルガン 分教場勤務)、南能衛(オルガン、楽理)、授業補助:青木シノ(オルガン、分教場勤務)、中田章(オルガン、分教場兼勤)であった。選科学生の増加に合わせて、分教場勤務の教員が増員している。

この年は甲種師範科三年の高橋テツが故白井銈造奨学記念として、音楽書一部、楽譜三部と鈴付きのメトロノームを授与された⁷⁶。

表 1-42 1909 (明治 42) 年~1910 (明治 43) 年オルガン履修生と受持

研究生	松井壮吉 中田章 平尾勇 古澤きみ 富岡静女	-
本科器楽部三年	張福興 高野釣雄	島崎
本科器楽部二年	山田ふく	島崎
本科器楽部一年	小原知孝 池田阿隻 吉田トキ	島崎
甲種師範科三年	橋村その 早川長 伴ひで 富田小芳 地脇たつ 小幡静江	島崎
	片岡ともゑ 竹澤貞次郎 為貝節子 岡部ちよ 園山民平	
	長橋熊次郎 中西フミ 村田ミネ 野村スミ 大谷ハツエ 山本けい	
	荒木栄次郎 宮内薫 鈴木あや 須階ときを 鈴木ミツ子	
甲種師範科二年	橋村正夫 林みつ 沼田ジユエ 岡田シゲ 伊達愛 小澤威 川下秋	楠美
	中村鹿之助 上村なつ 猪瀬久三 井上初枝 山内常光 古岩井久平	楠美
	小菅頴治郎 安藤憲 青木久 青柳善吾	楠美
	小木曽佳苗 鹿野キヨ 武井ノブ 竹村秀子 大島八尾 大谷さわ	中村
	山田フミ 松井ヒロ 今志げ 江中ムメ 天野ヨシ 里野ゑつ	中村
	宮田ミヨ 南セイ 菅原秀	中村
	谷澤とめ 小泉つね 山部幸恵	不明
甲種師範科一年	原格太郎 林仙二 岩狭万次郎 加藤英治 山本壽 牧野一郎	平尾
	藤田喜三郎	平尾
	服部ハル 西村規矩千代 小野リユウ 岡崎喜與 折橋アイ 竹村乕	楠美
	南里マサチ 中村コト 革田トシヱ 井上のぶ 長澤古ま	楠美
	内田はる 牧原カツヱ 松木くに 松野ちよ 古川ハルエ	中村
	近藤千重子 目賀田とし 水野リヨウ 宮崎タキ 宮川キヨ	中村
	森本絹 関恭	中村

⁷⁶ 〔304〕 『特待生書類 賞品授与書類 教務課』、明治 42 年 3 月 25 日。楽書は Davenport- Element of Harmony and Counterpoint、楽譜は Nicholl- Melodische Stücke / Reinhard-Harmonium 2 Heft / Harmonium Schule であった。

乙種師範科	飯島憲太郎 牛山充 櫛田トヨ 増田秀 小平たつ 有野やす	中田
	平間かね 毘蘆谷富衛 鈴木茂世	中田
	原田タミ 長谷霞 林ふみ 富永ひさ 岡フミ 岡田多枝 若林シヅ	南
選科	川上四郎 川崎たづ 松井テル	中田
	加藤静 松井スガ	松井
	杉みつ吉川才	青木

[033] 『明治四十三年三月 學年試験成績』

教師は、教授:島崎赤太郎(オルガン 和声論 楽式初歩)、助教授:楠美恩三郎(オルガン)、田村虎蔵(オルガン、分教場勤務)、中村芳子(オルガン)、南能衛(オルガン、和声論、音楽教授法、音楽通論)、講師補助:青木シノ(オルガン、分教場勤務)、授業補助:中田章(オルガン、分教場兼勤)、松井壮吉(オルガン、分教場勤務)、平尾勇(オルガン、分教場兼務)、富岡静女(オルガン、分教場勤務)であった。

この年、甲種師範科の岡部チョは東京音楽学校改称祝賀會記念奨学品並に白井銈造奨学記念として、音楽書一部と楽譜七部、甲種師範科の宮内薫と鈴木ミツ子、乙種師範科の毘蘆谷富衛は白井銈造奨学記念として、音楽書一部と楽譜四部を授与された77。

表 1-43 1910 (明治 43) 年~1911 (明治 44) 年オルガン履修生と受持

本科器楽科三年	山田ふく	島崎
本科器楽科二年	小原知孝 池田阿隻 吉田トキ	島崎
甲種師範科三年	橋村正夫 沼田ジュエ 小木曽佳苗 鹿野キヨ 武井ノブ	島崎
	竹村秀子 中村鹿之助 大島八尾 山内常光 松井ヒロ	
	小泉つね 小菅頴治郎 今シゲ 江中ムメ 安藤憲 天野ヨシ	
	青木久 青柳善吾 里見えつ 南セイ(伊達愛)	
甲種師範科二年	原格太郎 林仙二 若狭万次郎 山本壽 牧野一郎 藤田喜三郎	楠美
	服部ハル 西村規矩千代 小野リュウ 岡崎喜與 折橋アイ	楠美
	竹村乕 南里マサヂ 中村コト 長澤こま 革田トシヱ	楠美
	井上のぶ	楠美
	渡辺イワ 内田はる 牧原カツヱ 松木くに 松野ちよ	中村
	古川ハルヱ 近森千重子 目賀田とし 水野リヨウ 宮崎タキ	中村
	宮川きよ 森本絹 関恭	中村
甲種師範科一年	礒江清 小倉章義 片岡晴太郎 牛山充 草川友忠 高林シナ	楠美

^{77 [304] 『}特待生書類 賞品授与書類 教務課』、明治 43 年 3 月 25 日。授与内容はそれぞれ Chorübungen / Nicholl: Melodische Stücke / Reinhard: Studien Harmonium Heft I II / デュエットトリオ 唱歌集伴奏譜 / 島崎福井著 初等和声学 / 女学唱歌(山田)/ 重音唱歌 小山著 / オルガンノ友 ペリ著(岡部チョ)、

Lemmens: Morceaux pour Orgue-Mélodium / Grieg: Harmonium-Album / Reinhard: Harmonium Heft I II (宮内薫)、Lemmens: Morceaux pour Orgue-Mélodium / Grieg: Harmonium-Album / Nicholl: Melodische Stücke / Reinhard: Harmonium Heft I II (鈴木ミツ子)、前田久八著名進行曲 / 中等唱歌 / 女学唱歌(山田)/ 重音唱歌集小山 / 唱歌教授法 新納次郎著(毘蘆谷富衛)であった。

	中川さかえ 中島喜志 上村春野 大塚種 前川濱代 阿部みさを 櫻井みつ 佐久間よし 木岡信 宮崎まさ 城野たま 崎山テ輝	楠美 中村 中村 不明
乙種師範科	伊地知千代 田中やゑ 上田康 矢島繁治 安井ヨネ 眞篠俊雄 小暮徳治郎 佐々木きく 宮武まつ江 吉澤重	中田/南
選科	櫻井とみ [他]	中田 不明

[034] 『明治四十四年三月 各學科學年試験成績』

甲種師範科三年は半数がピアノを選択し、二年生は全員がオルガンを履修している。教務文書の中で、選科の履修を確認できたのは上記の櫻井のみであった。しかし、この年から『東京音樂學校一覧⁷⁸』の選科欄の記載方法が変わり、選択した科目が記されるようになった。櫻井を含む 58 人がオルガンを履修していたことが確認できるが、ここでは割愛する。

教師は、教授:島崎赤太郎(オルガン、和声論)、楠美恩三郎(オルガン)、助教授:中村芳子(オルガン)、南能衛(オルガン、和声論、音楽教授法、音楽通論)、講師補助:青木シノ(オルガン、分教場勤務)、中田章(オルガン、音楽通論、分教場兼勤)、松井壮吉(オルガン、分教場勤務)であった。

この年、甲種師範科の安藤憲は奨学記念として Violin を中心とした楽譜を、乙種師範科の真篠俊雄は白井銈造奨学記念として、メトロノームと楽書三部を授与された⁷⁹。

表 1-44 1911 (明治 44) 年~1912 (明治 45) 年オルガン履修生と受持

聴講	草川宣雄	
本科器楽三年	小原知孝 池田阿隻 吉田トキ	島崎
甲種師範科三年	原格太郎 牧野一郎 岡崎喜與 内田はる 井上のぶ 松木くに	島崎
	松野ちよ 古川ハルヱ 目賀田とし 宮崎タキ	
甲種師範科二年	礒江清 草川友忠 木岡信 島村えつ	島崎
	片岡晴太郎 藤田喜三郎 高林シナ 中川さかえ 水野リョウ	楠美
	宮崎まさ 牛山充 冨永嵯峨子	楠美
	中島喜志 上村春野 大塚種 前川濱代 阿部みさと 櫻井みつ	中村
	佐久間よし崎山輝	中村
甲種師範科一年	飯塚揆一 小倉章藏 富田鉦 加藤鶴 横山チカ 熊沢うめ	楠美
	安藤つじ弓削クミ(鈴木竹松)	

^{78 『}東京音樂學校一覧 従明治四十三年至四十四年』東京音樂學校、111~113頁。

_

^{79 [304] 『}特待生書類 賞品授与書類 教務課』、明治 44 年 3 月 17 日。 真篠俊雄の授与内容は、Weiser's Metronome / Morceaux pour Lemmens (Organ) / March Album / 12 vermischte Stücke von Benda (2 Heft)であった。

乙種師範科	萩原兼保 岡田志津磨 牧野正國	楠美
	石丸布九二 内田甚太郎 石倉とみ 林なつ 原喜久代	中村
	大和田望東 吉澤重 田澤トメ 増田あい 志賀松枝	中村
	榎田賢治	中村
選科	佐川ちやう	松井
	東泰	青木
	[他]	不明

[035] 『明治四十五年三月 各科學年試験成績』

通論、分教場兼勤)、松井壮吉(オルガン、分教場勤務)であった。

『東京音樂學校一覧⁸⁰』によれば、選科生のうち 50 人がオルガンを選択している。 教師は、教授:島崎赤太郎 (オルガン、和声論)、楠美恩三郎 (オルガン)、助教授:中村 芳子 (オルガン)、講師補助:青木シノ (オルガン 分教場勤務)、中田章 (オルガン、音楽

1906 (明治 39) 年に甲種師範科を卒業した草川宣雄が、聴講として再履修している。草川の師範科在学中、島崎赤太郎はちょうど留学で不在であった。草川は卒業後埼玉浦和中学の勤務となっていたが、島崎が帰朝したのに伴い分教場通いを始めた。「新帰朝の名聲噴々たる先生の教を受ける事となり、一週一回づゝ浦和から汽車で神田分教場に通った。更に、島崎先生からオルガンと楽式を」習ったという81。

「専修部」および改編後の「本科」の学生は、それぞれの科目を専門として選択した。ここでのオルガン履修者は、オルガン専攻だったといえるだろう。一方、師範部、師範科の学生は一部選択であるものの、概ね必修でオルガンを履修している。これは、各地の教育現場で使われた楽器が、主にオルガンだったことによる。専攻生の数はだいたい一桁で推移しているが、オルガン履修者全体でみると、その数は明治30年台にむけて次第に増加している。師範科の必修、甲種師範科の必修、乙種師範科の必修、選科生の増加、と分布を変えながら、総数は高い状態でキープされていた。

-

^{80 『}東京音樂學校一覧 従明治四十四年至明治四十五年』東京音樂學校、100~112頁。

⁸¹ 草川宣雄「島崎先生を憶ふ」… 初めて島崎先生にお目にからつたのは、神田一橋通にあった音楽學校分教場の二階の梯子段の右手突當りの小さい部屋であった。・・・ギルマン作曲の第二ゾナテをひいた。『學校音楽』學校音楽研究會編輯、1934 年 4 月、島崎赤太郎先生追悼號、21~25 頁。

3-2 明治期のオルガン受持教師

明治期の東京音楽学校では、多くの人がオルガン教授に携わった。そのうち、外国人教師はルドルフ・ディットリヒ Rudolf Dittrich (1861-1919)、ノエル・ペリーNoël Péri (1861-1922)、ヘルマン・ハイドリッヒ Hermann Heydrich (1855-?) の外国人教師 3 名である。

ルドルフ・ディットリヒ Rudolf Dittrich (1861-1919)

オーストリア出身。1878 年よりウィーン音楽院に学ぶ。ヴァイオリンを校長のヨーゼフ・ヘルメスベルガー Joseph Hellmesberger(1828-1893)、オルガン、和声、対位法、作曲をアントン・ブルックナーAnton Bruckner(1824-1913)およびフランツ・クレン Franz Krenn(1816-1897)に、ピアノをヴィルヘルム・シェンナー Wilhelm Schenner(1839-1913)師事した。1882 年にオルガン第一賞牌を獲得、卒業。ロットシーア男爵家オルガン奏者、ユダヤ大寺院オルガン奏者ならびに指揮者となり、1883 年の兵役後、ウィーンにおける音楽会でヴァイオリン、管弦楽、室内楽、ピアノおよびオルガンの演奏で活躍した82。ヘルメスベルガーの推薦により来日し、東京音楽学校で教鞭をとることになった83。

東京音楽学校での在職期間は 1888 (明治 21) 年~1894 (明治 27) 年、オルガンは 1890 (明治 23) 年から受持った。1892 (明治 25) 年の『東京音樂學校一覧』では「唱歌、ヴァイオリン、風琴、洋琴、和声」の担当となっている。

ノエル・ペリー Noël Péri (1865-1922)

フランス出身。1881年よりリヨン大学で文学を専攻。1883年に卒業後、パリの外国人宣教師会付属神学校に入学し音楽理論を研究した。1888(明治 21)年より宣教師として来日。1896(明治 29)より東京暁星学校の音楽教師となり、1899(明治 32)年に東京音楽学校に招聘された。正規の教師として東京音楽学校で指導した、初めてのフランス人であった。オルガン、和声、作曲を担当し1904(明治 37)年まで在職した84。オルガンは1901(明治 34)年から受持った。

 $^{^{82}}$ 東京藝術大学百年史刊行委員会編『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第一巻』東京:音楽之友社、1987 年、 $511\sim537$ 頁。

⁸³ 平沢博子「ルドルフ・ディットリヒ物語」『おんかん』東京:音楽鑑賞教育 2002 年、10 月号、26~27 頁。

⁸⁴ 東京藝術大学百年史刊行委員会編『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第一巻』東京:音楽之友社、1987 年、535 頁。

ヘルマン・ハイドリッヒ Hermann Heydrich (1855-?)

ドイツ出身。1870年よりベルリン帝室附属音楽学校に入学。ピアノ、楽理および作曲を専攻し1874年に卒業。イギリスのアッピングハム学校の音楽教師、唱歌指導者として6年在籍、ドイツでのピアノ研鑚期間を一年挟んだのちふたたびイギリスにもどり、ロンドンを拠点にした演奏活動と、ロンドン府音楽学校教務担任の職についていた。1902(明治35)年から1909(明治42)年の間、東京音楽学校の嘱託講師として、ピアノ、和声、作曲、合奏とオルガンを教えた85。オルガンは1904(明治37)年~1906(明治39)年に受持った。

日本人教師は総勢 20 名がオルガン教授に関わっている。そのほとんどは音楽取調掛および東京音楽学校の卒業生であった。内訳は音楽取調掛全科卒業生の、木村(能勢)作、遠山甲子、小山作之助、東京音楽学校師範科卒業生の楠美恩三郎、高木武子、齋藤左右田、太田勘七、野村成仁、渡邊森蔵、青木シノ、中田章、南能衛、東京音楽学校専修部及び本科器楽部卒業生の山田源一郎、島崎赤太郎、天谷秀、田村虎蔵、平尾勇、松井壮吉である。学外出身者は菊池武信、下村(中村)芳子であった。

学外出身の菊池武信と下村(中村) 芳子はいずれも、はじめは英語教師として赴任している。菊池武信は『音楽訓蒙』の訳者である。『音楽訓蒙』の原書は音楽取調掛の蔵書であった。菊池は音楽取調掛に事務方として勤務しており、この訳述を行っている⁸⁶。『音楽訓蒙』の内容がオルガン実技に関するものだったことで、初期のオルガン実技指導を担当することになったと考えられる。下村(中村) 芳子は、長崎活水女學校(現活水学院)の卒業生であった⁸⁷。長崎活水女學校では、初期からオルガンやピアノを用いた教育を行っており⁸⁸、下村もここで手ほどきを受けていたと考えられる。東京音楽学校には英語教師として赴任したが、次いでピアノ担当となり、1901(明治 34)年からは、師範科のオルガン担当となった。

⁸⁵ 東京藝術大学百年史刊行委員会編『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第一巻』東京:音楽之友社、1987 年、536 頁。

⁸⁶ 安部規子「修猷館の英語教師・菊池武信の履歴について」、『日本英語教育史研究』25 巻、2010 年、23-48 頁。

^{87 『}學事年報』東京藝術大学大学史史料室所蔵。

⁸⁸ 活水学院百年史編纂委員会編『活水学院百年史』福岡:活水学院、1980年、31~45頁。

音楽取調掛および東京音楽学校卒業生のうち、初期にオルガンを教えた木村(能勢)作、遠山甲子、小山作之助、山田源一郎は、唱歌やピアノとともにオルガンを担当しており、オルガン演奏の基礎を教えたとみられる。師範部の初期卒業生である高木武子、楠美恩三郎は、師範科を中心に担当した。

オルガンを専門として担当し始めたのは島崎赤太郎で、島崎以降の日本人教師のほとんど(島崎の留学中にオルガン履修をしていた松井壮吉以外)はすべて島崎の弟子や孫弟子にあたる。

3-3 明治期オルガン受持教師の変遷

表 1-45 明治期における各科受持教師の表

	専3	専2	専1	師範2	師範1			豫科	選科	その他
M22-23	<u>j-</u>	[-	j.	į.	菊池		<u> </u>	0	木村	. į
M23-24	-	Dittrich	Dittrich	菊池	<u> </u>	:		_	(乙)木村	4
	 					ļ			(丙)遠山	
M24-25		Dittmish	Dittuich		木村				(甲)木村	
M24-25		Dittrich	Dittrich	_	1 T				(乙)木村 (乙)瓜生	
M25-26	Dittrich		能勢	遠山	小山	;		小山	能勢	
M26-27		Dittrich	能勢	Dittrich	Dittrich			遠山/能勢	小山	
M20-21		能勢	肥务	Dittrich	小山				¦ т н	
M27-28	島崎	島崎	島崎	島崎	遠山	į		_	島崎	[補習科]
;		;		}		.;		Filter advise.	能勢	島崎
M28-29	島崎	島崎	:0	島崎	島崎	-	· .	能勢	:能勢	F.I. AHMET
M29-30	島崎	島崎	島崎	島崎	山田			能勢	能勢	[小学唱] 小山
										[小学唱]
M30-31	島崎	島崎	島崎	島崎	山田			山田	能勢	?
M31-32	島崎	島崎	0	島崎	— 島崎		-	島崎	島崎	
Wi51 52	CCT PHI	(CC) [FR]		?	<u>;</u>		<u> </u>	?	天谷	
M32-33	0	島崎	島崎	島崎	島崎	1		島崎	島崎	
					?	<u> </u>	-	?	?	-
改編	専科3	専科2	器楽1	師範2	師範1/甲師2	甲胂1	乙柳	豫科	選科	
1499-94	0	?	0	島崎	島崎	島崎			島崎 天谷	
M33-34	U	ſ	U	起啊	起那	后闸	-	-	高木	
改編	専科3	器楽2	器楽1	甲師3	甲師2	甲師1	乙師	豫科	選科	+
5人利用	3-770	1111752	THE PACE	- у-диро	77-4472	- 齋藤	С Дирг	135.17	田村	
M34-35	Péri	_	_	_	Péri	下村	?	_	島崎	
						太田			天谷	
改編	器楽3	器楽2	器楽1	甲師3	甲師2	甲師1	乙師	豫科	選科	
					下村	楠美			三上	
M35-36	-	Péri	Péri	?	天谷	天谷	?	-	田村	
						野村			天谷	
M36-37	Péri	Péri	Péri	-	下村	-	?	-	-	
·		}		楠美	天谷 楠美	楠美	· 	}		
M37-38	Hydrich	Hydrich	_	下村	下村	下村	渡邊	_	天谷	
				天谷	天谷	天谷	, and			
				楠美	楠美	楠美			田村	
M38-39	Heydrich	0	0	下村	下村	下村	?	?	天谷	
ļ		<u>;</u>		天谷	天谷 楠美	天谷				
M39-40			島崎	島崎	· 柚美	- 楠美	青木	中村		
M39-40	-	Ī	四門	西州町	中村 天谷	中村 天谷	7	T T T	Ī	
·					植美	楠美			· · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
1400 41	0	自动な	自动	自动	中村	中村	?		m++	
M40-41	0	島崎	島崎	島崎		青木]?	?	田村	
	<u> </u>		. <u></u>			中田			<u>. į</u>	
					楠美	島崎/中田				
M41-42	島崎	島崎	島崎	島崎	中村	楠美	?	-	中田	
						中村 南/中田				
·····			· †		 楠美	桶美	†		中田	
M42-43	島崎	島崎	島崎	島崎	中村	中村	中田/南	_	青木	
						平尾	1		松井	
M43-44	島崎	島崎	0	島崎	楠美	楠美	中田/南	0	中田	
mio Ti	在订 中川	tri) whi	, v	tert week	中村	中村			. <u>i</u>	
	ata ente			pla dete	島崎	L+	楠美		松井	
M44-45	島崎	0	0	島崎	楠美	楠美	中村		青木	-
: :	:	1	;	- ;	中村	;	;	- 1	;	i

東京音楽学校関係公文書(教務関係)文書綴内、成績関係資料より作成。

M=明治

?:履修生あり、受持不明

0:履修生なし

明治期の教師陣の変遷は、以下の4期をよみとることができる。

① 1889 (明治 22) 年~1894 (明治 27) 年

外国人教師ディットリヒが中心となった時期である。専修部と師範部のほとんどをディットリヒが受持ち、師範部、豫科、選科を菊池武信、遠山甲子、木村(能勢)作、瓜生繁、小山作之助が受持っていた。次期の中心となる島崎赤太郎はディットリヒに師事している。

② 1894 (明治 27) 年~1901 (明治 34) 年

ディットリヒに代わり島崎赤太郎が中心となった時期である。ディットリヒから学んだ島崎赤太郎は、専修部卒業後研究生となり、授業補助についた。ディットリヒに師事していた学生の受持を引き継いでいる。1902 (明治 35) 年からのドイツ留学までの間、専修部、師範部を中心に多くの学生を受持った。前期に引き続き、師範部の一部と豫科、選科、小学唱歌科を遠山、能勢、小山が担当している。山田源一郎、天谷秀、高木武子が加わった。

③ 1901 (明治34) 年~1906 (明治39) 年

島崎のドイツ留学に伴い、専修部より移行した器楽科をペリーとハイドリッヒが受持っている。師範科を楠美恩三郎と下村(中村)芳子、天谷秀が分担して受持つ形が定着した。 履修生の増加に伴い、齋藤左右田、太田勘七、野村成仁、渡邊森蔵、田村虎蔵など、卒業 生の中で教員として残るものが多数であった。

④ 1906 (明治 39) 年~1912 (明治 45) 年

島崎が留学から帰国。器楽科と師範科三年を中心に島崎が受持ち、師範科二年、一年を 楠美、中村が教えている。選科を中心として、新たに青木シノ、中田章、南能衛、平尾勇、 松井壮吉らが指導に加わった。

明治期の東京音楽学校におけるオルガン教育のうち、専修部、器楽部などの専攻生の教授は、ディットリヒにはじまり、島崎に受け継がれ、島崎の留学中のペリー及びハイドリッヒを経て、再び島崎に任されたことがわかる。

3-4 島崎赤太郎の活動と留学

ここでは、明治期のオルガン受持教師の中で特に中心的だった島崎赤太郎の、学生時代とその学びについて、東京音楽学校期、留学期の二点からみていく。

3-4-1 東京音楽学校学生時代 1889 (明治 22) 年~1902 (明治 35) 年

『東京音樂學校一覧』の生徒名簿によれば、豫科生として入学した 1889 (明治 22) 年 9 月からドイツに留学する 1902 (明治 35) 年まで、卒業後の一年間をのぞいて学生として籍をおいていた。

1889 (明治 22) 年~1890 (明治 23) 年豫科

1890 (明治 23) 年~1893 (明治 26) 年 専修部

1894 (明治 27) 年~1900 (明治 33) 年 研究生

1900 (明治 33) 年~1902 (明治 35) 年 (舊) 研究生

豫科在学中はピアノを履修していた⁸⁹が、専修部の 3 年間はディットリヒにオルガンを 教わっている。島崎の専修部一年次、二年次の課題はわからないが、同時期の他の学生に 課された課題をみると、『Reed Organ Book』⁹⁰『Benda's Book』⁹¹『Zundel's Organ-Book』⁹² などがある。同等の学習から始まったものと考えられる。

以下は専修部三年次の通年の課題である。

All scales. Bach V page 9-107 and selected pieces from all Bach's Organ-Books. Some other pieces and accompaniments.⁹³

^{89 『}明治二十三年七月 学年末試験書類綴』東京藝術大学大学史史料室所蔵。

^{90 (}Org-sol 7) Wm. Bell & Co's Peerless Method for the Reed

⁹¹ [Org-sol 9] [消失] ベンダ: ハーモニアム(おそらく Benda: *Méthode Théorique pratique pour Harmonium*)

^{92 [}OH 6] John Zundel (1815-1882): 250 Easy Voluntaries and Interludes, for the Organ, Melodeon, Seraphine

^{93 『}明治二十六年七月 学年試業成績書類』東京藝術大学大学史史料室所蔵。

「All scales」はすべての調の音階。『Bach V』は Peters 版バッハ全集の 5 巻 [Org-Ped 1 5/9] [消失] の 9 頁から 107 頁、56 kürzere Choralvorspiele / Fughetta super : Christum wir sollen loben schon(Manualiter)BWV696 から 7 Choralvorspiele / Choral : Herr Christ, der ein'ge Gottes Sohn BWV Anh. 75 までのことであろう。手鍵盤のみで演奏可能な曲(Manualiter)が多いが、ペダル付の曲もかなり含まれている。「selected pieces from all Bach's Organ-Books」は他にバッハの曲集の受入れがないことから、やはり Peters 版バッハ全集のことかと思われる。「Some other pieces and accompaniments」についてはわからないが、この時までに東京音楽学校では、「Org-Ped 2」Mendelssohn:Compositionen für die Orgel や、「Org-sol 4」~ [Org-sol 8] などの曲数の多い選集楽譜94を受入れているので、選択肢はかなりあったようである。

以下は、この時期の島崎による演奏記録である95。

専修部二年次

1891 (明治 24) 年 11 月 同好会慈善演奏会 結尾音

専修部三年次

1892 (明治 25) 年 11 月 27 日 学友会演奏会

ショパン: 喪式進行曲 石原重雄との連奏

シューベルト:進行曲 石原重雄との連奏

1892 (明治 26) 年 3 月 19 日 第 3 回学友会演奏会

バハ:ソナタ 第一部 石原重雄との連奏

1892 (明治 26) 年 6 月 11 日 学友会練習会 (男子部)

バハ:フーグ

メンデルソン:アダジヲ

1892 (明治 26) 年 7 月 8 日 卒業式

メンデルスゾーン:ソナタ第2部石原重雄との連奏

94 [Org-Sol 4] A selection from the Masse of Haydn and Mozart 、[Org-sol 5] Parlor Organ Folio、[OH 6] Zundel: 250 Easy Voluntaries and Interlude † S $^{\prime}$ E $_{\circ}$

⁹⁵ 東京芸術大学百年史編纂委員会編『東京芸術大学百年史 演奏会篇 第一巻』東京:音楽之友社、1990 年。

専修部二年次の「結尾音」は不明である。

専修部三年次は、同級だった石原重雄との連奏が多い。「連奏」はオルガン二台を並べて 二人で演奏するスタイルだった%。「ショパン: 喪式進行曲」「シューベルト: 進行曲」の ような編曲もののほか、「バハ: ソナタ 第一部」「メンデルスゾーン: ソナタ第2部」のよ うなペダルを伴うオルガン曲を工夫して演奏していた様子がうかがえる。

独奏の「バハ:フーグ」は曲の特定が難しいが、「メンデルソン:アダジヲ」はオルガン ソナタ第1番の緩徐楽章を手鍵盤のみで演奏した、と考えられる。

ディットリヒの在任中、東京音楽学校には手鍵盤のみのオルガンしかなかったが、楽譜のレパートリーは比較的豊富であった。ディットリヒはそのような環境のなかで、バッハやメンデルスゾーンの本格的なオルガン曲へのアプローチをあきらめず、多くの可能性を学生に示している。島崎に課された課題からは、ディットリヒの挑戦的な姿勢と島崎に対する期待の大きさを感じるとることができる。

専修部を卒業した 1893 (明治 26) 年 9 月以降、島崎は研究生として積極的に演奏を行っている。プログラムにはバッハ、メンデルスゾーンが並び、ディットリヒの影響を感じる。

1894 (明治 27) 年 12 月 8 日 学友会恤兵義捐演奏会 バハ: フウグ

1896 (明治 29) 年 4 月 18 日 同声会春季演奏会 バハ: コンサルト

1897 (明治 30) 年 11 月 20 日 同声会秋季演奏会 バッハ:トッカタ エ フーガ

1900 (明治 33) 年 12 月 8 日、9 日 秋季演奏会 バッハ

1901 (明治34) 年12月7日、8日第6回定期演奏会メンデルスゾーン:ソナタ第四

このうち、1897 (明治 30) 年までは手鍵盤のみの演奏であったが、1899 (明治 32) 年に Mason & Hamlin 社製のペダル付リード・オルガンが導入され、ペダル付のオルガン曲に関しては本来の形で演奏することが物理的に可能になった。1901 (明治 34) 年の演奏会評に

^{96 1897 (}明治 30) 年 10 月 26 日 学友会演奏会における演奏会評に「オルガン二個相對せしむるは…云々」とある。演奏会評の詳細は、本文 第一章 第五節 5 - 2 「1894 (明治 27) 年~1901 (明治 34) 年」、106 頁に掲載。

は「…殊にアレグレットに至り、足を以つて巧に最低音部の八分音符を奏した時などは、 只感嘆の外はない」⁹⁷とあり、島崎がペダルを用いた演奏をしたことがわかる。

3-4-2 ライプツィヒ留学時代 1902 (明治 35) 年~1906 (明治 39) 年

島崎赤太郎は 1902 (明治 35) 年からドイツ・ライプツィヒの王立音楽院に留学し、オルガンをパウル・ホーマイヤー Paul Homeyer (1853-1908) に教わった98。小野亮祐の研究99によれば、1900年~1904年のライプツィヒ音楽院における弾き合い会では、バッハのPassacaglia、Präludium und Fugeの Es-dur、h-moll、e-moll、a-moll、Fantasie und Fuge g-moll、Toccata und Fuge F-dur、d-moll、メルケルのソナタ、フランツ・リスト Franz Liszt (1811-1886) の BACHの主題による Fantasie、メンデルスゾーンのソナタ、ギルマンのソナタ、カール・ピウッティ Carl Piutti(1846-1902)のソナタ、ロベルト・シューマン Robert Schumann(1810-1856)の BACHの主題によるフーガ、ヨーゼフ・ガブリエル・ラインベルガー Josef Gabriel Rheinberger(1839-1901)のソナタなどが演奏されていた。島崎は演奏には参加していないが、これらの演奏や練習を身近に聴いていたと考えられる。大正期の楽譜の項で触れる「島崎のサインが入った楽譜」100は、この影響を受けたと思われるラインナップとなっている。

[OH 242] Josef Gabriel Rheinberger: Sonate für Orgel Nr. 9 Op. 142

[OH 243] Josef Gabriel Rheinberger: Sonate für Orgel Nr. 5 Op. 111

[OH 244] Josef Gabriel Rheinberger: Sonate für Orgel Nr. 6 Op. 119

[OH 245] Josef Gabriel Rheinberger: Sonate für Orgel Nr. 8 Op. 132

[OH 246] Josef Gabriel Rheinberger: Sonate für Orgel Nr. 11 Op. 148

[OH 247] Josef Gabriel Rheinberger: Sonate für Orgel Nr. 7 Op. 127

[OH 248] Josef Gabriel Rheinberger: Sonate für Orgel Nr. 1 Op. 27

69

 $^{^{97}}$ 東京芸術大学百年史編纂委員会編『東京芸術大学百年史 演奏会篇 第一巻』東京:音楽之友社、1990 年、 $105\sim106$ 頁。

⁹⁸ 赤井励『オルガンの文化史』東京:青弓社、2006、123~124頁。

⁹⁹ 小野亮祐「ドイツのオルガン教授と洋楽黎明期日本との接点についての試論―島崎赤太郎の「オルガン留学」を通しての検討―」『関西楽理研究』30号、2013、46~56頁。

¹⁰⁰ 第二章 第二節 1-2 「大正期受入れの OH、Org-sol 分類楽譜」に掲載。

[OH 251] ~ [OH 260] Josef Gabriel Rheinberger: Meditationen Op. 167

[OH 262] シューマン: フーゲ[消失]

[OH 264] Felix Mendelssohn: Drei Präludien und Fugen Op. 37 / Sechs Sonaten Op. 65

[OH 266] Johann Sebastian Bach: 15 Große Choral-Vorspiele

[OH 268] Gustav Merkel: Sonate für die Orgel zu vier Händen Op. 30

[OH 271 1/2 2/2] Josef Gabriel Rheinberger: Zehn Trios für die Orgel Op. 49 Heft I. II

[OH 273] Carl Piutti: Sonate für die Orgel Op. 27

[OH 276] Peters 版 Bach I. II. III. VI. VII. VIII. IX. [I. II は消失]

島崎のサインが入った楽譜については本文 第二章 第一節 1-2 「大正期受入れの OH、 Org-sol 分類楽譜」で扱う 101 が、その中には上記の楽譜が含まれており、島崎がライプツィヒで身近に聴いた演奏との関連が考えられる。

島崎は留学中、演奏会によく出かけたようである。現地で入手したプログラムを日本に持ち帰っており、『島崎教授寄贈 音楽會曲目 東京音楽学校』として東京藝術大学大学史史料室に収蔵されている。オルガンが関係する演奏会のものが多く、師であるホーマイヤーのほか、カール・シュトラウベ Karl Straube(1873-1950)や、マルコ・エンリコ・ボッシMarco Enrico Bossi(1861-1925)らの演奏が含まれる¹⁰²。特に、1903 年にライプツィヒのトーマス教会オルガニストに就任したシュトラウベの演奏は積極的に行われており、1903年2月18日の「オール・バッハプログラム」翌週25日の「ブクステフーデ&リストプログラム」、続けて同年3月4日「オール・レーガープログラム」の3週つづけてのオルガンコンサートシリーズを行い、さらに、1903年11月6日から翌年3月4日にかけても4回にわたるオルガンコンサートシリーズを行っている。シュトラウベのレパートリーは古いものから新しいものまで幅広く、ジローラモ・フレスコバルディ Girolamo Frescobaldi(1583-1643)、ゲオルク・ムファット Georg Muffat(1653-1704)、カスパール・ケルル Caspar Kerll(1627-1693)、ヨハン・パッヘルベル Johann Pachelbel(1653-1706)などの古典のほか、リストの技巧的な作品や、1901年まで存命だったラインベルガーの作品、作曲されたばかり

102 『島崎教授寄贈 音楽會曲目 東京音楽学校』のうち、オルガン関係のプログラムリストは資料④「島崎 赤太郎ライプツィヒ時代オルガン関係演奏会プログラム」として付録。

¹⁰¹ 本文 132~135 頁参照。

のマックス・レーガー Max Reger(1873-1916)の作品、フランスのカミーユ・サン=サーンス Camille Saint-Saëns(1835-1921)の作品などを意欲的に演奏している。これらのライプツィヒで行われていた活発な音楽活動は、島崎に大きな刺激を与えたと考えられる。

第四節 明治期の東京音楽学校におけるオルガンの課題の変遷

東京音楽学校関係公文書(教務関係)文書綴内、成績関係資料の中には、試験課題が記載されているものがあった。ここではそれらの情報を整理し、各教師の課題をまとめた。 受持教師の変遷にあわせ、4期に分けてみていく。

4-1 1889 (明治 22) 年~1894 (明治 27) 年

この時期は、菊池武信、木村(能勢) 作、遠山甲子、瓜生繁、小山作之助ら日本人教師の課題と、ディットリヒの課題とでは、傾向が分かれる。

表 1-46 菊池武信による課題:1890 (明治23) 年~1891 (明治24) 年

年度	学年	課題
1890 (明治 23)	師一	音楽訓蒙第 35 頁~38 頁の音階
		転調により互いに結合したる長音階三問
		唱歌集第二編第 48 太平の曲
1891(明治 24)	師二	唱歌集第三編の内─四の時□祝へ吾君を
		音楽訓蒙第 40 頁の内イの長音階
		同上第43頁の内への短音階
		唱歌集第二編の内中年たつけさ口岩もる水
		音楽訓蒙第35頁ヨリ二の長音階及び
		同上第37頁の内イの長音階

- [003] 『明治二十三年七月 學年末試験書類綴 東京音楽學校』
- [005] 『明治二十四年三月 期末試験書類綴 東京音楽學校』

専=専修部、師=師範部

表 1-47 木村 (能勢) 作による課題: 1890 (明治 23) 年~1894 (明治 27) 年

1890 (明治 23)	選科	嬰変長短音階 / かすめるそら 壱曲
		嬰変長音階 三度 十度 六度 反對音階 / 鏡なす 壱曲
		嬰長音階 三度 十度 六度 反對音階 / 玉の宮居 仝
		嬰変長音階 / 風琴教則本の内 仝
1891 (明治 24)	選科	嬰長音階八音三度十度六度反対音階等
		思ひ出れば/大和撫子
		嬰短音階八音三度十度六度反對音階等 / なみ風 / 秋の夕暮
		音階右仝/母の思ひ/千里の道
1892 (明治 25)	選科	「メソード」教則本双手練習第 11、第 15
		音階嬰長調ホ迄ノ内
		全教則本第 19、第 34 / 全 嬰長調の内

		全第41、第61/全嬰変長短調	
1893 (明治 26)	専一	ハトニ長音階三度十度反對等 「シユレー教則本第三より	
	選科	小學唱歌集第三編初ヨリ終迄 / 「ベンダー氏教則本初	
		ハ調長音階ヨリ変ホ調迄ノ内(但し三度十度反対等)	
		仝第三編初より第□番迄ノ内	
		嬰変長調嬰へ調短音階迄ノ内(但し仝上)	
		「メソウド」教則本第 27 番ヨリ第 73 番迄ノ内	
		嬰変長短音階	
1894(明治 27)	専二	イ調短音階より嬰ニ短調まで	
		「ヴィスチミゲー教則本二編第 18 番より三編第 11 番迄の内	
	専一	へ調長音階よりロ調短音階まで	
		「ヴィスチミゲー教則本初篇二編	
		イ調短音階よりへ調短調まで	
		「ベンダー教則本初より終迄の内	

- [003] 『明治二十三年七月 學年末試験書類綴 東京音楽學校』
- [005] 『明治二十四年三月 期末試験書類綴 東京音楽學校』
- [006] 『明治二十五年七月 學年大試験成績 生徒掛』
- [008] 『明治二十六年七月 學年試業成績書類 生徒掛』
- [009] 『明治二十七年 學年試業成績』

表 1-48 遠山甲子による課題:1891 (明治 24) 年~1894 (明治 27) 年

1891	(明治24)	選科	嬰長短音階 / 「メソード」教則本の内 57 58
			音階右全 / 54 55
			嬰変長音階 / 36 41
			音階仝上 / 31 32
1892	(明治25)	師一	音階 音楽訓蒙の内転調したるもの / 第二編唱歌集
		選科	音階嬰長調ロまでの内 三度十度反対等 / 第三編唱歌集仝
			全上イ長調迄 / 君ヶ代 富士山
			全上ハ長調 / 蛍の光 隅田川
1893	(明治 26)	師二	嬰 変 長短音階三度 十度 六度 反對等 / 小學唱歌集第一ヨリ終リ
			マデノ内 (只シ北村ハ第一ヨリニ編終マデ)
1894	(明治 27)	豫科	長音階八音、三音、十音、六音、反対等、
			「ウィスチミゲー教則本二編初より 15 番迄
			唱歌集四重音 春の弥生迄
			同上 蛍の光まで
			音階同上 仝教則本二編初より 15 番迄
			教則本初篇初より第17番迄
	_		イ調短音階より嬰ニ短調まで 仝教則本二編第9番迄
			音階同上 「メソード教則本初より第45番まで

[003] 『明治二十三年七月 學年末試験書類綴 東京音楽學校』

- [005] 『明治二十四年三月 期末試験書類綴 東京音楽學校』
- [006] 『明治二十五年七月 學年大試験成績 生徒掛』
- [008] 『明治二十六年七月 學年試業成績書類 生徒掛』
- [009] 『明治二十七年 學年試業成績』

表 1-49 瓜生繁による課題:1892 (明治 25) 年

1892(明治 25)	選科	ハト長音階三度十度反對等 / 初編唱歌集仝
-------------	----	-----------------------

[006] 『明治二十五年七月 學年大試験成績 生徒掛』

表 1-50 小山作之助による課題:1893 (明治 26) 年~1894 (明治 27) 年

1893 (明治 26)	師一	小學唱歌集初編諸重音	
		長短音階 / 小學唱歌集第 27 曲迄	
	豫科	長短音階 併にリード・オルガン第 62 ページ迄	
		長音階全体 短音階(イホロ#ヘ#ハ調)	
		リード・オルガン 35 頁迄	
1894 (明治 27)	師一	長短音階及小学唱歌集初篇	
	選科	長短音階及リード・オルガン全体	

- [008] 『明治二十六年七月 學年試業成績書類 生徒掛』
- [009] 『明治二十七年 學年試業成績』

日本人教師の課題は音階と唱歌が中心で、それに加えて『音楽訓蒙』『風琴教則本』『シュレー教則本』『リード・オルガン』『メソード教則本』『ベンダー氏教則本』『ヴィスチミゲー教則本』を使用している。

『音楽訓蒙』菊池武信の訳書。音階部分を使用している。

『風琴教則本』『リード・オルガン』〔Org-sol 7〕Wm. Bell & Co's Peerless Method for the Reed Organ

『シュレー教則本』 [Org-sol 26] Estey-Cottage Organ-Schule

『メソード教則本』 [Org-sol 8] Leybach's new method or Harmonium or Cabinet Organ

『ベンダー氏教則本』〔Org-sol 9〕ベンダ: ハーモニアム [消失]

『ヴィスチミゲー教則本』不明

表 1-51 ディットリヒによる課題:1892 (明治 25) 年~1894 (明治 27) 年

1892(明治 25) 103	専二	During the	All major and all melodies minor scales.
		year	Reed-Organ-Book all. Benda's book 1-14.
		During the	Melodies minor a b -b b
		last term	Benda's book 1-14
	専一	During the	All harmonies minor sc. a ♭ -b ♭ melodies d-A
		year	Reed-Organ-book page 27-81
		During the	c-b b harmonies C-A scales.
		last term	Reed-Organ-book 67-81
		During the	Melodies minor scales a b -b b.
		year	Harmonie scales from a-g #
			Reed-organ-book. Benda's book 1-14.
		During the	Harmonie scales a-b b.
		last term	Benda's book 1-14
1893(明治 26)	専三	L. T	All major and minor scales.
1093 (9114 20)	1,1 —	(Last	Bach V page 74-107
		Term)	and selections from the other book by Bach.
		,	Some Pieces and accompaniments.
		WH J	All scales. Bach V page 9-107
		(Whole	and selected pieces from all Bach's Organ-books.
		year)	Some other pieces and accompaniments.
		L.Y	C-E scales. Zundel's Organ-book. 9-16 Some Pieces.
1894(明治 27)	専二	Organ II	Major scales (all) Minor melodies scales all.
1074 (7)11 277	/1 —	Organin	Minor harmonies a-e
			Benda the whole book. Zundel 1-8
		Organ II	Major Scales C-A b Benda1-5
	師二		Š
	□ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □	Organ II	Major scales (all) Minor melodies scales a-b
		О П	Benda 1-18
		Organ II	Major scales (all) Minor melodies scales all.
			Minor harmonies a-c #
	-	0 77	Benda 1-20.
	1	Organ II	Major scales (all) Minor melodies scales a-e
	ļ		Benda 1-19
	1	Organ II	Major scales (all) Minor melodies scales a-e b
			Benda 1-21
	1	Organ II	Major scales (all) Minor melodies scales a-f#
			Benda 1-14
	師一	Organ I	Major scales (all) Minor melodies scales a g e Benda The whole. Zundel 1-4
	-	O I	
		Organ I	All minor scales. Zundel 13, 14, 16
	1		Bach Vol IX1, 2, 3, 4
			VII 40a, 40b, 40c No. 7. 18. 20. 23. 36. 39. 43. 47

[006] 『明治二十五年七月 學年大試験成績 生徒掛』

[008] 『明治二十六年七月 學年試業成績書類 生徒掛』

_

 $^{^{103}}$ ディットリヒの出題は、年間の課題になっている。この表では年度末に記された資料の日付を採用しているが、実際の実施時期は一年繰り上がる。

[009] 『明治二十七年 學年試業成績』

ディットリヒの課題でも音階が出題されている。『Reed Organ Book』や『Benda』は日本人教師の課題と共通するところである。ディットリヒによる『Benda』の出題(1-14、1-21)から、消失した〔Org-sol 9〕ベンダ:ハーモニアムシューレが Benda:Méthode Théorique pratique pour Harmonium [Theorethische-practische Harmonium-Schule](22曲)であったと推測できる。ディットリヒは『Zundel』〔OH 6〕John Zundel(1815-1882):250 Easy Voluntaries and Interludes も使用している。特筆すべきはやはり『Bach』の課題である。 [Org-Ped 1〕Peters 版バッハ全集の5巻、7巻、9巻から出題されている。

「V 9-107 頁」

5巻 56 kürzere Choralvorspiele のうち、

Fughetta super: Christum wir sollen loben schon (Manualiter) / Partite diverse sopra: Christ, der du bist der helle Tag (Manualiter) / Partite diverse sopra: O Gott, du frommer Gott / Variationen über: Sei gegrüßet, Jesu gütig / Einige canonische Veränderungen über das Weihnachtslied: Vom Himmel hoch / Anhang. Sieben bisher ungedruckte Choral Vorspiele über 1. Gelobet seist du, Jesu Christ 2. Jesus, meine Zuversicht 3. In dulci jubilo 4/5 Liebster Jesu, wir sind hier 6. Lobt Gott, ihr Christen allzugleich 7. Vom Himmel hoch, da komm' ich her.

「IX 1234」

9巻 1. Fantasia e Fuga a-moll BWV561 / 2. Fuga G-dur BWV576 / 3. Kleines harmonisches Labyrinth C-dur BWV591 / 4. Fuga G-dur BWV577

[VII 40a, 40b, 40c, No.7. 18. 20. 23. 36. 39. 43. 47]

7巻 40a, Kyrie, Gott Vater in Ewigkeit (Manualiter) / 40b, Christe, aller Welt Trost (Manualiter) / 40c, Kyrie, Gott heiliger Geist (Manualiter) / 36. Fantasia super: Komm, heiliger Geist, Herre Gott (Ped C. F.) / 39. [a. Kyrie, Gott Vater in Ewigkeit b. Christe, aller Welt Trost c. Kyrie, Gott heiliger Geist] / 43. Nun danket alle Gott / 47 Nun komm, der Heiden Heiland (Ped C. F.)

[6巻] No. 7 [17. Christ, unser Herr, zum Jordan kam Ped C.F.] / 18. Christ, unser Herr, zum Jordan kam (Manualiter) / 20. Fughetta super: Dies sind die heil'gen zehn Gebot' (Manualiter) / 23. Gelobet seist du, Jesu Christ

コラールに関しては手だけで演奏できる Manualiter、あるいはペダルパートに定旋律が来ている(ペダルの音数が少ない)曲の出題が多い。[Org-Ped 1 7/9] Peters 版バッハ全集7巻 36. Fantasia super: Komm, heiliger Geist, Herre Gott にはペダルを左手に移す書込みが見られ、ペダル部分ともに手だけで工夫して演奏したと考えられる。

4-2 1894 (明治 27) 年~1901 (明治 34) 年

この時期は島崎赤太郎、能勢作、小山作之助の課題が残っている。

表 1-52 島崎赤太郎による課題:1896 (明治29) 年~1897 (明治30) 年

1896 (明治 29)	専三	バハオルゲル第五巻自九ページ至六十四ページ
		音階長短
		バハオルゲル第壱巻 第四巻及び第六巻
		ハルモニームアルバム(ビュービル)自八ページ至十九ページ
		音階長短
		バハオルゲル第五巻自七十四ページ至終
		第六巻自八ページ至十ページ
		ハルモニュームアルバム (ビユービル) 自一ページ至四ページ
		音階長短
	師三	楽曲ベンダハルモニュームスチュレー自第14番至第22番
		ズンデルオルガン自第2番至第五番
		音階長短
		楽曲 唱歌集諸重音 自第 76 番至終
		ベンダハルモニュームスチュレー自第1番至9番
		音階長短
		楽曲 唱歌集諸二重音第二編第三篇
		ベンダハルモニュームスチュレー自第一番至第六番
		音階長短
		楽曲 ベンダハルモニュームスチュレー自第一番至 17番
		音階長及短音階嬰へ迄
		楽曲 唱歌集諸重音自第 86 至終
		ベンダハルモニュームスチュレー自第1番至16番
		音階長短

		楽曲 唱歌集諸重音自第 77 至終	
		ベンダ ハルモニュームスチュレー自第1番至8番	
		音階長短	
		楽曲 ベンダ ハルモニュームスチュレー自第 1 番至第 17 番	
		音階長短	
		楽曲 唱歌集諸重音 自第 86 番至終	
		ベンダハルモニュームスチュレー自第1番至第10番	
		音階長短	
		楽曲 唱歌集諸重音自 80 番至終	
		ベンダハルモニュームスチュレー自第一番至第 10番	
		音階長短	
	専二	ズンデル、オルガン自第二番至第十五番	
		ハルモニユームアルバム(ミツコ)自五ページ至十一ページ	
		音階 変種短音階	
		楽曲 ベンダ ハルモニュームスチュレー自第 13 番至第 2 番	
		ズンデルオルガン自第2番至第三番	
		音階変種短音階	
1897(明治 30)	専三	バッバ氏風琴曲自九ペーヂ至四十五ペーヂ音階全体	
		ハルモニユーム アルバム 全曲 音階全体	
	専二	リード・オルガン教則本自十二ペーヂ至終 音階短音階	
		嬰ハ調迄	
	専一	リード・オルガン教則本自十二ペーヂ至七十一ペーヂ	
		音階短音階ロ調	
		リード・オルガン教則本自十二ペーヂ至三十八ペーヂ	
		音階全体	
		リード・オルガン教則本自十二ペーヂ至三十四ペーヂ	
		音階短音階イ調	
	師二	ベンダ氏教則本全曲音階短音階嬰ハ調迄	
		ベンダ氏教則本 全曲 音階短音階嬰ハ調迄	
		ベンダ氏教則本 自一番至十二番 音階全体	
		ベンダ氏教則本 自一番至九番 音階全体	
		小学唱歌諸重音第三編終迄 音階全体	
		ベンダ氏教則本 全曲 音階全体	
		ベンダ氏教則本 全曲 音階全体	

- [013] 『明治二十九年 學年試験成績』
- [014] 『明治三十年 學年試業成績』

島崎の課題の出し方は、ディットリヒとよく似ている。『音階』、『バッハ』、『ズンデル』、『ベンダ:ハルモニウムスチュレー』『リード・オルガン教則本』など、ディットリヒの課題とほぼ同じであり、ディットリヒの教えを踏襲していることがわかる。

新たに『ハーモニュームアルバム(ビュービル)』と『ハーモニュームアルバム(ミツコ)』から課題がでている。それぞれ〔Org-sol 23〕〔Org-sol 33〕Bibl: *Harmonium Sammlung von Tonstücken, Op.* 29 と〔OH 24〕Vinz Micko: *Estey Cottage Orgel Album* のことで、いずれも 1897(明治 28)年までに受入れがあった。

表 1-53 能勢作による課題:1896 (明治29) 年~1897 (明治30) 年

1896(明治 29)	豫科	長音階ハ調よりへ調に至る迄八音三音六音反対等四重音
		小学唱歌集第一 第二迄
		短音階イ調より二調に至る迄 仝上 風琴教則本ノ内
	選科	長音階八音三音六音反対等
		ベンダーアルバム等教則本の内
		メソード教則本
1897 (明治 30)	豫科	音階 嬰長音階ノ内 雨露 榮へし御代
	選科	音階 短音階ノ内 メソード教則本ノ内

- [013] 『明治二十九年 學年試験成績』
- [014] 『明治三十年 學年試業成績』

表 1-54 小山作之助の課題:1897 (明治30)年

1897 (明治 30)	小唱	ほ調の長音階 ほ調の短音階 夏(小学唱歌第三巻)
		裏棹 (小学唱歌第六巻)

[014] 『明治三十年 學年試業成績』

小唱=小学唱歌講習科

能勢、小山の課題はそれぞれ前の期とほぼ変わらない。

4-3 1901 (明治 34) 年~1906 (明治 39) 年

ペリーやハイドリッヒが出した課題の記録は残っておらず、この時期の本科器楽科生の課題はわからない。ペリーやハイドリッヒが行った教授内容は、彼らが受持った学生の演奏記録¹⁰⁴が手掛かりになる。個々の曲については第一章 第五節「明治期の東京音楽学校におけるオルガン演奏の記録」で後述するが、ペリーやハイドリッヒが受持った学生の演奏レパートリーをここで紹介する。

¹⁰⁴ 東京芸術大学百年史編纂委員会編『東京芸術大学百年史 演奏会編 第一巻』東京:音楽之友社、1990年。

表 1-55 Péri が受持った学生の演奏曲目

1902 (明治 35) 年 2 月 23 日	バハ:ガボッテ
1902 (明治 35) 年 7 月 5 日	フランク:ファンタジー
1903 (明治 36) 年 3 月 8 日	C. Franck: Fantasie in E flat major
1903 (明治36) 年3月30日	ハッセンスタイン: ノヴェレッテ
1903 (明治 36) 年 12 月	レメンス: フーガー
	レメンス:ソールテー
1903 (明治 37) 年 7 月 10 日	セザーフランク:ファンタジー H-dur

第一章 第三節 3-2 「明治期のオルガン受持教師」の項で述べたように、ペリーは当時の東京音楽学校における初のフランス人教師であった。ここまでの課題にはフランスのレパートリーはみられなかったが、ペリーが受持った学生の演奏には『フランク』『レメンス』などのフランス人作曲家によるものが登場している。彼によって、東京音楽学校のオルガン演奏にフランスのレパートリーが取り入れられたことがわかる。

表 1-56 Heydrich が受持った学生の演奏記録

1904 (明治 37) 年 10月 19日	ギルマン:プリエール、エ、ベルソース
1904 (明治 37) 年 12 月	ラインハード、ソナチネ
1905 (明治38) 年2月25日	ギルマン:マドリガル
1906 (明治 39) 年 1 月 27 日	Bach : Preludiso [▽▽]

ハイドリッヒはペリーが受持っていた学生を引き継いで指導している。『ギルマン』はフランスのレパートリーの延長上と考えられる。『ラインハード』は、課題として出された記録はのこっていないが1901(明治34)年に島崎の受持学生が演奏しており、以前より勉強および演奏が行われていたと考えられる。

この時期の課題の記録は、楠美恩三郎、下村芳子、天谷秀、渡邊森蔵のものだけが残っている。師範科学生のオルガン履修数が多くなった時期であり、複数の学生に同様の課題が出題されている。(音階の調が違うだけ、同じ教本から出題番号が違うだけ、など)。以下の表では同学年中の類似したものからは一例だけを掲載した。

表 1-57 楠美恩三郎による課題:1905 (明治38) 年~1906 (明治39) 年

1905 (明治 38)	甲三	ハーモニュームアルバム五ノ巻ノ23ロ調各種コールト
		フランク ファンタジー 6 イ長

	甲二	ラインハード風琴練習本ノ一巻 2 ♭ 二長 3610
		ハーモニュームアルバムーノ巻5
		ベンダ風琴教則本正篇 17 # 〜長 3610 度
		ベンダ続篇ノ二巻 3 ト二長 3610
	甲一	ベンダ氏風琴教則本 正篇 1415 及ロノ和声的 反行
		ベンダ続篇 二ノ巻9 þ ホノ和声的 三六十度
		島崎氏風琴教則本二ノ巻 73 75 及び#ハノ長 反行
1906(明治 39)	甲三	ト和声三六十ベンダ続篇9番
		▶ロ同上 ラインハード スチュデン 三番下
		イ同上 レーマンス 五番上
	甲二	▶ ホ長短音階コールト 3610 度 フランク 6番
		ホ長短音階コールト 3610 度 ハンテル オラトリヲ
		▶ イ同上 ハイドン ラーゴ
		#へ同上グリーグ5番
		へ同上 ベトーベン トレラ アンダンテカンタビレ
	甲一	イ短反行 島崎氏ノ2巻69
		▶二長短コールドベンダ9番
		#ト短三六十度 ベンダ続篇ノ9番

[024] 『明治三十八年三月甲種師範科學年試験成績』

甲=甲種師範科

[027] 『明治三十九年三月 甲種師範科學年試験成績及問題』

表 1-58 下村芳子による課題:1905 (明治38) 年~1906 (明治39) 年

1905(明治 38)	甲三	ハーモニウムアルバム
		2編29番/5編19番/6篇9番24番/8編5番8番
		オーグストラインハード曲集第二編 31 番
		同氏ソナチナ2番
	甲二	ラインハード氏曲集 一篇 16 20 番
		ラインハード氏練習本一篇 18
		ベンダー氏練習本 20
	甲一	小学唱歌集 20 13 26 10 11
		島崎氏風琴教則本二 55 56 72 67
		ベンダー氏練習本9
1906(明治 39)	甲三	ソールテー レメンス
		ソールテー ギルマン
	甲二	Fuga, Sortie, Offertoire Lemmens / Piece from Benda No, 6
	甲一	Piece from Benda No. 15. 17 / organ method No. 74 Shimasaki

[024] 『明治三十八年三月甲種師範科學年試験成績』

[027] 『明治三十九年三月 甲種師範科學年試験成績及問題』

表 1-59 天谷秀による課題:1905 (明治38)年~1906 (明治39)年

1905 (明治 38) 甲三	音階 嬰ハ調短音階三度反行及コールド
-----------------	--------------------

	1	
		楽曲 レマンス作 ソルテー
		音階 変二調長音階三度反行及コールド
		楽曲 ベンダー続篇第7番
		音階 二調短音階三度 及反行コールド
		楽曲 ラインハルド教則本 17番
		音階イ調短音階三度反行及コールド
		楽曲 ワグネル作 メニュエット
		音階 嬰ハ調長音階三度反行コールド
		楽曲 ズンデル教則本 第10番
	甲二	音階 イ調短音階 三度十度六度反行及コールド
		楽曲 レマンス作 ソルテー
		音階 嬰ト調長音階 三度 十度 反行及コールド
		楽曲 ベンダー続篇第8番
	甲一	音階イ調長音階反行及びコールド
	'	楽曲 小学唱歌集楽譜中 大和撫子
		オルガン教則本 第 2 巻中 70 番
		音階 歩調長音階及関係短音階 反行及びコールド
		楽曲 小学唱歌集楽譜中、かすめる宴
		ベンダー第9番
	選科	音階 變歩調長音階 三度十度反行三度五度
	~= 11	楽曲アンダンテメンデルゾーン作
		音階 二長旋律的短音階 三度十度反行三度五度
		コールド三度五度
		ズンデル 教則本 第 12 番
		音階 歩調旋律的短音階三度六度十度 反行三度五度
		コールド 三度 五度
		フーガエベルリン作
1906(明治 39)	甲三	音階 ホ調和声的短音階三度十度六度反行三度五度コールド
(),,,,	'	楽曲 モツァルト作ドンファン
		音階 へ調長音階三度十度反行コールド
		楽曲 クレメンティ作 アンダンテコンエスプレション
		音階イ調和声的短音階3度10度反行コールド
		楽曲ハイドン作アンダンテ
		音階 ホ調長音階 3 度 10 度反行コールド
		楽曲モツァルト作アベベルーム
		音階 変口調旋律的短音階 3 度 10 度 6 度反行
		3度5度コールド
		楽曲 Die weiße Dame Boieldieu
	甲一	音階ト調二調及反行コールド
	'	小学唱歌集第三編 菊
		ベンダ-9番
	ı	

- [024] 『明治三十八年三月甲種師範科學年試験成績』
- [027] 『明治三十九年三月 甲種師範科學年試験成績及問題』

表 1-60 渡邊森蔵による課題:1905 (明治38) 年

1905 (明治 38) | 乙師 | オルガン教則本 38 ヨリ 75 に至る中数曲

[025] 『明治三十八年六月 各科學年試験成績』

乙師=乙種師範科

音階の課題が課されているところは変わらないが、音階の中でも重音や反行、さらに和音(おそらくカデンツ)が加わり、基礎練習が多様化している。

楠美恩三郎、下村芳子、天谷秀、渡邊森蔵の使用教本は以下である。

『ハーモニュームアルバム (Bibl)』[Org-sol 23] 他 Bibl: Harmonium Sammlung von Tonstücke, Op. 29

[Zundel] [OH 6] Zundel: 250 Easy Voluntaries and Interludes

『ベンダー』 [OH 66 1/3 3/3] 他 Benda: 12 Vermischte Stücke für das Harmonium Liv. 1.

『ベンダー続編』 [OH 66 2/3] 他 Benda: 12 Vermischte Stücke für das Harmonium Liv. 2.

『小学唱歌集』〔Org-sol 62 1-13/13〕他 東京音楽学校編: *小學唱歌集用オルガン ピアノ楽 譜*

『ラインハード風琴練習本』〔Org-sol 75-77〕他 Reinhard: Zwanzig Harmonium-Studien Op. 13

『島崎』〔Org-sol 42〕他 島崎赤太郎編: オルガン教則本 壹

[Org-sol 46 1/3-3/3] 他 島崎赤太郎編: オルガン教則本 弐

『レメンス』 [Org-Ped 8] 他 Lemmens: Ecole d'Orgue I

これらはいずれも、明治30年台に大量の副本を受入れているものである105。

課題にだされた「楽曲」は以下である。

「ハンテル:オラトリオ」

[Org-sol 38] 他 Händel: Messie

105 本文 第一章 第一節 1-2 「明治期受入れの OH、Org-sol 分類楽譜」、19~20 頁参照。

「ハイドン:ラーゴ」

[Org-sol 39 5/8] J. Haydn: Largo aus dem Streichquartett Op. 76

「グリーグ:5番」不明

「ベトベン:トレアアンダンテカンタビル」

[OH 39 4/8] Ludwig van Beethoven (1770-1827): Andante Cantabile aus dem Trio Op. 97

「ワグネル:メニュエット」

[Org-sol 23] [Org-sol 33] Richard Wagner (1813-1883): Menuett

「メンデルスゾーン:アンダンテ」

[OH 24] Mendelssohn: Andante (Violin Concerto) あるいは

[Org-sol 39 6/8] Mendelssohn: Andante aus der Orgelsonate Op. 65 No. 3

「エベルリン:フーガ」

[OH35] Johann Ernst Eberlin (1702-1762): Fuga

「モーツァルト:ドンファン」

[OH 25] [Org-sol 38] [Org-39 3/8] Mozart : Air de Don Juan

「モーツァルト:アベベルーム」

[Org-sol 32] Mozart: Ave verum

「フランク:ファンタジー」不明。

「ギルマン:ソールテー」

[OH 19 1/3] Guilmant: Sortie sur la prose あるいは

[Org-Ped 24 3/6] Guilmant: Sortie en fa majeure か。

この時期は「楽曲」としてバラエティーに富む曲が課題として出されたが、編曲ものの割合が多い印象である。これらの「楽曲」は以下の曲集に収められているのが確認できた。

[OH 25] [Org-sol 38] Renaud de Vilbac (1829-1884) : Parles de l'Harmonium 80

Transcriptions de Morceaux classiques

[Org-sol 23] [Org-sol 33] Bibl: Harmonium Sammlung von Tonstücken

[OH 35] William Joseph Westbrook (1831-1894): Fugen-Album

[Org-sol 32] Reinhard: Harmonium-Schule

[Org-39 3/8] [OH 39 4/8] [Org-sol 39 5/8] Reinhard: Am Harmonium Übungs und

Vortragsstücke Op. 21

これらはいずれも 1895 (明治 28) 年~1897 (明治 30) 年受入れの選集である。

『Bible』や『Zundel』といった、ディットリヒ以来の課題に加えて、『レメンス』「フランクファンタジー」「ギルマンソールテー」などの、ペリーを踏襲したフランスのレパートリーが課題となっている。

4-4 1906 (明治 39) 年~1912 (明治 45) 年

この時期は、留学から帰国した島崎による課題の記録が数多く残されている。

表 1-61 島崎赤太郎による課題:1907 (明治 40) 年~1908 (明治 41) 年

1907(明治 40)	本一	Reinhard Nr. 9 Im Tempel ¹⁰⁶ Tonleiterübung D-dur und G-dur
		Reinhard Nr. 19 Tempo di marcia aus den Studien
		Tonleiterübung Cis-dur und G-dur
		Benda Dramatisches Scene, Tonleiterübung G-dur und Fis-dur
	甲三	Lemmens Fanfare
		Lemmens Pastorale
		Lemmens Fuguette
		Lemmens Postlude (Seite 48)
		Lemmens Invocation

106 Reinhard が誤記であれば、Benda: 12 Vermischte Stücke Liv. 2 No. 9 Im Tempel のことかと思われる。

		Reinhard Nr. 14 aus den Studien
		Reinhard Erster Satz aus der F-dur Sonatine
		Reinhard Zweiter Satz aus der F-dur Sonatine
		Reinhard Erster Satz aus der a-moll Sonatine
1908(明治 41)		音階 嬰へ調旋法及其属和絃ノ七ノ和絃
	本二	楽曲 Prèlude Adagio et Fugue per Guilmant
		音階 変イ短旋法及其属和絃ノ七ノ和絃 楽曲
		Pastorale aus der Sonate von Rheinberger
		音階 ほ短旋法 楽曲 Kleine Fuge von Bach
	本一	音階 ハ調旋法 楽曲 Nr. 33 u. 35 aus der Studien II von Reinhard
		音階 嬰ハ調旋法 楽曲 Nr. 16 u. Nr. 20 aus der Studien I von Reinhard
	甲三	音階 変ろ短旋法 楽曲 Canzonetta per Guilmant
		音階 嬰は短旋法
		楽曲 Erster Satz aus der Sonatine a-moll von Reinhard
		音階 嬰ヘ短旋法 楽曲 Kleine Präludium und Fuge von Bach

[029] 『明治四十年三月 各科學年試験成績』

本=本科器楽部

[030] 『明治四十一年三月 各科學年試験成績』

ここで出題されている『Reinhard』『Benda』『Lemmens』の該当楽譜は以下である。

[Reinhard Studien]

[Org-sol 75, 76, 77] Reinhard: Zwanzig Harmonium Studien Op. 13

[Benda]

[OH 66, 67, 73, 84] Benda: 12 Vermischte Stücke für das Harmonium Liv. 2 「Dramatische Scene」は No. 10 として掲載。

[Lemmens]

[OH 49] [OH 154] Lemmens: Morceaux pour Orgue-Mélodium

「Invocation」はNo. 1 / 「Fugette」はNo. 3 / 「Fanfare」はNo. 6

[OH 85] [Org-sol 159] [OH 176] Lemmens: Ecole d'Orgue

「Pastorale」「Postludium」を掲載。

『Reinhard』や『Benda』、『Lemmens』はすでに教則本でおなじみになっているが、出題傾向が教則本から曲集へと移行しているのが注目される。加えて、「Reinhard Sonatine」や、

「Guilmant」「Rheinberger」のソナタ(ハルモニウム版)など、ハルモニウムの為の曲が課題となっている。

Reinhard Sonatine

[OH 48] [Org-sol 122] Reinhard: Drei Sonatinen Op. 38

「Prèlude adagio et Fugue per Guilmant」

[OH 19 2/3] Guilmant: L'Organiste pratique 9me Livraison Op. 56

Guilmant: 3e Sonate Prèlude Adagio et Fugue を掲載。

「Pastorale aus der Sonate von Rheinberger」

[OH 182 4/6] Rheinberger: Pastorale Op. 154 (Sonata Nr. 12)

[Canzonetta per Guilmant]

[Org-sol 123] Guilmant: Canzonetta Op. 28

この時期は以下のバッハの曲も課題に出されている。

「Kleine Fuge von Bach」「Bach Kleine Präludium und Fuge」

バッハの楽譜は〔Org-Ped 1〕Peters 版のバッハ全集のほかに、1906(明治 39)年受入れの [OH 146] Liszt: Bach Orgel Compositionen für Piano、1908(明治 41)年受入れの [Org-sol 178] Gustav Hecht: Fünf Sätze aus den Orgel-werken Joh. Seb. Bachs などがあり、バッハのオルガン曲を手鍵盤だけで演奏できるように編曲したものが充実しつつあった。また、フーガに関しては 1897(明治 30)年受入れの [OH 35] Westbrook: Fugen-Album、 [Org-sol 39] Reinhard: Am Harmonium Übungs Op. 21 などの選集にも収録されている。バッハの課題に該当する楽譜としては様々な可能性があるので断定はできないが、Bach: Acht kleine Präludien und Fugen BWV553-560 ではないかとみている。

表 1-62 島崎赤太郎の課題:1909 (明治 42) 年

1909(明治 42)	本三	Elegische Fuge von Dienel
		Choral und Variationen von Bach

	F-dur Pastoral von Bach
本二	Introduction et Fuge von Wanaus
	Nr. 49 aus Studien von Reinhard
本一	Nr. 32 u. Nr. 33 aus Studien von Reinhard
甲三	Allegro non troppo par Guilmant
	Prèlude par Guilmant
	Sonatine a-moll (Erster Satz) von Reinhard
	Sonatine F-dur (Erster Satz) von Reinhard
	Sonatine C-dur (Dritter Satz) von Reinhard
	Sonatine C-dur (Zweiter Satz) von Reinhard
	Sonatine C-dur (Erster Satz) von Reinhard
	Kleine Präludium und Fuge von Bach
	Präludium E-dur von Bach
	Thema und Veränderungen von Rheinberger
	Marche Triomphale par Lemmens
	Invocation par Lemmens
甲一	Nr. 8 aus Harmonium Schule von F. E. Benda

[031] 『明治四十二年三月 學年試験成績』

上記の表では、既出の『Reinhard Studien』『Reinhard Sonatinen』『Lemmens』『Benda』「Kleine Präludium und Fuge」に加えて、以下の楽曲が課題となった。

[Elegische Fuge von Dienel]

[OH 189] Otto Dienel (1839-1905) : Elegische Fuge

[Introduction et Fuge von Wanaus]

[OH 184] Jean Wanaus (?-?): Introduction et Fugue (h-moll) pour Harmonium Op. 12

[Allegro non troppo par Guilmant]

[Org-Ped 22 3/3] Guilmant: L'Organiste pratique 8me Liv. Op. 55

Guilmant: Allegro non troppo を掲載。

Prèlude par Guilmant

[Org-Ped 2/6] Guilmant: L'Organiste pratique 2me Liv. Op. 41

Guilmant: Prèlude en mi þ majeure を掲載

Thema und Veränderungen von Rheinberger

[OH 182 3/6] Rheinberger: Thema mit Veränderungen Op. 146 (Sonate Nr. 10)

[Marche Triomphale par Lemmens]

[OH 49] [OH 154] Lemmens: Morceaux pour Orgue-Mélodium

Lemmens: Marche Triomphale を No. 11 に掲載。

1909年の課題では、ハルモニウムのレパートリーがさらに拡充している。

また、この年もバッハが課題に挙がっている。

「F-dur Pastoral von Bach」

BWV590か。前述の〔Org-sol 178〕Hecht: Fünf Sätze aus den Orgel-werken Joh. Seb. Bachs には、Bach: Pastorale BWV590のうち、手で弾ける C-dur 部分だけが掲載されている。

「Praeludium E-dur von Bach」特定できず。

[Choral und Variationen von Bach]

バッハの Partita のいずれかと考えられる。

この年、 $[Org-Ped\ 26\ 1/4-4/4]$ Bach-Album für Orgel Band $I\sim IV$ の受入れがあり、バッハの楽譜は選択肢が増えた。

表 1-63 島崎赤太郎による課題:1910 (明治 43) 年

1910(明治 43)	本三	Passacaglia Bach
		Kleine Präludium und Fuge Bach
	本二	Invocation Lemmens
	本一	音階 D-dur No. 27, 50 Studien Reinhard
	甲三	音階 fis-moll Prèlude Guilmant
		音階 As-moll Canzonetta Guilmant
		音階 D-dur Sonata Guilmant
		音階 e-moll Fuge Bach

音階 E-dur Praeludium u. Fuge Bach
音階 As-dur Partita IX Bach
音階 Des-dur Canzone Bach
音階 gis-moll Romanze Rheinberger
音階 G-dur Sonatine Reinhard
音階 Cis-dur Fantasie Präludium Buxtehude
音階 D-dur Elegische Fuge Dienel
音階 c-moll Suite Bibl
音階 e-moll Praeludium Gavotte(Suite)Bibl

[033] 『明治四十三年三月 學年試験成績』

既出の「Kleine Präludium und Fuge Bach」『Lemmens』『Reinhard』「Canzonetta Guilmant」「Fuge Bach」「Praeludium u. Fuge Bach」「Sonatine Reinhard」「Elegische Fuge Dienel」「Prèlude Guilmant」に、以下の曲が加わった。

「Passacaglia Bach」

Bach: Passacaglia BWV582。 [Org-Ped 1 1/9] Peters 版バッハ全集 1 巻のほかに、1908(明 治 41)年に受入れの [OH 185] バッハ: パッサカリアが該当するが、[OH 185] は震災で焼失している。

「Sonata Guilmant」

[OH 19 1/3] Guilmant: 2e Sonate か、[OH 19 2/3] Guilmant: 3e Sonate が該当する。

「Partita IX Bach」

Bach: Partite diverse sopra: O Gott, du frommer Gott BWV767 の Partita IXと考えられるが、該当曲が掲載されている [Org-Ped 1 5/9] Peters 版バッハ全集 5 巻は消失している。

Canzone Bach

Bach: Canzona BWV588 か。〔Org-Ped 1 4/9〕Peters 版バッハ全集 4 巻のほかに、〔Org-sol 178〕Gustav Hecht: Fünf Sätze aus den Orgel-werken Joh. Seb. Bachs には手だけで弾けるアレンジがのっている。

「Fantasie Präludium Buxtehude」

[OH 187] Dietrich Buxtehude (c.1637-1707): *Fantasie, Präludium und Fuge* が該当する。この楽譜は Zellner 版だが、Buxtehude の原曲が不明である。

「Praeludium Gavotte (Suite) Bibl」

[OH 186] Bibl: Suite Op. 41

組曲の内容は Praeludium-Gavotte-Menuett-Courante-Fuge である。このうちの Praeludium と Gavotte が該当する。

表 1-64 島崎赤太郎による課題:1911 (明治44) 年

1911 (明治 44)	本三	Fuge in e-moll von Bach		
	本二	Dritte Satz aus der Sonatine in F-dur von Reinhard		
		Oreistimmige Fuge von Lachner		
		Thema mit Veränderungen von Rheinberger		
	甲三	Partita von Bach		
		antata von Bach		
		Fuge in h-moll von Bach		
		Marche Triomphale par Lemmens		
		Fuguette par Lemmens		
		Cantabile par Lemmens		
		Fanfare par Lemmens		
		Finale par Lemmens		
		Introduction et Fugue von Wanaus		
		Menuett und Courante von Bibl		

[034] 『明治四十四年三月 各學科學年試験成績』

「Reinhard Sonatinen」「Rheinberger」「Partita」「Marche Triomphale par Lemmens」「Fuguette par Lemmens」「Finale par Lemmens」「Introduction et Fugue von Wanaus」は既出である。

以下のバッハの課題がでているが詳細は不明である。

Fuge in e-moll von Bach

「Cantata von Bach」

Fuge in h-moll von Bach

そのほかに新しく出された楽曲は以下である。

「Dreistimmige Fuge von Lachner」

[OH 172] Vinzenz Lachner (1811-1893): Dreistimmige Fuge für Orgel Op. 68、が該当する。

「Cantabile par Lemmens」「Fanfare par Lemmens」

[OH 49] [OH 154 1/6-6/6] Lemmens: Morceaux pour Orgue-Mélodium.

No. 4 Cantabile、No. 6 Fanfare を掲載している。

Menuett und Courante von Bible

[OH 186] Bibl: Suite Op. 41

Praeludium-Gavotte-Menuett-Courante-Fuge を掲載、このうち Menuett と Courante が該当する。

表 1-65 島崎赤太郎による課題:1912 (明治 45) 年

1912(明治 45)	本三	Partita in e moll von Bach
		Passacaglia von Bach
	甲三	Canzonetta par Guilmant
		Suite von Bible
		Seconde Sonate par Guilmant
		Sonatine (in F-dur) von Reinhard
		Prélude et Adagio par Guilmant
	甲二	Elegische Fuge von Diener
		Große Fantasie von Kistler
		Fuge in e-moll von Bach
		Romanze aus der Vermischte Stücke von Benda

[035] 『明治四十五年三月 各科學年試験成績』

この年、Bach の楽譜の受入れが 3 冊あった。そのうちの 1 冊 [OH 223 1/3] は Peters 版 バッハ全集の 9 巻であり、[Org-Ped 1 9/9] として音楽取調掛時代に受入れられたものである。どこかにまぎれて除籍となってしまったものを再度受入れたと考えられる。そのほかに [OH 223 2/3 3/3] Homeyer 版の *Johann Sebastian Bach Orgelwerke* の二冊組が受入れられたが、後半の一冊は消失している。

新たな課題は以下である。

[Partita in e-moll von Bach]

Bach: Partite diverse über: Ach, was soll ich Sünder machen BWV770

[Org-Ped 1 9/9] = [OH 223 1/3] Peters 版バッハ全集 9 巻に掲載。

Große Fantasie von Kistler

[OH 165] Cyrill Kistler (1848-1907): Große Fantasie für Konzert Harmonium oder Orgel Op. 77

1902 (明治 35) 年受入れの [Org-sol 56] キストレル: グロス、ファンテジーもあったが、震災のために焼失している。

Romanze aus der Vermischte Stücke von Benda

[OH 66 2/3] 他 Benda: 12 Vermischte Stücke für das Harmonium Liv. 2

No. 11 Romanze: Romance を掲載。

島崎が帰国してから、課題にだされる楽曲の種類が飛躍的に増えた。Passacaglia に至るバッハのレパートリー拡充に加え、ハルモニウム用の様々な作品が課題に出された。楽譜の受入れから課題を出すまで比較的短い期間になっており、新規購入楽譜の意欲的な使用の様子がわかる。

島崎がこの時期行っていた『ベンダー教則本』を用いた指導とリード・オルガンの奏法について、草川宣雄が丁寧に回想している¹⁰⁷。草川は 1906 (明治 39) 年に甲種師範科を卒業しているが、在学中は島崎が留学で不在であった。どうしても島崎からオルガンを習いたかった草川は、卒業後あらためて聴講(選科)に入り直し分教場に通い、島崎からオルガンと楽式を学んでいる。初回に「ギルマン作曲の第二ゾナテをひいた」草川に対し、島崎は「此の次からもう一遍ベンダーの最初からおひきなさい」と返し、草川がすでに終えていた「ベンダー教則本」を一から教えたようだ。草川の回想からは、島崎のリード・オルガン演奏への姿勢と演奏解釈を読み取ることができる。以下に引用する。

 $^{^{107}}$ 草川宣雄「島崎先生を憶ふ」、『學校音楽』學校音楽研究會編輯、1934 年 4 月、島崎赤太郎先生追悼號、 21 ~25 頁。

練習曲でも、何か或る感想を云ひあらはした意味のある曲の様に頭でおひきなさい」 と云われた。

ベンダー教則本の二篇の五番、夕暮で、「此のメロディーは夕暗の靜々とせまつって来る光景です」と説明されつゝ、あのパイプオルガンのペダルの様な聲で、拳骨で一つづゝ押して行く様な格好で、バスを歌ひながら、先生獨特のバスの獨唱を伴奏として行かれるので、すっかり此の曲に魅せられてしまった。

ベンダー教則本二篇の六番、農夫の幸福の曲では、二十三、四、五、六、小節にわたる、「遠く山にこだまする羊飼の角笛の音である」と説明されて、私をすっかり欧羅 巴のとある牧場へと連れて行って下さったものである。

ベンダー教則本二篇の八番、「劇的光景」の一曲に進んだ時、「これは六かしい曲です、あなたはオペラを見ましたか、オペラを御覧にならないと一寸想像がつきかねますが、此の最初の十六分音符から成る速い細かい節は、ヴアイオリンや笛の獨奏部で、こゝは獨唱部、こゝはオーケストラの伴奏部であると目に見える様にオペラの光景を語りつゝ、慇懃に導いて下すった。また「日曜の朝」の曲になると、最初にあらはれるコラール部分は、遠くの教會から聞えて来る信徒のコラールの合唱の處で、マーチ風の處は牧師が徐々と教壇にあらはれて来る進行的の部分、こゝはフーゲで最後にまた信徒のコラールが聞えて来る」と口笛を高々と吹きならしつゝ、僕の奏するオルガン曲に樂しい伴奏をされたものである。

ベンダー教則本がすんでレメンス曲集に移る頃からノホル・ペリー先生のオルガンピアノ練習書を課せられた。演奏のテクニックに對する教授法は實に巧妙を極めて居た。

島崎先生以前のオルガン奏法上の手法は極めて不格好な拙劣なものであったが、先生は指の一、二関節と三関節とを直角に保つ様に、そして、一、二関節は鍵盤面に垂直に保つ様注意された。「手指の格好は金槌の様なものです、金槌の鐡片は柄に直角になって居ます。一、二関節と三関節の為す角度が直角になって居る時が、最も力強く鍵に働く時です」と云はれ、音階をひく時は、顔を横にして私の指の運びを水平的に見通して居られた。五指の位置と鍵盤との関係の練習法の如きは實に巧妙と云はふか、慇懃と云はふか、かくて私のオルガン奏法は全く島崎先生によって大改革の機運に遭遇した。

ペダルの踏み方の教授に於ては、先づリードオルガンの大體の構造を思ひ浮べさせ、ペダルは人體の肺臓に相應するものなることを説き、細くペダルを踏む時はペダルの吊皮の一小部分のみが摩擦され、風袋も又一小部分のみが頻繁に使用されるので、風袋は吊皮と共に短命にして倒れると説き自ら其の模範的奏法を示された。

草川のこの回想からは、Benda の教本を用いた島崎のオルガンの指導が、各曲をより音楽的に深く理解しようとするものであったことがうかがい知れる。また、リード・オルガンについて、その構造にみあった適切な奏法を目指していたことがわかる。

明治40年代は、楠美恩三郎、中村芳子、天谷秀、青木シノ、中田章が出題した課題も残っている。

表 1-66 楠美恩三郎による課題:1908 (明治 41) 年

1908(明治 41)	甲二	イ短コールト三六十度 アルペジオ/フランク 24 頁
		ホ短コールト三六十度 アルペジオ/レーマン 22 頁
		イ短コールト三六十度 アルペジオ/メルケル4番
		二短コールト三六十度 アルペジオ/ベンダ後編7番
		〜短コールト三六十度 アルペジオ/グリーグ1番
	甲一	ト調コールト反行アルペジヲ/ベンダ続篇9番

[030] 『明治四十一年三月 各科學年試験成績』

表 1-67 中村芳子による課題:1907 (明治 40) 年~1912 (明治 45) 年

1907(明治 40)	甲二	ラインハード スチュヂーン オープス十三ノ四			
		レメンス シーメーヂョル ソールテー			
		仝 デーメーヂョル ソールテー			
	甲一	小学唱歌集第一編 ノ 11. 13. 24. 36			
		ベンダー風琴教則本一巻ノ 12.13.15.21			
		仝二巻ノ4			
1908(明治 41)	甲一	長音階 短音階 三和音			
		Theoretische Practische E. Benda No. 17. 18. 20			
		Vermischte Stücke E. Benda Band 1 No. 1. 3 Band 2 No. 10			
		Ecole d'Orgue J. Lemmens Prélude, Sortie			
1909(明治 42)	甲二	レメンス 一編 三番四番 二編 拾番 オフワートリー			
		レメンス プレリユード			
		ギルマン オフワートリー			
		ラインハード ソナチナ			

	甲一	音階 長短音階 併行 三六十度 三和音			
		ベンダー風琴教則本 11、14、18、19、21 番			
		ベンダー続篇1、3、6、7番			
		レメンス オフワートリー			
1910(明治 43)	甲二	1. Scales Major and minor scales, with their thirds, tenths and sixths in			
		parallel and contrary motions broken chords and arpeggio			
		2. J. Lemmens Fuga Prèlude Sortie Capriccio and Andante			
		3. F. Benda Band III No. 3			
	甲一	1. Scales Major scales with their thirds, tenths and sixths: broken-			
		chords			
		2. Studien August Reinhard No. 12			
		3. Organ method Felix Benda Band I No. 9. 12. 22 Band II No. 3. 4. 6			
		4. Shogaku Shokashu No. 15. 18			
1911(明治 44)	甲二	一、音階平行反行三和音三度十度六度(短音階)			
		二、ベンダー続篇一番三番吸盤			
		三、レメンス フーゲタ オーフワートリー ソーチー			
		四、ラインハードソナチナ			
	甲一	一、音階 平行 三度十度六度三和音			
		二、ベンダーー篇三番九番十七番二十二番 仝三篇 一番二番			
		三、レメンスソルチー			
1912(明治 45)	乙師	1. 音階(長短音)			
		2. 嶋崎氏風琴教則本二編の内 六十五 六十八 六十九 七十四番			
		3. ベンダー一篇の内 三番四番十四番十五番二十四番			
		4. 仝二編の内四番 5. ギルマン ソルテ― (短ト調)			
	甲二	Scales-minor-contrary motion with third finite or Ut sixths			
		Lemmens a. Andante b. Pastorale c. Invocation d. Cantabile			
		e. Marche Triomphale			

- [029] 『明治四十年三月 各科學年試験成績』
- [030] 『明治四十一年三月 各科學年試験成績』
- [031] 『明治四十二年三月 學年試験成績』
- [033] 『明治四十三年三月 學年試験成績』
- [034] 『明治四十四年三月 各學科學年試験成績』

表 1-68 天谷秀による課題:1907 (明治 40) 年

1907(明	月治 40)	甲二	イ調和声的短音階 六度 コールド / 楽曲 アンダンテ モツァルト作
		甲一	二調旋律的短音階 反行 コールド / 楽曲 小学唱歌集中 忠臣 花鳥
			ホ調和声的短音階 反行 コールド/楽曲 ベンダー教則本第24

[029] 『明治四十年三月 各科學年試験成績』

表 1-69 青木シノによる課題:1908 (明治 41) 年

1000	(DD3/5 44)	ш	エッジン共印ナー アート
1908	(明治 41)		1 7 // / 2 / HII / H
1700	(ツルロ ユエノ	1 1 1	

[030] 『明治四十一年三月 各科學年試験成績』

表 1-70 中田章による課題:1908 (明治 41) 年、1910 (明治 43) 年

1908(明治 41)	甲一	ハ調長音階 オルガン教則本 41番	
1910 (明治 43)	乙師	オルガン教則本中74番変ホ旋律的短音階サンオクターブ	
		二調長音階三度六度十度	
		分散和絃(但是等の中二若くは三を行ふ)	
		ベンダー教則本 続篇 12番 変ロ短音階	
		ほ調長音階三度六度及十度並に分散和絃	

[030] 『明治四十一年三月 各科學年試験成績』

[033] 『明治四十三年三月 學年試験成績』

楠美、中村、天谷、青木、中田の課題は概ねこれまでの流れを汲んだものである。楠美の課題「フランク 24 頁」「メルケル 4 番」「グリーク 1 番」は記録としては初出¹⁰⁸である。

「フランク 24 頁」

[OH 118] Franck: L'Organiste の可能性がある。1904 (明治 37) 年の受入れである。

「メルケル4番」

[Org-sol 50, 57, 140] Merkel: Compositionen für Harmonium Op. 78:12 Lyrische Tonstücke あるいは [Org-sol 53, 54, 88, 141] Merkel: Lyrische Blätter 10 Stücke für Harmonium Op. 99 が考えられる。どちらも、1905 (明治 38) 年までに複数冊の受入れがあった。

「グリーグ1番」

楠美は明治 39 年にも「グリーグ 5 番」という課題を出している。何かしらの選集に含まれていたのではないかと考えられるが、1908(明治 41)年 3 月時点の受入れ楽譜には該当曲が確認できなかった。1915(大正 4)年に〔OH 291〕Reinhard: *Grieg Harmonium Album*が寄贈されている。寄贈楽譜は実際の使用時期が受入れよりも前である場合があり、この楽譜が該当する可能性もゼロではない。

¹⁰⁸ペリー等の課題が残っていいない為、すでに課題として出されていた可能性がある。

第五節 明治期の東京音楽学校におけるオルガン演奏の記録

明治期東京音楽学校での演奏会の記録は、『東京芸術大学百年史 演奏会編 第一巻』109から得ることができる。そこから、オルガンが関わる演奏を抽出した110。

明治期にオルガンが関わった演奏会には、毎学年末に行われる「卒業式」、定期的に開催された「同好会」「学友会」「同声会」「定期演奏会」、特別な機会に催された「創立紀念会」「皇后行啓演奏会」「慰労音楽会」のほかに、「大演奏(音楽)会」「演奏旅行」、「試業演奏会」「選科生徒演奏会」がある。

これらのほとんどは東京音楽学校内の奏楽堂で開催されたが、「大演奏(音楽)会」「演奏旅行」など地方での演奏、「試業演奏会」「選科生徒演奏会」など主に分教場で行われたものもあった。オルガンの演奏は1890(明治23)年から記録がある。

これまでみてきた楽譜、楽器、課題の変遷をもとに、これらの演奏がどのようなものだったのかを読み解いていく。

表 1-71 明治期におけるオルガン演奏

	研究/講師/教授	専修 器楽	師範	選科
M23			花や紅葉 雲(高木武)	
M24		結尾音(島崎赤太郎)		
M25		ショパン:喪式行進曲(島崎・石原)		
		シューベルト:進行曲(島崎・石原)		
M26		バハ:ソナタ一部(島崎・石原)	春の夜 太平の曲(飯田三々雄)	
		ラモ―:タンブラン(島崎・石原)	キュージヤス、アニマン(飯田・關根)	
		メーヒル:朝礼(石原重雄)	パストレール(飯田・關根)	
		モザート:オルガンソナタよりアリア(石原		
		重雄)		
		バハ:フーグ(島崎赤太郎)		
		メンデルソン:アダジヲ(島崎赤太郎)		
		メンデルスゾーン:ソナタ第2部(島崎・石		
		原)		
M27	[バハ]:フウグ(島崎赤太郎)			
M28			アンダンテ、コン、モト(野村)	
M29	バハ:コンサルト(島崎赤太郎)	ショッパン:葬送行進曲(永井・高橋)		
		シューマン:第三クワルテット第一部(永		
		井幸次)		
		シューベルト:進行曲(高橋・米野)		
		テンホテイマーシア ローマンス (永井幸		
		次)		
		メンデルソン:アダジヲソナタ1番ヨリ抜粋		
		(神山末吉)		
		ショパン:ロマンス(神山末吉)		
M30		バッハ:フーガ(神山末吉)		
	ワグネル:ミニュエット(天谷・太田)	バハ:ソナター部(神山・天谷)		
	バハ:トッカタエフーガ(島崎赤太郎)	シューマン:第三クワルテット第一部(太田勘七)		

¹⁰⁹ 東京芸術大学百年史編纂委員会編『東京芸術大学百年史 演奏会篇 第一巻』東京:音楽之友社、1990。 以下『芸大百年史 演奏会篇 第一巻』と略記する。

-

¹¹⁰ 資料③「東京音楽学校オルガン演奏リスト」を巻末に付録。

		1	T	
	研究/講師/教授	専修 器楽	師範	選科
M31	モツァルト:ラルゲトー(天谷秀)			
	メンデルスゾーン:ホッホ、ツァイツ、マ ルッシュ(天谷秀)			
	ショパン:ローマンス(天谷秀)			
				カンテヰク
M33	バッハ:ー(島崎)			ヴオルンタリー(仙波あい)
M34	メンデルスゾーン:ソナタ第4(島崎)		バハ:エーア(志水操)	楽しき我が家(水原みち)
			メンデルゾーン:プレールヂウム(齋藤左	アンダンテ、ソステニユトー(中澤ふじ)
			右田) メンデルゾーン:タンダンテ、トランクヰロ	,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,
			(ソナタ1)	バハ:ガボッテ(仙波あい)
M35		バハ:ガボッテ(三上たけ)	ラインハルト:ソナチナ(志水操)	バットマン:進行曲(石原傳枝)
				クロイツェル:朝の歌(堀しん)
				ラインハルト:薔薇(島地あつ)
				春の歌(赤星國清)
				アンダンテー(古澤きみ子) メルケル:モルソーリリック9番(岩井な
		フランク:フアンタジー(三上タケ)		み)
				ハイドン: 墺國々風(秋元きく)
				メルケル:リリッシェブレテル第1番(島地
				あつ)
	メンデルスゾーン:アダジオ			ラモー:レ、タンボリン(堀しん)
	リンク:モデラート(天谷秀) バハ:プレェリユヂュム、ウント、フーガ	F		
M36	バハ:フレェリユチュム、ワント、フーガ (齋藤左右田)	Franck: Fantasie in E flat major (古澤きみ)	ハッセンスタイン:ノヴェレッテ(村田ミイ)	ベートーヴェン:フュネラルマーチ(木田 アドルフ)
	(WI 10K/T=/H H-1)	か) レメンス:フーガー(松井壮吉)	Voluntary1.2 (釜萢善作)	フランク:ポストルヂューム(岩井のぶ)
		レメンス:ソールテー(三浦とめ)	ベンダー20(吉村リウ)	フランク:アンテム(島地あつ)
			Voluntary 6 14 (江澤淸太郎)	メンデルスゾーン:プレヂューム(秋元き
				<)
			ベルラニー:アダヂヲ(大熊しん) グーノーイントロダクション マイエル	
			グーノーイントロタクション マイエル ベール:ローマンツ (赤尾寅吉)	
M37		フランク:ファンタジー Hdur(三浦トメ)	Handel:Largo Bach:Gavotto(釜萢善作)	
		ギルマン:プリエール、エ、ベルソース		
		(古澤きみ)	Mozart:Don Junan(江澤淸太郎)	
		ラインハード:ソナチネ(松井壮吉)	Eberlin:Fuga(布村うた)	
			Bach: Fuga Bach:Praeludium (赤尾寅吉)	
			^古) メンデルゾーン:オルガンソナタ四番フィ	
			ナーレ(大熊・岩倉)	
			レムメンス:シェルソ、シンフォニック(南・	ニュー か ばい (31 正美 二億 た/)
			赤尾)	ラモー:タンボリン(辻亜美・三須きく)
			バハ:フーガー(草川宣雄)	メンデルスゾーン:プレルヂューム(岩井
				のぶ)
M38		ギルマン:マドリガル(松井壮吉)	レメンス:ソルチニ―(君塚正志) ギルマン:マーチ(藤田コト)	バハ:ガボット(三須きく)
WISO		ギルマン:カンツォナ(古澤きみ)	フランク:ファンタジー(松本徳蔵)	モツアルト:エーア(ドンフヮン)飯田隆健
		()	ワグネル:ミニュエット (青木シノ)	メンデルスゾーン:アダヂヲ(辻美亜)
			フランク:ファンタジー(吉村りう)	モツアルト:アンダンテ(山崎謙太郎
M39	バハ:トッカータ、ウント、フーゲ(島崎)	Bach:Preludo (加藤ぶん)	Lemmens:Cantabile(中田章)	メルケル:アンダンテ(宇津木喬子)
		10	A CHELLISTS	ベートーフェン:アダジオ(稻澤りう)
		ギルマン:アレグロ(加藤ぶん)	Mozart:Don Junan(草川宣雄)	ベートーフェン:アダジオ(飯田隆健)
			レーマン:カプリチョー フィナーレ(鈴木	ハイドン:メヌエット(櫻井とみ)
			善野)	ラインハルド:ソナチーネ(辻美亞)
M40		ギルマン:カンツォネッタ(富岡靜女)	リヒテル:フォルスピール(中田・原田)	ライヒヤルト:薔薇(宇津木喬子)
				ハイドン:テマ、ウンド、ヴァリアチオネン
				(稻澤りう)
		バハ:プレルデイエム、ウント、フーゲ(平 尾勇)	キストレル:フアンタジー(中島かつ)	レンマン:凱旋進行曲(水原みち)
			ラインハルト:ソナチイネ第一楽章(ト野	
M41		曲目不明(富岡靜女)	外喜雄)	
	_	曲目不明(平尾勇)	バハ:クライネ、プレリュヂウム及フーゲ	
			ギルマン:カンツォネッタ(松井あい)	
M42		バハ:パルティタ(平尾勇)	ギュルマン:アレグローノントロッポ(高橋	
			テツ) ラインハルト長へ調ソナテイネ 第一章	
			(橋村その)	
			バハ:パストラール(園山民平)	
M43		バハ:パッサカリア(張福興)	フーグ(伊達愛)	
			パルテイタ(園山民平)	
			レーメンス:凱旋進行曲(伊達愛)	
M44		バハ:短ハ調フーゲ(山田フク)	ラインハルト:ソナティナ(安藤憲)	
		バッハ:クライネ、プレリュディウム、ウン		
		ド、フーゲ(吉田)		
		バッハ:クライネ、プレリュディウム、ウン		
		ド、フーゲ(吉田)		
		バッハ:パッサカリア(池田阿隻子) バッハ:パルテヰタ(吉田トキ子)		
		レ・ン/ ・// ソビノ サク(盲 田 P ヤ 丁)		
		バッハ:パッカリヤ(池田)		
M45		バッハ:パッカリヤ(池田) バッハ:パッサカーリア(池田)	バッハ:パルティータ(磯江清)	
M45		バッハ:パッカリヤ(池田) バッハ:パッサカーリア(池田)	バッハ:パルティータ(磯江淸) キースター:グロッセ、フアンタギー	
M45				

5-1 1890 (明治 23) 年~1893 (明治 26) 年

表 1-72 1890 (明治 23) 年のオルガン演奏

10/18	同好会	花や紅葉	高木武	師二	風琴
		雲		(菊池)	

師:師範部

表 1-73 1891 (明治 24) 年のオルガン演奏

3/14	同好会	菊	-	-	風琴
		蛍の光			
11/15	同好会慈	結尾音	島崎赤太郎	専二	獨奏風琴
	善演奏会			(Dittrich)	

専:専修部

初期の師範科では、オルガンで唱歌を演奏している。

表 1-74 1892 (明治 25) 年のオルガン演奏

1	1/27	学友会演奏会	ショパン:喪式進行曲	島崎赤太郎/	専三	オルガン
			シューベルト:進行曲	石原重雄	(Dittrich)	二人連奏

ディットリヒが受持った学生が「連奏」を行っている。本文 第一章 第三節 3-4-1¹¹¹で 触れたように、連奏はオルガンを二台並べて演奏するものだった。この時期の東京音楽学 校には一段鍵盤の小型のリード・オルガンしかなかったので、それらを二台並べて二名で 演奏したようである。

「ショパン: 喪式進行曲」

ショパンのピアノ・ソナタ第三番の三楽章部分である。

[Org-sol 11] Josef Löw (1834-1886): Chopin Harmonium-Album

F. Chopin: Marche Funèbre de la Sonate Op. 35 を掲載。

[Org-sol 23 1/2] Bibl: Harmonium Sammlung von Tonstücke

F. Chopin: Marche Funèbre を掲載。

[Org-sol 23 1/2] には伴奏部分を線でくくる書込みがある。連奏の際の分担を示すものであった可能性がある。

 $^{^{111}}$ 本文 第一章 第三節 明治期の 3-4-1 「[島崎赤太郎の] 東京音楽学校学生時代 1889(明治 22)年~1902 (明治 35)年」、68 頁。

「シューベルト:進行曲」

この時点の受入れ楽譜の中では、

[Org-sol 10 2/4] Westbrook: Album Italien 30 Morceaux célèbres

Franz Schubert(1797-1828): Marsch aus Op. 27(3 つの英雄的行進曲)

が該当するが、その部分に書込みは特にない。この楽譜の中表紙には島崎のサインがある。

表 1-75 1893 (明治 26) 年のオルガン演奏

2/11	学友会演奏会	春の夜	飯田三三雄	師二(遠山)	風琴獨奏
		大平の曲			
		-	石原重雄	専三	風琴獨奏
				(Dittrich)	
3/19	第3回学友会	バハ:ソナタ 第一部	島崎赤太郎/	専三	風琴聯奏
	演奏会	ラモー:タンブラン	石原重雄	(Dittrich)	
6/11	学友会練習会	キユージヤス、アニマン	飯田三三雄	師二(遠山)	風琴連奏
	(男子部)	パストレール	關根琢	不明	
		メーヒル:イスラエル歌劇	石原重雄	専三	風琴
		より抜粋 朝礼		(Dittrich)	
		モザート:オルガンソナタ			
		より抜粋 アリア			
		バハ:フーグ	島崎赤太郎	専三	風琴
		メンデルソン:アダジヲ		(Dittrich)	
7/8	卒業式	メンデルスゾーン:	島崎赤太郎	専三	風琴曲
		ソナタ第二部	石原重雄	(Dittrich)	二人連奏

引き続き連奏が盛んにおこなわれている。以下は「連奏」で行われた曲目である。

「バハ:ソナタ第一部」

[Org-Ped 1 1/1] Peters 版バッハ全集 1 巻

Bach: Sonaten BWV525-530

バッハのトリオ・ソナタの一部分を二人で演奏したと考えられる。

バッハの曲は Peters 版の全集がすでにあり、ディットリヒの課題にも用いられていた。現存する巻(1.4.6.7.8.9巻)は全体的によく使われている印象である。第四節 4-1 内の「ディットリヒの課題」の箇所でも触れたように、コラールの定旋律がペダル部分にくる曲では、ペダル部分を左手に書きうつす書込みがあるなど、ペダルを使わずに工夫して演奏した様子が見られる。連奏というスタイルはそういった工夫の一部であると考えられる。

「ラモー:タンブラン」

[Org-sol 25] Vilbac: Parles de l'Harmonium 80 Transcriptions de Morceaux

Jean-Philippe Rameau(1683-1764): Le Tambourin classiques が該当する。

「キュージヤス、アニマン」不明

「パストレール」Bach: Pastorale BWV590 かと思われるが不明。

「メンデルスゾーン:ソナタ第二部」

メンデルスゾーンの楽譜もバッハ同様、最初期に受入れがあった。

[Org-Ped 2] Mendelssohn: Compositionen für die Orgel

Mendelssohn: Sechs Sonaten Op. 65

以下は独奏曲である。独奏曲のうち、「メーヒル:イスラエル歌劇より抜粋 朝礼」「モザート:オルガンソナタより抜粋 アリア」は不明である。

「バハ:フーグ」

前述のように、[Org-Ped 1] Peters 版バッハ全集に該当曲が多数あるほか、初期から『シュレー教則本』として使われた [Org-sol 26] Micko: *Estey-Cottage- Orgel-Schule* にも Fuge von Bach の掲載がある。

「メンデルソン:アダジヲ」

[Org-Ped 2] Mendelssohn : Compositionen für die Orgel

Mendelssohn: Sonata Nr. 12. Satz Adagio の掲載があるほか、

[Org-sol 23 2/2] Bibl: Harmonium Sammlung von Tonstücke für Harmonium

F. Mendelssohn: Op. 65 Adagio (Sonata Nr. 1) の掲載がある。後者の該当箇所には、手だけで弾けるような工夫がみられる。

この時期のオルガンは、一段鍵盤のものであった。足元が見えるのを布でかくしていた様子で¹¹²かなり小規模の楽器であったと考えられる。「連奏」ではそれらを二台用いて、バッハやメンデルスゾーンのソナタなどを工夫して演奏したようである。音楽取調掛時代より所蔵の〔Org-Ped 1〕Peters 版バッハ全集、〔Org-Ped 2〕Mendelssohn: *Compositionen für die Orgel* が活用されている。

また、当時教則本として用いられていた以下の曲集からも選曲されている。

[Org-sol 25] Vilbac: Parles de l'Harmonium 80 Transcriptions de Morceaux classiques

[Org-sol 26] Micko: Estey-Cottage-Orgel-Schule

[Org-sol 23] Bibl: Harmonium Sammlung von Tonstücke für Harmonium

5-2 1894 (明治 27) 年~1901 (明治 34) 年

この年から、島崎赤太郎がディットリヒを継いでオルガン教育の中心となったが、島崎は 演奏面でも活躍している。島崎自身による Bach、Mendelssohn の演奏が盛んにおこなわれ たほか、島崎が受持った学生による Bibl などの選集に掲載された曲の演奏が目立つ。

表 1-76 1894 (明治 27) 年のオルガン演奏

12/8	学友会恤兵義	(バハ):フウグ	島崎赤太郎	研究生	風琴獨奏
	捐演奏会				

この演奏は聴衆の関心を呼ぶものであったようで、以下のように演奏評が残っている。

島崎氏が風琴獨奏は番外にして『フウグ』とのみきゝしが有名なるバッハの曲にあらざりしか實に諧音の相離れ相合して或るメロジイを追ひ、ハルモニイの美しきもの數を知らず、終わりに近づきて音調漸く濶大、大海の波濤の如くエキスプレシッョンの自在なるは言辭に盡し難し。¹¹³

112 「…風琴の蹈盤を蹈む足の見えて不体裁なるを恐れ化粧房にて隠されたる…」『音楽雑誌』第 25 号 12 月、 $22\sim24$ 頁。『芸大百年史 演奏会篇 第一巻』、14 頁に再録、引用は同所より。

113 「忍岡演奏会」『帝國文學』1巻1号、明治28年1月。『芸大百年史演奏会篇第一巻』、26頁に再録、引用は同所より。

表 1-77 1895 (明治 28) 年のオルガン演奏

7/6	卒業式	アンダンテ、コン	、モト	野村[成仁]	師二(島崎)	風琴獨奏
-----	-----	----------	-----	--------	--------	------

「アンダンテ、コン、モト」には作曲家の表記がないが、

[Org-sol 23 2/2] Bibl: Harmonium Sammlung von Tonstücke für Harmonium

Mendelssohn: Andante con moto Symphonie IV Op. 90

と推測される。該当箇所には、フレーズを区切る線、ブレス記号、松葉、臨時記号の書込みがある。この時の演奏に際しては「拍子すこし遅かりし様なりしが無難」との評が残っている¹¹⁴。

表 1-78 1896 (明治 29) 年のオルガン演奏

4/18	同声会春季演奏	バハ:コンサルト	島崎赤太郎	研究生	風琴獨奏
	会				
5/30	学友会演奏会	ショッパン:葬式進行曲	永井幸次/	専三	オルガン
			高橋二三四	(島崎)	(連奏)
7/11	卒業式	シューマン:第三クワルテッ	永井幸次	専三(島崎)	オルガン
		ト第一部			(独奏)
		シューベルト:進行曲	高橋二三四/	専三/専二	オルガン
			米野鹿之助	(島崎)	(二人連奏)
8/24,	漫遊音楽大演奏	テンホテイマーシア	永井幸次	専三(島崎)	風琴獨奏
28	会	ローマンス			
12/12	学友会演奏会	メンデルソン:アダジヲ	神山末吉	専三(島崎)	オルガン
		(オルガンソナタ第一番ヨ			(独奏)
		リ) ロマンス			

「バハ:コンサルト」の演奏評は以下である。一部の音を省略していた様子が記されている。

「オルガニスト」として此校に重きを致す島崎氏は久しぶりにて「バハ」 の「コンチエルト」を獨奏せらる。此人の風采如何なれはこそますます「ヂツトリヒ」氏に髣髴する。はかなき業にも薫陶の効果はそのおもかけを傳ふるにや。「エキスプレツシヲン」のよきは云ふも更なり、花やかにして手の入り組みて演奏の困難にも似ず毫も

¹¹⁴ 「西樂月日 あやめ(上田敏)」『文學界』第 31 号、明治 28 年 7 月、28~31 頁。『芸大百年史 演奏会篇第一巻』、27~28 頁に再録、引用は同所より。

断絶せざりしには誰とて感せぬはなし。唯何となく時には飽き足らぬ和聲を耳にせしは「ハルモニユーム」にては奏されぬ節々のあればなる可し。かの曲の撰擇誤れりといふは、未だ此奏者が心事を解せぬか為めなる可し。おもふに堂々たる此校に「オルゲル」なきは口惜しき限ならずや。吾等は早く彼の「パイプ」が奏楽堂の白壁に刻まれん事を望む。¹¹⁵

ペダルがない、という楽器の事情に合わせて、工夫して演奏していたようである。[Org-Ped 1] Peters 版バッハ全集を用いたと考えられるが、その中でも様々な可能性がある。8 巻掲載の Concerto IV C-dur BWV595 が使い込まれている様子のほか、9 巻の BWV571 も Concerto と表示されており、こちらもかなり使用された感がある。

「ショパン:葬式進行曲」「シューベルト:進行曲」「メンデルスゾーン:アダジヲ」は前期から引き続き演奏されている。

「ローマンス」 「ロマンス」

この時のプログラムに作曲者名はないが、1898 (明治 31) 年のプログラムにもある「ショパンのロマンス」であると考えられる。

[Org-sol 11] Josef Löw: Chopin Harmonium-Album

Chopin: Romance de la 2e Partie du Concerto Op. 11

該当箇所には、指使い、松葉、強弱、音の訂正があり、よくめくった跡も残っている。

「シューマン:第三クワルテット第一部」

[Org-sol 23 2/2] Bibl: Harmonium Sammlung von Tonstücke für Harmonium

Schumann: Erster Satz aus dem III Quartett Op. 41

フレーズを区切る線、指使いの書込みがある。

 $^{^{115}}$ 藤野高根「樂堂放言」『文學界』41、明治 29 年 5 月、8~10 頁。『芸大百年史 演奏会篇 第一巻』、32~33 頁に再録、引用は同所より。

「テンホテイマーシア」

[Org-Sol 10 3/4] Westbrook: Album Français 37 Morceaux célèbres

A. F. Boieldieu (1775-1834): Tempo di Marcia (Jean de Paris) あるいは、

C. S. Catel (1773-1830): Tempo di Marcia (Fragment d'un Manuscript) の可能性がある。 ともに○印が書込まれている。

表 1-79 1897 (明治 30) 年のオルガン演奏

6/5	学友会演奏会	バッハ:フーガ	神山末吉	専三(島崎)	オルガン
					(独奏)
7/10	卒業式	バッハ:ソナタ第一	神山末吉/	専三(島崎)	オルガン
			天谷秀		(二人連奏)
10/26	学友会演奏会	ワグネル:ミニュエット	天谷秀/	研究生/	オルガン
			太田勘七	専三(島崎)	(聯奏)
11/20	同声会秋季演奏	バハ:トッカタ エ フーガ	島崎赤太郎	研究生	オルガン
	会				獨奏
12/24	学友会演奏会	シューマン:	太田勘七	専三(島崎)	オルガン
		第三クワルテット第一部			(独奏)

「ワグネル:ミニュエット」

[Org-sol 23 1/2] [Org-sol 33 5/10] Bibl: Harmonium Sammlung von Tonstücke für Harmonium

Wagner: Menuett

同本が 2 冊あるが、該当箇所にはいずれもチェックが入っている。この時の演奏評は以下である。

第四オルガン聯奏 曲はワグネル氏のミニュエット奏者は天谷秀太田勘七の二氏なり 其出来小瑕なきにあらねと大體に於ては佳良なりき而して演奏者の間に發相の合致を 欠きたるが如き感ありしは兩者の素養に差ありて然りならんか、序に一言すオルガン を二個相對せしむるは演奏者に多少の便宜を與ふること勿論なれども之を體裁宜しき には若かざるべし。¹¹⁶

¹¹⁶ 「學友會臨時音樂演奏會の記 樂友稿」『おむ賀く』第 74 号、明治 30 年 11 月、32~35 頁。『芸大百年史演奏会篇 第一巻』、53~55 頁に再録、引用は同所より。

ここから、「連奏」が楽器二台を用いて演奏するものであったことがわかる。この時は 向かい合う形に設置したようだが、体裁としては芳しくなかったらしい。

表 1-80 1898 (明治 31) 年のオルガン演奏

11/13	試業演奏会	モツァルト:ラルゲトー	天谷秀	もと	オルガン
		メンデルスゾーン:ホッ		研究生	獨奏
		ホ、ツァイツ、マルシュ			
11/20	同声会秋季演奏	ショパン:ローマンス	天谷秀	もと	オルガン
	会			研究生	獨奏

「モツァルト:ラルゲトー」

[OH 24] Micko: Estey-Cottage-Orgel-Album

Mozart: Larghetto (Clarinet-Quintet)

[Org-sol 25] [Org-sol 38] Vilbac : Parles de l'Harmonium

Mozart: Larghetto du Quintette en La

「メンデルスゾーン:ホッホ、ツァイツ、マルシュ」

ホッホ、ツァイツ、マルシュは Hochzeitsmarsch の読みを表わしたものかと考えられる。

[Org-sol 5] Parlor Organ Folio

Mendelssohn: Wedding March かと推測される。

表 1-81 1900 (明治 33) 年のオルガン演奏

3/4	第 5 回試業演	カンテヰク	仙波あい	選科(島崎)	オルガン
	奏会	ヴオルンタリー			
12/8, 9	秋季演奏会	バッハ:-	島崎赤太郎	舊[もと]	オルガン
				研究	

1899 (明治 32) 年受入れの 34 号 Mason & Hamlin 社製のペダル付リード・オルガンにより、この島崎のバッハはペダルでの演奏が可能であったが、ペダルを使用したかどうかについてはわからない。この時の演奏評は以下である。

即ちバッハ氏作曲オーガン島崎氏演奏、此曲面白しといはんよりも、高尚にして只 氏の手腕を驚嘆するの外なく、只何となく「ぶっきらぼう」にて、オーガンには今少 し静かなるものをとは思はれたり。¹¹⁷

この演奏評からは、あるいは島崎はペダルを用いた演奏に挑戦しており、それが「手腕を驚嘆するの外なく」と感じさせ、同時に演奏の動作が大きくうるさく感じられたのではないか、と推測する。

表 1-82 1901 (明治 34) 年のオルガン演奏

6/1	試業演奏会	楽しき我家	水原みち	選科(島崎)	オルガン
		メンデルゾーン:アンダ	中澤ふじ	選科(天谷)	オルガン
		ンテ、ソステニユトー			
		バハ:ガボッテ	仙波あい	選科(島崎)	オルガン
6/4	皇后行啓演奏	メンデルゾーン:プレー	齋藤左右田	師二(島崎)	オルガン
	会	ルヂウム			獨奏
7/6	第 14 回卒業	メンデルゾーン:アンダ	齋藤左右田	師卒(島崎)	オルガン
	式	ンテ、トランクヰロ			獨奏
		(オルガンソナタノ一部)			
12/7, 8	第6回定期演	バハ:エーア	志水操	師三(不明)	オルガン
	奏会				獨奏
		メンデルスゾーン:	島崎赤太郎	講師	オルガン
		ソナタ 第四			獨奏

「楽しき我家」は埴生の宿(Home sweet home)のことである。

[OH 24] Micko: Estey-Cottage-Orgel-Album

English Melody: Home sweet home

〔Org-sol 46〕他 島崎赤太郎: オルガン教則本第弐巻 にも Home sweet home として掲載されている。初学者の為の曲として定番だったようである。

「バハ:ガボッテ」

[Org-sol 46] 他 島崎赤太郎: オルガン教則本第弐巻 に掲載がある。

 $^{^{117}}$ 『讀賣新聞』明治 33 年 12 月 11 日。『芸大百年史 演奏会篇 第一巻』、96~97 頁に再録、引用は同所より。

「メンデルゾーン:アンダンテ、ソステニユトー」

[Org-sol 39 3/8 \equiv / \equiv] Reinhard: Am Harmonium Übungs und Vortragsstücke Op. 21

Mendelssohn: Aus den Kinderstücke Op. 72 かと推測される。

「メンデルゾーン:プレールヂウム」 メンデルスゾーンのプレリュードは、

[Org-Ped 2] Mendelssohn: Compositionen für die Orgel

Mendelssohn: Drei Praeludium und Fuge Op. 37 のほかに、

[Org-sol 23 1/2] Bibl: Harmonium Sammlung von Tonstücke für Harmonium 💝

[Org-sol 36] Westbrook: Präludium-Album に掲載がある。

これらの中で特に Mendelssohn: Praeludium II G-dur Op. 37-2 は、手鍵盤だけで弾けるように編曲されているものが多く、演奏機会が多かったと考えられる。

ペダルの使用の有無について、楽譜の面からはどちらの可能性も十分に考えられる。楽器の面でも、34号 Mason & Hamlin 社製のペダル付リード・オルガン の存在により、ペダルありの演奏が可能であった。「メンデルゾーン:アンダンテ、トランクキロ(オルガン、ソナタノ一部)も同様に、ペダルあり、ペダルなしのどちらの演奏も可能だったといえる。

「メンデルスゾーン:ソナタ第四」

[Org-Ped 2] Mendelssohn: Compositionen für die Orgel

Mendelssohn: Sonate Nr. 4 Op. 65-4

この時の島崎の演奏は以下の演奏会評から、ペダル付の演奏であったことが判明している。

ーオルガン獨奏ソナタ第四。メンデルゾン 島崎赤太郎氏 オルガンを以て演奏会に適せぬなどと云ふものは、須らく氏のオルガンに耳を貸すべしである、何の點から見ても一言の非を打つべきなき老熟の手腕、日本第一のオルガニストと云はれるも無理でない、殊にアレグレツトに至り、足を以つて巧に最低音部の八分音符を奏した時など

は、只感嘆の外はない、氏はオルガン及び作曲研究の為め、明春二月歐行の途に上られる由だから、向後數年間其妙技を聞く事が出来ないのは遺憾である。¹¹⁸

[Org-Ped 2] の該当部分には、指使いやペダリングが書きこまれている。二楽章の Andante にはレジストレーションの書込み「Fl. Dolce / Dolce / Ped 16 Bor / Eol Harp [Kerau.]」 があり、Mason & Hamlin 社製ペダル付オルガンのストップ名と一致する。

第二章 第一節 1-2 「大正期受入の OH、Org-sol 分類楽譜」¹¹⁹で述べるが、島崎が個人で所有していた楽譜は、大正期に東京音楽学校で受入れている。[OH 264] Felix Mendelssohn: *Drei Präludien und Fugen Op. 37 / Sechs Sonaten Op. 65* はそのうちの一つで、島崎のサインが入っている楽譜だが、この中にも Mendelssohn: Sonate Nr. 4 Op. 65-4 が掲載されており、めくり箇所が黒く跡になるほど使い込まれている。島崎がこの楽譜をいつから所有していたかは不明だが、この演奏時に使われた可能性もある。

島崎が演奏面、教育面でも中心となったこの時期は、「連奏」が引き続き行われていているほか、Bibl、Micko、Vilbac などの選集や、教本からの選曲が踏襲され、編曲されたものの演奏が多くなっている。一方で島崎自身が中心となって、バッハ、メンデルスゾーンのオルガン曲へのアプローチを続けている。1899(明治 32)年にペダル付の楽器が導入され、いよいよオリジナルの形での演奏が可能になった。

5-3 1902 (明治 35) 年~1907 (明治 39) 年

留学する島崎に代わって、教授の中心はペリーが担っていた時期である。これまで述べて きたように、フランスのレパートリーが増えてくるのが特徴である。

表 1-83 1902 (明治 35) 年のオルガン演奏

2/23	学友会演奏会	バハ:ガボッテ	三上たけ	專三(Péri)	オルガン
					獨奏

 $^{^{118}}$ 「東京音樂學校秋季演奏會(下)五線子」『中央新聞』明治 34 年 12 月 13 日。『芸大百年史 演奏会篇 第一巻』、 105 ~106 頁に再録、引用は同所より。

_

¹¹⁹ 本文、132~135 頁。

3/2	試業演奏会	練習曲/進行曲	木田アドルフ	選科(田村)	オルガン
3/2	下不良失五	練習曲	计美亞	選科(島崎)	オルガン
		バットマン:進行曲	石原傳枝	選科(田村)	
		クロイツェル:朝の歌	堀しん	選科(五行)	
			島地あつ	,	
3/29	安 口田廷氏	ラインハルト:薔薇 ラインハルト:ソナチナ		選科(島崎)	
	第一回甲種師 範科卒業式		志水操	甲三(不明)	
5/6	第三回皇后行	ライヒハルト:ビルド、	島地あつ	選科(島崎)	オルガン
	啓演奏会	デル、ローゼ			獨奏
6/1	分教場試業演	春の歌	赤星國淸	選科(不明)	オルガン
	奏会				獨奏
		アンダンテー	古澤きみ子	選科(不明)	オルガン
					獨奏
		-	堀しん子	選科(不明)	オルガン
					獨奏
		-	須貝八重子	選科(不明)	オルガン
					獨奏
		-	秋元さく子	選科(不明)	オルガン
					獨奏
7/5	卒業式	フランク:フアンタジー	三上タケ	専三(Péri)	オルガン
					獨奏
11/9	第 12 回試業	メルケル;モルソー、	岩井なみ	選科(三上)	オルガン
	演奏会	リリック第9番			
		進行曲	木田アドルフ	選科(田村)	オルガン
		練習曲	秋元きく	選科(天谷)	オルガン
		ハイドン:墺國々風			
		メルケル:リリッシェ、	島地あつ	選科(三上)	オルガン
		ブレテル第一番			
		ラモー:レ、タンボリン	堀しん	選科(天谷)	オルガン
11/15	第7回秋季定	メンデルスゾーン:	天谷秀	研 究	オルガン
	期演奏会	アダジオ		(舊)	獨奏
		リンク:モデラート			

甲:甲種師範科

引き続き、教本からの選曲がみられる。

「バハ:ガボッテ」「バットマン:進行曲」「ハイドン:墺國々風120」

[Org-sol 46] 他 島崎赤太郎: *オルガン教則本弐巻* に掲載されている。1902 (明治 32) 年 の演奏では「バッハ:ガボッテ」が景気よく演奏されたとの評がある¹²¹。

¹²⁰ 墺國々風は「墺國々歌」の可能性がある。

^{121 「}音樂學校演奏會 うたのや (投) …五、オルガン獨奏、ガボッテ、バハ作曲 此上なき演奏、オルガンには稀らしい景気のいい曲です、無論完全無欠とは行きませんが、曲相應に聞かれました」『讀賣新聞』明治35年2月28日。『芸大百年史演奏会篇第一巻』、111~112頁に再録、引用は同所より。

「クロイツェル:朝の歌」

[Org-sol 39] Reinhard: Am Harmonium Übungs und Vortragsstücke Op. 21

Conradin Kreuzer (1780-1849) : Des Morgens frischer Odem weht

「ラインハルト:薔薇」「ライヒハルト:ビルド、デル、ローゼ」

[OH 91] [Org-sol 107] Stapf: Harmonium Album

Reinhard: Das Bild der Rose

1902 (明治 35) 年 3 月 2 日の試業演奏会時における、島地あつの演奏について演奏会評があり、好評であった様子がうかがえる¹²²。

「作者不詳:アンダンテー」を演奏した古澤きみ子はのちに本科の学生になっている。 古澤による1902 (明治35) 年6月1日の演奏にも演奏評があり、かなりの好評を得ている。以下に引用する。

オルガン獨奏は計七番中生の最も感服したるは古澤きみ子のアンダンテーなり。發想法姿勢ペダル等の他生よりは遥に一頭地を擢出せるを見留めたり 嬢に次では堀しん子あり下て須貝八重子秋元さく子等先ず未来のオルガニストなるべし。¹²³

ここで「ペダル」に言及されているが、この場合のペダルはおそらく踏板のことと考え られる。

この時期に注目されるのは、ペリーが受持っていた学生とそのまた弟子が、フランスの 作品を演奏していることである。

「フランク:ファンタジー」不明。

 $^{^{122}}$ 「音樂學校分教場演奏會評判 澁谷馬頭 …島地あつ嬢の風琴ラインハルト氏作曲の薔薇は此度の風琴でのきゝもの。」『讀賣新聞』明治 35 年 3 月 25 日。『芸大百年史 演奏会篇 第一巻』、 113 ~ 114 頁に再録、引用は同所より。

¹²³ 「第十一回試業總會短評 桔梗生」『音樂之友』第 2 巻第 3 号、明治 35 年 7 月、27~28 頁。『芸大百年史演奏会篇 第一巻』、119~120 頁に再録、引用は同所より。

所蔵の楽譜のなかでフランクのファンタジーとして該当するのは、[Org-Ped 13] *3 Pièces pour le Grand Orgue* の Franck: Fantasie であるが、この曲である確証はない。1905 (明治 38) 年までに「フランクのファンタジー」は演奏会に頻出しているが、「in E flat major」や「H-dur」の記載があり、「フランクのファンタジー」に該当する曲が複数あったことを示している。

「メルケル:モルソー、リリック第9番」

メルケルの曲集は 1901 (明治 34) 年~1902 (明治 35) 年にかけて相次いで受入れがあった。

[Org-sol 50] [Org-sol 57] Merkel: 12 Lyrische Tonstücke Op. 78

[Org-sol 53] [Org-sol 54] Merkel: Lyrische Blätter 10 Stücke für Harmonium Op. 99 いずれかからの選曲と考えられる。

また、この頃より「ラインハルト:ソナチネ」が演奏されるようになった。

[OH 48] Reinhard: Drei Sonatinen Op. 38

ラインハルトのソナチネは、以降たびたび演奏され、重要なレパートリーとなっていく。

表 1-84 1903 (明治 36) 年のオルガン演奏

3/8	学友会演奏会	C. Franck: Fantasie in E	古澤きみ	本一(Péri)	オルガン
		flat Major			獨奏
3/15	山勢松韻慰労	バハ:プレェリユヂュ	齋藤左右田	研究科	オルガン
	音楽会	ム、ウント、フーガ			獨奏
3/30	第二回甲種師	ハッセンスタイン: ノヴ	村田ミイ	甲三(不明)	オルガン
	範科卒業式	ェレッテ			獨奏
7/10	第 14 回生徒	マエス:アレグレット	堀しん	選卒(天谷)	オルガン
	卒業式				獨奏
10/5	東京音楽学校	Voluntary 1. 2	釜萢善作	甲二(不明)	オルガン
	設立紀念会				獨奏
		ベンダー20	吉村リウ	甲二(不明)	オルガン
					獨奏
		Voluntary 6. 14	江澤淸太郎	甲二(不明)	オルガン
					獨奏
11/14	選科生徒試業	ベートーヴェン:フュネ	木田アドルフ	選科(不明)	オルガン
	演奏会	ラル、マーチ			
		フランク:ポストルヂュ	岩井のぶ	選科(不明)	オルガン
		ーム			

		フランク:アンテム	島地あつ	選科(不明)	オルガン
		メンデルスゾーン:プレ	秋元きく	選科(不明)	オルガン
		ルヂューム			
[12]	学友会演奏会	ベルチニー:アダヂオ	大熊しん	甲三(不明)	オルガン
					獨奏
		グーノー:イントロダク	赤尾寅吉	甲三(不明)	オルガン
		ション			獨奏
		マイエルベール:ローマ			
		ンツ			
		レメンス:フーガ―	松井壮六[吉]	本二(Péri)	オルガン
					獨奏
		レメンス:ソールテ	三浦とめ	本三(Péri)	オルガン
					獨奏

「ハッセンスタイン: ノヴェレッテ」「マエス: アレグレット」「Voluntary」「ベートーヴェン: フュネラル、マーチ」の詳細は不明である。「C. Franck: Fantasie in E flat Major」「フランク: ポストルヂューム」と「フランク: アンテム」も、それまでの受入れ楽譜の中で該当するものを特定できなかった。

「メンデルゾーン:プレルヂューム」は前述のように Op. 37-2 G-dur のプレリュード部分を手だけで弾けるようにした編曲が、複数の選集に掲載されている。

[Org-sol 23] Bibl: Harmonium Sammlung von Tonstücke für des Harmonium

[Org-sol 36] Westbrook: Präludium-Album

[Org-sol 39] Reinhard: Am Harmonium Übungs und Vortragsstücke Op. 21

「ベンダー」

[Org-sol 9] 他 Benda: Méthode théorique pratique pour Harmonium [Theorethische-practische Harmonium-Schule]

よく課題にだされているこの教本からの選曲と考えられる。

「ベルチニー:アダジオ」

[OH 28] Joh. Wanaus: Harmonium-Schule

Henri Bertin (1798-1876): Adagio

「グーノー:イントロダクション」

[OH 68] Reinhard: Melodien Sammlung Vortragsstücke für Harmonium

Charles Gounod (1818-1893): Introduction de l'Opera Marguerite

「マイエルベール:ローマンツ」

[OH 68] Reinhard: Melodien Sammlung Vortragsstücke für Harmonium

Giacomo Meyerbeer (1791-1864) : Romanze aus de Hugenotten

「レメンス:フーガー」「レメンス:ソールテー」

[Org-Ped 8] Lemmens : $Ecole\ d'Orgue\ I$

Lemmens: Fuga, Sortie

以上はいずれも教本および選集からの選曲である。

この時期、島崎弟子によるバッハ演奏が続いていることも注目される。齋藤左右田による「バハ:プレェリユヂュム、ウント、フーガ」の演奏は、演奏会評に「オルガン獨奏、上出来。島崎教授の相續はこれで安心。」とある。¹²⁴

表 1-85 1904 (明治 37) 年のオルガン演奏

2/20	学友会演奏会	Händel: Largo	釜萢善作	甲二(不明)	オルガン獨奏
		Bach : Gavotte			
		Mozart: Don Juan	江澤淸太郎	甲二(不明)	オルガン獨奏
		Eberlin: Fuga	布村ウタ	甲三(不明)	オルガン獨奏
		Bach : Fuga	赤尾寅吉	甲三(不明)	オルガン獨奏
		Bach : Praeludium			
3/29	(第三回)甲種師	メンデルゾーン:オルガ	大熊しん/	甲三(不明)	オルガン合奏
	範科卒業式	ンソナタ第四番(フィナ	岩倉一野		
		ーレ)			
		レムメンス:シェルソ、	南能衛/	甲三(不明)	オルガン合奏
		シンフォニック	赤尾寅吉		
5/28	第 15 回選科生	メルケル:リーリッシ	岩井なみ	選科(不明)	オルガン
	徒試業会	エ、ステュッケ			
		メヌエット			

_

 $^{^{124}}$ 三浦俊三郎『本邦洋楽変遷史』東京、日東書院、1931、435 頁。『芸大百年史 演奏会篇 第一巻』、130 頁 に再録、引用は同所より。

		ラモー:タンボリン	辻美亜/	選科(不明)	オルガン連奏
			三須きく		
		メンデルスゾーン:プレ	岩井のぶ	選科(不明)	オルガン
		ルヂューム			
7/10	卒業式	セザー、フランク:フア	三浦トメ	本三(Péri)	オルガン獨奏
		ンタジー H-dur			
10/29	学友会恤兵義	ギルマン:プリエール、	古澤きみ	本三	ハルモニユム
	捐演奏会	エ、ベルソース		(Heydrich)	獨奏
12	学友会吊祭会	バハ:フーガー	草川宣雄	甲二	ハルモニユー
				(天谷)	ム獨奏
		レメンス:ソルチニー	君塚正志	甲三	ハルモニユー
				(天谷)	ム獨奏
		ラインハード:ソナチネ	松井壮吉	本三	ハルモニユー
				(Heydrich)	ム獨奏

「連奏」が復活している。

「メンデルスゾーン: オルガンソナタ第四番 (フィナーレ)」「ラモー: タンボリン」は 以前からのレパートリーである。

「レムメンス:シェルソ、シンフォニック」

[Org-Ped 7] Guilmant : Concert historique d'Orgue

Lemmens: Scherzo symphonique Concertant A-dur

「Händel: Largo」

[Org-Ped 9] Händel: LARGO (Aria) Große Orgel, G-dur

「メルケル:リーリッシェ、ステュッケ」は、

[Org-sol 50] [Org-sol 57] Merkel: 12 Lyrische Tonstücke Op. 78 のことである。

「Eberlin: Fuga」

[OH 35] Westbrook: Fugen-Album

J. E. Eberlin: Fuga

[OH 35] は [OH 36] Westbrook: *Praeludium-Album* とともによく使われている。この時期の演奏「Bach: Fuga」「Bach: Praeludium」「メンデルスゾーン、プレルヂューム」は、これらの曲集と関連があるかもしれない。

「ギルマン:プリエール、エ、ベルソース」

Guilmant: Prière et Berceuse Op. 27 は Canzonetta Op. 28 [Org-sol 123] や、Scherzo Op. 3 [Org-sol 124] とともに Guilmant: *Morceaux pour Harmonium* のシリーズから出版されているが、現存資料の中から所蔵の確認はできなかった。

1904 (明治37) 年の古澤きみの演奏は好評だったようで、以下の演奏評がある。

第四ハルモニウム獨奏(ギルマン作曲のプリエール、エ、ベルソース)古澤きみ嬢 是迄余の獨奏等を拝聴したことはなかりし為か余は一驚をきつしたり今回の演奏会の 最上出来にて発想の具合感服の外なし嬢にして勵げめば近い将来に於て其の薀澳を極 むること又難らず幸に嬢勉めよや。¹²⁵

「セザー、フランク:フアンタジー H-dur」 該当曲不明。

1904 (明治 37) 年 9 月に Rudolphe Fils & Debain (仏) 製のハルモニウムが受入れられ、翌 10 月から早速演奏会に登場している。

表 1-86 1905 (明治38) 年のオルガン演奏

2/25, 26	学友会祝捷音楽	ギルマン:マーチ	藤田コト	甲三(下村)	ハルモニユ
	会				ーム獨奏
		フランク:フアンタヂ	松本德藏	甲三(楠美)	ハルモニユ
		<u> </u>			ーム獨奏
		ギルマン:マドリガル	松井壮吉	本三	ハルモニユ
				(Heydrich)	ーム獨奏

^{125 「}東京音樂學校學友會恤兵音樂會」『音樂之友』樂友社、第7巻第2号、明治37年12月、35頁。『芸大百年史演奏会篇第一巻』、151頁に再録、引用は同所より。

3/27	甲種師範科卒業	ワグネル:ミニュエッ	靑木シノ	甲三(天谷)	ハルモニユ
	式	7			ーム獨奏
		フランク:フアンタジ	吉村リウ	甲三(楠美)	オルガン獨
		J			奏
7/8	卒業式	ギルマン:カンツォナ	古澤きみ	本三	オルガン獨
				(Heydrich)	奏
11/18	第 18 回撰科生	バハ:ガボット	三須きく	選科(田村)	オルガン
	徒試業会				
		モツァルト:エーア	飯田隆健	選科(天谷)	オルガン
		(ドンファン歌抜粋)			
		メンデルスゾーン:ア	辻美亞	選科(不明)	オルガン
		ダヂヲ			
		モツアルト:アンダン	山崎謙太郎	選科(天谷)	オルガン
		テ			

ギルマンのレパートリーが増えている。

「ギルマン:マーチ」

[Org-Ped 24] Guilmant: L'Organiste pratique のシリーズに「マーチ」というタイトルの該 当曲が複数ある。ペダル付の曲だが、書込みからはペダルなしで演奏していた印象をうけ る。

「ギルマン:マドリガル」

[Org-Ped 22] Guilmant: L'Organiste pratique 7e Liv. Op. 52

Guilmant: Madrigal

マーチと同様にペダル付の曲であるが、「ペダルなしに」という書込みがある。1905 (明 治38) 年2月25日、26日の松井壮吉の演奏は好評であった¹²⁶。

「ギルマン:カンツォナ」不明。

他に、既出の「ワグネル:ミニュエット」は1897 (明治30) 年に天谷秀・太田勘七の連奏で演奏されているが、ここではハルモニウムでの独奏であった。

[Org-sol 23] [Org-sol 33] Bibl: Harmonium Sammlung von Tonstücken für das Harmonium Wagner: Menuett (Aus der Sonate)

¹²⁶「両日ともに演奏殊に美事にして、他のハーモニユーム獨奏に比して一段の光彩ありき」『日本』明治 38年3月3日。『芸大百年史演奏会篇第一巻』、164~165頁に再録、引用は同所より。

「ワグネル:ミニュエット」と、「フランク:ファンタジー」が演奏された 1905 (明治 38) 年の演奏では、「ハーモニユーム獨奏」と「オルガン獨奏」の表記が区別されている。 それぞれ異なる楽器で弾かれたようである127。「フランク:ファンタジー」の評では同じ曲 を以前は別な楽器で演奏したことにも触れており、楽器によって表現が違うことを指摘し ている128。この時の演奏では、楽器の置き場所によってか「ハーモニユーム」のほうがや や音が小さく感じられたようである129。

選科生が演奏した曲は、これまでのレパートリーが踏襲されている。教本や選集からの 選曲が多い。

表 1-87 1906 (明治 39) 年のオルガン演奏

1/27, 28	モツァルト誕	Lemmens : Cantabile	中田章	甲二(楠美)	ハルモニウ
	生記念音楽会				ム獨奏
		Mozart: Don Juan	草川宣雄	甲三(天谷)	オルガン獨奏
		Bach : Preludiso(▽▽)	加藤ぶん	本三	ハルモニウ
				(Heydrich)	ム獨奏
3/28	甲種師範科卒	バハ:ミニュエット	山崎謙太郎	選科(天谷)	オルガン獨奏
	業式				
		レーマン:カプリチョー	鈴木善野	甲三(楠美)	オルガン獨奏
		フィナーレ			
6/9	第 19 回選科生	メルケル:アンダンテ	宇津木喬子	選科(不明)	オルガン
	徒試業演奏会	バハ:ガボット			
		ベートーフェン:アダジ	稻澤りう	選科(不明)	オルガン
		オ			
		ベートーフェン:アダジ	飯田隆健	選科(天谷)	オルガン
		オ			

^{127 「}靑木しの子のハーモニユーム獨奏は此器の目新しい丈人の感を牽いた」『中央新聞』明治38年3月2 日。「ワグネルの作程ありて、壮大なる曲なりし。嬢の熟練なる軽き手指は、大成の望を見能ひし。アハ レ今一と入のエキスプレツションもがなと思ひしが如何に?」『音楽』樂友社、第7巻第6号、明治38年 4月、37~41頁。『芸大百年史 演奏会篇 第一巻』、181~182頁に再録、引用は同所より。

^{128 「}当日第一の聴き物にして随分しっかりした奏き振り総体よりいふ時は、先づ無難なるべしと雖も、此 曲を理解せるものとは如何にしても見る能はざりし、前に祝捷音楽会に於て、某氏、ハーモニユームにて 同曲を演奏せり、感服の余り其楽譜借覧の便もがなと切望せし程なりしが、之をオルガンにて奏するとき は、大に結果の異なるものあり…」『讀賣新聞』明治38年3月30日。『芸大百年史演奏会篇第一巻』、 180~181 頁に再録、引用は同所より。

^{129 「}靑木嬢のハーモニユーム、…相応の出来なりしもハーモニユームの方は場ウラの為と音量小さかりし 為に聞き劣りし」『日本』明治39年3月29日。『芸大百年史演奏会篇第一巻』、180頁に再録、引用は同 所より。

7/7	卒業式	ギルマン:アレグロ	加藤ブン	本三	オルガン獨
				(Heydrich)	奏

レメンスのレパートリーにも変化がみられる。

「レーマン:カプリチョー」はこれまでも頻出している教本 [OH 85] Lemmens: Ecole d'Orgue からの選曲であるが、次第に Lemmens の曲集からも曲が選ばれるようになる。「Lemmens: Cantabile」と「レメンス:Dフィナーレ」は、[OH 49] [OH 154] Lemmens: Morceaux pour Orgue-Mélodium に掲載されている。この楽譜は、1906 (明治39) 年 9 月に 6 冊買い足されており、この時期から需要が大きくなったようである。教材として用いられる楽曲が、曲としての体裁がより整ったものへと移行している様子がうかがえる。

初出の「ギルマン:アレグロ」は曲目不明だが、演奏会評がある130。

この時期は、前期までの教本や選集からのレパートリーを引き継ぎながら、フランク、メルケル、レメンスといったフランスの教本が使われている。また、1904 (明治 37) 年 9 月からは Rudolphe Fils & Debain (仏) 製のハルモニウムが受入れられ、翌 10 月から早速演奏会に登場した。ハルモニウムでの演奏は積極的に行われており、ギルマン、フランク、レメンスが盛んに演奏されている。

次第に、教本の次の段階として、ラインハルトのソナチネやレメンス、ギルマンの曲集 から選曲されるようになった。

5-4 1906 (明治 39) 年~1912 (明治 45) 年

島崎が留学から帰国、ふたたび教授の中心となった。

表 1-88 1906 (明治 39) 年のオルガン演奏

11/10第 15 回定期
演奏会バハ:トッカータ、ウント
フーゲ島崎赤太郎
巻教授
奏オルガン獨奏11/25第 20 回選科
生徒試業会ハイドン:メヌエット
生徒試業会櫻井とみ
関本とみ選科(不明)オルガン

^{130 「}曲は変化少なき、ギルマン作『アレグロ』奏者は加藤ぶん子、能く忠実に譜を辿り真面目に奏せり。」 『毎日新聞』明治 39 年 7 月 10 日。『芸大百年史 演奏会篇 第一巻』、208~209 頁に再録、引用は同所より。

ラインハルド:ソナチーネ 辻美亞 選科(不明) オルガン	
----------------------------	--------	--

島崎は帰国してすぐバッハの演奏を披露したが、「先つ第一あんな大破損のオルガンでは演奏も何も出来たもので無し。如何なる名手でもあれては匙をなげざるべからず」¹³¹と評されている。この時、Mason & Hamlin 社製ペダル付リード・オルガンの状態はかなり悪かったようである。

翌年にかつての「連奏」が復活しているのは、このオルガンの不調が一因であると考えられる。

表 1-89 1907 (明治 40) 年のオルガン演奏

3/23	卒業式	リヒテル:フオルスピー	中田章/	甲三	ハーモニユー
		ル	原太彦四郎	(島崎)	ム合奏
		キストレル:フアンタジ	中嶋かつ	甲三	ハーモニユー
		<u> </u>		(島崎)	ム獨奏
6/1	第 21 回選科生	ライヒヤルト:薔薇	宇津木喬子	選科	オルガン
	徒試業演奏会			(不明)	
		ハイドン:テマ、ウン	稻澤りう	選科	オルガン
		ド、ヴァリアチオネン		(田村)	
		レンマン:凱旋進行曲	水原みち	選科	オルガン
				(不明)	
10/4	東京音楽学校創	キルマン:カンツヲネツ	富岡静女	本二	オルガン獨奏
	立紀念日学友会	タ		(島崎)	
	演奏会				
		バハ:プレルデイエム、	平尾勇	本二	オルガン獨奏
		ウント、フーゲ		(島崎)	

ハルモニウムのレパートリーの拡張が進んだ。

「キストレル:フアンタジー」

[Org-sol 56] キストレル: グロス、ファンテジー[消失]

課題として記録が残っている中では 1912 (明治 45) 年が初出であったが、実際には 1907 (明治 40) 年からすでに演奏されていたようである。[OH 165] Cyrill Kistler (1848-

 $^{^{131}}$ 『音楽新報』第3巻第11号、明治39年12月、28~30頁。『芸大百年史 演奏会篇第一巻』、214~215頁に再録、引用は同所より。

1907): Große Fantasie für Konzert Harmonium oder Orgel Op. 77 の受入れ前であるので、 [Org-sol 56] が使われたと考えられる。

「ハイドン:テマ、ウンド、ヴァリアチオネン」

[OH 39] [Org-sol 120] Reinhard: Am Harmonium Übungs und Vortragsstücke Op. 21

J. Haydn: Thema und Variationen aus dem Kaiserquartet

「レンマン:凱旋進行曲」

[OH 49] [OH 154] Lemmens: Morceaux pour Orgue-Mélodium

Lemmens: Marche Triomphale

「キルマン:カンツヲネッタ」

[Org-sol 123] Guilmant: Morceaux pour Harmonium

Guilmant: Canzonetta Op. 28

表 1-90 1908 (明治 41) 年のオルガン演奏

3/28	卒業式	ラインハルト:ソナチイ	上野外喜雄	甲三	オルガン獨奏
		ネ (第一楽章)		(島崎)	
		バハ:クライネ、プレリ	大西正直	甲三	オルガン獨奏
		ュヂウム及フーゲ		(島崎)	
		ギルマン:カンツオネッ	松井あい	甲三	オルガン獨奏
		タ		(島崎)	
12/24	学友会演奏会	-	富岡静女	本三	オルガン獨奏
				(島崎)	
		-	平尾勇	本三	オルガン獨奏
				(島崎)	

12 月 24 日の富岡静女の演奏は、「見事の出来栄えなり。運指、ペダル、表情、天晴なり。」と評されている¹³²。この「ペダル」については、踏板の操作のことか、ペダル鍵盤のことかの判別はつかないが、演奏は絶賛されている。同日平尾の演奏についても、かなり好評だった様子である¹³³。

 132 『音楽界』第 1 巻第 12 号、明治 41 年 12 月、30~31 頁。『芸大百年史 演奏会篇 第一巻』、263~264 頁に再録、引用は同所より。

133 「富岡嬢にゆずらざる出来、オルガン両氏ともの成功は教師島崎氏あつかつて力あり、オルガンは当日の白眉といふべし。」『音楽界』第1巻第12号、明治41年12月、30~31頁。同前。

表 1-91 1909 (明治 42) 年のオルガン演奏

3/25	卒業式	ギユルマン:アレグローノ	高橋テツ	甲三	オルガン獨奏
		ントロッポ		(島崎)	
		バハ:パルテイタ	平尾勇	本三	オルガン獨奏
				(島崎)	
10/9,1	学友会演奏	ラインハルト:第一章	橋村その	甲三	オルガン獨奏
0	会	(長へ調ソナテイネ)		(島崎)	
		バハ:パストラール	園山民平	甲三	オルガン獨奏
				(島崎)	

「ギユルマン:アレグローノントロッポ」

[Org-Ped 22 3/3] Guilmant: L'Organiste pratique 8me Liv. Op. 55

Guilmant: Allegro non troppo

指使い、強弱の外にテヌート記号、ブレス記号などの書込みがあり、かなり使用された痕跡がある。

「バハ:パルテイタ」「バハ:パストラール」

課題の項でふれたように、バッハの楽譜は 1909 (明治 42) 年に Bach-Album für Orgel Band $I \sim IV$ [Org-Ped 26] の受入れがあり拡充されたほか、G. Hecht: Fünf Orgel-werken Joh. Seb. Bach [Org-sol 178] など、手鍵盤だけで演奏可能な楽譜の受入れもあった。

表 1-92 1910 (明治 43) 年のオルガン演奏

3/25	卒業式	バハ:パッサカリア	張福興	本三	オルガン獨奏
				(島崎)	
3/31	大音楽会	フーグ	伊達愛	甲二	オルガン獨奏
				(楠美)	
		パルティタ	園山民平	本三※	オルガン獨奏
				(島崎)	
4/22	大音楽会	レーメンス:凱旋進行曲	伊達愛	甲三	オルガン獨奏
				(島崎)	
10/16	学友会演奏会	ラインハルト:ソナテイ	安藤憲	甲三	オルガン獨奏
		ナ		(島崎)	

※本三と記載されているが、実際には甲種師範科三年所属

この年から、バッハのパッサカリアが頻繁に演奏されている。パッサカリアも他のバッハの曲同様、ペダル付、ペダルなし、ともに可能性があった。張福興の演奏には演奏会評がある。

始めのバスの部分のソローを弾く時は、少し物足りない感じがあった、それから途中で少し拍子が崩れかかった所があったが終わりは中々立派の出来だった、パッサカリアはバッハの傑作中で有名な難曲の一つであるのに、兎も角もあれ迄に弾かれた技量は流石に感心せざるを得ない。¹³⁴

大音楽会は地方での演奏旅行であったため、この時の演奏は手だけで行われたことが確 実である。

表 1-93 1911 (明治 44) 年のオルガン演奏

3/25	卒業式	バハ:短ハ調フーゲ	山田フク	本三	オルガン獨奏
				(島崎)	
4/22,	学友会春季演奏	バッハ:クライネ、プレリュ	吉田繙子	本三	オーガン獨奏
23	会	ディウム、ウント、フーゲ		(島崎)	
5/3-10	学友会春季演奏	バッハ:クライネ、プレリュ	-		オルガン獨奏
	旅行(男子部)	ディウム、ウント、フーゲ			
		マイロッヒョー:オッファー	-	-	オルガン獨奏
		トイレオヴソルティ			
5/3-4	学友会春季演奏	バッハ:クライネ、プレリュ	吉田繙子	本三	オーガン獨奏
	会(女子部)	ディウム、ウント、フーゲ		(島崎)	
10/21,	学友会秋季演奏	バッハ:パッサカリア	池田阿隻子	本三	オルガン獨奏
22	会			(島崎)	
10/22-	学友会秋季演奏	バッハ:パルテヰタ	吉田トキ子	本三	オルガン獨奏
28	旅行(女子部)			(島崎)	
		バッハ:パッサカリア	池田さち子	本三	オルガン獨奏
				(島崎)	

この年のはじめに、Mason & Hamlin 社製ペダル付リード・オルガンの修理が行われている¹³⁵。1906 (明治 39) 年 11 月に島崎が演奏した際に不調だったらしいことはすでに述べ

¹³⁴ 『音楽』学友会、第 1 巻第 4 号、明治 43 年 5 月、25~27 頁。『芸大百年史 演奏会篇 第一巻』、291 頁に 再録、引用は同所より。

^{135 『}歳出内譯簿』明治 44 年 1 月 31 日「奏楽用ペダル付オルガン内部大修理」。東京芸術大学大学史史料室所蔵。

たが、それ以降不調が続いていた可能性がある。ここで「大修理」が行われ、ふたたび演奏が可能になったと考えられる。

「マイロッヒョー:オッファートイレオヴソルティ」

東京音楽学校の蔵書の中からは見つけられなかったが、大正期で触れる中田章の蔵書には「J. B. Maillochaud: Offertoire」があり、これが該当する。

バッハが盛んに演奏されている。1906 (明治 39) 年 3 月 25 日卒業式における山田フクの演奏¹³⁶、同 4 月 22 日、23 日における吉田繙子の演奏¹³⁷、同 10 月 21 日、21 日の池田阿隻子の演奏¹³⁸については演奏会評がある。いずれの演奏も、難しい曲をよく弾いているという印象だったようだ。

表 1-94 1912 (明治 45) 年のオルガン演奏

3/25	卒業式	バハ:パッサカーリア	池田阿隻	本三	オルガン獨奏
4/26-	学友会演奏旅行	バッハ:パルテイータ	磯江淸	甲三	オルガン獨奏
		キースター:グロツセ、	草川友忠	甲三	オルガン獨奏
		フアンタヂー			
5/18	学友会春季演奏会	島崎赤太郎:二重フーガ	草川友忠	甲三	オルガン獨奏

「島崎赤太郎:二重フーガ」

東京音楽学校の蔵書としては昭和になってからの寄贈 [OH 380] であるが、これは 1909 (明治 42) 年発行の 學友會誌の附録である。この曲の楽譜は島崎自身が持っていたと思われる他、學友會誌の附録が眞篠の蔵書にもあることから、島崎のまわりでは比較的入手しやすい状況だったと考えられる。

^{136 「}オルガン曲ではバッハが古今独歩だ而かも作者得意のフーゲで拍子も運指法も中々六ヶ敷しい難曲を 兎に角奏したが最初の弾出は上出来だったが卒業式と云ふので怯れしたのか二三回障えたのは気の毒だっ た其上一体にテンポが正確でなく完全に追覆の実を挙げ得なかった、今少しく余裕があってほしい。」『讀 賣新聞』明治44年3月28日。『芸大百年史演奏会篇第一巻』、309頁に再録、引用は同所より。

 $^{^{137}}$ 「大體上出来である殊にプレルデイウムよりフーゲに移る時のテンポの變り工合大によかったが最後のトウリラは余り短かく尚少しリタルダンドに終わったらば如何なものか。」『讀賣新聞』明治 44 年 4 月 26 日。同前、 $311\sim312$ 頁。

¹³⁸「急に寂しい気がする、而しよくひいて居た。」『音楽界』第4巻第2号、明治44年2月、46~47頁。 同前、329~330頁。

島崎が帰国してから、連奏および独奏によってオルガン演奏は盛んにおこなわれた。 Mason & Hamlin 社製ペダル付リード・オルガンは不調であったため、ペダルを伴う演奏についてはこの時期制限された可能性がある。しかしその中でバッハの曲の演奏頻度は高くなり、本科、師範科ともに取り組むようになった。終盤にはパッサカリアに取り組むものもあらわれ、以後頻繁に演奏されるようになる。

ハルモニウムのレパートリーについても引き続き拡充している。この時期から拡がった レパートリーは、その後のオルガン教育の基礎となっていった。

第六節 まとめ

東京音楽学校の明治期は、オルガンの楽譜、楽器、履修生、そのすべてにおいて、数が増えていった時期である。近代日本の学校教育が全国に浸透するのに伴い、音楽教師の需要が急速に拡大したためである。学校教育の現場にいち早く採用されたオルガンは、音楽教師の必修となっていった。東京音楽学校のオルガン履修生は明治 30 年代後半にむけて急速に増加し、それにあわせて教本を中心とした楽譜の受入れ数、一段鍵盤の楽器の受入れ数ともに増加している。そうした設備的な拡充にあわせて、オルガンの教授内容と演奏内容は段階的に変化していった。

東京音楽学校の最初期の演奏は、音楽取調掛からの流れを汲んだ唱歌であったが、早くにそこからの脱却が図られている。1890 (明治 23) 年からオルガンの教育に携わった外国人教師のディットリヒは、オルガンの専門知識と技術を持っていた。彼は、音楽取調掛時代からの蔵書であった Peters 版のバッハ全集を用い、唱歌とは離れたところのオルガン演奏教育を始めた。また一段鍵盤のリード・オルガンしかないという状況の中で、「連奏」という工夫を行っている。連奏によって得られる効果は声部の確保だけでなく、音量の増強もあったと思われる。当時受入れのあった教本や選集の中から、重厚な響きのものを選んで演奏している。

ディットリヒが示した、専門的なオルガン曲へのアプローチは弟子の島崎赤太郎に引き継がれ、Peters 版バッハの全集を引き続き教材として用いているほか、メンデルスゾーンのオルガン曲も緩徐楽章を中心に引き続き演奏している。島崎自身のそれらの曲に対する探究が続けられる中、1899(明治 32)年に Mason & Hamlin 社製ペダル付二段鍵盤のリード・オルガンが受入れられた。いよいよペダル付の演奏が可能になり、島崎を中心に演奏が行われている。同時に、この時期は履修生の増加に沿って教本が整備された。『島崎赤太郎編 オルガン教則本』や『東京音楽學校:小學唱歌用オルガンピアノ楽譜』は学校教育現場の実践向けとして、その後のオルガン学習のベースとなっている。

1902 (明治 35) 年からライプツィヒに留学した島崎に代わり、フランス人のノエル・ペリーがオルガン教授の中心となった。ペリーによってフランスのメソッドが取り入れられ、フランスのレパートリーを演奏するようになった。また、教則本に続けて曲集を扱うようになり、演奏のレパートリーが拡大し始める。1904 (明治 37) 年には Rodolphe Fils

Rodolphe Fils & Debain 製のハルモニウムが受入れられ、オルガン演奏がオルガンならではのものへと変わりつつある様子がうかがえる。

1906 (明治 39) 年に島崎が帰国し、東京音楽学校での教授活動が再開されると、バッハ 演奏が目立つようになる。その中でペダルの使用の使用については確認ができないが、挑戦する学生がいた可能性はある。また、手だけで弾ける編曲の楽譜が揃ってきたことで、バッハのオルガン曲を独奏できる機会が拡がったと捉えることもできる。オリジナルのハルモニウムの曲のレパートリーも引き続き拡大している。

第二章 大正期の東京音楽学校におけるオルガン演奏(1912-1925)

明治期の師範科ではオルガンがほぼ必修であったため、師範科生の増加に合わせてオルガン履修生の数が増えたが、大正期にかけて甲種師範科の習得する楽器は選択制となりオルガン履修率が次第に低くなってきた。一方で、乙種師範科や選科にオルガンの履修生が増え、全体としての履修生の数は多いまま推移している。

明治から大正にかけての師範科オルガン履修生の中には、のちにオルガンを専門とするものが現れる。大正期のオルガン演奏で活躍する中田章や、続く昭和にかけて東京音楽学校のオルガン教育の中心となる真篠俊雄らである。彼らによって Mason & Hamlin 社製ペダル付リード・オルガンがよく演奏されるようになる。

留学から帰ってきてから再びオルガン教育の中心となった島崎赤太郎は、大正期も引き 続きオルガン教育を牽引した。

大正期の終わりには関東大震災があり、残念ながらオルガン科も少なからず影響を受けた。被災した神田分教場にあった楽譜や楽器は失われている。

第一節 大正期の東京音楽学校で受入れた楽譜

1-1 大正期受入れの Org-Ped 分類楽譜

大正期受入れの Org-Ped 分類楽譜は 48 点 [Org-Ped 28] ~ [Org-Ped 36]、消失したものはなくすべて現存する。受入れ時期は 1913 (大正 2) 年から 1915 (大正 4) 年までに集中している。

1913 (大正2) 年

[Org-Ped 28 1/20-20/20] Ralph Hamon Bellairs (1867-1947): The Enoch Organ Library A series of Pieces for Church & Concert No. 1~No. 20

[Org-Ped 29] Ralph Hamon Bellairs: Daily Studies for the Organ

[Org-Ped 30 1/3-3/3] William Joseph Westbrook (1831-1894) : Ancient & Modern Fugues for the Organ Vol. $1 \sim 3$

[Org-Ped 31 1/4-4/4] J. Matthews (? - ?): Short Voluntaries for the Organ Vol. 1-4

[Org-Ped 32 1/3-3/3] William Joseph Westbrook: March Album Book I, II, III

[Org [OH]-Ped 33] William Thomas Best (1826-1897): The Old hundredth psalm

[Org-Ped 34 1/2 2/2] Ebenezer Prout (1835-1909) : Organ Arrangements Vol. I, II

1914 (大正3) 年

[Org-Ped 35] —: *Modern Organ Pieces with Pedal Obligato*

[Org-Ped 30] Westbrook: Ancient & Modern Fugues for the Organ Vol. 1~3 には、John Benett (ca.1735-1784)、Johann Ernst Eberlin (1702-1762)、Johann Georg Albrechtsberger (1736-1809)、Domenico Scarlatti(1685-1757)などのフーガが掲載されている。

〔Org-Ped 32 1/3-3/3〕Westbrook: March Album Book I、Ⅱ、Ⅲ には、Händel、Haydn、Beethoven、Carl Maria von Weber(1786-1826)、Gioachino Antonio Rossini(1792-1868)、Schubert らの、オペラや器楽曲からの編曲が多数掲載されている。

1915 (大正5) 年

[Org-Ped 36 1/12-12/12] Alexandre Guilmant: École Classique de l'Orgue [全 12 巻]

Guilmant 編による楽譜のシリーズで、Dietrich Buxtehude (ca.1637-1707)、Nicolaus Bruhns (1665-1697)、Johann Gottfried Walther (1684-1748)、Johann Pachelbel (1653-1706)、Jan Pieterszoon Sweelinck (1562-1621)、Girolamo Frescobaldi (1583-1643)、Sebastian Bach、Domenico Zipoli (1688-1726)、Johann Ludwig Krebs (1713-1780)、Georg Muffat (1653-1704)、Johann Caspar Kerll (1627-1693)の曲をそれぞれ収録している。

大正期受入れの Org-Ped 分類楽譜は選集や編曲がほとんどで、バロック期から古典期、ロマン期のものまで幅広く収集されている。[Org-Ped 30] のフーガ集だけは、よく使用された痕跡があるが、他の楽譜は、状態からあまり使用されていない印象を受ける。

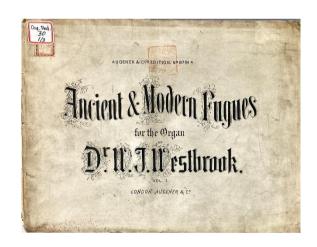


写真 2-1 [Org-Ped 30 1/3] 表紙 [東京藝術大学附属図書館所蔵]

大正期 Org-Ped 分類楽譜の受入れは 1913 (大正 2) 年、1914 (大正 3) 年、1915 (大正 4) 年に集中しており、以後 10 年間の受入れがない。大正期の OH 分類楽譜のほうにペダル付の曲が多く分類されており、この時期の分類はやや混乱しているようである。

1-2 大正期受入れのOH、Org-sol 分類楽譜

大正期の OH、Org-sol 分類楽譜は、1912 (大正元) 年 9 月から 1926 (大正 15) 年 12 月までに 171 冊 [OH 242] ~ [OH 357] (うち現存 159 冊) が受入れられた。大正期の Org-Ped 分類楽譜の受入れ時期が 1913 (大正 2) 年から 1915 (大正 4) 年までに集中しているのに対し、OH、Org-sol 分類楽譜は大正期を通じて継続的に受入れが行われている。

表 2-1 大正期における「OH、Org-sol 分類楽譜」の受入れ冊数

1912(大正元)年	(OH 242) ∼ (OH 276)	44 ∰
1913 (大正 2) 年	(OH 227)	2 ∰
1914 (大正 3) 年	(OH 228) ∼ (OH 283)	18 ∰
1915(大正 4)年	$[OH 284] \sim [OH 292]$	10 ∰
1916 (大正 5) 年	(OH 293) ∼ (OH 305)	18 ∰
1917 (大正 6) 年	(OH 307) ∼ (OH 332)	34 ∰
1918(大正7)年	(OH 333) ∼ (OH 335)	10 ∰
1919(大正 8)年	(OH 336) ∼ (OH 339)	4 ∰
1920 (大正 9) 年	[OH 340]	1 ∰
1921 (大正 10) 年	-	0 ∰
1922 (大正 11) 年	-	0 ∰
1923(大正 12)年	(OH 341)	2 ∰
1924 (大正 13) 年	[OH 342] ∼ [OH 353]	12 ∰
1925(大正 14)年	-	0 ∰
1926(大正 15)年	[OH 354] ∼ [OH 357]	16 ∰

1912 (大正元) 年受入れの OH、Org-sol 分類楽譜は 44 冊のうち 8 冊が消失しており、現存するのは 36 冊である。このうちの 27 冊には「A. Shimasaki」 ¹³⁹のサインが入っており、もともとは島崎の所有であったと考えられる。同日受入れの残り 9 冊はサイン入りの楽譜と近い内容であり、消失した 8 冊についても『圖書出納帳』の台帳表記から同系統の楽譜だったことがわかっている。サインはみられなかったがこの 17 冊も島崎のものであった可能性が高い。OH、Org-sol に分類されているが、ペダルを伴う曲が多く含まれており、中には Org-Ped に分類されるべきだったものがある。

132

 $^{^{139}}$ 筆記体での署名。島崎の学生時代の Dittrich による表記も含め、「Shimasaki」と濁らない読みで記されている。

島崎赤太郎と関連する楽譜

[OH 242] Josef Gabriel Rheinberger (1839-1901): Sonate für Orgel Nr. 9 Op. 142

[OH 243] Josef Gabriel Rheinberger: Sonate für Orgel Nr. 5 Op. 111

[OH 244] Josef Gabriel Rheinberger: Sonate für Orgel Nr. 6 Op. 119

[OH 245] Josef Gabriel Rheinberger: Sonate für Orgel Nr. 8 Op. 132

[OH 246] Josef Gabriel Rheinberger: Sonate für Orgel Nr. 11 Op. 148

[OH 247] Josef Gabriel Rheinberger: Sonate für Orgel Nr. 7 Op. 127

[OH 248] Josef Gabriel Rheinberger: Sonate für Orgel Nr. 1 Op. 27

[OH 249] [消失]

[OH 250] [消失]

[OH 251] ~ [OH 260] Josef Gabriel Rheinberger : Meditationen Op. 167

[1. Entrata] / [2. Agitato] / 3. Canzonetta / 4. Andantino / 5. Preludio / 6. Aria / 7. Intermezzo

/ 8. Alla marcia / 9. Tema variato / 10. Passacaglia / 11. Fugato / 12. Finale

消失した [OH 249] と [OH 250] は 1. Entrata と 2. Agitato だったと考えられる。







右上サイン部分[東京藝術大学附属図書館所蔵]

- [OH 261] Niels Wilhelm Gade (1817-1890): 3 Tonstücke für Orgel Op. 22
- [OH 262] シューマン: フーゲ [消失]
- R. Schumann: Sechs Fugen über den Namen BACH Op. 60 だったと考えられる。
- [OH 263 2/2] Hermann Kretzschmar (1848-1924) : Technische Etüden Heft. II
- [OH 263 1/2] [消失] はおそらく Kretzschmar: Technische Etüden Heft. Iである。
- [OH 264] F. Mendelssohn: Drei Präludien und Fugen Op. 37 / Sechs Sonaten Op. 65
- [OH 265] Johann Gottlob Töpfer (1791-1870): Orgel Sonate
- [OH 266] J. S. Bach: 15 Große Choral-Vorspiele
- [OH 267] シュナイダー: スチウデンペダル [消失]
- Schneider のペダル教則本は明治期の Org-Ped 分類楽譜にもある。
- [OH 268] G. Merkel: Sonate für die Orgel zu vier Händen Op. 30
- [OH 269] Albert Becker (1834-1889) : Adagio für Violine und Orgel oder PF
- [OH 270] -: Album für Violine und Orgel
- [OH 271 1/2 2/2] J. G. Rheinberger: Zehn Trios für die Orgel Op. 49 Heft I II
- [OH 272] Johannes Brahms (1833-1897): Elf Choral-Vorspiele Op. 122
- [OH 273] Carl Piutti (1846-1902) : Sonate für die Orgel Op. 27
- [OH 274] C. H. Rinck: Practische Orgelschule Op. 55
- リンクの教本は〔Org-Ped 3 1/2 2/2〕〔Org-Ped 27 1/2 2/2〕と同本である。
- [OH 275] -: Chappell's Collection of Anthems
- [OH 276] Peters 版 Bach I. II. III. VI. VII. VII. IX. うち I. II は消失。

ここまでは島崎関連楽譜のうち、1912 (大正元) 年~1913 (大正 2) 年受入れの楽譜である。Rheinberger の Sonata を筆頭に、ドイツ人作曲家による多彩なオルガンレパートリーが並ぶ。若干数だがアンサンブルの楽譜も含まれている。これに加えて 1919 (大正 8) 年受入れの、以下の四点にも島崎のサインがみられる。

- [OH 336] Gustav Merkel: Orgelschule Op. 177
- [OH 337] Christian Heinrich Rinck: Praktische Orgelschule Op. 55
- [OH 338] Gustav Merkel: Zehn Fughetten
- [OH 339] Johann Ernst Rembt (1794-1810): Fünfzig Orgel-Fughetten

第一章 第三節 3-4-2¹⁴⁰で触れたように、島崎赤太郎は 1902 (明治 35) 年から 1906 (明治 39) 年にかけて、ライプツィヒに留学した。島崎のサインが入った楽譜群は、留学時に受けた影響を少なからず感じさせるレパートリーになっている。ライプツィヒ音楽院で学友たちが演奏していた曲目¹⁴¹には、Piuttiのソナタや Schumann の BACH の主題によるフーガ、Rheinberger のソナタ、Merkel のソナタなどがあり、島崎のサインが入った楽譜と重なる部分が多い。これらの楽譜の中には留学時に現地で入手したものがあるのではないかと思われる。それらが東京音楽学校の蔵書となり、実際に教授に使用されることで、ライプツィヒでの島崎の学びは東京音楽学校のオルガン演奏に還元されていったと考えることができる。

大正期の OH、Org-sol 分類楽譜にも副本の多いものがあるが、明治期ほどの数ではない。

楠美恩三郎(1868-1927)編『オルガン曲集』、東京: 共益商社書店、1913(大正2)年

18 曲の選集。楠美恩三郎は長年東京音楽学校に勤務し、師範科生を中心としたオルガン 履修者の教授を行った。明治期にも楠美の教本『オルガン規範』〔OH 227〕の受入れがあった。

[OH 278 1/5-5/5] 5冊の受入れがあった。

島崎赤太郎編『リードオルガンアルバム』、東京:共益商社、1914 (大正3)年

Mendelssohn オルガン・ソナタの緩徐楽章や、Schumann の BACH の名によるフーガなど、ペダル付のオルガン曲を手で弾けるように編曲が施されている。

[OH 283 1/5-5/5] 5冊の受入れがあった。

August Reinhard (1831-1912): Drei Sonatinen Op. 38 Berlin: Carl Simon Musikverlag.

明治期にも 3 セットの受入れがあった Reinhard の Sonatine であるが、大正期にはさらに 5 セット追加された。

¹⁴⁰ 本文 第一章 第三節 3-4-2 「ライプツィヒ留学時代 1902(明治 35)年~1906(明治 39)年」、69~71 頁。

¹⁴¹ 小野亮祐「ドイツのオルガン教授と洋楽黎明期日本との接点についての試論―島崎赤太郎の「オルガン 留学」を通しての検討―」『関西楽理研究』30 号、2013、46~56 頁。

[OH 354 1/5-5-5] Nr. 1 C-dur、[OH 355 1/5-5/5] Nr. 2 F-dur、[OH 356 1/5-5/5] Nr. 3 a-moll、の 5 冊ずつである。

William Joseph Westbrook (1831-1894): Fugen-Album Braunschweig: Henry Litolff.

様々な作曲家のフーガを集めた選集。明治期にも一冊受入れがあり、よく使用されていたが、大正期になり追加された¹⁴²。

[OH 290 1/2-2/2] 2冊の受入れがあった。

大正期の OH、Org-sol 分類楽譜には、楠見恩三郎の押印楽譜も含まれていた。1918 (大正 7) 年受入れの [OH 335] August Reinhard: *Duo-Album* のシリーズはハルモニウムとピアノによる二台演奏用の楽譜である。5 巻 10 冊からなるがそのうちの 3 冊に楠見印が見られ、このシリーズが楠美恩三郎の持ち物であったと推測できる。書込みには「37.5.11」という日付もみられ、明治期に使用された可能性が高い。演奏会での連奏の曲目と合致するものはなかったが、連奏の指導に使用された可能性がある。



写真 2-3 〔OH 335 1/4 (2/2)〕 表紙



楠美印拡大[東京藝術大学附属図書館所蔵]

¹⁴² 同シリーズの Westbrook: Präludium-Album も大正期に 1 冊追加されている [OH 343]。

大正期の OH、Org-sol 分類楽譜には、フランスのレパートリーもまとまっている。特に 1916 (大正 5) 年受入れの OH、Org-sol 分類楽譜にはフランスのレパートリーが多く含まれ、大正期受入れのフランス人作曲家の楽譜は、この年に集中している。

[OH 293 1/2 2/2] Théodore Dubois (1837-1924) : Deux Morceaux de Salon pour orgue

[OH 294] Fernand de La Tombelle (1854-1928) : Aubade pour Harmonium

[OH 295] Clément Loret: Œuvres Originales pour Orgue-Mustel

[OH 296] Camille Saint-Saëns: Rhapsodie I II III

[OH 297] ~ [OH299] Lefébure-Wély (1817-1869) : 1re Suite de Morceaux de Salon

[OH 300] Alexandre Guilmant: Transcription pour Harmonium (Bach: Gavotte, Air et Menuet)

[OH 301] Alexandre Guilmant: Fughetta pour Harmonium ou Piano

[OH 303] Louis Ferlus (1841-1899): Composition pour Orgue-Expressif, Impromptu-Caprice Op. 72

ここにはハルモニウムのための楽譜が多く含まれ、中には〔OH 295〕Clément Loret: *Œuvres Originales pour Orgue-Mustel* ¹⁴³のような、ハルモニウムの為に作られた曲もある。

一方で〔OH 296〕のようなペダル付のオルガン曲も分類されている。この後、1926(大正 15)年に〔OH 357〕César Franck: 6 Pièces d'Orgue の受入れがあるが、こちらもペダル付の大オルガン用の楽譜である。大正期の Org-Ped 分類楽譜にはフランスのものがなかったが、それはこの時期のフランスの作品がすべて OH、Org-sol のほうに分類されてしまったためである。実際にはフランスの作曲家による、ペダルを伴うオルガン曲の楽譜は大正期にも受入れがあった。

137

¹⁴³ Mustel 社: フランスのハルモニウムメーカー。Clément Loret は、ハルモニウム製作者の Victor Mustel (1815-1890) と親交があった。

第二節 大正期の東京音楽学校で受入れた楽器

2-1 大正期受入れのオルガン

大正期に東京音楽学校が新たに購入した楽器の動向については、明治期に引き続き『音楽機械出納簿』『楽器監守簿』で知ることができる。明治期には 100 台を超えて受入れられたオルガンだが、大正期に入ると新規受入れ数は激減する。大正 14 年間のなかで東京音楽学校が購入したオルガンはいずれもリード・オルガンで、わずか 8 台であった。明治期からの楽器を引き続き使用しているが、それらの多くは売却、譲渡、保管転換が随時行われていった。大正期には東京音楽学校のオルガン保有台数のピークが過ぎていることがわかる。

表 2-2 1914 (大正 3) 年受入れのオルガン

号数	摘要/備考(納入)	価格
103	オルガン / 南製オルガン(東洋楽器製造)	100円
104	オルガン / 南製オルガン(東洋楽器製造)	100円

東洋楽器製造株式會社製の「南製オルガン」を 2 台購入している南製オルガンは、東洋楽器製造会社製のオルガンである。東洋楽器製造会社は、東京音楽学校でオルガンを履修し卒業後に助教授まで務めた南能衛を、技術顧問格として迎えている。「南製オルガン」はその名をつけて作られたブランドで、専門家向けの仕様であったらしい¹⁴⁴

表 2-3 1915 (大正 6) 年受入れのオルガン

105	オルガン / 南特製 12 号 (高井徳三)	120 円
-----	------------------------	-------

前年と合わせ、東京音楽学校では計 3 台の「南製オルガン」を受入れている。この後、1916 (大正7) 年~1920 (大正11) 年までは、オルガンの受入れがない。

表 2-4 1921 (大正 12) 年受入れのオルガン

106	オルガン / 山葉製(共益商社)	195 円
107	オルガン / 山葉製(共益商社)	195 円
108	オルガン / 山葉製(共益商社)	195 円

¹⁴⁴ 赤井励『オルガンの文化史』東京:青弓社、2006年、94~95頁、134頁

表 2-5 1922 (大正 13) 年受入れのオルガン

109	オルガン / 山葉製 C スケール (日本楽器製造)	315 円
110	オルガン / 山葉製 C スケール(日本楽器製造)	315 円

1915 (大正 6) 年受入れの 105 号 南製オルガンから、1922 (大正 13) 年購入の 110 号 山葉オルガンまでの計 6 台は、いずれも 1932 (昭和 8) 年 3 月に廣田米太郎へ売却された。 廣田米太郎は東京音楽学校で長くピアノを調律していたがその後独立し、株式會社東京楽器研究所、続いて廣田楽器商會を開業して輸入ピアノの販売及び調律を行っていた¹⁴⁵。

大正期に東京音楽学校で購入した楽器は以上の 8 台のみである。新規購入数がわずかである一方で、明治期から続けて使用された楽器が多数あった。東京音楽学校は大正期までに 102 台のオルガンを受入れたが、そのうちの 48 台は明治期のうちに移管、譲渡、廃棄等となり、大正期のはじめ東京音楽学校に在籍していたオルガンは約半数となる 54 台であった。その内訳を以下の表に記す¹⁴⁶。

表 2-6 大正期初年に在籍した明治期受入れのオルガン

号	受入れ年	摘要/備考 (納入)	価格	1907
				(明治40)
3	1893 (明治 26)	オルガン / Carpenter	60 円	保管
9	1893 (明治 26)	オルガン / George woods	50 円	50室
10	1893 (明治 26)	オルガン / 西川	25 円	55 室
13	1893 (明治 26)	オルガン/才田	25 円	保管
18	1895 (明治 28)	風琴 / 山葉	70 円	61 室
34	1899 (明治32)	オルガン / Mason & Hamlin 社製ペダル	1450 円	1室
		(白井銈造)		合奏用
35	1900 (明治33)	オルガン / Mason & Hamlin 社製	250 円	57室
		(白井銈造)		[楠美]
36	1900 (明治33)	オルガン / Mason & Hamlin 社製	250 円	分教場
		(白井銈造)		
37	1900 (明治33)	オルガン / メーソン型 8 ストップ	130 円	分教場
		(白井銈造)		
43	1901(明治 34)	オルガン / 山葉メーソン型 (白井銈造)	130 円	58室
44	1901 (明治 34)	オルガン / 山葉メーソン型 (白井銈造)	130 円	分教場

145 倉田喜弘[他]「昭和前期音楽家総覧-『現代音楽大観』-下巻」東京:ゆまに書房、2008、277 頁。

¹⁴⁶ 『楽器器械原簿』『楽器機械出納帳』の会計情報に、『楽器品目員数表』による明治 40 年当時の使用状況を付記して作成。

47	1902 (明治 35)	オルガン / 西川製 12 号型	(倉田範太郎)	85 円	分教場
53	1902 (明治 35)	オルガン / 山葉製 7 号型	(白井銈造)	65 円	分教場
58	1904(明治 37)	オルガン / W. Doherty 社製	(内藤文六郎)	250 円	52 室
59	1904(明治 37)	オルガン / Rodolphe 社製	(内藤文六郎)	700円	1室
	1701 (7114 27)	vi vi vi vi riodolphe i i ac	(1 1/14/20)	70013	[奏楽堂]
60	1904(明治 37)	オルガン / Rodolphe 社製	(内藤文六郎)	510円	57室
	(),,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,	r	(, ,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,		[楠美]
61	1905(明治38)	オルガン / Mason & Hamlin	社製 13 ストップ	350 円	56室
			(内藤文六郎)		[中村]
62	1905 (明治 38)	オルガン/山葉製第1号型	(内藤文六郎)	130 円	29室
					[島崎]
65	1906(明治39)	オルガン/山葉8号	(内藤文六郎)	75 円	1室
					[奏楽堂]
66	1906(明治 39)	オルガン/山葉8号	(内藤文六郎)	75 円	分教場
67	1906(明治 39)	オルガン / 西川 11 号	(倉田範太郎)	75 円	5室
69	1906(明治 39)	オルガン/山葉8号	(内藤文六郎)	75 円	分教場
70	1906(明治 39)	オルガン/山葉8号	(内藤文六郎)	75 円	8室
71	1906(明治 39)	オルガン/山葉8号	(内藤文六郎)	75 円	13室
72	1906(明治 39)	オルガン / 山葉 8 号	(内藤文六郎)	75 円	14 室
73	1906(明治 39)	オルガン / 西川製 11 号	(倉田範太郎)	75 円	59室
75	1907(明治 40)	オルガン / 山葉製 14 号	(内藤文六郎)	130 円	29室
					[島崎]
76	1907 (明治 40)	オルガン / 山葉製 11 号	(内藤文六郎)	80 円	分教場
77	1907 (明治 40)	オルガン / 山葉製 14 号	(内藤文六郎)	130円	分教場
78	1907(明治 40)	オルガン / 山葉製 11 号	(内藤文六郎)	80 円	16室
	(SPENAL)		/ [-#+]		[男教員]
79	1907 (明治 40)	オルガン / 山葉製 11 号	(内藤文六郎)	80 円	19室
80	1907 (明治 40)	オルガン / 山葉製 11 号	(内藤文六郎)	80 円	12室
81	1907 (明治 40)	オルガン / 山葉製 11 号	(内藤文六郎)	80 円	53 室
82	1907 (明治40)	オルガン / 山葉製 11 号	(内藤文六郎)	80 円	60室
83	1907(明治 40)	オルガン / 山葉製特製大型	(内藤文六郎)	650 円	1[奏楽堂]
Q A	1000 (明弘 41)	ナルガン / Hz-q	(小去紅田山)	000 [演奏用
84	1908 (明治41)	オルガン / Hofberg 社製	(小立鉦四郎) (内藤文六郎)	900円	-
86	1908 (明治41)	オルガン / 山葉製		300円	-
87	1908(明治 41) 1909(明治 42)	オルガン/ 山栗製 オルガン/フィルハモニック	(内藤文六郎)	300 円 304 円	-
07	1プ0プ (切行行 42)	スルルン/ノイルハモーツク 腰掛付	(西川乕吉)	304 円	-
88	1909(明治 42)		(倉田範太郎)	80 円	_
89	1909 (明治 42)	オルガン / 西川製	(倉田範太郎)	80 円	-
90	1909 (明治 42)	オルガン / 山葉製	(内藤文六郎)	350円	-
91	1909 (明治 42)	オルガン / 山葉製	(内藤文六郎)	80円	-
92	1909 (明治 42)	オルガン/山葉製	(内藤文六郎)	80 円	_
93	1909 (明治 42)	オルガン / 山葉製	(内藤文六郎)	80 円	_
94	1909(明治 42)	オルガン / 山葉製	(内藤文六郎)	80円	_
95	1909 (明治 42)	オルガン/山葉製	(内藤文六郎)	80円	-
75	エノロノ (ウガロ サム)	ペパタイ 世末衣	(11)08/2/(14)/	00 1	

	(5 55 1 H+#+-1	/ [-144		
96	1909(明治 42)	オルガン / 山葉製	(内藤文六郎)	80 円	-
97	1910(明治 43)	オルガン / 西川製	(倉田範太郎)	80 円	1
98	1910 (明治 43)	オルガン / 西川製	(倉田範太郎)	80 円	-
99	1910(明治 43)	オルガン / 山葉製	(内藤文六郎)	339 円	-
				50 銭	
100	1911 (明治 44)	オルガン / 西川製 腰掛付	(西川虎吉)	80 円	-
101	1911(明治 44)	オルガン / 西川製 腰掛付	(西川虎吉)	80 円	-
102	1912(明治 45)	オルガン / 西川製	(倉田範太郎)	80 円	-

その後の推移を、『楽器監守簿』『音楽機械出納簿』をもとに追ってみる。[]内は『楽器品目員数表』によるオルガンが設置されていた部屋(番号、および記号)である。

1912 (大正元) 年

75号[29:島崎]は秋田鉱山専門学校へ保管轉換となった。

43 号 [58]、47 号 [分] ¹⁴⁷、65 号 [1:奏楽堂]、70 号 [8]、79 号 [19]、82 号 [60] の 6 台が売却され、在籍数が 54 台から 47 台に減少した。

1914 (大正 3) 年

103号、104号の2台を受入れた。

37号[分]、44号[分]、53号[分]、62号[29:島崎]、66号[分]、69号[分]、72号[14]、88号¹⁴⁸の8台を売却

在籍数が49台から41台に減少した。

この時点で、明治期に 29 室 (島崎赤太郎) にあったオルガン (62 号、75 号) は二台とも移籍している。1917 (大正 6) 年に島崎からレッスンを受けた井上武士の回想によれば、島崎の教室には 2 段鍵盤のオルガンがあったという¹⁴⁹。2 段鍵盤を持つオルガンは、34 号 Mason & Hamlin 社製ペダル付と、84 号 Hofberg 社製オルガンしかなかったことから、島崎の部屋には84 号が置かれていたと考えられる。

_

^{147 [}分] は分教場

^{148 88} 号以降は楠見の調査後受入れの為、所在が不明。

¹⁴⁹學校音楽研究會「學校音楽」四月號(島崎赤太郎先生追悼號)東京:共益商社書店、1934年、39-48頁。

1917 (大正 6) 年

105号を受入れ、所有台数は41台から42台に増加した。

1918 (大正7) 年

18号 [61]、73号 [59] の 2 台が東京女子高等師範学校へ保管轉換され、保有台数は 42 台から 40 台へと減少した。

1922 (大正 11) 年

100 号が東京商業学校へ保管轉換、102 号が東京高等蚕糸学校へ保管轉換となり、保有台数は40 台から38 台へと減少した。

1923 (大正 12) 年

89 号を水戸高等学校へ譲渡、36 号、67 号、77 号、90 号、95 号、103 号、104 号の 7 台 が震火災の為に焼失し、保有台数は38 台から30 台へと減少した。

1917 (大正 6) 年の楽器掛の記録「分教場備付品支給簿」¹⁵⁰ によると、1917 (大正 6) 年の時点で分教場には 36 号、77 号、90 号、105 号が備え付けてあった。このうち 105 号は 1921 (大正 10) 年 10 月 14 日に本校に返却されている。1921 (大正 10) 年 9 月 14 日には、新たに 95 号、35 号、103 号、67 号が貸し付けられ、35 号だけは返却された。1923 (大正 12) 年 4 月 6 日に 104 号が貸し出されている。この時点で分教場に貸し出されていた 7 台のオルガンは、上記の 7 台と一致し、震火災による焼失が、分教場にあったためであることがわかる。

同年に、106 号、107 号、108 号の 3 台を受入れたが、101 号が東京外語学校へ、98 号が 弘前高等学校へとそれぞれ保管轉換となり、保有台数は33 台から31 台へ減少した。

1924 (大正 13) 年

109号、110号を受入れた。

150 [東音文 27] 「大正六年十月起 分教場備付品支給簿 楽器掛 図書掛」東京藝術大学附属図書館所蔵。

この年の時点で3号 [保管¹⁵¹]、9号 [50]、58号 [52] の3台は除籍、97番は不明になって おり、最終的にオルガンの台数は29台まで減少した。

『楽器監守簿』には 1925 (大正 14) 年 3 月 20 日にペダル・ピアノの受入れがあったことが記載されている。備考に「58 室パイプ」とあり、オルガンの練習用として使用されていたと考えられる。

大正期を通して、最も規模の大きな楽器は依然として 34 号の Mason & Hamlin 社製ペダル付のリード・オルガンであった。1916 (大正 5) 年 11 月 16 日に行われた皇后行啓演奏会でのオルガン演奏は、「手鍵盤二列と足鍵盤を用いて演奏」¹⁵²と記されており、表舞台で34 号が活躍していたことがわかる。

大正期の奏楽堂の舞台を写した写真には、Mason & Hamlin 社製ペダル付のリード・オルガンが写っている。当時は舞台奥がカーブしており奥行があった。その奥まったところに置かれていたとみえ、集合写真などをみても、向かって左奥の位置に Mason & Hamlin 社製ペダル付のリード・オルガンが写っている。



写真 2-4 大正期奏楽堂舞台上の Mason & Hamlin ペダル付リード・オルガン (1) [大正 2~13 年頃 於:旧東京音楽学校奏楽堂(部分)東京藝術大学大学史史料室所蔵] 蓋が開いており、二段鍵盤と特徴的な譜面台が写っている。

¹⁵¹ 明治40年の時点で、保管状態:使用されていない状態だった。

^{152 「}演奏曲目梗概」『芸大百年史演奏会篇第一巻』、443頁に再録、引用は同所より。



写真 2-5 大正期奏楽堂舞台上の Mason & Hamlin ペダル付リード・オルガン (2) [大正 2~13 年頃 於: 旧東京音楽学校奏楽堂(部分)東京藝術大学大学史史料室所蔵]

写真 2-1 と同じ位置に Mason & Hamlin 社製ペダル付のリード・オルガンが写っているが、 こちらの写真では蓋が閉まっている。オルガンの右側にはふいご用のレバーもみえる。

この位置に常設されていたのではないかと推測され、オルガン演奏時もこの位置だった 可能性が高いが、演奏中の写真は今のところ見つかっていない。

大正期の演奏用楽器としては、この 34 号 Mason & Hamlin 社製ペダル付のリード・オルガンのほかに、59 号の Rodolphe 社製ハルモニウムや、83 号 山葉製特製オルガンも健在だった。

明治期から引き継がれた 54 台の楽器は、大正期に 8 台増加したが最終的に 29 台にまで減少した。1923 (大正 12) 年 9 月 1 日の関東大震災で分教場設置の 7 台が失われたことの損失は大きいが、それ以前の 1912 (大正元) 年に 6 台、1914 (大正 3) 年に 8 台が売却され、本校、分教場ともにまんべんなく楽器を削減し始めていることも注目される。大正期の全体を通して他学校への譲渡、保管轉換が多くみられる。楽器の新旧を問わず他の施設へ転属させているところを見ると、東京音楽学校の中では次第にオルガン教授の規模が縮小され、楽器数の多さが求められなくなっていったと考えられる。

第三節 大正期の東京音楽学校におけるオルガン履修生と教師

3-1 大正期のオルガン履修生と受持

大正期は、明治期に引き続き、研究科、本科、豫科、甲種師範科、乙種師範科、選科に オルガン履修生が存在した。1922 (大正 11) 年には第四臨時教員養成所¹⁵³が設置され、オ ルガン履修があった。明治期の師範科生の専攻楽器はオルガンが主だったが、次第に甲種 師範科の中でオルガンを選択する学生が減少していった。代って、乙種師範科生、選科生 の履修数が多くなっている。

表 2-7 1912 (明治 45) 年~1913 (大正 2) 年のオルガン履修生と受持

聴講	草川宣雄 山本恭三	-
本科三年	小原知孝	島崎
本科一年	和田央 津田修一 澤ひさ	島崎
甲種師範科三年	草川友忠 木岡信 島村悦 (富永嵯峨子)	島崎
	牛山充(櫻井みつ)	楠美
	阿部みさを	不明
甲種師範科二年	小倉章蔵 絹笠知恵之	島崎
	富田鉦 加藤鶴 横山チカ 熊澤うめ 安藤フジ弓削クミ	楠美
	飯塚揆一	不明
甲種師範科一年	岡本新市 権藤円立 関塚晋 新居ノブ 高木卉笑 内藤谷	楠美
	梅澤うめ 大和田路得子 松倉しゆん 白坂ミイ(関根益三)	
乙種師範科卒	堀江誠一 小澤作太郎 野澤貞吉 山井基文 近藤徳次郎	楠美
	疋田脩	楠美
	飯野操 石関うめ子 石井まさ 萩原兼保 原田モト 穂坂邦	中村
	堀江清一 小澤作太郎 川本ヲキョ 吉澤島 難波クニ	中村
	那須コマ 野々垣ぎん 藤巻満恵	中村
[選科]	中野孝輔 荻原美代三郎 亀岡茂 大足壽郎 藤辰雄	不明
	外狩伸七津田藤江 小林ちよ 野田シン 鈴木ツネ 龍岡照	
	伊藤玉財前錠久保田喜代山下花安次富幸大村おゑ	
	東泰 宮島虎雄 小幡重一 劉錦製 長峰英人 小野すま	
	朝野テル 徐竹素 徐竹筠 川合照子 増野花子 二木初枝	
	太田貞 張淑英 大富部政 佐野とみ 向井花子 佐藤喜代	
	岡島静枝 沼澤敏子 小澤なほ 金子ふみ 武田喜久	
	川田てい 千葉しゆん 丸山瀧子	

[102] 『大正二年 卒業及學年成績』

¹⁵³ 第四臨時教員養成所:師範学校、中学校及び高等女学校の教員養成を目的として、文部省管轄の帝国大学および直轄学校内に設置された臨時教員養成所のうちのひとつ。音楽科は第四として東京音楽学校内に置かれた。

選科は『東京音樂學校一覧』¹⁵⁴記載分である。分教場勤務の青木シノ、中田章、松井壮 吉らが教えていたとみられる。

教師の布陣は、教授:島崎赤太郎 (オルガン、和声論、楽式)、楠美恩三郎 (オルガン)、助教授:中村芳子 (オルガン)、講師補助:青木シノ (オルガン、分教場勤務)、中田章 (オルガン、唱歌、分教場兼勤) 155、松井壮吉 (オルガン、分教場勤務) であった。前年までオルガン教えていた南能衛の担当は、和声論、音楽教授法、音楽通論だけになっている。

この年、甲種師範科の草川友忠と木岡信は奨学品として楽譜、楽書を授与された156。

表 2-8 1913 (大正 2) 年~1914 (大正 3) 年のオルガン履修生と受持

本科三年	津田修一	島崎
本科二年	和田央	島崎
豫科	真篠俊雄	不明
甲種師範科三年	小倉章藏 絹笠知恵之	島崎
甲種師範科二年	岡本新市 権藤円立 関塚晋 新居ノブ 高木喜美 内藤谷	楠美
	梅澤うめ 大和田路得子 松倉しゆん 白坂ミイ	
甲種師範科一年	厨二郎 松川喬一 新藤武 岩田艶子 大森トモ 武野美輪恵	楠美
	斉藤キミ 平松すみ 諏訪光子 鈴木ふみ 淡河トヨ	
乙種師範科	岩城準一 野口忠敬 疋田修 尚琳	楠美
	長谷川誠治 服部進 友野正 栢木タマ 安原八代野 松本マキ	中田
	藤間きん 喜多トク 三澤さた	
選科	金子ふみ	不明
	向ハナ	青木
[選科]	松尾孝輔 小林多治 萩原美代三郎 外狩伸七 青木喜介	不明
	小林ちよ 鈴木ツネ 磯本ヒサヨ 近藤俊子 宮島虎雄	
	榮常次郎 小野すま 朝野テル 川合照子 増野花子 太田貞	
	張淑英 佐野とみ 向花子 沼澤敏子 金子ふみ 瀧岡照 東泰	
	川崎タカコ 佐藤こと 笹川菊子 谷口こま 湯淺九女	
	齋藤ウメ 鈴木鈴 恩地加壽惠 斎藤房 山本ユキ 久野恭子	
	影山多仁 西川秋 楊瑞華 玉川ふく江 山科フデ	

[104] 『大正三年 卒業学年試験成績』

^{154 『}東京音樂學校一覧 従明治四十五大正元年至大正二年』東京音樂學校、104~112頁。

¹⁵⁵ 同前、88 頁によれば、中田の担当科目はオルガン、唱歌に加えて「寫語」とある。写譜のことかと思われるが、前後年の担当および科目欄には見当たらない。

^{156 〔304〕 『}特待生書類 賞品授与書類 教務課』、大正 2 年 3 月 24 日。記念品は二名ともに Sonatinen Album Violin und Piano / Elson's pocket music dictionary であった。

明治期に乙種師範科でオルガンを履修していた真篠俊雄が豫科で再入学しており、この後本科へ編入となる。この年の乙種師範科は、一人を除いてオルガンを履修している。[選科]は『東京音樂學校一覧』¹⁵⁷による。

オルガンの教師は、教授:島崎赤太郎(オルガン、和声論、楽式)、楠美恩三郎(オルガン)、助教授:中村芳子(オルガン、分教場兼勤)、中田章(オルガン)、講師補助:青木シノ(オルガン、分教場勤務)、松井壮吉(オルガン、分教場勤務)であった。前年まで聴講で在籍していた草川宣雄は、この年から授業補助で教授法を担当した。以後長くその職にあった。

表 2-9 1914 (大正 3年) ~1915 (大正 4年) のオルガン履修生と受持

[研究]	草川宣雄	_
[本科三年]	和田央津田修一	不明
[本科一年]	真篠俊雄	不明
[甲種師範科三年]	岡本新市 権藤圓立 関塚晋 新居ノブ 高木喜美 内藤谷	不明
	梅津うめ 大和田路得子 松倉しゆん 白坂ミイ	
[甲種師範科二年]	厨二郎 松川喬一 新藤武 岩田艶子 大森トモ	不明
	武野美輪恵 斉藤キミ 平松すみ 諏訪光子 鈴木ふみ	
甲種師範科一年	岩尾真幸 石井きた 高宮キミ 宮川政城 淡河トヨ	楠美
乙種師範科	林さと 荻野茂 田中考子 田栗イソ 中島英子 門馬栄	中田
	星野義政 陳蒙 小野千代子 河原フサ 風間イキ 田村忠信	楠美
	玉置正巳 名嘉眞武輝 井上秀吉 安東圭之介	楠美
[聴講科(選科)]	外狩伸七 喰田ヤエコ	不明
[選科]	松尾孝輔 小林多治 荻原美代三郎 瀧田卯夫 堀江淸一	不明
	小林ちよ 鈴木ツネ 長谷川静 宮島虎雄 朝野テル 佐野とみ	
	向ハナ 沼澤敏子 川崎タカコ 佐藤こと 笹川菊子 湯淺九女	
	鈴木鈴 影山多仁 玉川ふくえ 多賀艶 佐々木日出子	
	天野米子 小平トラ 菅能美保 菅能壽瀧 徳富安 林雛子	
	山口心 須貝千代 鈴木え以 谷口こま 斎藤ウメ	

[129] 『大正三年 入學試験成績』

大正4年の卒業成績資料がみつかっていないために、成績資料からは甲種師範科一年と 乙種師範科の情報しか得られなかった。『東京音樂學校一覧』¹⁵⁸から研究、本科、聴講科、 選科を補った。甲種師範科三年と二年に関しては、前後の年度からの推測である。

147

_

^{157 『}東京音樂學校一覧 従大正二年至大正三年』東京音樂學校、107~114頁。

^{158 『}東京音樂學校一覧 従大正三年至大正四年』東京音樂學校、104~121頁。

オルガンの教師は、教授:島崎赤太郎(オルガン、和声論、楽式)、楠美恩三郎(オルガン)、助教授:中田章(オルガン、唱歌、和声論、分教場兼勤)、講師補助:青木シノ(オルガン、分教場勤務)、松井壮吉(オルガン、分教場勤務)であった。

甲種師範科から聴講(選科)を経て、この年研究科に入った草川宣雄は、島崎のレッス ンについて回想している。

やがてリードオルガンの一通りをすませた頃、先生の御蔭で東京音楽學校の研究科に入り、オルガン科に通學することが出来た。今度はペダルオルガンの研究を繼續する事になった。バッハ作曲のフーゲの演奏等になると、對位法的に仕組まれて居る多聲部を、あの講堂の隅から隅へと、響きわたる様に力強く、そして明瞭に一點の淀もなくひかなければならなかった。氣持よくひける時は、下の鍵盤から出る主旋律を聲高々と口笛で伴奏され、この主旋律が足で奏するペダルに移ると、例の低いバスの聲で伴奏して下すった。159

リード・オルガンの習得のあとにいよいよペダル付のオルガンを弾くようになったという。レッスンは奏楽堂に設置されたペダルオルガン、すなわち Mason & Hamlin 社製ペダル付リード・オルガンで行われたようだ。

また、甲種師範科三年の岡本新市は、一二年までは楠美恩三郎から習い、三年になって島崎に習ったことを回想している。

三年になって始めて渇仰して居た先生に愈々教へて頂くので胸がわくわくした。始めはエレジツヒフーガ¹⁶⁰であったと思ふ。夏休前はエスモールのパルテイタ¹⁶¹をひいて居った、卒業試験にはバツサカリア¹⁶²をやったものであるが、一時間数人教授を受けるうちに練習不充分で度々引つかかる生徒の順番になると、先生はハタキでそこら邊をはたいたり、窓掛を引いて締めたり帰り仕度をされた様に記憶して居る。しかし

148

 $^{^{159}}$ 草川宣雄「島崎先生を憶ふ」『學校音楽』 學校音楽研究會編輯、1934 年 4 月、島崎赤太郎先生追悼號、 $21\sim25$ 頁。

¹⁶⁰ Otto Dienel: Elegische Fuge

¹⁶¹ J. S. Bach: Partite diverse über Ach, was soll ich Sünder machen BWV770

¹⁶² J. S.Bach: Passacaglia BWV582

どんな曲でも自由自在に範奏をして下さったのには敬服して居った。先生は卒業したらピアノが大切だからと、誰かのエチウドでピアノを教へて下さつたり、新譜の即奏も課して下さった。¹⁶³

表 2-10 1915 (大正 4) 年~1916 (大正 5) 年のオルガン履修生と受持

本科器楽科二年	真篠俊雄	島崎
豫科	橋本ケシ	_
甲種師範科三年	厨二郎 新藤武 岩田艶子 大森トモ 斎藤きみ 平松すみ	島崎
甲種師範科二年	宮川成城	島崎
	岩尾眞幸 石井きた 児玉玉枝 鈴木ふみ 松川喬一	楠美
	(小川研一)	
甲種師範科一年	井上武士 羽場匡雄 橋本ケン 長谷川静 亀ケ森イサヲ	楠美
	鈴木イト	
乙種師範科	石川基成 池上多喜 原野孝多郎 速水稲 長谷川秀和	楠美/中田
	大澤千波 (生越マツヨ) (王素常) 金坂つる子	
	橘英之祐 玉置正巳 中村藤吉 永澤助市 (呉靖)	
	安東圭之介 鈴木ノブ	
[聴講科(選科)]	外狩伸七 喰田ヤエコ	不明
[選科]	小林多治 荻原美代三郎 瀧田卯夫 堀江淸一 吉田政明	不明
	小林ちよ 鈴木ツネ 鈴木鈴 陳剣吟 井上俊子 傳恒瑛	
	中島英子 宮島虎雄 朝野テル 佐野とみ 川崎タカコ	
	笹川菊子 玉川ふく江 小林トラ 菅能すま 林雛子 山口心	
	鈴木えい 岩村安子 岩潤ハツエ 箕輪シヅ子 中村梅	
	斎藤ウメ 都筑なつ子 横山豊子 黒澤しの 金井清子	
	吉井敏子 玉井しず 小谷野芳江 谷口こま	

[069] 『大正四年 入學試験成績』

[070] 『大正五年 入學卒業試験成績 東京音楽学校』

[069] 『大正四年 入學試験成績』には甲種師範科一年と、乙種師範科の臨時試験について 掲載がある。[069] 『大正四年 入學試験成績』の甲種師範科一年にいる「橋本ケン」と、 [070] 『大正五年 入學卒業試験成績 東京音楽学校』豫科の橋本ケシはおそらく同一人物で ある。師範科から本科への編入は稀に行われたようである。

この年の乙種師範科のオルガン履修は全員ではない。選科は小林多治を除いて『東京音樂學校一覧』¹⁶⁴による。

 $^{^{163}}$ 岡本新一「お懐かしい島崎先生」『學校音楽』學校音楽研究會編輯、1934 年 4 月、島崎赤太郎先生追悼號、38 頁。

^{164 『}東京音樂學校一覧 従大正四年至大正五年』東京音樂學校、112~123 頁。

オルガンの教師は、教授:島崎赤太郎(オルガン、和声論、楽式初歩)、楠美恩三郎(オルガン)、助教授:中田章(オルガン、唱歌、和声論)、講師補助:青木シノ(オルガン、分教場勤務)、松井壮吉(オルガン、分教場勤務)であった。

この年、甲種師範科の大森トモと乙種師範科の鈴木ノブは奨学品として楽書を授与された¹⁶⁵。

表 2-11 1916 (大正 5) 年~1917 (大正 6) 年のオルガン履修生と受持

本科三年	真篠俊雄	島崎
本科一年	橋本ケシ	島崎
豫科	杉生信雄	不明
甲種師範科三年	松川喬一 宮川政城 岩尾真幸 児玉玉枝	島崎
甲種師範科二年	井上武士 長谷川静 亀ケ森イサヲ 鈴木イト 小川研一	楠美
甲種師範科一年	石岡ヲサメ 竹谷てい 竹田はつ 中島英子 中村籍 山城てる	楠美
乙種師範科	西川治助橘 英之祐 山下鎌次郎(古川武夫)小林宗作	楠美/
	峰尾國彦 今井うり 黒崎良子 山内ヤスヨ 榊原由子 北川清	中田
	(鎌田正男) 田宮昭太郎 (加賀杏一)	
[聴講科]	瀧田卯夫 白坂ミイ 福田トク	不明
[選科]	吉田政明 鈴木ツネ 小林ちよ 紅木廣 荻原美代三郎	不明
	宋李敏琇 安藤榮 朝野テル 川崎タカコ 笹川菊子 鈴木鈴	
	山口心 鈴木えい 岩村安子 岩淵ハツエ 齋藤ウメ 黒澤しの	
	金井清子 小谷野菊枝 黒澤愛 德澤淸 下平暢子 矢野廣子	
	横山豊子 白井静子 頭山岩生 松岡百合子 岡見恭 小澤和久	
	加藤律 福地保江 谷口古ま	

[071] 『大正六年 卒業學年試験成績』

乙種師範の受持は楠美恩三郎と中田章の併記で、個人毎の受持がどちらだったのかは判別できない。この翌年、楠美が教授から講師になっているので、中田に引き継ぎを行っていたのかもしれない。以降、成績関係資料では、一つの科につき複数の教員で担当する場合は併記の形がとられている。聴講科と選科は『東京音樂學校一覧』 166 による。

オルガンの教師は、教授:島崎赤太郎(オルガン、和声學、楽式初歩)、楠美恩三郎(オルガン、分教場兼務)、助教授:中田章(オルガン、和声論)、講師補助:青木シノ(オルガン、分教場勤務)、松井壮吉(オルガン、分教場勤務)、教務嘱託:青木友

150

¹⁶⁵ [304] 『特待生書類 賞品授与書類 教務課』、大正 5 年 3 月 25 日「賞品授与の件」。ともに上真行奨学品として、大森トモには富尾木知佳著西洋音楽史網一部、鈴木ノブには尋常小学唱歌伴奏楽譜歌詞評譚。

^{166 『}東京音樂學校一覧 従大正五年至大正六年』東京音樂學校、77~83 頁。

忠 (オルガン)であった。教務嘱託の青木友忠は、草川友忠であり草川宣雄の弟である。明治期にはオルガンを履修していた。

この年度、本科器楽部の真篠俊雄、乙種師範科の小林宋悦は奨学品を授与されている¹⁶⁷。

表 2-12 1917 (大正 6) 年~1918 (大正 7) 年のオルガン履修生と受持

研究生	眞篠俊雄	-
本科二年	橋本ケシ	島崎
本科一年	杉生信雄	島崎
豫科	高勇吉	不明
甲種師範科三年	小川研一 井上武士 長谷川静 亀ケ森イサヲ 鈴木イト	島崎
甲種師範科二年	石岡ヲサメ 竹谷てい 竹田はつ 中島英子 山城てる	楠美
甲種師範科一年	今吉惺 下總覺三 西田フミ 島本貞 山本はな	中田/眞篠
乙種師範科	金窪良輔 安東榮 富安とみ 笠原ふみ 永田亀子 植田小芳	中田/眞篠/
	大江ヒデ 及川チヨ 九鬼ミツ 古川喜代 古賀操 鐵能子	楠美
	佐藤マス 菊池キヌエ	
[選科]	中山眞一郎 加藤律 鈴木ツネ 佐野順子 岡見恭 酒井千枝	不明
	福地保江 青木馨 齋藤ウメ 若林春 松橋あさ 岡安三枝	
	大森光世 菅能壽満子 川勝リウ 留岡満都 山内賀陽子	
	松岡百合子 浅田フミ 鈴木鈴 小谷野芳江 水戸てる子	
	豊崎田英子 黒澤愛 片岡民子 皆川みさを 鈴木ゑい	
	黒澤しの 頭山岩生 金井清子 河合澄子 岩村安子	
	下平暢子	

[072] 『大正七年 卒業及學年成績』

豫科の高勇吉はオルガン履修の記録があるが、その後 Cello 専攻に進んでいる。この年、豫科に木岡英三郎がいる。木岡はのちに日本のオルガン界を牽引する奏者になるが、東京音楽学校での履修はピアノであった。選科は『東京音樂學校一覧』 168による。

オルガンの教師は、教授:島崎赤太郎(オルガン、和声論、楽式初歩)、助教授:中田章(オルガン、和声論)、講師:楠美恩三郎(オルガン)、教務嘱託:青木シノ(オルガン、分教場勤務)、松井壮吉(オルガン、分教場勤務)、授業補助:眞篠俊雄(オ

.

 $^{^{167}}$ [304] 『特待生書類 賞品授与書類 教務課』、大正 6 年 3 月 24 日「賞品授与の件」。真篠の奨学品は「ジャトソン著和声論壱部」であった。

^{168 『}東京音樂學校一覧 従大正六年至大正七年』東京音樂學校、76~81 頁。

ルガン)であった。甲種師範科一年および乙種師範科の受持ちは、中田章と真篠俊雄 の併記である。

この年は、甲種師範科の井上武士と乙種師範科の大江ヒデが奨学品を授与された¹⁶⁹。 井上武士は一二年次楠見に、三年次島崎にオルガンを習っているが、島崎のレッスン について回想している。

島崎先生のお稽古は本當に沈黙のお稽古であった。あの先生のお室にあった二 重鍵盤のオーガンの前に座ると、やさしく「やってごらんなさい」とおっしゃる。 練習不十分で音が良くないと椅子にかけられて居た先生が黙って立たれてしまふ。 いよいよまづいとお散歩が始まる。そして窓から外を眺めて居られる。そんな時 はきっといけない。何も御批評なさらず「今一度やっていらっしゃい」とおっし ゃる。練習がよく出来て居ると、そばで御覧になって居て、時にはすらすらと一 通りひいて下さることもあった。黙って居られたけれども、ほんとうに怖いお稽 古だったと思った。

三年の時は和聲や樂式も教へて戴いた。いつだったか課題に「マーチ」を出されたことがあった。一生懸命に作って行くと、「ひいてごらんなさい」とおっしゃる。まごまごして居ると、だまってひいて直して下すった。¹⁷⁰

表 2-13 1918 (大正 7) 年~1919 (大正 8) 年のオルガン履修生と受持

研究科	真篠俊雄	島崎
本科三年	橋本ケシ	島崎
本科二年	杉生信雄	島崎
甲種師範科三年	長渡榮 中島英子 山城テル	島崎
甲種師範科二年	今吉惺 下總覺三 竹田はつ	楠美/眞篠
甲種師範科一年	小川一郎 納尚克	中田/眞篠
乙種師範科	田中四朗 山北佐平 町井八郎 松田新治 今村たま	楠美/中田/
	今井幸恵 池田やす 原田榮 東海林すん 開沼とみ 樫	真篠
	田静子 四方花子 吉野ユキヨ 竹内正四 永田亀子 福	
	地保江 有野そな 三井ふ美子	

^{169 [304] 『}特待生書類 賞品授与書類 教務課』大正7年3月25日、「賞品授与の件」。井上武士は上真行寄附奨学賞品として、「タッパー著ファースト、イヤー、アナリシス」「バルツェルス著、ディクショナリー、オブ、ミュージシアンス」、大江ヒデは学友会寄附久野ひさ奨学賞品として「ゴウス著ストラクチュアー、オブ、ミュージック」「福井直秋著尋常奨学唱歌教授提要一部」であった。

¹⁷⁰ 井上武士「島崎先生!!!」『學校音楽』學校音楽研究會編輯、1934 年 4 月、島崎赤太郎先生追悼號 、39-48 頁。

[選科]	久我義俊 鈴木次郎 陳璵洲 呂耀堂 佐藤ヌイ 武田アサ	不明
	川畑シゲ 向美津子 小川縫 森居乙女 酒井千枝 三笠秀	
	伴小彌太 靑木馨 小林喜久七 大木重吉 鈴木まい	
	金井濱子 小谷野芳江 岡見恭 大森光世 菅野壽満子	
	山内賀陽子 留関まつ 川勝リウ 浅川フミ 河合澄子	
	倉知玉緒 富永たか 丹すぎの 古坂千代 丹呉富美子	
	清田俊 中山操 小山その子 佐藤フミ 宇野千草	
	金子定子 田畑幸子 水野津奈	

[073] 『大正八年 卒業及學年成績』

選科は『東京音樂學校一覧』¹⁷¹による。甲種師範科のオルガン選択の割合が次第に減少し、全体のオルガン履修生数がおちついてきている。乙種師範科、選科生の履修は変わらず多い。

オルガンの教師は、教授:島崎赤太郎(オルガン、和声論、楽式初歩、分教場主事)、助教授:中田章(オルガン、和声論)、講師:楠美恩三郎(オルガン、分教場勤務)、教務嘱託:青木シノ(オルガン、分教場勤務)、松井壮吉(オルガン、分教場勤務)、授業補助:眞篠俊雄(オルガン)であった。

表 2-14 1919 (大正 8) 年~1920 (大正 9) 年のオルガン履修生と受持

本科三年	杉生信雄	島崎
豫科	橋南静子	不明
甲種師範科三年	今吉惺 下總覺三 石岡ヲサメ 竹田はつ	島崎
甲種師範科二年	小川一郎 納尚克	中田
甲種師範科一年	金子潔 三島喜代造	中田
乙種師範科	川本健三 瀧谷正一郎 飯尾千代子 井上タカ 馬場ハル	楠美/眞
	本多美良 布廣君代 尾上喜典 田中のぶ 布市寿恵子	篠
	武藤敏子 森居乙女(温徳霊)(内田幸子)	
[選科]	周信一 久我義俊 山下千壽 加藤忠七 留岡満都 小川縫	不明
	向ミツ 中西福子 太田ぬい 堀田照子 大木重吉 田中豊吉	
	周□西 金井清子 小谷野芳江 岡見恭 大森光世 菅野壽満子	
	山内賀陽子 倉知正緒 丹すぎの 清田俊 中山操 小山その子	
	宇野千草 金子定子 戸張澄子 有動良 今中ミツ 富田リウ	
	張淑英 遲金環 川畑シゲ 野田鈴子 佐藤くに子 江上節子	
	土屋富 古賀操 中村芳子 矢田てい 飯田英子	

[074] 『大正九年 卒業及學年成績』

_

^{171 『}東京音樂學校一覧 従大正七年至大正八年』東京音樂學校、78~82頁。

選科は『東京音樂學校一覧』¹⁷²による。オルガンの教師は、教授:島崎赤太郎(オルガン、和声論、楽式初歩)、助教授:中田章(オルガン、和声論)、講師:楠美恩三郎(オルガン、分教場兼務)、青木シノ(オルガン、分教場勤務)松井壮吉(オルガン、分教場勤務)、教務嘱託:真篠俊雄(オルガン)であった。

表 2-15 1920 (大正 9) 年~1921 (大正 10) 年のオルガン履修生と受持

本科一年	橋南静子	島崎
甲種師範科三年	小川一郎 納尚克	島崎
	原公子	中田
甲種師範科二年	三島喜代造 川井順	中田
甲種師範科一年	黒岩夏	中田
乙種師範科	杉山繁 岡本みつ 笠井小はる 田村つね 武藤梅子 内田幸子 内田さち 馬越久代 丸野サメ 紺野輝 足立和 木村貞子	楠美
	平野ヌイ	
[選科]	久我義俊 長谷基孝 山下千喬 田中豊吉 加藤忠七 温德霊 秋元良助 丸山隆惠 小川縫 長谷川よし 伊藤くめ 武藤愛子 高橋愛 大木重吉 梅澤邦雄 小谷野芳江 岡見恭 加藤律 菅野壽満子 倉知正緒 丹すぎの 清田俊 小山その子 宇野千草 向ミツ 有動良 富田リウ 野田鈴子 江上節子 古賀操 矢内てい 三箇島俶子 岡田千春 岡田高根 杉村文子 山室智子 菊池香代 武島千枝子 藤本さちこ 袁尊素 柴婦手 櫻川ミネ	不明

[075] 『大正十年 卒業及學年成績』

甲種師範科三年の原公子の主科はピアノだが、随意科としてオルガンを履修していた。 甲種師範科二年の川井順も主科はピアノであり、副科としてオルガンを履修している。 甲種師範科のオルガン履修生の数は激減している。選科は『東京音樂學校一覧』¹⁷³による。

オルガンの教師は、教授:島崎赤太郎(オルガン、和声論、楽式初歩、分教場主事)、助教授:中田章(オルガン、和声論)、講師:楠美恩三郎(オルガン、分教場兼務)、青木シノ(オルガン、分教場勤務)、教務嘱託:眞篠俊雄(オルガン)であった。

^{172 『}東京音樂學校一覧 従大正八年至大正九年』東京音樂學校、74~81 頁。

^{173 『}東京音樂學校一覧 従大正九年至大正十年』東京音樂學校、73~81 頁。

甲種師範科三年の小川一郎は、この年のレッスンが週二回だったことと、暗譜奏が行われていたことを回想している¹⁷⁴。

表 2-16 1921 (大正10) 年~1922 (大正11) 年のオルガン履修生と受持

研究科	杉生信雄	島崎
本科二年	橋南静子	島崎
甲種師範科三年	三島喜代造	島崎
	川井順	中田
甲種師範科二年	黒岩夏	中田
乙種師範科	岡本重吉 上野耐之 黒田昭邑 小出永太郎 西尾久美	楠美/中田
	西山晴江 和田こと 片岡舞子 高木栃子 田中キクヱ	
	塚崎一子 鶴見とめ 井上廸 山岡美枝 相浦信 荒谷章子	
	清水ひさ子 毛利千代子 鈴木のぶ(塚田實)(横山祐吉)	
[選科]	井深光一 長谷基孝 山下千喬 中川稲夫 加藤忠七	不明
	野田鈴子 山田秀子 山路壽子 田中豊吉 川嶋與太郎	
	佐藤雄次郎 渡邊利一 福田一 倉知正緒 丹すぎの	
	小山その子 宇野千草 矢内てい 岡田富根 岡田千春	
	高橋愛子 杉村文子 菊池香代 袁尊素 櫻川ミネ	
	澤田富枝 山下茂 藤千代 德澤恵 大竹いさを 葦原フミ	
	西ヨチ 西シバ 池田禮 佐野きく子 矢野その 小倉榮	

[076] 『大正十一年 學年試験書類』

選科は『東京音樂學校一覧』¹⁷⁵による。研究科の杉生信雄は1921 (大正10) 年から1927 (昭和2) 年の間、眞篠俊雄の後任として成城小学校の音楽教師を務めた。

オルガンの教師は、教授:島崎赤太郎(オルガン、和声論、楽式初歩、分教場主事)、 助教授:中田章(オルガン、和声論、分教場兼勤)、講師:楠美恩三郎(オルガン、分教 場兼勤)、教務嘱託:青木シノであった。

表 2-17 1922 (大正 11) 年~1923 (大正 12) 年のオルガン履修生と受持

本科三年	橋南静子	島崎
豫科	黒岩幸四郎	不明
甲種師範科三年	黒岩夏	不明
甲種師範科一年	近藤艶子	島崎

 174 小川一郎「先生の御教授振りを偲ぶ」、『學校音楽』 學校音楽研究會編輯、1934 年 4 月、島崎赤太郎先生追悼號、50頁。

^{175 『}東京音樂學校一覧 従大正十年至大正十一年』東京音樂學校、76~83 頁。

乙種師範科	大友純 荻原範次郎 影山周次郎 高橋悦 多田操 飯田節子 横田ぎん 美添ゆき 高だ織江 中村ミツヱ 中山ちよ 武藤道子 村岡郁子 上田しま 栗山弘子 菊池菊代 富澤志恵 (三谷淑夫)	楠美/中田
[選科]	長谷基孝 加藤忠七 中川則夫 廣岡九一 藤美千代 小暮馨 浅田フミ 田中豊吉 佐藤雄次郎 毛利高棟 小山その 矢内てい 岡田千春 岡田高根 高橋愛子 杉村文子 澤田嘉枝 徳澤惠 大竹いさを 山路壽子 西シバ 池田禮 小倉榮 矢崎その 松島英子 横尾藍子 白井婦美 木村春美 中川愛	不明
第四臨時教員養 成所	岡田守治 千本延隆 富安とみ 五島節子 安中淑 秋元愛子 佐藤ヒナコ 毛利千代子	中田/杉生

[077] 『大正十二年三月 卒業試験書類』

[378] 『自大正十一年度至仝 十五年度 教務関係文書 第四臨時教員養成所』

選科は『東京音樂學校一覧』¹⁷⁶による。この年、甲種師範科はほとんどがピアノ履修となり、学年によってはオルガン履修者が一人もいない例がでてきた。一方で、島崎や中田は和声論の授業で甲種師範科学生との関係が続いていた。この年、甲種師範科二年生への和声課題は中田章の出題で、本科卒業生に対しては島崎から「ヤダソン対位法より」出題されている。

甲種師範科の履修に代わって、第四臨時教員養成所での履修が始まった。1923(大正12)年度に向けてだされた第四臨時教員養成所の募集要項¹⁷⁷によれば、募集人員は20名で、授業料は必要なく、そのうちの若干名には学資金が給付された。オルガンかピアノのどちらかで受験することができ、オルガンの場合は「島崎赤太郎著オルガン教則本第一巻を了へて第二巻中の曲を奏し得る者にして今後進歩の見込ある者」が対象であった。オルガン担当の名前に中田章と杉生信雄の名前がある。「志願者の心得」¹⁷⁸に、「器楽の試験には既修の楽曲中成るべく程度の高いもの一つを選んで其楽曲を持参する事」とある。授業は上野公園内東京音楽学校の校舎および神田区一ツ橋通町の分教場で行われ、練習も同様に両所の指定の場所で行うこととされていた。器楽練習を希望するものには東京音楽学校備付の練習楽器が貸し出された。オルガンの使用料は一学期1.5円、二学期2円、三学期1.5円であった。

^{176 『}東京音樂學校一覧 従大正十一年至大正十二年』東京音樂學校、79~85 頁。

¹⁷⁷ [378] 『自大正十一年度至仝 十五年度 教務関係文書 第四臨時教員養成所』内、「第四臨時教員養成所 募集要項」。

¹⁷⁸ 同前内、「大正十三年四月入学 第四臨時教員養成所生徒入学試験書類」に付録。

オルガンの教師は、教授:島崎赤太郎(オルガン、和声論、楽式初歩、分教場主事)、助教授:中田章(オルガン、和声論)、講師:楠美恩三郎(オルガン、分教場兼勤)、教務嘱託:青木シノ(分教場勤務)であった。

表 2-18 1923 (大正 12) 年~1924 (大正 13) 年のオルガン履修生と受持

本科一年	黒岩幸四郎	島崎/中田
豫科	多田操	島崎/中田
甲種師範科二年	近藤艶子	島崎/中田
乙種師範科	市原濵夫 岩村潔(鳥居善次郎)上村正 田中良三	楠美/中田
	山田正好 佐々木幸穂 北川正義 三谷淑夫 服部道子	
	岡田松枝 脇玉 海福照 川口隆(米原君子)佐藤静子	
	城間ツル 篠崎愛 森谷静子 諏訪千鶴	
第四臨時教員養	岡田守治 千本延隆 富安とみ 五島節子 安中淑 秋元愛子	中田/杉生
成所	佐藤ヒナコ 毛利千代子	
	山本春人 佐藤朋吉 里見良堯 廣岡九一	杉生

[080] 『大正十三年 學年試験成績』

[078]『大正十二年三月以降卒業迄ノ分(第一面教員養成所生徒ノ分) 第四臨時教員養成 所學年試験書類』

師範科学生の減少の一方で、前年より始まった第四臨時教員養成所での履修生の割合 が多くなっている。選科から第四臨時教員養成所へ進むものもあった。

表 2-19 1924 (大正 13) 年~1925 (大正 14) 年のオルガン履修生と受持

本科二年	黒沼幸四郎	島崎
本科一年	多田操	島崎
甲種師範科三年	近藤艶子	島崎
乙種師範科	岩村潔 鳥居善次郎 黒田進 山根良一 國眼一郎 下野米	中田/杉生
	石原龍 千木良美佐 渡邊文子 土屋よし 安武田鶴子	
	(山田さざれ)増成菫 古林千鶴 阿部ハル 鮎沢八重子	
	木村利 木村芳枝 篠崎愛 須山壽々子 須子久子	
[選科]	粗部為男 山北佐平 阿部ムメ 持山嘉造 中島秀哉	不明
	福田襄三 福島常太朗 岡島誠三 上野恒三郎 山路壽子	
	木村春美 島津芳 折橋治代 名倉久子 後藤百合子	
	小野貞 穂澤淸 市川みち 阿部ムメ 平賀のぶ江 海福テル	
	太田歌子	
第四臨時教員養	服部道子 栗山弘子 山本浩良 出石勝子	杉生/眞篠
成所		
台湾委託生	陳氏招治	不明

- [082] 『大正十四年 學年試験成績』
- 〔081〕『大正十三年四月入学 第四臨時教員養成所生徒入学試験書類 學年試験(第三回生徒)』

選科は『東京音樂學校一覧記載』¹⁷⁹による。台湾委託生は臨時教員養成に含まれる。 オルガン教師は、教授:島崎赤太郎(オルガン、教頭、分教場主事)、助教授:中田章 (オルガン、和声論)、教務嘱託:橋南静子(オルガン、分教場勤務)、杉生信夫(オルガン、分教場兼勤)であった。

表 2-20 1925 (大正 14) 年~1926 (大正 15) 年のオルガン履修生と受持

本科三年	黒岩幸四郎	真篠
本科二年	多田操	眞篠
乙種師範科	川原勝久 中村英千代 上島仲郷 岡田正惠 渡邊一 片桐セツ 吉川三五子 向谷節 倉知壽々枝 松尾幽子 船橋禄江 小口重代 江副キク 溝淵八重子 水谷てる子 平田マサコ	島崎/眞篠 中田/杉生
	森本志づ 鈴木美庭	
[選科]	粗部為男 鈴木宗治 國眼一郎 阿部ムメ 小鷹ミサヲ 松井朝 持山嘉造 上野恒三郎 三谷淑夫 安藤榮 鳥居善次郎 山根良一 佐藤禎次 福富啓泰 山田吉次 浦田末太郎 木村春美 折橋治代 德澤清 後藤百合子 市川みち 島富海 小栗初枝 地引とし江 篠崎愛 高藤民子 田中萬壽子 鮎澤八重子 松井朝 草野恭 葛木操	-
第四臨時教 員養成所	服部道子 栗山弘子 山本浩良 出石勝子 陳氏招治	-

- [083] 『大正十五年 學年試験成績 東京音樂學校』
- [378] 『自大正十一年度至全十五年度 教務関係文書 第四臨時教員養成所』

甲種師範科の中にオルガン履修者が一人もいない。選科は『東京音樂學校一覧』¹⁸⁰による。オルガン教師は、教授:島崎赤太郎(オルガン、和声論、教頭、分教場主事)、助教授:中田章(オルガン、和声論、分教場兼勤)、教務嘱託:橋南静子(オルガン、分教場勤務)、杉生信雄(オルガン、分教場兼務)、真篠俊雄(オルガン)であった。

^{179 『}東京音樂学校一覧 従大正十三年至大正十四年』東京音樂学校、84~92頁。

^{180 『}東京音樂學校一覧 従大正十四年至大正従五年』東京音樂學校、85~95頁。

大正期は、本科器楽部のオルガン専攻生が 0~3 人で推移した。学年ごとでは最大が 2 人で、3 学年合わせても 1 人しかいないという年もあった。明治期に比べてオルガン履修者は全体的に減少している。明治期にはほぼ全員が履修した甲種師範科は、次第にオルガン履修生よりもピアノの履修生のほうが多くなり、大正後期には学年のオルガン履修生が 0 人となる年もあった。代わって、乙種師範科のオルガン履修生が多くなり、一時は全員が履修している。選科のオルガン履修生は 30~40 人を数えるが、多年度にわたり長く履修している学生が多い。総数でみると、まだかなりの数の履修生を抱えてはいるが、全体的には減少傾向にあったことがわかる。

3-2 大正期のオルガン受持教師の変遷

第二章 第三節 3-1 「大正期のオルガン履修生と受持」で確認した受持教師の部分を、 年度ごと、科ごとに表にしたものが以下である。

表 2-21 大正期における各科受持教師の表

	研聴	本四	本三	本二	本 一		甲師2	甲師1	乙師	豫科	選科	四臨
T1-2			島崎	0	島崎	島崎	島崎 楠美	楠美	楠美/中村	-	-	
T2-3			島崎	島崎	0	島崎	楠美	楠美	楠美 中田	?	青木	
T3-4			島崎	0	島崎	?	?	楠美	楠美 中田	0	-	
T4-5			0	島崎	0	島崎	島崎 楠美	楠美	楠美 中田	?	?	
T5-6			島崎	0	島崎	島崎	楠美	楠美	楠美 中田	?	-	
T6-7			0	島崎	島崎	島崎	楠美	中田 真篠	中田 眞篠	?	-	
T7-8	島崎		島崎	島崎	?		楠美 眞篠	中田 楠美	楠美 楠美 中田	0	<u></u>	
T8-9	-		島崎	-	-	島崎	中田	中田	真篠 楠美	-	-	
T9-10			0	0	島崎	島崎 中田	中田	中田	真篠 楠美 中田	0		
T10-11	島崎		0	島崎	-	島崎 中田	中田	0	楠美 中田	0		
T11-12	-		島崎	0	0	.:	0		楠美 中田	?		杉生
T12-13			0	-	島崎 中田	0	島崎 中田	-	楠美 中田	島崎 中田		中田 杉生 杉生
T13-14			0	島崎	島崎	島崎	-	-	中田 杉生	0	<u> </u>	杉生 眞篠
T14-15			眞篠	眞篠	0	0			島崎 眞篠 中田 杉生	0		

T=大正

大正期は明治期に引き続き、オルガン教授の中心は島崎赤太郎であった。1920 (大正 9) 年まで、本科器楽科、甲種師範科三年生はすべて、島崎が受持っている。この時期、島崎に次いでオルガン教授に大きく貢献したのは中田章である。中田は1907 (明治 40) 年に師範科を卒業後、研究生として在学しながら授業補助に加わり、明治期すでにオルガン指導を始めていたが、1914 (大正 3) 年からは助教授となり、1915 (大正 4) 年からは島崎の担当である和声論の授業も分担した。明治期に師範科を広く受持っていた楠美恩三郎と中村

芳子が、大正期にその職務から退くのに代わって(中村は大正 3 年まで、楠美恩三郎は大正 12年まで師範科生にオルガンを教えた)、中田が師範科指導の中心となった。

1917 (大正 6) 年からは、本科器楽科を卒業した真篠俊雄が研究生に在籍しながら授業補助に加わり、オルガンの指導を始めている。真篠は 1920 (大正 9) 年からベルリンに留学するのに伴い、いったん東京音楽学校の教授活動から離れているが、1924 (大正 13) 年帰国後は、再び東京音楽学校のオルガン教授陣に加わり、次第に中心的な役割を担うようになる。真篠の活動については昭和期に述べる。

分教場の選科学生の指導は明治期から引き続き、卒業生の青木シノ、松井壮吉が行っていたが、1923 (大正12) 年からは、同じく卒業生の橋南静子と杉生信雄に引き継がれた。

3-3 中田章の活動と関連資料

3-3-1 中田章の演奏活動

『東京芸術大学百年史』¹⁸¹には中田章の履歴が掲載されている。それによれば、中田章は 1886 (明治 19) 年に東京四谷区で生まれ、1900 (明治 33) 年に早稲田中学校に入学、1903 (明治 36) 年に同校を卒業し、翌 1904 (明治 37) 年に東京音楽学校の甲種師範科に入学した。1907 (明治 40) 年に同科を卒業すると、私立高輪中学校唱歌授業嘱託になると同時に、東京音楽学校の研究科に入学、同年 7 月に開設された師範学校中学校高等女学校等夏期講習会講師補助を命じられている。1908 (明治 41) 年から 3 年間、韓国皇太子英親王の唱歌教授嘱託を受けている。1909 (明治 42) 年、東京音楽学校の研究科卒業と同時に同校のオルガン講師補助嘱託となり、以後東京音楽学校のオルガン教師を務めている。

東京音楽学校の甲種師範科在学時は、一年、二年次は楠美恩三郎に、三年次からは、 留学からかえってきた島崎赤太郎にオルガンの指導を受けた。学生時代の演奏記録には、 以下の二つの演奏会がある¹⁸²。

1906 (明治39) 年1月27日、28日

モツアルト誕生記念音楽会(学友会) Lemmens: Cantabile ハルモニウム獨奏

1907 (明治40) 年3月23日

卒業式 リヒテル:フオルスピール 原田彦四郎とのハーモニユーム合奏

一、二年次の受持であった楠美恩三郎は、1901 (明治 34) ~1904 (明治 37) 年に東京 音楽学校でオルガンを教えたフランス人教師のペリーの影響をうけ、その後のオルガン 教授でフランスのレパートリーを踏襲している。中田はその恩恵を受けたと考えられる。

¹⁸¹ 東京藝術大学百年史刊行委員会編『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第二巻』東京:音楽之友社、2003 年、1324~1325 頁。

¹⁸² 東京芸術大学百年史編纂委員会編『東京芸術大学百年史 演奏会篇 第一巻』東京:音楽之友社、1990年 掲載の演奏会記録による。

1904 (明治 37) 受入れの、Rodolphe Fils & Debain 社製ハルモニウムを用いて演奏している。

甲種師範科卒業と同時に研究生に籍をおきながら、以下の教授活動を行った。

1908 (明治41) 年~ 授業補助としてオルガンを担当分教場兼務

1910 (明治43) 年~ 講師補助として、オルガンと音楽通論を担当

1912 (明治 45) 年~ 講師補助として、オルガン、唱歌、寫語 [譜?] を担当

1913 (大正2) 年~ 助教授としてオルガンを担当

1915 (大正4) 年~ オルガンに加えて和声論を担当

また教師としての活動と同時に、積極的な演奏活動を行っている。教師期の演奏記録には以下のものがある¹⁸³。

1912 (大正元) 年 12 月 14 日

学友会第三回土曜演奏会 ラインベルゲル:ソナタ(イ短調) 風琴獨奏

1914 (大正3) 年9月28日

第一回通俗演奏会 レムメンス:ファンファール 風琴獨奏

同年 12月6日7日

第29回定期演奏会 バハ、グノー:メディテーション ピアノ、オルガン及弦楽

1915 (大正4) 年6月19日

学友会春季演奏会 ブロージッヒ:ファンタジー、作品21 オーガン獨奏

同年 11月21日

¹⁸³ 東京芸術大学百年史編纂委員会編『東京芸術大学百年史 演奏会篇 第一巻』東京:音楽之友社、1990年 掲載の演奏会記録による。 学友会第一回特別演奏会 バッハ: 幻想曲と追復樂 大風琴獨奏

同年 12月23日~29日

御大礼奉祝演奏会 ゲオルゲベルグ:フーガ 風琴獨奏

ジョンベネット:フーガ 風琴獨奏

本居長世-弘田龍太郎:めでたき卯年 洋琴三重奏風琴附

1916 (大正5) 年11月16日

皇后行啓演奏会 レムメンス:祝典前奏曲 オールガン獨奏

1919 (大正8) 年5月31日、6月1日

第 36 回定期演奏会 シヤルヴェンカ:ヴェニスに於ける夕の祝典 ピアノ及オルガン伴奏附女声合唱

1920 (大正9) 年5月9日

楽友会第三回特別演奏会 セバスティアン バッハ:ニ長調進走曲

:ハ短調トゥリオ 風琴獨奏

1925 (大正 14) 年

天長節奉祝演奏放送 メンデルゾーン:オルガン・ソナタ中のアダージォ バッハ:プレリュード及フーゲ オルガン獨奏

中田章の東京音楽学校での演奏回数は、残っている記録の中では大正期で最も多いものである。御前演奏など、学校を代表して演奏する機会もあり、大正期東京音楽学校でのオルガン演奏を牽引していたことがわかる。

外部での演奏の記録もある。のちに、東京音楽学校に寄贈されるアボット&スミス社製のパイプ・オルガンは、もともと、日本における初の私立音楽ホールである南葵音楽堂に設置されたものであるが、その完成記念の音楽会でオルガンを演奏したのが中田章であった。1920 (大正 9) 年 11 月 22 日に行われたパイプ・オルガン完成披露の御前演奏

会で、「バッハ:プレリュードニ短調」と、「ラインベルガー:ソナタイ短調・間奏曲」を演奏している¹⁸⁴。また、同年の12月11日に行われたベートーヴェン生誕150年紀念音楽会に参加している。この日のプログラムにはオルガンの独奏曲はないが、伴奏で参加したと思われる¹⁸⁵。

オルガニストとして内外で活躍し、島崎赤太郎の後継として将来を嘱望されたと思われるが、結核を患い、1931(昭和6)年に46歳の若さで没している¹⁸⁶。

-

¹⁸⁴ 徳川頼貞『薈庭楽話』東京:中央公論社、2021、160~166 頁。

¹⁸⁵ 演目は一エグモント序曲/二エグモントのための音楽 二曲「太鼓は響く」「喜びに満ち、悲しみに満ち」/三 交響曲第三番 / 四ピアノ協奏曲第三番 ハ短調 作品 37 / 五 悲歌「生けがごとく 安らかに」(四重奏)作品 118。指揮グスタフ・クローン、演奏は東京音楽学校の職員、卒業生、海軍軍楽隊からなる管弦楽団に音楽学校男女生徒の合唱団。ソプラノ長坂好子、ピアノ小倉末子、オルガン中田章。中田は二と五に参加したと考えられる。村上紀史郎『音楽の殿様・徳川頼貞 1500 億円の<ノーブレス・オブリージュ>』東京:藤原書店、2012、131 頁。

¹⁸⁶ 牛山剛『夏がくれば思い出す 評伝 中田喜直』東京:新潮社、2009、23 頁。

3-3-2 中田章の所蔵楽譜

中田章の蔵書は震災および戦災でそのほとんどが失われてしまったそうだが、今回ご子孫のご協力により、筆写譜を含む楽譜のコレクションが若干数残されていることが明らかになった¹⁸⁷。詳細な書誌情報については、付録 資料⑤「中田章所蔵楽譜リスト」に掲載した。

個々の筆写譜

Jean Baptiste Maillochaud (1840-1928): Offertoire

Sigfrid Karg-Elert (1877-1933): Erste Sonate Op. 36

Sigfrid Karg-Elert: Passacaglia Op. 25

Johann Sebastian Bach (1685-1750): Prelude [平均律クラヴィーア曲集]

Cyrill Kistler (1848-1907): Große Fantasie

Richard Mandl (1859-1918): Hymnus an die aufgehende Sonne

Arthur Van den Plas (?-?): Toccata

作者不明: Chœur et Récitatif No. 5

作者不明: Quatuor No. 9

筆写譜を連ねた音楽帳

表紙には「オルガン名曲集 中田章寫 中田一次藏 F. J. Haydn」とある。F. J. Haydn 以外の文字については、中田章の長男、中田一次氏によって書きこまれたと考えられ る。おそらくハイドンの曲の筆写譜に他の筆写譜を挟みこみ、あとから全体を綴った ものとみられる。曲集の中には、

バッハの8つの小プレリュードとフーガよりト短調とへ長調の二曲

ギルマンのマドリガルとカンツォネッタ

リンクのペダル練習曲集中の曲

作者不明プレリュード

ハイドンの四重奏曲「皇帝」の緩徐楽章オルガン版

¹⁸⁷ 中田基彦氏:中田一次(中田章・長男)ご子息、所蔵。2021年6月より現物をお預かりし、調査させていただいている。

が収められている。いずれも「Takai. Musikalie」の五線譜に書かれている。ペダルを 用いる曲も含め、すべて二段譜でかかれているが、大譜表内にはペダルパートもその ままの音で書きこまれている。ペン書きの筆写譜に、鉛筆で指使いがところどころに 書込まれている。

印刷譜

Rudolf Schartel (1884-1930): Aus Wald und Feld

Reinhard: Studien

Bach-Busoni: Orgel-Choralvorspiele

オーガン曲撰 中田章撰抄 バッハ ファンタジート長調の一部

このほかに中田家には Peters 版バッハ全集のうち、1 巻から 6 巻までと 8 巻が残っているとのことである¹⁸⁸。

また、本文 第三章 第三節 3-3-3「眞篠文庫: 眞篠俊雄関連楽譜群」で後述する眞 篠文庫中に一冊、中田印の入っているものがあった¹⁸⁹。







[左下の中田印]

¹⁸⁸ 中田基彦氏談。2021年8月6日メールにて。

^{189 〔}真篠文庫 7〕 Sigfrid Karg-Elert: Zweite Sonate b-moll Op.46 Enharmonische Fantasie und Doppelfuge. Berlin: Carl Simon Musikverlag, 1913 C. S. 3279、本文 258 頁。

筆写譜の詳細は以下である。

Jean Baptiste Maillochaud (1840-1928) : Offertoire

6ページに渡って共益商社の五線譜に筆写され、紐でつづられている。

1911 (明治 44) 年 5 月 3 日から 10 日にかけて甲信越方面で行われた学友会春季演奏旅行男子部の演目にある「マイロッヒョーのオッファートイレオヴソルティ」(演奏者不明) はこの曲のことであったと考えられるが、東京音楽学校の蔵書の中に、この筆写のもとになった原譜は、現在のところ見つけられていない。



写真 2-7 中田筆写譜 Maillochaud: Offertoire

〔中田所蔵楽譜1〕190

¹⁹⁰ 巻末付録『資料⑤ 中田章所蔵楽譜リスト』の整理番号による。

Sigfrid Karg-Elert (1877-1933) : Erste Sonate

神田文房堂の五線帳に15頁に渡り筆写。東京音楽学校が1908 (明治41) 年に受入れた楽譜 [OH-solo 201] と譜割りが一致している。Karg-Elert: Erste Sonate は1915 (大正4) 年3月に甲種師範科卒業生の白坂ミイが卒業式で演奏しているほか、課題にもなっている。その後のオルガン名曲集などにも多く取り上げられており、人気のレパートリーだったことがうかがえる。



写真 2-8 中田筆写譜 Karg-Elert: Erste Sonate

〔中田所蔵楽譜 4〕

細かい指示文まで丁寧に筆写されている。

Karg-Elert: Passacaglia Op. 25

神田文房堂の五線帳全 12 頁中、はじめの 9 頁に筆写されている。東京音楽学校では Karg-Elert: Erste Sonate と同じタイミングで 1908 (明治 41) 年に [OH-solo 200] Karg-Elert: Passacaglia Op. 25 が 受入れられた。Karg-Elert: Erste Sonate とともに人気があった作品であり、1913 (大正 2) 年に甲種師範科三年だった草川友忠が卒業式で演奏している。



写真 2-9 中田筆写譜 Karg-Elert: Passacaglia

[中田所蔵楽譜 5]

同じ冊子の最後の 3 ページには、バッハの平均律クラヴィーア曲集第一巻嬰ハ短調の前奏曲 BWV849 の筆写譜が載っている。ペダルパートが足されたオルガン版で、指番号も丁寧にふられている。



写真 2-10 中田筆写譜 Bach: Preludio

〔中田所蔵楽譜 6〕

バッハのクラヴィーア用の曲に効果的なペダルパートが付してある。本来手鍵盤の みで演奏する曲をペダル付のオルガンで演奏していたことを示す興味深い例である。 東京音楽学校の蔵書の中に原譜がある可能性が高いが現時点では見つけられていない。 ペダルパートの付与が中田独自のアレンジである可能性もある。

Cyrill Kistler (1848-1907): Große Fantasie

共益商社の五線譜に筆写、途中まで(4 頁)が残っている。あと 2 頁あったはずだが、欠落している。もとになった楽譜は東京音楽学校で 1908(明治 40)年に受入れた [OH 165] Kistler: Große Fantasie と思われる。[OH 165] は激しいめくりの跡があるほか、指使いや音名が付され、よく使用されていたことがうかがえるものである。1912(明治 45)年 4 月に甲種師範科三年であった草川友忠が、千葉成田方面の学友会演奏旅行で演奏しているほか、課題にもよく出された人気曲である。



写真 2-11 中田筆写譜 Kistler: Große Fantasie

〔中田所蔵楽譜 8〕

鉛筆書きの指使いが、ところどころに見られる。

Richard Mandl (1859-1918): Hymnus an die auf gehende Sonne 共益商社の五線譜に5頁にわたり筆写されている。





写真 2-12 中田筆写譜 Mandl: Hymnus an die aufgehende Sonne

[中田所蔵楽譜9]

筆写自体はペン書きであるが、後から書込まれたとみられる鉛筆書きのペダリングがある。曲の冒頭には「Vox Ang / Swell to Pedal / echo Gamba」とのレジストレーションが鉛筆書きで書込まれている。これは、南葵音楽堂のアボット&スミス社製のパイプ・オルガンのものである。演奏会の履歴は確認できなかったが、この曲の演奏をパイプ・オルガンで行ったと考えられる。

Arthur Van den Plas (?-?): Toccata

共益商社の五線譜に4頁にわたり筆写されている。各ページ大きく破損し、中段の後半がかけてしまっている。この曲は東京音楽学校で1909(明治42)年9月に購入した楽譜 [OH 212 1/12] に掲載されているほか、昭和期の課題にもみられる。



写真 2-13 中田筆写譜 Van den Plas: Toccata

〔中田所蔵楽譜 7〕

これらの筆写譜はペン書きで書き写されたあとに、鉛筆で、指使いや強弱記号、ストップの表記などが書込まれている。丁寧に書きうつされた楽譜はいずれもよく使いこまれ、筆写ののちに実際に演奏等に用いられたことがわかる。

また、中田章は『オーガン曲撰』というピース楽譜のシリーズを共益商社から出版していた。中田家にはこのシリーズのうちの第貮編「バッハのフーガト長調¹⁹¹」の表紙と中身の半分が残されているのみだったが、後述する眞篠家に他の 2 冊が完全な形で残っていた。その裏表紙から、このシリーズの他のラインナップを知ることができた。それによると、中田章オーガン曲撰の全容は以下である。

中田章先生撰抄 オーガン曲撰 共益商社書店より出版。第四編と第五編はいずれ も 1922 (大正 11) 年に初版、1924 (大正 13) 年の時点で三版を数えていた。

. .

¹⁹¹ Bach: Fuga G-dur BWV576

第一編	英國國歌 "ヴァリエーシャンズ"	リンク
	Variations of God Save the King	Ch. H. Rinck
第二編	フーグ	バーハ
	Fugue in G Major	J. S. Bach
第三編	フュネラルマーチ	バロンチャード
	Funeral March	Baroncherd
第四編	インターメッツォー	ラインベルゲル
	Intermezzo	J. Rheinberger
第五編	悲哀なるフーゲ	ディーネル
	Elegische Fugue	O. Dienel
第六編	I. プレリュード (前奏曲)	リンク
	Prelude	Ch. H. Rinck
	Ⅱ. ポストリュード (後並奏)	リンク
	Postlude	Ch. H. Rinck
第七編	I. ローマンツェ	マイアベーア
	Romanze	G. Meyerbeer
	Ⅱ. テーマ・ウント・ヴァリエションネン	ハイドン
	Thema und Variationen (aus dem Kaiserquartett) J. Ha	ydn

これらは、明治期の後期から大正期にかけて東京音楽学校で多く演奏されていた曲と合致する。

中田章所蔵楽譜には、東京音楽学校受入れの楽譜を筆写したと思われるものが複数 みられた。また、パイプ・オルガンでの演奏する際の書込みがみられたほか、リード・オルガンやハルモニウムで演奏する曲目もあり、中田自身の演奏楽器が多岐にわたっていたことを示している。中田の選曲による楽譜の出版は、東京音楽学校で課題に出されよく演奏された曲が、学外にむけて供されていくプロセスの一端と見ることができる。

第四節 大正期の東京音楽学校におけるオルガンの課題の変遷

大正期の課題のうち、残されているものはほとんどが島崎赤太郎のものである。多くの 履修生をかかえていた島崎の課題からは、大正期の課題の傾向を知ることができる。年度 ごとにみていく。

表 2-22 1913 (大正 2) 年の課題

学年			課題			
本三	小原知孝	島崎	Reinecke: Kindesträume / Tonleiter B-dur			
本一	和田央	島崎	Reinhard: Sonatine in F-dur / Tonleiter Es-dur			
	津田修一	島崎	Reinhard: Studien 1 No. 24 / Tonleiter a-moll (melodisch)			
	澤ひさ	島崎	Reinhard: Studien 1 No. 18 No. 19 / Tonleiter A-dur			
甲三	牛山充	楠美	Reinhard: Allegro aus der Sonatine in a-moll / Tonleiter B-dur			
		島崎				
	草川友忠	島崎	Karg-Elert: Passacaglia in es-moll / Tonleiter gis-moll			
	阿部みさを	島崎	Bach: Phantasie et Fuga in a-moll / Tonleiter: As-dur			
	木岡信	島崎	Bibl: Fuge aus der Suite / Tonleiter F-dur			
	富永嵯峨子	島崎	Reinhard: No. 46 in den Studien II			
甲二	小倉章蔵		Lemmens: Fughette / Tonleiter Es-dur			
	絹笠知恵之	島崎	Wanaus: Introduction et Fugue in h-moll / Tonleiter A-dur			
乙師	-	中村	一、楠美氏オルガン軌範中 125番 126番 136番 137番			
			二、ペリー氏「オルガンの友」中3番 10番 13番 14番			
			18番			
			三、Archives de L'organiste a. Messe b. Sortie			
			四、J. Lemmens a. Fughette			

[102] 『大正二年 卒業及學年成績』

本=本科 甲=甲種師範科 乙=乙種師範科

音階および、「Reinhard: Sonatine」『Reinhard: Studien』など、明治期から続けて課題に出されているもののほか、以下のレパートーが加わった。

「Reinecke: Kindesträume」

[Org-sol 37] Carl Reinecke: Kindesträume Op. 202

楽語の意味が丁寧に書込まれている。

「Karg-Elert: Passacaglia in es-moll」

[OH-solo 200] Siegfried Karg-Elert: Passacaglia Op. 25

校正用の書込み192があるほか、かなり使われていた様子がわかる。

Bach: Phantasie et Fuga in a-moll

[Org-Ped 1 9/9] = [OH 223 1/3] Bach : Fantasia e Fuga a-moll BWV561 指使い、区切りなどの書込みがある。使用感が目立つ。

Bibl: Fuge aus der Suite

[OH 186] Rudolf Bibl: Suite Op. 41 Praeludium, Gavotte, Menuetto, Courante e Fuga 指使い、区切り、スラー、強弱の書込み。よくめくられた跡がある。

[Lemmens : Fuguette]

[OH 49] [OH 154] Lemmens: Morceaux pour Orgue-Mélodium No. 3 Fuguette

Wanaus: Introduction et Fugue in h-moll

[OH 184 1/2 2/2] Jean Wanaus: Introduction et Fugue (h-moll) pour Harmonium Op. 12 同本が二冊。いずれも、音をかえる書込みと指使いが書込まれている。よく使用された 印象。

この年の課題にみられる曲は、楽譜の使用感が強く感じられる。

表 2-23 1914 (大正3) 年の課題

島崎 音階 ほ長調 津田修一 楽曲 ラインハルド作: い短調ソナティネ (第一楽章) 和田央 島崎 音階 變い長調 楽曲 バハ作パルティタ中の第九 甲三 小倉章蔵 島崎 音階 変い長調 ラインハルド: い短調ソナティネ中のアンダンテ、アラ、サ ラバンデ 絹笠知恵之 島崎 音階 に長調 ラインハルド:は長調ソナティネ (第壱楽章) 乙師 中村 楠美氏オルガン軌範中40番 50番 53 番 59番66番 [臨時試験]

192 海外の出版譜をもとに、国内版が出版されることがあった。その際のものとみられる、通し番号の付記 や、頁番号の訂正などがみられる。

-	中村	楠氏「オルガン曲集」「	中	1, 2, 3, 5, 12, 13, 15, 17
		楠氏「オルガン軌範」「	中	136

- [129]『大正三年 入學試験成績』 [乙種師範科・臨時試験分]
- [104] 『大正三年 卒業学年試験成績』

1915 (大正4) 年の課題は不明。

表 2-24 1916 (大正 5) 年の課題

本三	真篠俊雄	島崎	Karg-Elert: Fuga aus der Sonate	
甲三	厨二郎	島崎	Bach : Passacaglia in c-moll	
	新藤武	島崎	Guilmant: Canzonetta	
	岩田艶子	島崎	Bach : Partita in f-moll	
	大森トモ	島崎	Kistler: Große Fantasie	
	斎藤きみ	島崎	Bach : Fantasia e Fuga in a-moll	
	平松すみ	島崎	Bach : Partita in f-moll	
甲二	宮川政城	島崎	Lemmens: Marche Triomphale	

[070] 『大正五年 入學卒業試験成績 東京音楽学校』

「Karg-Elert: Fuga aus der Sonate」

[OH-solo 201] Karg-Elert: Erste Sonate h-moll für Harmonium Op. 36

三楽章 Fuga には、指使い、フェルマータ、区切りの印がある。全体的によく使われている。

「Bach: Partita in f-moll」

[Org-Ped 1 5/9] [消失]

Partite diverse sopra: Christ, der du bist der helle Tag (Manualiter) BWV766

調性の表記によって曲を特定できるが、楽譜は消失している。

1917 (大正6) 年の課題は不明。

表 2-25 1918 (大正 7) 年の課題

本二	橋本ケシ	島崎	Romanze aus der Sonate Op. 142 von Rheinberger
本一	杉生信雄	島崎	Sonatine in C-dur von Reinhard
甲三	小川研一	島崎	Sonatine in F-dur von Reinhard

井上武士	島崎	Passacaglia in c-moll von Bach-Zellner
長谷川静	島崎	Canzonetta in F-dur von Guilmant
亀ケ森イサヲ	島崎	Partita in c-moll von Bach
鈴木イト	島崎	Fuga in a-moll von Bach

[072]『大正七年 卒業及學年成績』

[Romanze aus der Sonate Op. 142 von Rheinberger]

該当楽譜は二冊ある。

[OH 182 2/6] Rheinberger: Romanze (Op. 142)

明治 41 年受入れ。ソナタからの抜粋による 6 冊セットのうちの一つ。Harmonium 版。 めくり 跡と レジストレーションの書きこみ (Melodia Seraphone Viol-dolce Diapason Diapason-dolce 途中で Flute G D. Dolce) がある。

[OH 242] Rheinberger: Sonate No. 9 b-moll Op. 142

大正元年にまとめて受入れられた、島崎のサインが入った楽譜の中の一冊。ペダル付の 三段譜。二楽章 Romanze には、青い字でペダル記号、赤で区切りの印等、カラフルな書込 みが見られる。

これら二冊の存在からは、この曲がペダル付、ペダルなしのどちらの形態でも演奏可能であったと考えられる。

Partita in c-moll von Bach

[Org-Ped 1 5/9] [消失]

Partite diverse sopra: O Gott, du frommer Gott BWV767 Manualiter。調性の表記によって 曲を特定できるが、楽譜は消失している。

Fuga in a moll von Bach

[Org-Ped 1 1/9] = [OH 223 1/3] [OH276 9/9] Bach: Fantasia e Fuga a-moll BWV561 のフーガ部分の可能性がある。[Org-Ped 1 1/9] = [OH 223 1/3] には、指使い、フレーズの区切り、スラーのほか、ペダルの書込みと、ペダル部分を左手に移す書込みの両方が見られる。 [OH 276 9/9] にはカプラー指示の書込みがある。

もう一つの可能性としては、[Org-Ped 1 2/9] [消失]の Praeludium et Fuga a-moll BWV543 Fuga 部分、あるいは [OH 146 1/2] Liszt: *Bach Orgel-Compositionen für Piano Heft I* 掲載の

Bach: Praeludium und Fuga a-moll の手鍵盤版が考えられる。Liszt 編曲版は書込みが非常に多い。手鍵盤編曲であるが、逆に I II Ped などペダル付で演奏することを想定していると思われる書込みもある。

いずれにせよ、バッハの曲は該当楽譜が複数あるため曲の特定が困難であるとともに、それが手鍵盤のみで行われたか、ペダルを伴って行われたかを推測するのは難しい。

Passacaglia in c-moll von Bach-Zellner

Zellner 版のパッサカリアは手鍵盤だけで演奏できるように編曲されたものである。この課題はペダルがなかったことが確実である。Zellner 版のバッハの楽譜は現存する中に確認できなかったが、震災で焼失した〔OH 185〕バハ:パッサカグリア [消失] がそれであった可能性が高い。

1919 (大正8) 年の課題は不明である。

表 2-26 1920 (大正9) 年の課題

本三	杉生信雄	島崎	Rheinberger: Romanze aus der Orgelsonate	
甲三	今吉惺	島崎	Guilmant: Canzonetta	
	下總覺三	島崎	Bach : Passacaglia	
	石岡ヲサメ	島崎	Reinhart: Sonatine in F-dur	

[074] 『大正九年 卒業及學年成績』

1921 (大正 10) 年から 1926 (大正 15) 年までの課題はわからない。 1925 (大正 14) 年の学年試験成績書類¹⁹³には、本科二年、本科一年、甲種師範科三年の三

名の試験成績に Harmonium と書かれているだけである。

大正期の課題は明治期からの流れに加えて、Rheinberger や Karg-Elert の曲が新たに加わっているのが注目される。課題とされた曲は、いずれも楽譜の使用感が目だっていた。明治 40 年代に受入れた楽譜から多く出題されているが、それらは島崎が留学から帰ってきてから新たに購入したものと考えられる。また、島崎のサインが入った本からの出題もみられた。島崎の留学の影響がここに現れているとみることができる。

-

^{193 〔082〕 『}大正十四年 學年試験成績』

この頃に出された課題は、のちに一般向けに出版されているケースが多い。東京音楽学校での実績を踏まえて出版された可能性が高い。

第五節 大正期の東京音楽学校における演奏の記録

大正期東京音楽学校での演奏会の記録は、『東京芸術大学百年史 演奏会編 第一巻』 194から得られる。大正期にオルガンが関わった演奏会は、「卒業式」と「学友会」が中心で、ほかに「定期演奏会」「奉祝演奏会」「皇后行啓演奏会」と、「通俗演奏会」「演奏旅行」、そして「選科生徒演奏会」があった。

ほとんどは東京音楽学校内の奏楽堂で開催されたが、「奉祝演奏会」「演奏旅行」が地方での演奏であり、「選科生徒演奏会」は神田一ツ橋分教場で行われた。付録の表には、合奏内でのオルガンについても掲載したが、ここでは、オルガンのみの演奏についてとりあげる。

表 2-27 大正期におけるオルガン演奏

	研究/講師/教授	専修 器楽	師範	選科
Т1	ラインベルゲル:ソナタイ短調 (中田章)		バッハ:パルティータ(磯江清)	
Т2	レムメンス:ファンファール(中田章)		シルドクネヒト:オーサンクティシマ(櫻井 みつ)	
			バハ:短イ調フアンタジーア及フーガ(木 岡信)	
			カルクーエレーアー: 短變ホ調パッサ カーリア(草川友忠)	
			レムメンス:インヲ"ーケーション (岡本新一)	
Т3		バッハ:パルティータ(和田央)	ベルグ:フーガ エ"ルネー:フィナーレ(白坂ミイ)	
		ラインハルト:ソナティーネい短調 作品38 (真篠俊雄)		
T4	ブロージッヒ:ファンタジー、作品21 (中田章)	バッハ:パッサカーリア(眞篠俊雄)	カルクーエレーアト:ろ短調ソナタ(第一番作品36)(白坂ミイ)	
	バッハ:幻想曲と追復樂(中田章)	バッハ:ハ短調パッサカーリア (眞篠俊雄)		
	ベルグ:フーガ ベネット:フーガ(中田章)			
Т5	レムメンス:祝典前奏曲(中田章)	リンク:英国国歌の主題とその變奏曲 (眞篠俊雄)	バハ:ハ短調パッサカーリア(ツェルナー版)(厨二郎)	(山口心子)
			シルドクネヒト:おゝ、いとも聖きものよ(變 奏曲) (井上武士)	マイアベーア:歌劇『フーゲノット教徒』 中の一節、『貴婦人』(川崎隆子)
Т6		バッハ:ハ短調二重フーガ(レグレンツィ の主題) (真篠俊雄)		
Т7	ラインベルガー: 奏鳴樂 イ短調作品98 (眞篠俊雄)		バッハツェルナー編:パッサカーリア(井 上武士)	
Т8	バッハ:ニ短調トッカータ及フーガ (眞篠俊雄)		ギルマン:カンツォネッタ(下總覺三)	
			ギルマン: 諧謔曲 作品31 (下總覺三) Rinck:Variations on The English Hymn (小川一郎)	
Т9	バッハ:ニ長調進走曲 バッハ:ハ短調トゥリオ(中田章)		ギルマン:交響楽的諧謔曲(小川一郎)	
T10			ギルマン:ソナタ、プレリュード、アダジオ、フーゲ(三島喜代造)	ギルマン:小夜曲(川井順子)
T14	メンデルスゾーン:オルガン・ソナタ中の アダージオ バッハ:プレリュード及フーゲ (中口章)			

T=大正

11

¹⁹⁴ 東京芸術大学百年史編纂委員会編『東京芸術大学百年史 演奏会篇 第一巻』東京:音楽之友社、1990。 以下『芸大百年史 演奏会篇 第一巻』と略記。

表 2-28 1912 (大正元) 年のオルガン演奏

10/26, 27	学友会秋季演奏	バッハ:パルティータ	磯江淸	甲三(島崎)	風琴獨奏
	会				
12/14	学友会第三回	ラインベルゲル:ソナタ	中田章	講師補助	風琴獨奏
	土曜演奏会	(イ短調)			

甲:甲種師範科

「バッハ:パルティータ」

バッハの演奏の流れは明治期から続いている。

「ラインベルゲル:ソナタ (イ短調)」

大正期になって新たに、ラインベルガーが弾かれるようになった。「ソナタ(イ短調)」とは、Rheinberger: Organ Sonata Nr. 4 Op. 98 (以下 Sonata Nr. 4) のことである。

ラインベルガーのオルガン・ソナタは、1908 (明治 41) 受入れ [OH 182 1/6-6/6] と、1912 (大正元) 年 [OH 242-248] にまとまった受入れがあった。[OH 242-248] には島崎のサインが入っており、東京音楽学校のラインベルガーの楽譜の受入れは島崎の留学による影響があると考えられる。しかし、大正期までの受入れ楽譜の中に、Rheinberger: Sonata Nr. 4 は確認できなかった。東京音楽学校の蔵書の中で、現在確認できるRheinberger: Sonata Nr. 4 の受入れは 1930 (昭和 5) 年である。それ以前の Sonata Nr. 4 の楽譜については、学内の資料からはわからなかった。あるいは、島崎の私的な蔵書の利用があったのかもしれない。

表 2-29 1913 (大正 2) 年のオルガン演奏

2/8	学友会第四回	シルドクネヒト:	櫻井みつ	甲三(楠美)	風琴獨奏		
	土曜演奏会	オーサンクティシマ					
3/25	卒業式	バハ:短イ調フアンタジ	木岡信	甲三(島崎)	オルガン		
		ーア及フーガ			獨奏		
		カルクーエレーアー:	草川友忠	本三(島崎)	オルガン		
		短變ホ調パッサカーリア			獨奏		
9/28	第一回通俗演	レムメンス:ファンファ	中田章	助教授	風琴獨奏		
	奏会	ール					
11/1,	学友会演奏旅	レムメンス:インヲ゛ー	岡本新市	甲二(楠美)	オルガン		
2	行 (男子部)	ケーション			獨奏		

本:本科

「シルドクネヒト:オーサンクティシマ」

[OH 203] Joseph Schildknecht (1861-1899): Harmonium-Schule

Schildknecht: O Sanctissima

教本の中の一曲。鍵盤を指定するⅠⅡの書込みがある。よく使用した跡がある。

「バハ:短イ調フアンタジーア及フーガ」

[Org-Ped 1 1/9] = [OH 223 1/3] Bach : Fantasia et Fuga a-moll BWV561

指使い、区切り、スラーのほか、ペダルの書込みと、ペダル部分を左手に移す書込みの 両方が見られる。

「カルクーエレーアー:短變ホ調パッサカーリア」

[OH-solo 200] Sigfrid Karg-Elert: Passacaglia es-moll Op. 25

課題にもだされ、中田の筆写譜にもある。

「レムメンス:ファンファール」「レムメンス:インヲ゛ーケーション」

[OH 49] [OH 154] Lemmens : Morceaux pour Orgue-Mélodium

No. 1 Invocation, No. 6 Fanfare

レメンスのこの曲集からの選曲は、定番となりつつある。

表 2-30 1914 (大正3) 年のオルガン演奏

2/14	第八回土曜	ゲオルゲベルグ:フーガ	白坂ミイ	甲二(楠	オーガン
	演奏会	エ゛ルネー:フィナーレ		美)	獨奏
6/6	学友会春季	セバセティアンバッハ:	和田央	本三(島	オーガン
	演奏会	パルティータ		崎)	獨奏
10/17,18	学友会恤兵	ラインハルト:ソナティー	真篠俊雄	本一(島	オーガン
	演奏会	ネい短調作品第38		崎)	獨奏

「ゲオルゲベルグ¹⁹⁵:フーガ」

[OH 35] [OH 290] Westbrook: Fugen-Album

George Berg (1730-1775) : Fuge

¹⁹⁵ イギリスの作曲家であるが、東京音楽学校ではドイツ語読みで定着していた。その後の国内版オルガン 曲集においても、「ベルグ」あるいは「ベルク」として扱われている。

Berg のフーガは、のちに国内版のオルガン曲集によく採用されている。

「エ゛ルネー:フィナーレ」

[OH 212 2/12] Abbé Henri Delépine (1871-1956) : Archives de l'Organiste No. 2

A. Vernet (?-?): Sortie-Finale が掲載されている。

Delépine: Archives de l'Organiste シリーズの No. 1 には中田オルガンスタディーズ掲載の

A. Van den Plas: Toccata がある。これらの楽譜を中田がよく使用していたと思われる。

「ラインハルト:ソナティーネい短調作品第38」

Reinhard: Drei Sonatinen は明治期の後半から定番となっている。イ短調は第三番。この時の眞篠の演奏は「上出来であった一年生の同氏が斯くも公開の席上でやってのけたのは将来大に嘱望すべきものがある」¹⁹⁶と、好評を得ている。

表 2-31 1915 (大正 4) 年のオルガン演奏

3/25	卒業式	カルクーエレーアト:	白坂ミイ	甲三	オルガン
		ろ短調ソナタ		(不明)	獨奏
		(第一番作品 36)			
6/19,20	学友会春季	ブロージッヒ:ファンタ	中田章	助教授	オーガン
	演奏会	ジー、作品 21			獨奏
10/29,30	学友会秋季	バッハ:パッサカーリア	真篠俊雄	本二	風琴獨奏
	演奏会			(島崎)	
11/21	学友会第一	バッハ:幻想曲と追復樂	中田章	助教授	大風琴獨
	回特別演奏				奏
	会				
12/23-	御大礼奉祝	バッハ:ハ短調パッサカ	真篠俊雄	本二	風琴獨奏
29	演奏会(洋	ーリア		(島崎)	
	楽)		_		
		ゲオルゲ ベルグ:フーガ	中田章	助教授	風琴獨奏
		ジョンベネット: フーガ			

「カルクーエレーアト: ろ短調ソナタ (第一番作品 36)」

[OH-solo 200] Karg-Elert: Erste Sonate h-moll für Harmonium Op. 36

 196 『月刊楽譜』第3巻第 11 号、大正3年 11 月、 26 ~ 27 頁。『芸大百年史演奏会篇第一巻』、 397 ~ 398 頁に再録、引用は同所より。

指使い、フェルマータ、区切りの書込みがあり、使用感がある。前出の〔OH-solo 200〕 Karg-Elert: *Passacaglia es-moll Op. 25* とともに 1908 (明治 41) 年に受入れられた。両曲とも中田章が写譜している。

「ブロージッヒ:ファンタジー、作品 21」

[Org-Ped 21 1/2] Moritz Brosig: 5 Präludien und eine Fantasie für das Harmonium Op. 21

「バッハ:パッサカーリア」「バッハ:ハ短調 パッサカーリア」 パッサカリアの人気は明治期から続いている。

[Org-Ped 1 1/9] Peters 版バッハ全集のほかに [OH 185] があったが震災で焼失している。 [OH 185] が Zellner 版の手だけで弾けるアレンジだった可能性については、大正期の課題の項で触れた。

「バッハ:幻想曲と追復樂」

[Org-Ped 1 2/9] [消失] Fantasia et Fuga g-moll BWV542

[Org-Ped 1 3/9] [消失] [OH 276 3/9] Fantasia et Fuga c-moll BWV537

[Org-Ped 1 9/9] = [OH 233 1/3] [OH 276 9/9] Fantasia e Fuga a-moll BWV561

いずれも可能性がある。楽曲の規模からは BWV537 か BWV561 の可能性が高いように 思うが不明である。

「ゲオルゲベルグ:フーガ」は中田が前年にも演奏している。

「ジョンベネット:フーガ」

[OH 35] [OH 290] Westbrook: Fugen-Album

John Bennett (1790-1809) : Fuge

Berg と同じフーガアルバムに掲載されている。John Bennett のフーガものちに国内版の オルガン曲集によく採用されている。 1915 (大正 4) 年 12 月 23~29 日の演奏旅行では、中田章が「ゲオルゲベルグ:フーガ」「ジョンベネット:フーガ」の二曲を演奏しており、「獨奏中では中田章氏のオルガンの獨奏など全く熟練の後の軽妙が特にこころよく感得された」との演奏評がある¹⁹⁷。

表 2-32 1916 (大正 5) 年のオルガン演奏

3/25	卒業式	バハ:ハ短調 パッサカーリ	厨二郎	甲三(島崎)	オールガン
		ア(ツェルナー編)			獨奏
6/10	第一回選科生	ヨーセフブロック:露西亜国	山口心子	選科(不明)	風琴獨奏
	徒演奏会	歌進行曲			
		マイアーベーア:歌劇『フー	川崎隆子	選科(不明)	風琴獨奏
		ゲノット教徒』中の一節、			
		『貴婦人』			
10/28	学友会秋季演	シルドクネヒト:おゝ、いと	井上武士	甲二(楠美)	風琴獨奏
,29	奏会	も聖きものよ(變奏曲)			
11/16	皇后行啓演奏	レムメンス:祝典前奏曲	中田章	助教授	オールガン
	会				獨奏
12/6	学友会第 18	リンク:英国国歌の主題とそ	眞篠	本三(島崎)	風琴獨奏
	回土曜演奏会	の變奏曲			

「バハ:ハ短調パッサカーリア (ツェルナー編)」

この演奏は手鍵盤だけで演奏したことが確実である。

[OH 185] バハ:パッサカグリア[消失]

「ヨーセフブロック:露西亜国歌進行曲」不明。

露西亜国家は『島崎赤太郎編:オルガン教本 弐』に掲載がある。

「マイアーベーア:歌劇『フーゲノット教徒』中の一節、『貴婦人』」

[Org-sol 68] Reinhard: Melodien Sammlung Vortragsstücke für Harmonium

Meyerbeer: Arioso aus den Hugenotten

「シルドクネヒト:おゝ、いとも聖きものよ(變奏曲)」

1913 (大正2) 年2月8日演奏の「シルドクネヒト: オーサンクティシマ」と同曲。

 $^{^{197}}$ 『京都日出新聞』大正 4 年 12 月 28 日。『芸大百年史 演奏会篇 第一巻』、 425 頁に再録、引用は同所より。

人気曲だったようだ。

「レムメンス:祝典前奏曲」

Lemmens の楽譜の中には「前奏曲」とつくものが見当たらない。この時だけ、曲名を特別なものにした可能性がある。曲目解説¹⁹⁸には、「本日演奏する曲は活發なる短曲にして全部所謂スタッカートの奏法を用ひ、各音の間を切断して奏す。曲は三部に分れ、第一部及び第三部は二長調、中間の第二部はト長調なり。」とある。この特徴に該当する曲目としてLemmens: March Triomphale が挙げられる。この曲は手鍵盤のみで演奏できる版が明治 40年代から学生の課題および演奏曲としてたびたび用いられているが、同解説に「本曲は手鍵盤二列と脚鍵盤一列を用ひて演奏す。」とあることから、この時はペダル付きで演奏されたと考えられる。Lemmens: March Triomphale のペダル付版の楽譜は、現時点で東京音楽学校受入れ楽譜の中に見つかっていない。

「リンク:英国国歌の主題とその變奏曲」

[Org-Ped 3 2/2] [Org-Ped 27] Rinck: Practische Orgel-Schule Op. 55

Rinck: Variationen über Heil Dir im Siegeskranz (God save the King)

人気曲である。中田オーガン曲撰にも収録されている。

表 2-33 1917 (大正 6) 年のオルガン演奏

3/24	卒業式	バッハ:ハ短調二重フーガ	真篠俊雄	本三(島崎)	オルガン
		(レグレンツイの主題)			獨奏

「バッハ:ハ短調二重フーガ (レグレンツイの主題)」

Fuga c-moll BWV574 [Org-Ped 1 4/9] Peters 版バッハ全集 4 巻に掲載されている。指使い、I II の鍵盤指示の書きこみがある。

本文 第三章 第三節 3-3-3 「真篠文庫: 真篠俊雄関連」 199 で後述する真篠文庫の中にも BWV574 を含む楽譜がある 200 。該当部分の書込みは少なく拍のカウントのみだが、破れる ほどめくった跡がある。

198 「演奏曲目梗概」『芸大百年史演奏会篇第一巻』、443頁掲載、引用は同所より。

-

¹⁹⁹ 本文 258~278 頁。

^{200 〔}眞篠文庫 183〕 J. S. Bach: Joh. Seb. Bach's Werke für Orgel Band. IV. Leipzig: Breitkopf & Härtel。

表 2-34 1918 (大正7) 年のオルガン演奏

2/23	学友会第 22	ラインベルガー:奏鳴樂イ短調作	真篠俊雄	研究	風琴獨奏
	回土曜演奏	品 98 い、モデラート ろ、アン			
	会	ダンティーノ は、フーガクロ			
		マティーカ			
3/25	卒業式	バッハ ツェルナー編:	井上武士	甲三	オールガ
		に短調パッサカーリア		(島崎)	ン獨奏

「ラインベルガー: 奏鳴樂イ短調作品 98 い、モデラート ろ、アンダンティーノ は、フーガクロマティーカ」Rheinberger: Organ Sonata Nr. 4 Op. 98 の全曲。楽譜については前述のとおりで、この時点でも不明である。

「バッハツェルナー編:に短調パッサカーリア」

前述。に短調はおそらく誤植で、ハ短調であったと考えられる。

表 2-35 1919 (大正8) 年のオルガン演奏

2/15	学友会第 25	ギルマン:カンツォネッ	下總覺三	甲二(楠美/	風琴獨奏
	回土曜演奏会	タ		眞篠)	
3/25	卒業式	バッハ:ニ短調トッカー	真篠俊雄	研究	オルガン
		タ及フーガ			獨奏
7/5	学友会第 26	ギルマン:諧謔曲 作品 31	下總覺三	甲三(島崎)	風琴獨奏
	回土曜演奏会				
12/8	学友会第27	H. Rinck: Variations on The	Mr.	甲三(中田)	Organ
	回土曜演奏会	English Hymn	I. Ogawa		Solo

「ギルマン:カンツォネッタ」

[Org-sol 123] Guilmant: Morceaux pour Harmonium

Guilmant: Canzonetta Op. 28

明治期からたびたび演奏されている。

「バッハ: 二短調トッカータ及フーガ」

[Org-sol 1 4/9] [Org-Ped 26 4/4] Bach : Toccata et Fuga d-moll BWV565

[Org-Ped 26 4/4] には(左 16 all soft 拍 -solo 指 スラー)などの書込みが多数あるが、34 号 Mason & Hamlinペダル付リード・オルガン演奏時のものとみられる書きこみ(左 16 all soft)と、昭和期のアボット&スミスのものとみられる書込み(-solo)が混在している。そのほか、[OH 223 2/3] [OH 276 3/9] にも掲載がある。

「ギルマン: 諧謔曲 作品 31」

[Org-sol 124] Guilmant: Scherzo Op. 31

楽譜が使い込まれている。

「H. Rinck: Variations on The English Hymn」

大正5年12月6日の演奏「リンク:英国国家の主題とその變奏曲」と同曲である。

表 2-36 1920 (大正9) 年のオルガン演奏

5/9	楽友会第 3 回	セバスティアンバッハ:	中田章	助教授	風琴獨奏
	特別演奏会	二長調遁走曲			
		ハ短調トゥリオ			
11/9	学友会第 29	ギルマン:交響楽的諧謔	小川一郎	甲三(島崎)	風琴獨奏
	回土曜演奏会	曲			

「セバスティアンバッハ:ニ長調遁走曲」

[Org-Ped 1 4/9] Bach: Praeludium et Fuga D-dur BWV532 のフーガ部分か、Variante BWV532a のどちらかかと考えられる。

「バッハ:ハ短調トゥリオ」

[Org-Ped 1 9/9] = [OH 233 1/3] Bach: Trio c-moll BWV585 の可能性がある。

「ギルマン:交響楽的諧謔曲」

[Org-Ped 22 3/3] Guilmant: Scherzo Symphonique

指使いなどの書込みがあるほか、非常に激しい使用感がある。

表 2-37 1921 (大正10) 年のオルガン演奏

2/26	学友会第 30	ギルマン:ソナタ、	、プレリュ	三島喜代造	甲三	オルガン

	回土曜演奏会	ード、アダージョ、フーゲ		(中田)	獨奏
10/8	学友会第 31	ギルマン:小歌曲	川井順子	甲三	風琴獨奏
	回土曜演奏会			(中田)	

「ギルマン:ソナタ、プレリュード、アダージョ、フーゲ」

[OH 19 2/3] Guilmant: Prèlude Adagio et Fugue (3e Sonate)

指使いのほか、ドイツ語での書込みがみられる。

「ギルマン:小歌曲」不明。

表 2-38 1925 (大正14) 年のオルガン曲

10/31	天長節奉祝演	メンデルゾーン:オルガン・ソ	中田章	助教授	オルガン
	奏放送	ナタ中のアダージョ			獨奏
		バッハ:プレリュード及フーゲ			

「メンデルゾーン:オルガン・ソナタ中のアダージョ」

[Org-Ped 2] Mendelssohn: Organ Sonata Nr. 1-2 Adagio

「バッハ:プレリュード及フーゲ」 該当多数。

大正期に行われた演奏会での使用楽器は、34号 Mason & Hamlin 社製ペダル付リード・オルガンと、59号 Rodolphe Fils & Debain 製ハルモニウム、83号山葉特製大型オルガンが主で、明治期と変わらない。

1915 (大正 4) 年 11 月 21 日の中田の演奏は「大風琴獨奏」と記載されており、おそらく 34 号 Mason & Hamlin 社製ペダル付リード・オルガンのことを指している。また、1916 (大正 5) 年 11 月 16 日の皇后行啓演奏会の解説には「手鍵盤二列と足鍵盤を用いて演奏す」とあるので、これも 34 号を用いたことが確実である。しかし、他の演奏については演奏形態の表記が統一されておらず、それぞれの演奏でどの楽器を用いたのかは明らかでない。楽譜の所蔵状況からみても可能性が複数考えられ、ペダルを用いたかどうかの判別が難しい。

大正期の演奏曲目は、明治期の後期からの流れをうけ、レパートリーの拡充が進んでいる。大正期に入って初めて Rheinberger の作品が演奏されるようになるのは、島崎の留学に

よる影響が直接的に関係しているとみられる。この時期は Karg-Elert や Schildknecht、Georg Berg、Guilmant のような、まとまりのある曲が演奏されるようになり、それらはその後の定番のレパートリーとなっていった。バッハのパッサカリアは明治期から引き続いて人気であった。1908 (明治 41) 年に受入れの版 (おそらく Zellner 版) によって、より多くの学生がパッサカリアを演奏できるようになったと考えられる。

第六節 まとめ

明治期に急増したオルガン履修生の数は大正期には落ち着きを見せる。本科生のオルガン履修状況を見てみると、全学年と研究生あわせても 2 人程度で推移しており、明治期に比べると若干少なくなっている。甲種師範科生の中のオルガン履修生は大正後期にむけて減少し続け、最終的には 0 になった。代わって乙種師範科、選科、第四臨時教員養成所の中にオルガン履修生が存在した。

明治期から引き続き、島崎赤太郎が中心となってオルガン教育を行った。大正期に入り、島崎の留学による影響が演奏レパートリーに現れてきている。1912(大正元)年に、講師補助となっていた中田章がラインベルガーのソナタ第 4 番を演奏している。1916(大正 7)年には、研究生の真篠俊雄も演奏しており、以後昭和期に入ってからもラインベルガーのソナタ第 4 番の人気は続いた。ラインベルガーのソナタの緩徐楽章は 4 番以外も(9 番のRomanze など)課題としても扱われている。

島崎の帰国後盛んになったバッハの演奏は、明治期に続けて大正期も行われた。明治期から人気の高いパッサカリアに加えて、幻想曲とフーガイ短調、トッカータとフーガニ短調、レグレンツィの主題によるフーガ、トリオハ短調などが演奏されており、レパートリーの幅が格段に増えている。演奏者は中田と真篠に集中しており、彼らはペダル付きの演奏にも熱心に取り組んだ。

一方、ペダルを伴わない曲及び、ハルモニウムのレパートリーも拡充した。バッハの Manualiter のパルティータや、ベルグやベネットのフーガに加え、Karg-Elert のソナタやパッサカリアなど、明治期の後期に受入れた楽譜が盛んに演奏されている。

明治期の後半から大正期にかけて東京音楽学校でよく演奏されるようになったレパート リーは、演奏効果の高いものが多く、のちに名曲集として一般向けに出版されるようになった。

第三章 昭和期の東京音楽学校におけるオルガン演奏(1925-1952)

1941 (昭和 16) 年および 1942 (昭和 17) 年の全国の学校楽器所蔵調査201を見ると、各地の高等女学校にはすでにピアノが複数設置されており、中には外国製のグランドピアノを設置している学校や、グランドピアノとアップライトピアノを複数台所有しているところもある。オルガンは練習用としてまとまった数が設置されているところが多いが、教育現場で先生が扱う鍵盤楽器はピアノへと完全に移行している様子がうかがえる。学校教育の中でのオルガンの役割の変化に伴い、東京音楽学校でのオルガン履修生の数は減少した。甲種師範科のオルガン履修生数は大正期にすでに 0 になっていたが、昭和期に入り乙種師範科が廃止され、オルガン履修生の数はさらに少なくなった。昭和期のはじめは本科、選科、第四臨時教員養成所のオルガン履修生のみであった。履修生数の縮小に伴い、オルガンの台数も減少している。

1928 (昭和 3) 年に寄贈されたパイプ・オルガンによって、東京音楽学校のオルガン演奏は新たなステージを迎える。それまで Mason & Hamlin 社製リード・オルガンおよびハルモニウムによって培われてきたオルガン演奏技術は、オルガン本科生にとっての礎となっていく。

昭和期までに確立したハルモニウムのレパートリーは、選科に通う履修生が引き続き演奏している。

193

²⁰¹ 『東京音楽学校公文書(教務関係)文書綴』〔138〕『昭和十三年 卒業生関係』、東京芸術大学大学史史 料室所蔵。

第一節 昭和期の東京音楽学校で受入れた楽譜

1-1 昭和期受入れの Org-Ped 分類楽譜

1916 (大正 5) 年以降受入れが止まっていた Org-Ped 楽譜であるが、昭和期にはいって 受入れが再開された。1927 (昭和 2) 年~1953 (昭和 28) 年までの間に 50 点 [Org-Ped 37] ~ [Org-Ped 79] を受入れた。そのうち 8 点が消失している。

1927 (昭和2) 年

[Org-Ped 37] Johann Gottlob Schneider: Pedalstudien für Orgel Band III Op. 48

[Org-Ped 38] Karl Straube (1873-1950): Alte Meister des Orgelspiels

[Org-Ped 37] の内表紙には島崎のサインがはいっており、もともとは島崎赤太郎 (1874-1933) のものであったと考えられ、実際の使用はこれよりかなりさかのぼるとみられる。Schneider のペダル教則本は明治期にも受入れがあるが同本ではない。

[Org-Ped 38] は Bach、Georg Böhm(1661-1733)、Dieterich Buxtehude(1637-1707)、Pachelbel らの曲を集めた選集である。

1930 (昭和5) 年

[Org-Ped 39 1/2] Josef Gabriel Rheinberger (1839-1901): Sonate Op. 98

[Org-Ped 40] [Org-Ped 41] César Franck: 3 Pièces pour le Grand Orgue

[Org-Ped 42] [Org-Ped 43] [Org-Ped 44] Edwin Henry Lemare (1865-1934): New Organ Music Bell Scherzo Op. 89 / Lullaby Op. 81 / Toccata Fugue Op. 98

[Org-Ped 45] William Joseph Westbrook: New Organ Arrangements (Widor: Marche Nuptial)

[Org-Ped 46] [Org-Ped 47] Hippolyte Barbedette (1827-1901): Deux Sonatas pour Grand Orgue Op. 202 / Op. 208

[Org-Ped 48] Camille Saint-Saëns: Marche d'Hyménée tirée de Noces de Prométhée

[Org-Ped 50] Charles-Marie Widor: Sinfonia Sacra Op. 81

[Org-Ped 39 2/2] は Rheinberger: Sonate Op. 99 であった。除籍となっているが、Op. 99 はピアノ・ソナタである。配架違いで現存する可能性もある。

[Org-Ped 40] [Org-Ped 41] は明治期受入れの [Org-Ped 13] と同本である。

[Org-Ped 49] は『圖書楽譜出納帳』の記載によれば「ヴィドール作曲作品七十二番サンフォニーロマンス」であったが除籍されている。現存しない。

1931 (昭和6) 年

[Org-Ped 51] Henri Messerer (1838-1923) : Le Grand Maîtres de l'Orgue (Bach : Chaconne pour Violin arr.)

[Org-Ped 53] — : Frühmeister der deutschen Orgelkunst

[Org-Ped 54] Charles Quef (1873-1931): Händel Six Concertos pour Orgue 2me Cahier

[Org-Ped 55] Preston Ware Orem (1865-1938): The Organ Player

[Org-Ped 56] Johann Sebastian Bach: Orgel Band VIII

[Org-Ped 57] Jules Massenet (1842-1912) : Le Dernier Sommeil de la Vierge

[Org-Ped 58] Alexandre Guilmant: L'Organiste pratique 1re Liv. Op. 39

[Org-Ped 60] Alexandre Guilmant: L'Organiste pratique 3me Liv. Op. 46

[Org-Ped 61 1/2 2/2] Alexandre Guilmant: L'Organiste pratique 2me Liv. Op. 41 [同本二冊]

[Org-Ped 62 2/2] Alexandre Guilmant: L'Organiste liturgiste 2me Liv. Op. 65

[Org-Ped 52] は Marcel Dupré(1886-1971): 3 Préludes et Fugues であったようだが消失、存しない。

[Org-Ped 55] は選集である。

[Org-Ped 56] Peters 版バッハ全集の 8巻

[Org-Ped 59] は Widor のオルガン交響曲 Op. 13 と Op. 42 だったようだが除籍されており、現存しない。

Widorのオルガン交響曲は明治期の〔Org-Ped 16〕以来たびたび受入れがあるが、残念ながらことごとく現存せず、どのような楽譜だったのか、どのような使用状況だったのか、手掛かりが失われている。

[Org-Ped 58] は明治期受入れの [Org-Ped 24 1/6] と同内容、[Org-Ped 60] は [Org-Ped 24 3/6] と同本である。

[Org-Ped 62 1/2] は失われているが、おそらく Guilmant: L'Organiste liturgiste 2me Liv. Op. 65 であったと考えられる。

[Org-Ped 63] は、帳簿の該当箇所にオルガンの楽譜がみあたらず、全くわからない。

[Org-Ped 55] から [Org-Ped 62] は、渡辺とり氏寄贈となっている。渡辺とりは東京音楽学校のピアノ講師であった²⁰²。

1936 (昭和11) 年

[Org-Ped 64] Felix Mendelssohn Bartholdy: Sämtliche Orgelwerke

[Org-Ped 65] Alexander Glazunov (1865-1936): Preludio e Fuga in E minor

[Org-Ped 64] は遠藤宏²⁰³の寄贈だが、中表紙に A. Shimasaki のサインがはいっている。もともとは島崎赤太郎のものだったようだ。島崎が Leipzig 留学時に師事していた Paul Homeyer (1853-1908) の版である。



写真 3-1 [Org-Ped 64] 中表紙と、一部次ページ [右端][東京藝術大学附属図書館所蔵]

-

²⁰² 渡邊とり (1897-1979): 東京音楽学校の在職は1919 (大正8) 年から1945 (昭和20) 年まで。

 $^{^{203}}$ 遠藤宏(1894-1963): 東京音楽学校に 1934(昭和 9)年~1946(昭和 21)年まで在職。音楽史他を担当。

1937 (昭和12) 年

[Org-Ped 66 1/4-4/4] César Franck : Orgel Werke Band $I \sim IV$

[Org-Ped 68] Karol Rathaus (1895-1954): Präludium und Toccata für Orgel Op. 32

[Org-Ped 67] も [Org-Ped 63] 同様に不明である。

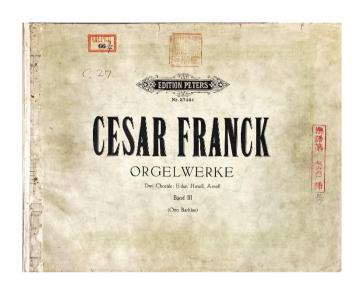


写真 3-2 [Org-Ped 66 3/4] 表紙 [東京藝術大学附属図書館所蔵]

1941 (昭和16) 年

[Org-Ped 69 2/2] Johann Gottlob Schneider: Pedal Studien für Orgel Heft II Op. 48

[Org-Ped 69 1/2] は除籍されているが、おそらく [Org-Ped 69 2/2] と対となる、Johann Gottlob Schneider: *Pedal Studien für Orgel Heft I Op.* 67 であったと考えられる。明治期受入れの [Org-Ped 5] と同内容であった可能性がある。

昭和期にはいってからの Org-Ped 分類楽譜で顕著なのは、フランス人作曲家による作品 の増加である。特にフランクの大オルガンを想定した曲の楽譜が複数受入れられているの が特徴的である。昭和期の演奏レパートリーにも影響していると考えられる。また、こと

ごとく失われてしまっているが、ヴィドールのオルガン交響曲の楽譜も複数受入れがあった。

この時期は寄贈楽譜の点数も多い。渡邊とり寄贈の 8 冊 (失われてしまっているものも 含めるとおそらく 10 冊) と、遠藤宏寄贈 1 冊は、実際にはだいぶ前から使用されていたと 考えられる。遠藤宏寄贈の楽譜は特に島崎赤太郎のサインがみられ、本人の使用は留学時 までさかのぼる可能性がある。その後、私物のまま東京音楽学校での教授に用いられた可 能性もある。

ここまでが東京音楽学校としての Org-Ped 分類楽譜の受入れである。この後学校組織が東京藝術大学に改編してからも 1952 (昭和 27) 年と 1953 (昭和 28) 年の受入れまでは旧分類が続き、1953 (昭和 28) 年の途中から現行の分類に移行した。1952 (昭和 27) 年と1953 (昭和 28) 年の受入れ楽譜は以下である。

1952 (昭和 27) 年

[Org-Ped 70] Karl Matthaei (1897-1960): Ausgewählte Orgelstücke des 17. Jahrhunderts

1953 (昭和28) 年

[Org-Ped 71] Jacques-Nicolas Lemmens: Ecole d'Orgue II

[Org-Ped 72] Marcel Dupré: Méthode d'Orgue

[Org-Ped 73] Henri Büsser (1872-1973) : Marche de Fête pour Orgue Op. 36

[Org-Ped 74] Marcel Dupré: Symphonie-Passion pour Grand Orgue

[Org-Ped 75] Marcel Dupré: Suite Bretonne pour Grand Orgue

[Org-Ped 76] Paul Hindemith (1895-1963): Konzert für Orgel und Kammerorchester

[Org-Ped 77] Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791): Phantasie für Orgel f-moll K. V. 608

[Org-Ped 78] Henry Purcell (1659-1695): Trumpet Tune and Air

[Org-Ped 79] Francis Poulenc (1899-1963): Concerto en sol Mineur pour Orgue partie

カード分類²⁰⁴上は〔Org-Ped 79〕と類似した Poulenc の楽譜がもう一冊受入れとなっているが、詳細は不明である。

204 東京藝術大学附属図書館内カード目録。旧分類楽譜についてはカード目録が現在も機能している。

1-2 昭和期受入れのOH、Org-sol 分類楽譜

昭和期の OH、Org-sol 分類楽譜は、1912 (昭和 2) 年 1 月から 1949 (昭和 24) 年 6 月までに、57 冊 [OH 358] ~ [OH 388] (うち現存 52 冊) が受入れられた。受入れは 1926 (昭和 2) 年と、1929 (昭和 5) 年から 1931 (昭和 7) 年に集中している。明治期、大正期にくらべて新規受入れ数は激減している。

表 3-1 昭和期における「OH, Org-sol 分類楽譜」受入れ冊数

1926(昭和 2)年	[OH 358] ~ [OH 364]	25 ∰
1927 (昭和3) 年	-	0 冊
1928(昭和4)年	-	0 冊
1929(昭和5)年	[OH 365] ~ [OH 367]	4 ⊞
1930 (昭和 6) 年	[OH 368] ∼ [OH 379]	19 冊
1931 (昭和7) 年	[OH 380] ~ [OH 386]	10 ∰
1932 (昭和8) 年~	-	0 冊
1940(昭和 15)年		
1941(昭和 16)年	(OH 387)	1 冊
1942(昭和 17)年~	-	0 冊
1948(昭和 23)年		
1949(昭和 24)年	(OH 388)	1 冊

1926 (昭和2) 年

受入れは、大多数が Reinhard の教本である。

[OH 358 1/10-10/10] Augst Reinhard: Studien, 50 Übungs und Vortragsstücke (Heft. 1)

[OH 359 1/10-10/10] Augst Reinhard: Studien, 50 Übungs und Vortragsstücke (Heft. 2)

前半25曲 (Heft. 1)、後半25曲 (Heft. 2) を収録。それぞれ10冊ずつ購入している。さらに続けて前半がもう一冊追加された。

[OH 361] Augst Reinhard: Studien, 50 Übungs und Vortragsstücke (Heft. 1)

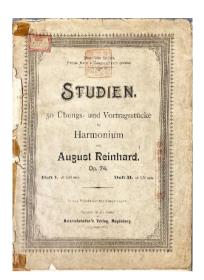


写真 3-3 [OH 358 2/10] 表紙 [東京藝術大学附属図書館所蔵]

その他に以下の2冊を受入れた。

[OH 362] Gustav Merkel: Acht Präludien und acht Fughetten Op. 179

[OH 363] 120 Cadenze Facilissime e Nuovissime

[OH 362] は寄贈印があり、[OH 363] には「A. Shimasaki」のサインがある。二冊とも 島崎赤太郎所有だった可能性がある。



写真 3-4 [OH 363] 表紙 [東京藝術大学附属図書館所蔵]

1930 (昭和5) 年

[OH 367] Louis Désiré Besozzi (1814-1879) : 30 Pièces caractéristiques pour Orgue-Harmonium

4冊の受入れのうち、一冊のみが現存する。消失した 3冊は〔OH 365〕Rheinberger のオルガンソナタが 2冊と、〔OH 366〕Franck の 3 つの作品、であった。いずれもペダル付のオルガンを想定している。

1931 (昭和6) 年

Franck の楽譜が3冊受入れられている。

[OH 368] César Franck: L'Organiste I

[OH 369] César Franck: L'Organiste II

[OH 370] César Franck: Cinq Pièce pour Harmonium

Franck のこれらの曲集は、1904 (明治 37) 年受入れの [OH 118] César Franck: L'Organiste、1907 (明治 39) 年受入れの [OH 147] César Franck: L'Organiste 以来である。 これ以降の OH、Org-sol 分類楽譜は寄贈、献本が多い。

[OH 371 1/3-3/3] 真篠俊雄編:初等オルガン教科書 出版もとの大阪開成館より3冊寄贈された。

[OH 373] Georges Jacob (1739-1814): Exercices d'Orgue

[OH 374] César Franck : L'Organiste I

[OH 375] Jacques-Nicolas Lemmens: Ecole d'Orgue I

[OH 376] Jacques-Nicolas Lemmens: Ecole d'Orgue II

[OH 377 1/2 2/2] Joseph Bizet (1876-1961): Transcription pour Orgue-Mustel

[OH 378] Paul Hassenstein(1843-1927): Richard Wagner Album für Harmonium Parsifal 以上 7 冊は、渡邊とりの寄贈。

[OH 379 1/5 5/5] 東京音楽学校編: 小學唱歌用オルガンピアノ樂譜 合資会社共益商社書店より5冊の献本があった。

[OH 380] 島崎赤太郎: Fuga for the Harmonium or Organ

[OH 381] Ernst Felix Benda: Méthode Théorique pratique pour Harmonium

[OH 382] 真篠俊雄、草川宣雄共編:オルガン新教本

[OH 383] ノエル・ペリー編: オルガンの友 第一篇 新撰簡易オルガン楽譜

以上4冊は遠藤宏より寄贈。[OH 380] は雑誌の付録(學友會誌 第拾七號 附録²⁰⁵)である。

[OH 384] 天谷秀編:新編オルガン教科書

[OH 385] 天谷秀、多梅稚共編: 初等オルガン教科書

[OH 386] 瓜生繁編: *進行曲*

乙骨三郎より3冊寄贈。

1931 (昭和 16) 年

[OH 387] Walter Upmeyer (1876-1961): [Telemann's] 20 Kleine Fugen für Orgel oder Klavier の一冊を受入れた。

1949 (昭和 24) 年

[OH 388] 小川一郎: オルガン奏法

の一冊を受入れた。目黒三策206の寄贈であった。

²⁰⁵ 1909 (明治 42) 年7月11日の発行。同じものが、真篠家所蔵品の中からも発見された。

²⁰⁶ 目黒三策(1904-1974): 日本管楽器会社を経て音楽之友社社長。[OH 388] の出版社である楽友社は、音楽雑誌『音楽之友 [初期]』の出版元。

昭和期の OH、Org-sol 分類楽譜の新規受入れは非常に少ない。Reinhard: *Studien 50*、 Franck: *L'Organiste*、Franck: *Cinq Pièces pour Harmonium* など、必要に応じた受入れが若干あるほかは、明治期大正期に受入れられた楽譜の蓄積でまかなわれていたと考えられる。

第二節 昭和期の東京音楽学校で受入れた楽器

2-1 昭和期受入れのオルガン

昭和期にはいり、待望のパイプ・オルガンが導入された。楽器監守簿にはパイプ・オルガンのページが昭和になってから足された。3件の記載があるが、うち1件は部分品のみである。したがって昭和期、東京音楽学校で受入れたパイプ・オルガンは全部で2台、ということになる。

一台目は1928 (昭和3) 年9月15日に受入れられた。アボット&スミス社製のパイプ・オルガンである。徳川頼貞侯寄贈、と備考欄にある。

徳川頼貞が、1920 (大正 9) 年に自身の音楽ホール「南葵音楽堂」に設置したものであるが、1923 (大正 12) 年の関東大震災によってホールが壊れ使用できなくなっていたものである。オルガン自体は損壊を免れ、東京音楽学校に寄贈されることになった²⁰⁷。

楽器の仕様は以下である208。

表 3-2 東京音楽学校所蔵アボット&スミス社製パイプ・オルガンストップリスト

I . Solo Organ C-c ⁴	II . Great Organ C-c ⁴	III. Swell Organ C-c ⁴
(with expression)	Double Open Diapason 16'	Bourdon 16'
Dulciana 8'	Open Diapason 8'	Open Diapason 8'
Viol da Gamba 8'	Stopped Diapason 8'	Flûte à Cheminée 8'
Shakuhachi 8'	Gamba 8'	Echo Gamba 8'
Harmonic Tromba 8'	Principal 4'	Vox Angelica 8'
Clarinet 8'	Harmonic Flute 4'	Octave 4'
Cor Anglais 8'	Fifteenth 2'	Mixture III
Pedal C-f ¹	(Couplers)	
Open Diapason 16'	Swell to Great	
Flauto Contrabasso 16'	Solo to Great	
Bass Expressive 16'	Swell to Solo	
Flute Bass 8'	Swell to Pedal	
Tuba 16'	Great to Pedal	
Trombone 8'	Solo to Pedal	
	Swell Octave	
	Solo Octave	
	Solo Sub-Octave	
	Solo Unison Off	

ストップ数:26

_

 $^{^{207}}$ 中田恵子「旧東京音楽学校奏楽堂のアボット&スミス・オルガン」『Japan Organist』 45、2018 年、20~28 頁。

²⁰⁸ 株式会社 マナ オルゲルバウ 「旧東京音楽学校 奏楽堂 1987 年修復」リーフレット。

パイプ総数:1379

アクション: Tubular Pneumatic Action

1 Toe Piston for Great to Pedal

10 Toe Pistons for Fixed Combination

3 Thumb Pistons for Solo Organ (Fixed Combination)

1 Thumb Piston for Swell Organ (Fixed Combination)

Transmission-Piston for Solo-Reeds to Swell

調律:平均律

現在も旧東京音楽学校奏楽堂にあり、演奏されている。





写真 3-5 旧東京音楽学校奏楽堂 アボット&スミス社製パイプ・オルガン

[2021年9月26日千田寧子撮影旧東京音楽学校奏楽堂]

1933 (昭和 8) 年に豫科に入学した牧野敏成は、アボット&スミス社製のパイプ・オルガンについて以下のように回想をのこしている²⁰⁹。

²⁰⁹ 牧野敏成「オルガンと格闘した青春」、谷根千工房編『よみがえれ!パイプオルガン―永遠に響け上野の杜に―』東京:谷根千工房、1985年、10頁。

を上がってコンソールのふたを開けスイッチを入れると、下からの空気が出て、やっとオルガンが鳴るわけです。故障はそれほどなかった。故障すると楽器係の人が直してくれました。

奏楽堂は木造ですから、オルガンの音はまろやかな音がしましたね。あまり合奏には使わず、独奏が多かったみたいです。

二台目は昭和9年3月31日の受入れで、YAMAHA製であった。「ヤマハ草創譜²¹⁰」によれば、ヤマハは1932(昭和7)年に本郷聖テモテ教会からの依頼(2段鍵盤5オクターブ、14ストップ、電動送風装置付)を完成後、その実績をもって東京音楽学校からの「電気式特注パイプ・オルガン」の注文をとりつけた。ヤマハ草創譜に掲載の「東京音楽学校の電気式特注パイプ・オルガン」の写真は、確かに東京音楽学校の練習室に設置されたものである。1955(昭和30)年前後の教室の写真には同じオルガンが写っている²¹¹。

YAMAHA ホームページの「仕事の歴史」のページには、このオルガンの設計図が掲載されている(次頁)。それによれば、このオルガンの仕様は以下である。

表 3-3 東京音楽学校所蔵 YAMAHA 製パイプ・オルガン ストップリスト

Great Organ	Swell Organ
Principal 8' metal	Salicional 8' Metal
Gedact 8' Wood	Horn flute 4' Metal
Flute d'Amour 4' Wood	Melodia 8' Wood
	Clarinet 8' Reed Pipe
Pedal	
Subbass 16' Wood	

Electro Pneumatic Action

Coupler---Pedal to Great, Pedal to Swell, Swell to Great

Swell Super Octave, Swell Sub Octave

Pedal Movements --- Balanced Swell Pedal, Balanced Crescendo Pedal

Generator 10 Amp 10 Volt

 210 三浦啓市『ヤマハ草創譜 1885-1959 ~洋楽事始から昭和中期までの 70 年余をふりかえる~』東京: 按可社、 114 ~115 頁。

207

^{211 1953 (}昭和 28) 年東京藝術大学入学の松平郁子氏提供。

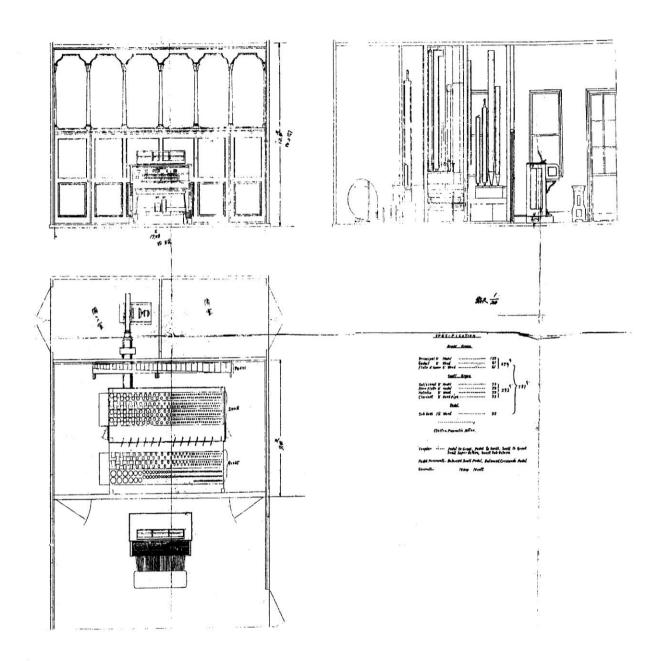


図 3-1 東京音楽学校所蔵 YAMAHA 製パイプ・オルガン 図面

https://jp.yamaha.com/products/contents/keyboards/pipeorgan/history/ Accessed October 20, 2021 パイプ・オルガンが導入された一方で、リード・オルガンも存在していた。大正期から 引き続いて在籍していたリード・オルガンは次の29台である。

表 3-4 昭和期初年に在籍した、明治・大正期受入れのオルガン

10	X 3	• PD4P391471-1-1-1-1	省した、明伯・八正朔文八仏のス	17070	
34 1899 (明治 32) オルガン / Mason & Hamlin 社製ペダル付 (白井銈造) 35 1900 (明治 33) オルガン / Mason & Hamlin 社製 (白井銈造) 250 円	10	1893 (明治 26)	オルガン	(西川)	25 円
(自井銈造) 35 1900 (明治 33) オルガン / Mason & Hamlin 社 (自井銈造) 250 円 59 1904 (明治 37) オルガン / Rodolphe 社製 (内藤文六郎) 700 円 60 1904 (明治 37) オルガン / Rodolphe 社製 (内藤文六郎) 510 円 61 1905 (明治 38) オルガン / Mason & Hamlin 社製 13 ストップ (内藤文六郎) 350 円 71 1906 (明治 39) オルガン / 山葉製 11 号 (内藤文六郎) 75 円 76 1907 (明治 40) オルガン / 山葉製 11 号 (内藤文六郎) 80 円 78 1907 (明治 40) オルガン / 山葉製 11 号 (内藤文六郎) 80 円 80 1907 (明治 40) オルガン / 山葉製 11 号 (内藤文六郎) 80 円 81 1907 (明治 40) オルガン / 山葉製 11 号 (内藤文六郎) 80 円 81 1907 (明治 40) オルガン / 山葉製 11 号 (内藤文六郎) 80 円 83 1907 (明治 40) オルガン / 山葉製 11 号 (内藤文六郎) 650 円 84 1908 (明治 41) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 300 円 85 1908 (明治 41) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 300 円 86 1908 (明治 41) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 300 円 87 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 304 円 71 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 92 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 93 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 94 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 94 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 96 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 97 1910 (明治 43) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 96 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 309 円 96 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 309 円 910 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 309 円 9110 (明治 43) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 309 円 9110 (明治 43) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 309 円 300 円 3190 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 309 円 300 円 3190 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 309 円 300 円 3190 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 309 円 300 円 3	13	1893 (明治 26)	オルガン	(才田)	25 円
35 1900 (明治 33) オルガン / Mason & Hamlin 社 (白井銈造) 250 円 59 1904 (明治 37) オルガン / Rodolphe 社製 (内藤文六郎) 700 円 60 1904 (明治 37) オルガン / Rodolphe 社製 (内藤文六郎) 510 円 61 1905 (明治 38) オルガン / Mason & Hamlin 社製 13 ストップ 350 円 (内藤文六郎) 71 1906 (明治 39) オルガン / 山葉 8 号 (内藤文六郎) 75 円 76 1907 (明治 40) オルガン / 山葉製 11 号 (内藤文六郎) 80 円 78 1907 (明治 40) オルガン / 山葉製 11 号 (内藤文六郎) 80 円 80 1907 (明治 40) オルガン / 山葉製 11 号 (内藤文六郎) 80 円 81 1907 (明治 40) オルガン / 山葉製 11 号 (内藤文六郎) 80 円 81 1907 (明治 40) オルガン / 山葉製 11 号 (内藤文六郎) 80 円 83 1907 (明治 40) オルガン / 山葉製 11 号 (内藤文六郎) 80 円 83 1907 (明治 40) オルガン / 山葉製 11 号 (内藤文六郎) 650 円 84 1908 (明治 41) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 300 円 85 1908 (明治 41) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 300 円 87 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 300 円 87 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 92 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 92 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 93 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 94 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 96 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 97 1910 (明治 43) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 1921 (大正 12) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 105 1915 (大正 12) オルガン / 山葉製 (大藤帝之) 120 円 106 1921 (大正 12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 107 1921 (大正 12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 108 1921 (大正 12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山菜製 (共益商社) 195 円 1	34	1899(明治 32)	オルガン / Mason & Hamlin 社	製ペダル付	1450 円
59 1904 (明治 37) オルガン / Rodolphe 社製 (内藤文六郎) 700 円 60 1904 (明治 37) オルガン / Rodolphe 社製 (内藤文六郎) 510 円 61 1905 (明治 38) オルガン / Mason & Hamlin 社製 13 ストップ (内藤文六郎) 75 円 76 1907 (明治 40) オルガン / 山葉製 11 号 (内藤文六郎) 80 円 78 1907 (明治 40) オルガン / 山葉製 11 号 (内藤文六郎) 80 円 80 1907 (明治 40) オルガン / 山葉製 11 号 (内藤文六郎) 80 円 80 1907 (明治 40) オルガン / 山葉製 11 号 (内藤文六郎) 80 円 81 1907 (明治 40) オルガン / 山葉製 11 号 (内藤文六郎) 80 円 83 1907 (明治 40) オルガン / 山葉製 11 号 (内藤文六郎) 650 円 84 1908 (明治 41) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 900 円 85 1908 (明治 41) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 300 円 86 1908 (明治 41) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 300 円 87 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 300 円 87 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 92 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 93 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 94 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 96 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 96 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 97 1910 (明治 43) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 91 1910 (明治 43) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 339 円 50 50 50 50 50 50 50				(白井銈造)	
60 1904 (明治 37) オルガン / Rodolphe 社製 (内藤文六郎) 510 円 61 1905 (明治 38) オルガン / Mason & Hamlin 社製 13 ストップ 350 円 (内藤文六郎) 75 円 76 1907 (明治 40) オルガン / 山葉製 11 号 (内藤文六郎) 80 円 78 1907 (明治 40) オルガン / 山葉製 11 号 (内藤文六郎) 80 円 80 1907 (明治 40) オルガン / 山葉製 11 号 (内藤文六郎) 80 円 81 1907 (明治 40) オルガン / 山葉製 11 号 (内藤文六郎) 80 円 81 1907 (明治 40) オルガン / 山葉製 11 号 (内藤文六郎) 80 円 83 1907 (明治 40) オルガン / 山葉製 11 号 (内藤文六郎) 80 円 83 1907 (明治 40) オルガン / 山葉製 11 号 (内藤文六郎) 650 円 84 1908 (明治 41) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 900 円 85 1908 (明治 41) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 300 円 86 1908 (明治 41) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 300 円 87 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 300 円 91 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 92 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 94 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 94 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 96 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 97 1910 (明治 43) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 98 1910 (明治 43) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 99 1910 (明治 43) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 339 円 50 銭 105 1915 (大正 6) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 107 1921 (大正 12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 108 1921 (大正 12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 108 1921 (大正 12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益和社) 195 円 109 1922 (大正 14 14 14 14 14 14 14 14 14 14 14 14 14	35	1900 (明治 33)	オルガン / Mason & Hamlin 社	(白井銈造)	250 円
1905 (明治 38) オルガン / Mason & Hamlin 社製 13 ストップ (内藤文六郎) 75 円 76 1907 (明治 40) オルガン / 山葉製 11 号 (内藤文六郎) 75 円 76 1907 (明治 40) オルガン / 山葉製 11 号 (内藤文六郎) 80 円 78 1907 (明治 40) オルガン / 山葉製 11 号 (内藤文六郎) 80 円 80 1907 (明治 40) オルガン / 山葉製 11 号 (内藤文六郎) 80 円 81 1907 (明治 40) オルガン / 山葉製 11 号 (内藤文六郎) 80 円 81 1907 (明治 40) オルガン / 山葉製 11 号 (内藤文六郎) 80 円 83 1907 (明治 40) オルガン / 山葉製 11 号 (内藤文六郎) 650 円 84 1908 (明治 41) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 900 円 85 1908 (明治 41) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 300 円 86 1908 (明治 41) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 300 円 87 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 304 円 (西川乕吉) 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 92 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 94 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 94 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 96 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 96 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 97 1910 (明治 43) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 339 円 50 銭 105 1915 (大正 6) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 107 1921 (大正 12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 107 1921 (大正 12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 108 1921 (大正 12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (大	59	1904(明治 37)	オルガン / Rodolphe 社製	(内藤文六郎)	700 円
(内藤文六郎) 71 1906 (明治39) オルガン / 山葉8号 (内藤文六郎) 75円 76 1907 (明治40) オルガン / 山葉製 11号 (内藤文六郎) 80円 78 1907 (明治40) オルガン / 山葉製 11号 (内藤文六郎) 80円 80 1907 (明治40) オルガン / 山葉製 11号 (内藤文六郎) 80円 81 1907 (明治40) オルガン / 山葉製 11号 (内藤文六郎) 80円 81 1907 (明治40) オルガン / 山葉製 11号 (内藤文六郎) 80円 83 1907 (明治40) オルガン / 山葉製 11号 (内藤文六郎) 650円 84 1908 (明治41) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 900円 85 1908 (明治41) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 300円 86 1908 (明治41) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 300円 87 1909 (明治42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 300円 87 1909 (明治42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80円 92 1909 (明治42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80円 93 1909 (明治42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80円 94 1909 (明治42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80円 94 1909 (明治42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80円 96 1909 (明治42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80円 97 1910 (明治43) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80円 1910 (明治43) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 339円 50銭 105 1915 (大正6) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 339円 50銭 105 1915 (大正6) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195円 107 1921 (大正12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195円 108 1921 (大正12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195円 109 1922 (大正13) オルガン / 山葉製 (共益の社) 120 120 120 120 120 120 120	60	1904(明治 37)			510円
71 1906 (明治39) オルガン / 山葉8号 (内藤文六郎) 75円 76 1907 (明治40) オルガン / 山葉製 11号 (内藤文六郎) 80円 78 1907 (明治40) オルガン / 山葉製 11号 (内藤文六郎) 80円 80 1907 (明治40) オルガン / 山葉製 11号 (内藤文六郎) 80円 81 1907 (明治40) オルガン / 山葉製 11号 (内藤文六郎) 80円 83 1907 (明治40) オルガン / 山葉製 11号 (内藤文六郎) 650円 84 1908 (明治41) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 650円 85 1908 (明治41) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 300円 85 1908 (明治41) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 300円 86 1908 (明治41) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 300円 87 1909 (明治42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 300円 87 1909 (明治42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80円 92 1909 (明治42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80円 93 1909 (明治42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80円 94 1909 (明治42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80円 94 1909 (明治42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80円 96 1909 (明治42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80円 97 1910 (明治43) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 339円 50銭 105 1915 (大正6) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 339円 50銭 105 1915 (大正6) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195円 107 1921 (大正12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195円 108 1921 (大正12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195円 109 1922 (大正13) オルガン / 山葉製 (共益の社) 195円 109 1922 (大正14) 195円 109 1922 (大正15)	61	1905(明治 38)	オルガン / Mason & Hamlin 社算	製 13 ストップ	350 円
76 1907 (明治40) オルガン/山葉製 11号 (内藤文六郎) 80円 78 1907 (明治40) オルガン/山葉製 11号 (内藤文六郎) 80円 80 1907 (明治40) オルガン/山葉製 11号 (内藤文六郎) 80円 81 1907 (明治40) オルガン/山葉製 11号 (内藤文六郎) 80円 83 1907 (明治40) オルガン/山葉製 11号 (内藤文六郎) 650円 84 1908 (明治41) オルガン/山葉製特製大型 (内藤文六郎) 900円 85 1908 (明治41) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 300円 86 1908 (明治41) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 300円 87 1909 (明治42) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 300円 87 1909 (明治42) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 80円 91 1909 (明治42) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 80円 92 1909 (明治42) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 80円 93 1909 (明治42) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 80円 94 1909 (明治42) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 80円 95 1909 (明治42) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 80円 96 1909 (明治42) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 80円 97 1910 (明治43) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 80円 1910 (明治43) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 339円 105 1915 (大正6) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 339円 50銭 105 1915 (大正12) オルガン/山葉製 (共益商社) 195円 107 1921 (大正12) オルガン/山葉製 (共益商社) 195円 108 1921 (大正12) オルガン/山葉製 (共益商社) 195円 108 1921 (大正12) オルガン/山葉製 (共益商社) 195円 109 1922 (大正13) オルガン/山葉製 (共益商社) 195円 109 1922 (大正142) オルガン/山葉製 (共益商社) 195円 109 1922 (大正142) オルガン/山葉製 (共益商社) 195円 109 109 109 109 109 109 109 109 109 109					
78 1907 (明治40) オルガン / 山葉製 11 号 (内藤文六郎) 80 円 80 1907 (明治40) オルガン / 山葉製 11 号 (内藤文六郎) 80 円 81 1907 (明治40) オルガン / 山葉製 11 号 (内藤文六郎) 80 円 83 1907 (明治40) オルガン / 山葉製 11 号 (内藤文六郎) 650 円 84 1908 (明治41) オルガン / Hofberg 社製 (内藤文六郎) 900 円 85 1908 (明治41) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 300 円 86 1908 (明治41) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 300 円 87 1909 (明治42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 304 円 1909 (明治42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 92 1909 (明治42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 93 1909 (明治42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 94 1909 (明治42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 94 1909 (明治42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 96 1909 (明治42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 97 1910 (明治43) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 339 円 50 銭 105 1915 (大正6) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 107 1921 (大正12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 108 1921 (大正12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正14 192 1920 1920 1920 1920 1920 1920 1920 1920 1920 1920 1920 1	71	1906(明治 39)	オルガン/山葉8号	(内藤文六郎)	75 円
80 1907 (明治40) オルガン/山葉製11号 (内藤文六郎) 80円 81 1907 (明治40) オルガン/山葉製11号 (内藤文六郎) 80円 83 1907 (明治40) オルガン/山葉製大型 (内藤文六郎) 650円 84 1908 (明治41) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 900円 85 1908 (明治41) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 300円 86 1908 (明治41) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 300円 87 1909 (明治42) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 304円 (西川乕吉) 91 1909 (明治42) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 80円 92 1909 (明治42) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 80円 93 1909 (明治42) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 80円 94 1909 (明治42) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 80円 94 1909 (明治42) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 80円 96 1909 (明治42) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 80円 96 1909 (明治43) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 80円 96 1909 (明治42) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 80円 1910 (明治43) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 339円 50銭 105 1915 (大正6) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 120円 106 1921 (大正12) オルガン/山葉製 (共益商社) 195円 107 1921 (大正12) オルガン/山葉製 (共益商社) 195円 108 1921 (大正12) オルガン/山葉製 (共益商社) 195円 108 1921 (大正12) オルガン/山葉製 (共益商社) 195円 108 1921 (大正12) オルガン/山葉製 (共益商社) 195円 109 1922 (大正13) オルガン/山葉製 (共命社) 195円 109 1922 (大田14 11 11 11 11 11 11 11 11 11 11 11 11 1	76	1907(明治 40)	オルガン / 山葉製 11 号	(内藤文六郎)	80 円
81 1907 (明治40) オルガン/山葉製11号 (内藤文六郎) 80 円 83 1907 (明治40) オルガン/山葉製特製大型 (内藤文六郎) 650 円 84 1908 (明治41) オルガン/山葉製 (小立鉦四郎) 900 円 85 1908 (明治41) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 300 円 86 1908 (明治41) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 300 円 87 1909 (明治42) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 304 円 (西川乕吉) 91 1909 (明治42) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 80 円 92 1909 (明治42) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 80 円 93 1909 (明治42) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 80 円 94 1909 (明治42) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 80 円 94 1909 (明治42) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 80 円 96 1909 (明治42) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 80 円 97 1910 (明治43) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 100 1921 (大正12) オルガン/山葉製 (共益商社) 195 円 107 1921 (大正12) オルガン/山葉製 (共益商社) 195 円 108 1921 (大正12) オルガン/山葉製 (共益商社) 195 円 108 1921 (大正12) オルガン/山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正13) 115 円 1109	78	1907(明治 40)	オルガン / 山葉製 11 号	(内藤文六郎)	80 円
83 1907 (明治40) オルガン/山葉製特製大型 (内藤文六郎) 650円 84 1908 (明治41) オルガン/Hofberg 社製 (小立鉦四郎) 900円 85 1908 (明治41) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 300円 86 1908 (明治41) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 300円 87 1909 (明治42) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 304円 (西川乕吉) 91 1909 (明治42) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 80円 92 1909 (明治42) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 80円 93 1909 (明治42) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 80円 94 1909 (明治42) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 80円 96 1909 (明治42) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 80円 96 1909 (明治42) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 80円 99 1910 (明治43) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 339円 50銭 105 1915 (大正6) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 339円 50銭 105 1915 (大正6) オルガン/山葉製 (共益商社) 195円 106 1921 (大正12) オルガン/山葉製 (共益商社) 195円 107 1921 (大正12) オルガン/山葉製 (共益商社) 195円 108 1921 (大正12) オルガン/山葉製 (共益商社) 195円 109 1922 (大正13) 100 1	80	1907(明治 40)	オルガン / 山葉製 11 号	(内藤文六郎)	80 円
84 1908 (明治41) オルガン / Hofberg 社製 (小立鉦四郎) 900 円 85 1908 (明治41) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 300 円 86 1908 (明治41) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 300 円 87 1909 (明治42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 91 1909 (明治42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 92 1909 (明治42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 93 1909 (明治42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 94 1909 (明治42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 96 1909 (明治42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 99 1910 (明治43) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 339 円 50 銭 105 1915 (大正6) オルガン / 山葉製 (共盛商社) 195 円 106 1921 (大正12) オルガン / 山葉製 (共盛商社) 195 円 107 1921 (大正12) オルガン / 山葉製 (共盛商社) 195 円 108 1921 (大正12) オルガン / 山葉製 (共盛商社) 195 円 109 1922 (大正13) オルガン / 山葉製 (共盛商社) 195	81	1907(明治 40)	オルガン / 山葉製 11 号	(内藤文六郎)	80 円
85 1908 (明治41) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 300円 86 1908 (明治41) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 300円 87 1909 (明治42) オルガン/フィルハモニックオルガン 腰掛付 (西川乕吉) 91 1909 (明治42) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 80円 92 1909 (明治42) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 80円 93 1909 (明治42) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 80円 94 1909 (明治42) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 80円 94 1909 (明治42) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 80円 96 1909 (明治42) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 80円 99 1910 (明治43) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 339円 50銭 105 1915 (大正6) オルガン/山葉製 (内藤文六郎) 339円 50銭 106 1921 (大正12) オルガン/山葉製 (共益商社) 195円 107 1921 (大正12) オルガン/山葉製 (共益商社) 195円 108 1921 (大正12) オルガン/山葉製 (共益商社) 195円 109 1922 (大正13) 109	83	1907(明治 40)	オルガン / 山葉製特製大型	(内藤文六郎)	650 円
86 1908 (明治 41) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 300円 87 1909 (明治 42) オルガン / フィルハモニックオルガン 腰掛付 (西川乕吉) 91 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80円 92 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80円 93 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80円 94 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80円 96 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80円 99 1910 (明治 43) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80円 99 1910 (明治 43) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 339円 50銭 105 1915 (大正 6) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 50銭 106 1921 (大正 12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195円 107 1921 (大正 12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195円 108 1921 (大正 12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益の社) 1921 (大田 14	84	1908(明治41)	オルガン / Hofberg 社製	(小立鉦四郎)	900円
87 1909 (明治 42) オルガン / フィルハモニックオルガン 腰掛付 (西川乕吉) 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 92 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 93 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 94 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 96 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 96 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 99 1910 (明治 43) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 339 円 50 銭 105 1915 (大正 6) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 106 1921 (大正 12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 107 1921 (大正 12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 108 1921 (大正 12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (スクール (日本楽器製造) 315 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (スクール (日本楽器製造) 315 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (スクール (日本楽器製造) 315 円 109 100 1	85	1908(明治41)	オルガン / 山葉製	(内藤文六郎)	300 円
1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 92 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 93 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 94 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 96 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 96 1909 (明治 43) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 99 1910 (明治 43) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 339 円 50 銭 105 1915 (大正 6) オルガン / 南特製 12 号 (高井徳三) 120 円 106 1921 (大正 12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 107 1921 (大正 12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 108 1921 (大正 12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 108 1921 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 315 円	86	1908(明治 41)	オルガン / 山葉製	(内藤文六郎)	300 円
91 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 92 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 93 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 94 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 96 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 99 1910 (明治 43) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 339 円 50 銭 105 1915 (大正 6) オルガン / 南特製 12 号 (高井徳三) 120 円 106 1921 (大正 12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 107 1921 (大正 12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 108 1921 (大正 12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 315 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (スケール (日本楽器製造) 315 円	87	1909(明治 42)	オルガン/フィルハモニックオ	アルガン 腰掛付	304 円
92 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 93 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 94 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 96 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 99 1910 (明治 43) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 339 円 50 銭 105 1915 (大正 6) オルガン / 南特製 12 号 (高井徳三) 120 円 106 1921 (大正 12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 107 1921 (大正 12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 108 1921 (大正 12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 (大工 14年来器製造) 315 円				(西川乕吉)	
93 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 94 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 96 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 99 1910 (明治 43) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 339 円 105 1915 (大正 6) オルガン / 南特製 12 号 (高井徳三) 120 円 106 1921 (大正 12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 107 1921 (大正 12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 108 1921 (大正 12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 C スケール (日本楽器製造) 315 円	91	1909(明治 42)	オルガン / 山葉製	(内藤文六郎)	80 円
941909 (明治 42)オルガン/山葉製(内藤文六郎)80 円961909 (明治 42)オルガン/山葉製(内藤文六郎)80 円991910 (明治 43)オルガン/山葉製(内藤文六郎)339 円 50 銭1051915 (大正 6)オルガン/南特製 12 号(高井徳三)120 円1061921 (大正 12)オルガン/山葉製(共益商社)195 円1071921 (大正 12)オルガン/山葉製(共益商社)195 円1081921 (大正 12)オルガン/山葉製(共益商社)195 円1091922 (大正 13)オルガン/山葉製 Cスケール (日本楽器製造)315 円	92	1909(明治 42)	オルガン / 山葉製	(内藤文六郎)	80 円
96 1909 (明治 42) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 80 円 99 1910 (明治 43) オルガン / 山葉製 (内藤文六郎) 339 円 50 銭 105 1915 (大正 6) オルガン / 南特製 12 号 (高井徳三) 120 円 106 1921 (大正 12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 107 1921 (大正 12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 108 1921 (大正 12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 C スケール (日本楽器製造) 315 円	93	1909(明治 42)	オルガン / 山葉製	(内藤文六郎)	80 円
991910 (明治 43)オルガン / 山葉製(内藤文六郎)339 円 50 銭1051915 (大正 6)オルガン / 南特製 12 号(高井徳三)120 円1061921 (大正 12)オルガン / 山葉製(共益商社)195 円1071921 (大正 12)オルガン / 山葉製(共益商社)195 円1081921 (大正 12)オルガン / 山葉製(共益商社)195 円1091922 (大正 13)オルガン / 山葉製 C スケール (日本楽器製造)315 円	94	1909(明治 42)	オルガン / 山葉製	(内藤文六郎)	80 円
1051915 (大正6)オルガン/南特製 12号(高井徳三)120円1061921 (大正12)オルガン/山葉製(共益商社)195円1071921 (大正12)オルガン/山葉製(共益商社)195円1081921 (大正12)オルガン/山葉製(共益商社)195円1091922 (大正13)オルガン/山葉製 Cスケール (日本楽器製造)315円	96	1909(明治 42)	オルガン / 山葉製	(内藤文六郎)	80 円
105 1915 (大正 6) オルガン / 南特製 12 号 (高井徳三) 120 円 106 1921 (大正 12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 107 1921 (大正 12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 108 1921 (大正 12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 C スケール (日本楽器製造) 315 円	99	1910(明治 43)	オルガン / 山葉製	(内藤文六郎)	339 円
1061921 (大正 12)オルガン / 山葉製(共益商社)195 円1071921 (大正 12)オルガン / 山葉製(共益商社)195 円1081921 (大正 12)オルガン / 山葉製(共益商社)195 円1091922 (大正 13)オルガン / 山葉製 C スケール (日本楽器製造)315 円					50 銭
107 1921 (大正 12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 108 1921 (大正 12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 C スケール (日本楽器製造) 315 円	105	1915 (大正 6)	オルガン / 南特製 12 号	(高井徳三)	120 円
108 1921 (大正 12) オルガン / 山葉製 (共益商社) 195 円 109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 C スケール (日本楽器製造) 315 円	106	1921 (大正 12)	オルガン / 山葉製	(共益商社)	195 円
109 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 C スケール (日本楽器製造) 315 円	107	1921 (大正 12)	オルガン / 山葉製	(共益商社)	195 円
V 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	108	1921 (大正 12)	オルガン / 山葉製	(共益商社)	195 円
110 1922 (大正 13) オルガン / 山葉製 C スケール (日本楽器製造) 315 円	109	1922 (大正 13)	オルガン/山葉製Cスケール	(日本楽器製造)	315 円
	110	1922(大正 13)	オルガン/山葉製Cスケール	(日本楽器製造)	315円

昭和期にはいってからの楽器の移籍は以下である。

1928 (昭和3) 年

71 号、76 号、78 号、80 号、81 号、91 号、92 号、93 号の 8 台が会計課へ返附され離籍。 29 台から 21 台に減少した。

1932 (昭和7) 年

94号、96号の2台が売却。60号、83号の2台も日本楽器製造會社東京支店へ売却され、 21台から17台へ減少した。

1933 (昭和8) 年

35 号、87 号、99 号、105 号、106 号、107 号、108 号、109 号、110 号の 9 台が、廣田米 太郎へ売却された。リード・オルガンの台数は17 台から8台に減少した。

この後、新規に受入れられた昭和期のリード・オルガンについては、『楽器監守簿』に記載がある。この資料からは購入価格はわからないが、以下の6台の受入れが確認できた。

表 3-5 昭和期受入れのリード・オルガン

111	1938(昭和13)	Yamaha
112	1949(昭和 24)	(Nishikawa)(小型)
113	1950(昭和 25)	YAMAHA ポータブル型
114	1950(昭和 25)	YAMAHA ポータブル型
115	1951 (昭和 26)	純正調 ○標
116	-	ヤマハ (Cスケール2列手)

1933 (昭和 8) 年時点で残った 8 台と上記の 6 台を合わせた 14 台は『楽器監守簿(楽器) (標本)』の記載から、1951 (昭和 26) 年にいずれも存在していたことが確認できた。

表 3-6 昭和 26 年時の東京藝術大学(東京音楽学校)所蔵リード・オルガン

10	1893(明治 26)	オルガン (西川)	25 円
13	1893 (明治 26)	オルガン (才田)	25 円
34	1899(明治 32)	オルガン / Mason & Hamlin 社製ペダル付	1450 円
		(白井銈造)	

35	1900 (明治33)	オルガン / Mason & Hamlin 社製 (白井銈造)	250 円
59	1904(明治 37)	オルガン / Rodolphe 社製 (内藤文六郎)	700 円
61	1905 (明治 38)	オルガン / Mason & Hamlin 社製 13 ストップ	350 円
		(内藤文六郎)	
84	1908(明治 41)	オルガン / Hofberg 社製 (小立鉦四郎)	900円
85	1908(明治41)	オルガン/山葉製 (内藤文六郎)	300 円
86	1908(明治41)	オルガン/山葉製 (内藤文六郎)	300 円
111	1938(昭和13)	Yamaha	-
112	1949(昭和 24)	(Nishikawa)(小型)	-
113	1950(昭和 25)	YAMAHA ポータブル型	-
114	1950(昭和 25)	YAMAHA ポータブル型	-
115	1951(昭和 26)	純正調 〇標	-
116	-	ヤマハ (Cスケール2列手)	-

13 号、84 号、115 号は「標本」との記載があり、保存状態だった。それらは実際には演奏されていなかったと考えられる。

1935 (昭和 10) 年の「東京音楽学校参観の栞」には、東京音楽学校の設備にはパイプ・オルガンが 2 台とオルガン 8 台があり、パイプ・オルガンのうち一台はアボット&スミスで奏楽堂付、もう一台は国産の最新式で第70番教室にあったことが記載されている²¹²。

⁻

²¹² 『東京音楽学校参観の栞』(昭和 10 年 1 月) 教務文書綴内『入学案内の訂正関係』に含まれている資料。東京芸術大学大学史史料室所蔵。「パイプオルガン 奏楽堂備付のものは英国アボット・アント・スミス会社製で、三段の鍵盤 53 個の音栓、1384 本のパイプ 30 本のペダルを有している。第70番教室備付のものは國産で約500本のパイプを備へ、昭和9年購入したる最新式のものである」とある。

第三節 昭和期の東京音楽学校におけるオルガン履修生と教師

3-1 昭和期のオルガン履修生と受持

昭和期開始から 10 年ほどの間は、本科、選科、第四臨時教員養成所にオルガン履修生を確認することができる。大正期に多くのオルガン履修生を数えた乙種師範科は昭和 2 年度以降、履修生がいない。昭和3年度に完全に募集が停止している。

甲種師範科学生のオルガン履修は、大正期後期に激減し、0名の年もあったが、1936 (昭和11)年から復活し、1944 (昭和19)年まで履修者が続いている。

表 3-7 1926 (大正 15) 年~1927 (昭和 2) 年のオルガン履修生と受持

本科三年	多田操	眞篠
[乙種師範科]	富樫四郎 竹中重雄 藤沢紫朗 飯田はる 大津良	不明
	近江みどり 渡邊ふみこ 唐澤壽々 吉田直枝 吉田光	
	高野千代 中村藤枝 藤井千佐子 小林フミイ 三木京子	
	島留子 島村敏子	
[選科]	鈴木宗次 粗部為男 松井朝 持山嘉造 山根良一 村山博 永島政治 林良夫 上島伸郷 木村春美 島富海 高藤民子 田中萬壽子 草野恭 葛木操 川崎環 小野貞 福田文子 太田美金子 岡本綾子	不明
四臨一年	河野たか 山本喜代 松尾幽子 鈴木賢吾 (石坂房子)	眞篠

〔535〕『本科卒業生名簿』

四臨=第四臨時教員養成所

〔084〕『大正十五年四月入學(第五回)第四臨時教員養成所生徒 入學試験書類學年試験書類』

選科および乙種師範科は『東京音樂學校一覧』²¹³による。乙種師範科のオルガン履修が 全員ではなかった可能性はあるが、ここでは『東京音樂學校一覧』から補い、乙種師範科 生全員の名前を載せた。

オルガン教師は、教授:島崎赤太郎(オルガン、和声論、教頭、分教場主事)、助教授:中田章(オルガン、音楽通論、音楽理論、分教場兼勤)、教務嘱託:橋南静子(オルガン、分教場勤務)、杉生信雄(オルガン、分教場兼勤)、眞篠俊雄(オルガン)であった。

^{213 『}東京音樂學校一覧 従大正従五年至大正十六年』 東京音樂學校、84~95 頁。

表 3-8 1927 (昭和 2) 年~1928 (昭和 3) 年のオルガン履修生と受持

豫科	鳥居善次郎	中田
[選科]	鈴木宗治 粗部為男 山田吉次 草間桂子 持山嘉造	不明
	山根良一 林良夫 上島伸郷 鈴木德藏 近藤健 青木親夫	
	奥田耕天 島田寛敏 後藤百合子 阿部ムメ 草野恭	
	小野貞 大原とき 廣瀬久美 野呂保榮 宮川敬子	
	酒井マツエ 澁谷千代 細貝ナホ 佐藤みよし	

[036] 『昭和三年度 學年試験成績 東京音楽学校』[度に赤で斜線]

選科は『東京音樂學校一覧』²¹⁴による。のちに本科でオルガンを履修する奥田耕天が、 選科生としてオルガンを学んでいる。このとき奥田は神田分教場に通い、杉生信雄からレ ガート奏法をよく教えてもらったという²¹⁵。

この年の甲種師範科受験生 183 人のうち、31 人はオルガンで受験をしている。試験課題は「ラインハルト Op. 74」であった²¹⁶。

オルガン教師は、教授:島崎赤太郎(オルガン、和声論、教頭、分教場主事)、助教授: 中田章(オルガン、音楽通論、音楽理論、分教場兼勤)、教務嘱託:杉生信夫(分教場勤務)、真篠俊雄(分教場勤務)であった。

表 3-9 1928 (昭和 3) 年~1929 (昭和 4年) のオルガン履修生と受持

本科一年	鳥居善次郎	眞篠/島崎
[選科]	鈴木宗治 山田吉次 鈴木徳藏 阿部ムメ 草野恭 小野貞 大原とき 廣瀬久美 宮川敬子 澁谷千代 細貝ナホ 佐藤みよし 草間桂子	不明
第四臨時教員	尾形登美 岡田香積 海鋒義美 矢澤クニ	眞篠

[086] 『昭和四年三月 學年試験書類 東京音樂學校』

[085] 『昭和三年五月入學(第七回)昭和五年卒業 第四臨時教員養成所生徒入學試験書類學年試験書類』

選科生は『東京音樂學校一覧』217による。

^{214 『}東京音樂學校一覧 従昭和二年至昭和三年』東京音樂學校、85~94頁。

²¹⁵ 「私も始めは九段下にあった分教場に通っていました。そこで島崎赤太郎先生に会いました。習ったのは杉生先生でした。杉生先生はレガート奏法が上手で、よく教えてくれました。」、奥田耕天「回想」、『Organist』 15 巻、1988 年、6 頁。

^{216 〔469〕 『}昭和二年度 入学臨時試験成績』に記載。

^{217 『}東京音樂學校 第四臨時教員養成所一覧 従昭和三年至昭和四年』東京音樂學校、99~100頁。

オルガン教師は、教授:島崎赤太郎(オルガン、和声論、教頭、分教場主事)、助教授: 真篠俊雄(オルガン、音楽理論、和声論)、教務嘱託:杉生信雄(オルガン、分教場勤務)。 第四臨時教員養成所の教授として中田章(和声論)、講師として真篠俊雄(オルガン、音楽 通論)であった。

表 3-10 1929 (昭和 4年) ~1930 (昭和 5) 年のオルガン履修生と受持

本科二年	鳥居善次郎	眞篠/島崎
豫科	松本寛郎	眞篠/島崎
選科	佐々孝 竹内要也	杉生
[選科]	佐藤清德 石本恭 鈴木徳藏 橋村壽 番場道夫	-
	谷村義人 大原とき 的場久美 宮川敬子 細貝ナホ	
	波多野益代	
第四臨時教員一年	井上一男 渡邊義夫 草間桂子 齋藤次郎	真篠

- [253] 『昭和五年度 時間割 [他]』 218
- [108] 『自昭和五年三月 至昭和八年三月 選科定期試験成績 東京音樂學校分教場』
- [105] 『昭和四年五月入學(第八回)第四臨時教員養成所生徒試験書類』

豫科のオルガン受験者は3人であった。分教場での選科生のうち佐々と竹内は杉生が指導し、試験には真篠が立ち合っている²¹⁹。佐藤清徳以降の選科生は『東京音楽學校一覧』 ²²⁰による。この年の第四臨時教員養成所の入試は真篠が試験官になっているが、受験者は 173名、うちオルガンでの受験は9人であった。第四臨時教員養成所生徒の草間桂子は以前に選科生としてオルガンを履修している。

オルガン教師は、教授:島崎赤太郎(オルガン、和声論、教頭、分教場主事)、助教授: 真篠俊雄(オルガン、音楽理論、和声論、分教場兼勤)、講師:杉生信雄(オルガン、分教 場勤務)であった。この年、事務嘱託の楽器掛に木岡英三郎が加わっている。アボット & スミスのパイプ・オルガン導入に付随するものかもしれない。

²¹⁸ 「昭和五年度時間割」とかかれた封筒に括られているが、大正 14年度、昭和 4年度、昭和 5年度の試験成績が部分的に含まれている。昭和 4年度の本科豫科の試験書類はここに入っていた。

²¹⁹ 立合:『東京音楽学校公文書(教務関係)文書綴』の表記。担当教員以外の試験官は、試験書類に「立合」として記載されている。大正期にもまれにみられたが、昭和期の書類では頻出する。

^{220 『}東京音樂學校・第四臨時教員養成所一覧 自昭和四年至昭和五年』東京音樂學校、125~139頁。

この年から担任制がはじまった。オルガンはピアノとともにまとめられた。「ピアノ及オルガン科」の学科主任は萩原英一が務めている。 真篠は甲種師範科二年の担任となっている。

表 3-11 1930 (昭和5) 年~1931 (昭和6) 年のオルガン履修生と受持

本科三年		鳥居善次郎	真篠
本科一年		松本寛郎	真篠
選科		橋村新	杉生
[選科]		鈴木徳藏 佐藤清徳 佐々孝 大原とき 的場久美	不明
		宮川敬子 波多野益代 重田まさ 砥目民子	不明
第四臨時教員	卒	井上一男 渡邊義夫 草間桂子 齋藤次郎 福田隆一	眞篠
	一年	佐々木忠次郎	眞篠

- [088] 『昭和六年 卒業及學年試験成績』
- [108]『自昭和五年三月 至昭和八年三月 選科定期試験成績 東京音樂學校分教場』
- [089] 『昭和六年(第十回) 卒業及學年試験成績 第四臨時教員養成所』

選科の鈴木徳藏以降は、『東京音樂學校一覧』221による。

オルガン教師は、教授: 眞篠俊雄(オルガン、音楽理論、和声論、分教場兼勤)、講師: 島崎赤太郎(オルガン、和声論)、杉生信雄(オルガン、分教場勤務)であった。 楽器掛に木岡がいる。 眞篠俊雄が教授、島崎赤太郎が講師になった²²²。 選科の試験の立合い教員は眞篠が行っている。

この年の入学案内223には、パイプ・オルガンの楽器使用料がのっている。

一週六回以内

- 一学期 ピアノ2円、パイプ・オルガン4円、オルガン1円、チェロ5円
- 二学期 ピアノ 2.5 円、パイプ・オルガン 5 円、オルガン 1 円、チェロ 4 円
- 三学期 ピアノ 1.5 円、パイプ・オルガン 3 円、オルガン 0.8 円、チェロ 2.5 円 であった。

^{221 『}東京音樂學校 第四臨時教員養成所一覧 自昭和五年至昭和六年』東京音樂學校、168~169頁。

²²² 教授を務めたあと、講師として後進の指導を継続することがあった。オルガン科においては比較的よくよく見られる。大正期の楠美恩三郎、昭和期の眞篠俊雄もまた、同様に後継の教員をサポートしている。

^{223 [106] 『}昭和五年度 入學臨時試験成績 東京音楽学校』

豫科の入学試験は Reinhard Op. 74 程度、甲種師範科も同等だがピアノで受験することもできた²²⁴。

表 3-12 1931 (昭和 6) 年~1932 (昭和 7) 年のオルガン履修生と受持

聴講科	鳥居善次郎	眞篠
本科二年	松本寛郎	眞篠
選科	砥目民子 大原とき 的場久美 宮川敬子(隅田喜代子)	眞篠
	佐藤清徳 佐々孝 出口尚 岡田正義 (和田常夫)	杉生
	(菅原憲明)	
	御供うめ	不明
	橋村壽 宮川敬子 波多野益代 古坂さなえ 青木雪	
第四臨時教員	福田隆一 佐々木忠次郎	眞篠

- [202] 『タイトルなし』 [昭和七年]225
- [108] 『自昭和五年三月 至昭和八年三月 選科定期試験成績 東京音樂學校分教場』
- [039] 『昭和七年(第十一回) 卒業試験成績 第四臨時教員養成所』

選科の隅田、和田、菅原は打消し線があったため括弧書きとした。橋村壽以降は『東京音樂學校一覧』²²⁶による。

オルガン教師は、教授: 眞篠俊雄(オルガン、音楽理論、和声論、分教場兼勤)、講師: 杉生信雄(オルガン、分教場勤務)の二人のみであった。講師: 島崎赤太郎(和声論)、楽 器掛に木岡英三郎がいる。

ピアノ及オルガン科の担任は萩原英一と貫名美名彦。 真篠俊雄は甲種師範科三年の担任 を務めている。

表 3-13 1932 (昭和7) 年~1933 (昭和8) 年のオルガン履修生と受持

聴講	鳥居善次郎	-
本科三年	松本寛郎	真篠
選科	古坂さな江 盛内政子 橋本壽	真篠
	橋村寿修	杉生
	岡山正義 田村定 砥目民子 御供うめ 横山眞子	不明

^{224 [106] 『}昭和五年度 入學臨時試験成績 東京音楽学校』

²²⁵ [202] は封筒入りの資料のまとまりであるが、入学案内、書簡、時間割変更など、さまざまなものが同梱されている。「昭和六年度の担任表」や、「昭和七年三月施行の本科試験成績」、「同第四臨時教員養成所試験成績」が含まれる。

^{226 『}東京音樂學校 第四臨時教員養成所一覧 自昭和六年至昭和七年』東京音樂學校、178~179 頁。

- [191] 『各科擔任表』 [昭和五年~昭和十二年度]
- [041] 『昭和八年 卒業及學年試験成績 東京音楽学校』
- [108] 『自昭和五年三月 至昭和八年三月 選科定期試験成績 東京音樂學校分教場』

聴講の鳥居は〔191〕『各科擔任表』より、選科の岡山正義以降は『東京音樂學校一覧』 ²²⁷による。選科には、のちに本科オルガン生となる奥田耕天と牧野俊成もいるが、両名と もこの時はピアノを履修している。眞篠が受け持った学生の試験には、島崎が立ち合った。 オルガン教師は、教授:眞篠俊雄(オルガン、音楽理論、和声論、分教場兼勤)、講師:杉 生信雄(オルガン、分教場勤務)であった。

前年に引き続き、オルガン教師は真篠と杉生の二人のみである。『東京音樂學校一覧』 ²²⁸では島崎赤太郎は講師として和声論のみの担当となっているが、実際にはオルガン の試験の立合い教員を務めており、オルガン履修に関わっていたとみられる。ピアノ 及オルガン科の学科主任は引き続きピアノの萩原英一が務めている。 真篠は甲種師範 科二年の担任であった。

この年の入学案内²²⁹には、「甲種師範科の器楽はピアノとし、従来のオルガンは廃す」とある。以後しばらく甲種師範科のオルガン履修生がいない。

表 3-14 1933 (昭和8) 年~1934 (昭和9) 年のオルガン履修生と受持

研究科一年	松本寛郎	眞篠
豫科	牧野俊成	眞篠
選科	岡山正義 砥目民子 御供うめ 横山眞子	眞篠
	林道子 渡邊芳枝	

- [191] 『各科擔任表』 [昭和五年~昭和十二年度]
- [042] 『昭和九年 卒業及學年試験成績 東京音楽学校』
- [286]『自昭和八年六月至昭和十年三月 選科 定期試験成績 東京音樂學校分教場』

研究科の松本は[191]『各科擔任表』、選科の林、渡邊は『東京音樂學校一覧』230による。

^{227 『}東京音樂學校一覧 自昭和七年至昭和八年』東京音樂學校、179~180頁。

^{228 『}東京音樂學校一覧 自昭和七年至昭和八年』東京音樂學校、137頁。

^{229 [038] 『}昭和七年度 入学、臨時試験成績東京音楽学校』同梱。

^{230 『}東京音樂學校一覧 自昭和八年至昭和九年』東京音樂學校、156頁。

牧野俊成の入試時の回想がある。入試ではバッハのト短調小フーガを弾き、試験官は眞 篠、島崎両先生であったという²³¹。この年からオルガン教師は真篠一人になった。これま で眞篠とともにオルガン科の教員をしてきた島崎赤太郎はこの年の4月、東京音楽学校勤 務中に倒れ、帰らぬ人となった。以降、オルガン科試験の立合いには、ピアノ科の教員が つくようになり、豫科の試験立合いには貫名美名彦、選科の試験立合いには岡野貞一がつ いている。

表 3-15 1934 (昭和9) 年~1935 (昭和10) 年のオルガン履修生と受持

研究生	松本寛郎	眞篠
本科一年	牧野敏成	眞篠
豫科	奥田耕天青山まさ	眞篠
選科	砥目民子 渡辺芳枝 鷲巣ふじ 神長康	眞篠
	御供うめ 荘田ひろ	

- [191] 『各科擔任表』[昭和五年~昭和十二年度]
- [043] 『昭和十年 卒業及學年成績 東京音楽學校』
- [286] 『自昭和八年六月至昭和十年三月 選科 定期試験成績 東京音樂學校分教場』

研究生は〔191〕『各科擔任表』、選科の御供、荘田は『東京音樂學校一覧』232による。豫 科に入学した奥田耕天は、「変ホ長調のフーガ」を弾いて受験し、審査には岡野貞一がいた という。この頃の受験曲として一般的なのは「八つの小さい前奏曲とフーガ」だったと回 想している²³³。

年度末試験の立合い教員は貫名美名彦であった。オルガン科教師は眞篠一人。眞篠はオ ルガン、音楽理論、和声論を担当、分教場兼勤であった。加えて甲種師範科一年の担任も 務めている。

この年の3月には福島琢郎234による「ピアノ、オルガンの構造及調律」の特別講座が行 われた。この講座はその後各年で行われ、1939(昭和14)年からは「ピアノ、オルガン調 律法」として少なくとも 1941(昭和 16)年までは年に一度、定期的に開講されている²³⁵。

²³¹ 牧野敏成「オルガンと格闘した青春」、谷根千工房編『よみがえれ!パイプオルガン―永遠に響け上野 の杜に一』東京:谷根千工房、1985、10頁。

^{232 『}東京音樂學校一覧 自昭和九年至昭和十年』東京音樂學校、160頁。

²³³ 奥田耕天「回想」、『Organist』 15 巻、1988 年、6 頁。

²³⁴ 福島琢郎 (1886-1958): ピアノ調律師。1916 (大正 5) 年から 1952 (昭和 27) 年まで東京音楽学校の 講師を務め、音楽理論(楽器の沿革及調律)を担当した。

表 3-16 1935 (昭和10) 年~1936 (昭和11) 年のオルガン履修生と受持

本科二年	牧野俊成	眞篠
本科一年	奥田耕天 青山まさ	眞篠
豫科	木岡梅子	眞篠
甲種師範科三年	小野寺純子 伊藤綾子 小野田文子 永峰富貴 高城富貴子 梅沢信一 金田茂 中村一郎 松下民之助 小宮千代 石井信夫 今井圓治	眞篠
選科	御供うめ 鷲巣ふじ 荘田ひろ 工藤雅子 木村寛子	眞篠

- [191] 『各科擔任表』[昭和五年~昭和十二年度]
- [289] 『昭和十一年三月 定期試験成績』[選科]

選科の荘田、工藤、木村は『東京音樂學校一覧』236による。

久しぶりに師範科生のオルガン履修が再開された。このときの師範科生のレッスン割りが残っている²³⁷。

表 3-17 1935 (昭和 10) 年度 師範科生レッスン割

随意科履修者 師範科三年生	
今井圓治	月四時限
石井信夫	月四時限
金田茂	木一時限
中村一郎	月四時限
松本民之助	木一時限
伊藤綾子(11月より休学)	金五時限
小野田文子	火一時限
小野寺純子	金五時限
永峰富貴	金五時限
梅澤信一	木一時限
小宮千代	火一時限

²³⁵ [384] 『タイトルなし』[掲示案 昭和 4 年~昭和 13 年、他]、昭和 9 年 3 月 6 日福島「ピアノ、オルガン構造、調律」特別講義 / 昭和 11 年 3 月 4 日福島講師「ピアノ、オルガン構造及び調律」の特別講義 / 昭和 13 年 3 月 5 日掲示案、福島講師「ピアノ、オルガンの構造及調律」の特別講義。

^{[383] 『}タイトルなし』 [掲示案 昭和 13 年~16 年、他]、 昭和 14 年 2 月 20 日掲示案、福島講師「ピアノ、オルガン調律法」/ 昭和 15 年 2 月 17 日掲示案 特別講義 福島講師「ピアノ、オルガン調律法」/ 昭和 16 年 2 月 24 日掲示案 福島講師「ピアノ、オルガン調律法」。

^{236 『}東京音樂學校一覧 自昭和十年至十一年』東京音樂學校、165頁。

^{237 [191] 『}各科擔任表』 [昭和五年~昭和十二年度] に含まれる。

月曜日の四時限に三人、火曜日の1時限に二人、木曜日の一時限に三人、金曜日の五時 限三人が割り当てられているのがわかる。

本科一年の奥田耕天は、前年に豫科へ入学した後バッハの「八つの小さい前奏曲とフーガ」の勉強を始め、本科一年次に「前奏曲とフーガ」ト長調をやった、と回想している²³⁸。

昭和10年度用の入学案内²³⁹によれば、東京音楽学校内のオルガン履修は「器楽部(豫科を含む)」「研究部」「選科」に設けられており、入試課題はJ. Schneider Op. 48 終了程度、となっていた。豫科パイプオルガンの入試は3月24日に70室で第一回が実施²⁴⁰され、木岡梅子²⁴¹が入学した。

表 3-18 1936 (昭和 11) 年~1937 (昭和 12) 年のオルガン履修生と受持

本科三	牧野敏成	眞篠
本科二	奥田耕天 青山まさ	眞篠
本科一	木岡梅子	眞篠
甲種師範三年	池島つや 浮岳好恵 神本さと子 小林悦子	眞篠
選科	工藤雅子 木村寛子	眞篠
	荘田ひろ	眞篠
	高島貞充 周慶淵 秋山登 御供うめ 鷲巣ふじ	

- [044] 『昭和十二年 卒業及學年試業成績』
- [468] 『定期試験書類綴 昭和十一年至昭和二十一年』 [選科]
- [291] 『昭和十二年三月 定期試験成績』

選科の工藤、木村は〔468〕、荘田は〔291〕、高島貞充以降は『東京音樂學校一覧』²⁴²による。

オルガン教員は眞篠。立合いに貫名、田中(田中規矩士)。選科立合いに岡野。

『昭和十一年 入學、臨時試業成績』²⁴³によると、予科パイプ・オルガン受験生は二人で、 試験は70室で行われた。試験官は眞篠と岡野貞一。第二回試験時に受験生は一人だが、結

²³⁸ 奥田耕天「回想」、『Organist』 15 巻、1988 年、6 頁。

^{239 [336]『}東京音楽学校入学案内』に含まれる。

^{240 [546]『}昭和十年 入學、臨時試験成績 東京音樂學校』記載。

²⁴¹ オルガニストの木岡英三郎(1895-1982)の妹。

^{242 『}東京音樂學校一覧 自昭和十一年至昭和十二年』東京音樂學校、180~181 頁。

果入学しなかったらしい。この年、眞篠は写譜も教えている。「昭和十一年度 試験時間割 学年末」²⁴⁴には年末試験が本科二年、一年、予科ともに 70 室で行われる予定であることが 記載されている。

牧野の回想によれば、練習やレッスンには奏楽堂(現旧奏楽堂)のオルガンを使っていたとのこと。レッスンは週に一度、50分と決まっていたそうである²⁴⁵。

この年の眞篠教授の時間割が残っている246。

表 3-19 1936 (昭和11) 年度 眞篠時間割

月	9-10時	本科三年	牧野
火	9-10時	本科二年	奥田 青山
	10-11 時	本科一年	木岡
	3-4時	師範科一年	寫譜
水	_		
木	8-9時	豫科	寫譜
	10-11 時	本科一年	木岡
金	9-10時	本科二年	青山 奥田
	1-2時	師範科一年	通論
	2-3時	豫科	通論

門下生の記載は四人であるが、実際には師範科生と選科生をこの他の時間枠で教えていたと思われる。

本科三年の牧野は週一回、本科二年の奥田、青山は二人で一枠、週二回、本科一年の木岡は週二回であったようだ。

このとき本科二年の奥田耕天は、二年次にバッハの「パッサカリア」を勉強し、それを土曜演奏会で演奏したと回想している。それから、フランク、ギルマン、ヴィドール、ラインベルガーなども勉強したという²⁴⁷。

年度末には豫科入学試験が70室で行われ248、選科生であった周慶淵が入学した。

^{243 〔137〕 『}昭和十一年 入學、臨時試業成績 東京音楽學校』

^{244 [261] 『}昭和十一年度』 [担任表、時間割、学則など]

 $^{^{245}}$ 牧野敏成「オルガンと格闘した青春」、谷根千工房編『よみがえれ!パイプオルガン―永遠に響け上野の杜に―』東京:谷根千工房、1985、10頁

²⁴⁶ [261] 『昭和十一年度』 [担任表、時間割、学則など] に含まれる。

²⁴⁷ 奥田耕天「回想」、『Organist』 15 巻、1988 年、6 頁。

^{248 [548] 『}昭和十二年 入学 臨時試業成績 東京音楽学校』

表 3-20 1937 (昭和 12) 年~1938 (昭和 13) 年のオルガン履修生と受持

聴講	牧野俊成	眞篠
本科三年	奥田耕天 青山まさ	真篠
本科二年	木岡梅子	眞篠
豫科	周慶淵	真篠
師範科三年	有賀正助 石桁眞禮生 樫本正 加野高行 小森芳介 近藤猛	真篠
	笹谷榮一郎 武山信治 寺本節生 橋爪修 平山孝志 山田常三	
	赤松嘉壽子 石場ハル 上野文子 牛込淑江 大渕孝 山畑絢子	
	笠井治子 川井マツ 神野正子 久保津多子 近藤俊子 清水玉子	
	杉野正枝 瀧澤恵美子 田中恭子 中西梅 藤平正子 藤村敏	
	本橋由子 谷中雪子 宍部攝 吉岡道子 来倉美枝 綿引夏	
選科	髙島貞充 御供うめ 鷲巣ふじ	真篠
	鹽見晴雄 岳野慶作 荘田ひろ 工藤雅子 木村寛子 山田百合子	

- [191] 『各科擔任表』[昭和五年~昭和十二年度]
- [294] 『昭和十三年三月 定期試験成績』[選科]

選科の鹽見以降は『東京音樂學校一覧』249による。

師範科の履修生によって、オルガン履修生の人数が増加しているが、真篠一人体制は変わらない。

師範科三年生のオルガン履修は全員で、前期18名後期18名にわかれて履修している。

第一期は6月1日より11月8日まで 約82日間12回のレッスン

第二期は 11 月 9 日より昭和 13 年 2 月末日まで、約 82 日間約 12 回のレッスンであった 250 。

この年の師範科生レッスンの時間割り251は以下である。

表 3-21 1937 (昭和 12) 年度師範科生オルガンレッスン割

第一期		第二期	
有賀正助	火一時限	笠井治子	火一時限
石桁眞禮生	水二時限	川井マツ	火一時限
樫本正	水二時限	神野正子	火一時限
加野高行	水二時限	久保津多子	火二時限
小森芳介	火一時限	近藤俊子	火二時限
近藤猛	火一時限	清水玉子	水二時限
笹谷榮一郎	火二時限	杉野正枝	水二時限
武山信治	火二時限	瀧澤恵美子	火二時限
寺本節生	火二時限	田中恭子	水二時限

^{249 『}東京音樂學校一覧 自昭和十二年至昭和十三年』、東京音樂學校、179~180頁。

^{250 [191]『}各科擔任表』[昭和五年~昭和十二年度]に掲載。

²⁵¹ 同前。

橋爪修	缼	中西梅	水四時限
平山孝志	金六時限	藤平正子	金五時限
山田常三	金六時限	藤村敏	金四時限
赤松嘉壽子	水四時限	本橋由子	金四時限
石場ハル	水四時限	谷中雪子	金四時限
上野文子	金四時限	宍部攝	金四時限
牛込淑江	金四時限	吉岡道子	金五時限
大渕孝	金四時限	来倉美枝	金五時限
山畑絢子	水四時限	綿引夏	金四時限

一時限に3~4人が割り当てられている。グループレッスンか、あるいは一人15~20分のレッスンだったのかもしれない。

表 3-22 1938 (昭和 13) 年~1939 (昭和 14) 年のオルガン履修生と受持

研究一年	奥田耕天	真篠
聴講二年	牧野俊成	真篠
聴講一年	青山まさ	真篠
本科三年	木岡梅子	真篠
本科二年	渡辺 ²⁵²	真篠
本科一年	周慶淵	眞篠
豫科	髙島貞充	眞篠
師範科三年	青山正雄 石黒一郎 斎藤鉱吉 石井悠紀子 久保貞祐	眞篠
(前期)	澤崎公之 福沢光世 福本正 松田博人	
	田中正 原敏義 久田貞祐 武内等 友利明長 榊原昌	
	内田沓志 地主忠雄 望月敬明 斎藤美喜恵 柳橋久	
	富田正牧	
師範三年	朝長道子 横山節 都田千枝子 杉浦文子 高橋理子	眞篠
(後期)	髙山教子 吉村嘉久子 若穂光子 中田早苗	
	島指春子 永瀬爽子 田中千代子 塚本智子 野口美代	
	福島綾子 高橋千枝子 水上武子 益子憂子	
	土松嘉寿子 松本千鶴子 柳原博子 矢谷万知子	
選科	工藤雅子 山田百合子 木村寛子 武野慶作	眞篠
	荘田ひろ 中村アサ子 原田輝子	
	岳野俊作 鷲巣ふじ 高村愛子 平岩幸子	

[260] 『時間表』 [昭和13年]

〔295〕 『昭和十三年七月 定期試験成績』 [選科]

[296] 『昭和十三年十二月施行 定期試験成績』[選科]

[297] 『定期試験成績 昭和十四年三月施行』[選科]

²⁵² 本科二年の渡辺姓で該当するのは渡邉暁雄 (1919-1990)。専攻はヴァイオリン。

.

豫科以上の履修については〔260〕『時間表』に掲載。選科のうち、工藤、山田は〔295〕、 木村、武野は〔296〕、荘田、中村、原田は〔297〕に掲載、岳野以降は『東京音樂學校一覧』 ²⁵³による。

この年の眞篠の一週間の時間割が、前期、後期それぞれ残されている²⁵⁴。本科学生も含めたレッスンの時間が記載されている。左列は時限の開始時間である。

表 3-23 1938 (昭和 13) 年度前期 7月より 11月までの担任表(眞篠)

20.	25 1750 (#H/)	(54 134)				
	月	火	水	木	金	土
9	-	青山 [師三]				
		石里 [師三]				
		斎藤 [師三]				
10	木岡 [本三]	石井[師三]	武内 [師三]	木岡 [本三]	周 [本一]	写譜 [予]
		久保 [師三]	友利 [師三]			
		澤崎 [師三]	榊原 [師三]			
11	周 [本一]	奥田 [研一]		高島 [予]	青山 [聴一]	
12	高島 [予]	渡辺 [本二]	内田[師三]			
			地主 [師三]			
			望月 [師三]			
14		福沢 [師三]				
		福本 [師三]				
		松田 [師三]				
15		田中[師三]	斎藤 [師三]		写譜 [師一]	
		原 [師三]	柳橋 [師三]			
		久田 [師三]	室田[師三]			
16						

表 3-24 1938 (昭和 13) 年度後期 11月9日より2月末日までの担任表(眞篠)

	月	火	水	木	金	土
9		朝長 [師三]				
		横山 [師三]				
		都田[師三]				
10	木岡 [本三]	杉浦 [師三]	島指 [師三]	木岡 [本三]	周 [本一]	
		高橋 [師三]	永瀬 [師三]			
		高山 [師三]	田中[師三]			
11	周 [本一]	奥田 [研一]		高島 [予]	青山 [聴一]	
12	高島 [予]	渡辺 [本二]	塚本 [師三]		松本 [師三]	

^{253 『}東京音樂學校一覧補遺 自昭和十三年至同十四年』東京音樂學校、67~68頁。

^{254 〔252〕 『}試験書類』 [昭和十三年度 教官担任表 教務課]、各教員の担任表のうち、眞篠の頁。

		野口 [師三] 福島 [師三]	柳原 [師三] 矢谷 [師三]	
14				
15	吉村 [師三] 若狭 [師三] 中田 [師三]	水上[師三]		
16				

研究科、本科、予科、聴講科の学生は一時間に一人、師範科三年生は一時間に3~4人が割り当てられている。本科、豫科生は週に二回のレッスンだったようだ。

生徒側の時間割も残っている。1938 (昭和 13) 年度の豫科生であった髙島貞充と、本科 一年の周慶淵²⁵⁵の生徒時間割りが次である。

表 3-25 豫科生 髙島貞充の時間割

	月	火	水	木	金	土
第一時	-	オルガン	唱歌	-	オルガン	独語
			(澤﨑)			(妹尾)
第二時	-	理論	理論	オルガン	唱歌	写譜
		(片山)	(片山)		(澤崎)	(眞篠)
第三時	国語	-	修身	オルガン	-	合唱
	(風巻)		(馨)	(眞篠)		(木下)
第四時	オルガン	合唱	国語	オルガン	合唱	-
	(眞篠)	(Fe.)	(風巻)		(Fe.)	
第五時	ピアノ	通論	-	合唱	-	-
	(永井)	(片山)		(Fe.)		
第六時	独語	教練	-	合唱	-	-
	(妹尾)	(家所)		(澤崎)		
第七時	-	教練	-	独語	-	-
		(家所)		(妹尾)		

表 3-26 本科第一学年 周慶淵の時間割

_	-						
		月	火	水	木	金	土
Ī	第一時	-	理論	教育	-	オルガン	教育
			(橋本)	(山下)		(練習)	(山下)
Ī	第二時	オルガン	唱歌	国語	ヴァイオリン	オルガン	独乙語
		(練習)	(澤崎)	(風巻)	(井上)	(眞篠)	(妹尾)

²⁵⁵ [205]『豫科「生徒時間割」昭和十三年』各学生の時間割表綴り。豫科だけでなく本科生のものも綴られている。うち、オルガン履修生は髙島、周の二名。

第三時	オルガン	オルガン	オルガン	オルガン	-	合唱
	(眞篠)	(練習)	(練習)	(練習)		(木下)
第四時	ピアノ	合唱	音楽史	理論	合唱	
	(水谷)	(フェルマー)	(遠藤)	(橋本)	(フェルマー)	
第五時	音楽史	国語	独乙語	合唱	独乙語	
	(遠藤)	(風巻)	(妹尾)	(フェルマー)	(妹尾)	
第六時	教練	-	-	-	-	
	(金子)					
第七時	教練	音声	-	-	-	
	(金子)					

週に2回のレッスンだった様子が生徒側からも確認できる。また週に4日の練習枠があったことがわかる。

本科三年の木岡梅子の生徒時間割りも残っている256。

表 3-27 本科第三学年木岡梅子の時間割

	月	火	水	木	金	土
第一時	独	-	独	合唱	国語	唱歌
	(妹尾)			(H)	(風巻)	(木下)
第二時	オルガン	-	美学	オルガン	理論	教授法
	(眞篠)		(遠藤)	(眞篠)	(細川)	(草川)
第三時	-	理論	音楽史	独語	-	合唱
		(細川)	(遠藤)	(山下)		(木下)
第四時	-	合唱	修身	-	ピアノ	-
		(H)	(山下)		(渡辺)	
					→木四へ	
第五時	国語	_	-	合唱	-	_
	(風巻)			(H)		
第六時	体操	-	体操	教授法	-	-
	(折井)		(折井)	(草川)		
第七時	-	-	-	-	-	-

レッスンはやはり週二回。こちらは練習枠に関しては書込まれていない。

226

 $^{^{256}}$ [311] 『本三 師三』 [昭和 13 年度 本科三年、師範科三年 各生徒の時間割綴]、木岡の時間割はこちらに 綴られていた。

『昭和十四年 卒業及學年試験成績』²⁵⁷によれば、この年の卒業試験の会場は 70 教室。 試験官は眞篠教授、立合い教員は萩原(萩原英一)。卒業生の本科三年木岡梅子と選科荘田 ひろが試験を受けた。

表 3-28 1939 (昭和 14) 年~1940 (昭和 15) 年のオルガン履修生と受持

研究二年	奥田耕天	眞篠
研究一年	木岡梅子	真篠
本科三年	(渡辺)	眞篠
本科二年	周慶淵	眞篠
本科一年	高島貞充	眞篠
予科	中村アサ子	眞篠
聴講	青山まさ	眞篠
師範科三年	石本一雄 岡本道夫 草野剛 小澤慎一郎 澤崎公之 澤邊司郎	眞篠
	難波正 原田豊 平田弘夫 松井三雄 山上豊 山崎三郎	
	安澤ユキ 石原喜美子 市川郁子 井上芳子 今泉あつ	
	梅村房子 岡田千鶴子 岡部美智子 北島惠美子 國藤ちか子	
	齋藤照 鈴木藤子 高橋和 瀧田靜子 玉置温子 土橋とも	
	出原雅子 中野正子 中村千代子 中山田鶴子 成田百合子	
	橋本淑子 華房寛子 船越瑞穂 松井智子 松永昌子	
	安田和子 谷津道子 山下千鶴	
選科	高村愛子 平岩幸子	眞篠
	鷲巣ふじ 秋元道雄 武藤カヅ子 木村寛子	
	岳野慶作 荘田ひろ 山田百合子 原田輝子	

- [255] 『昭和十四年度 教務課』 [教官担任綴]
- [298] 『定期試験成績 昭和十四年七月施行』[選科]
- [299] 『定期試験成績 昭和十四年十二月施行』[選科]
- [300] 『昭和十五年三月 定期試験成績』[選科]

豫科以上の履修については〔255〕、選科の高村は〔298〕、平岩は〔299〕、鷲巣、秋元、 武藤、木村は〔300〕に掲載。岳野以降は『東京音樂學校一覧』²⁵⁸による。

この年の眞篠の時間割がある。『昭和十四年度 教務課』²⁵⁹資料による眞篠の一週間は以下である。

-

^{257 [048] 『}昭和十四年 卒業及學年試験成績 東京音楽学校』記載。

^{258 『}東京音樂學校一覧補遺 自昭和十四年至昭和十五年』東京音樂學校、76~77頁。

^{259 [255] 『}昭和十四年度 教務課』 [教官担任綴] 記載。

表 3-29 1939 (昭和14) 年度 4月~10月眞篠時間割

	1	1	1	1	1
	月	火	水	木	金
8-9 時		岡田 (師三)		國藤 (師三)	
		高橋 (師三)		北島 (師三)	
9-10 時	高島 (本一)		安沢 (師三)	中村 (予)	井上(師三)
			石原 (師三)		梅村 (師三)
			市川 (師三)		今泉 (師三)
10-11 時	周 (本二)	奥田 (研二)	木岡 (研一)	周 (本二)	高島 (本一)
11-12 時	中村 (予)	石本 (師三)	青山 (聴二)		小沢 (師三)
		岡本 (師三)			沢辺 (師三)
		草野 (師三)			沢崎 (師三)
1-2 時				渡辺 (本三)	岡部 (師三)
					鈴木 (師三)
					斉藤 (師三)
2-3 時		滝田 (師三)			
		玉置 (師三)			
		土橋 (師三)			

表 3-30 1939 (昭和14) 年度11月~3月 眞篠時間割

	月	火	水	木	金
8-9 時		松井 松永 安田		谷津 山下	
9-10 時			中野 中村 中山		
10-11 時					
11-12 時		原田 平田 松井			難波山崎
1-2 時		山上 出原 成田 →金 9-へ			橋本 華房 船越
2-3 時					

変更部(師範科の部分)だけの記載である。

66 室と 120 室はオルガン教室で、師範科三年のオルガン授業は 120 室で行われた 260 。この年真篠教授の部屋は 141 室へ変更となっている 261 。

-

^{260 [255] 『}昭和十四年度 教務課』[教官担任綴] 記載。

前年度の時間割にも選科生の指導については書込まれていない。空白のところのどこかで、別途行われていたのかもしれない。

修了および試業試験は1940(昭和15)年3月1日に58教室で行われた²⁶²。

9:30~研究科、聴講生

10:30~本科二年生、豫科生

試験官は眞篠、立ち合い教師に岡野貞一。

3月7月施行の試験では、秋元、武藤の二名が同じく 58 室で受験²⁶³、翌年から豫科に入 学している。

表 3-31 1940 (昭和15) 年~1941 (昭和16) 年のオルガン履修生と受持

研究二年	木岡梅子	眞篠
聴講	牧野俊成	眞篠
本科三年	周慶淵	眞篠
本科一年	中村アサ子 高島貞充	眞篠
予科	秋元道雄 武藤カヅ子	眞篠
師範科三年	宮下簾 吉川千鶴子 多田千賀子 安藤要一 植木忠 緒方勉	眞篠
	水野久美 水ノ上牧子 三谷郁子 宮地哀子 渡辺タカ 渡辺リリイ	
	安城政三 大給正夫 熊田為宏 渡辺和喜 辻野英子 中山幸子	
	田中誠一 供田武嘉津 永見貞三 見藤武雄 沢辺 鈴木信一	
選科	岳野慶作 小川誠治 荘田ひろ 野崎律子 徳田美代子	真篠
	成末美代子 脇屋寛子	

- 〔315〕 『時間表 永久保存』 [昭和 15年]
- [301] 『昭和十五年十二月 定期試験成績』 [選科]
- [302] 『定期試験成績 昭和十六年三月施行』[選科]

選科の岳野、小川は〔301〕、荘田以降は〔302〕に掲載。

この年の眞篠の時間割264は以下である。

²⁶¹ [383] 『タイトルなし』[掲示案 昭和 13 年~16 年、他] のうち「昭和 14 年 9 月 11 日掲示案 教室の変更」。

^{262 [551] 『}昭和十五年三ノ三 卒業及學年試業成績 東京音楽学校』記載。

^{263 [471] 『}昭和十五年三月七日施行 入学、臨時、試業成績綴 東京音楽学校』記載。

^{264 [315] 『}時間表 永久保存』[昭和 15 年] 記載。

表 3-32 1940 (昭和15) 年度 眞篠時間表

	月	火	水	木	金
1		木岡 (研二)	水野 (師三)	高島 (本一)	田中(師三)
			水上(師三)		供田 (師三)
			三谷 (師三)		永見(師三)
2	周 (本三)	宮下(師三)	宮地 (師三)	周 (本三)	武藤 (予)
		吉川 (師三)	渡辺タ (師三)		
		多田(師三)	渡辺リ (師三)		
3	中村(本一)	秋元 (予)			秋元 (予)
		武藤 (予)			
4		安藤 (師三)		渡辺ワ (師三)	
		植木 (師三)		辻生 (師三)	
		緒方 (師三)		中山 (師三)	
5		高島 (本一)	安斉 (師三)		見藤 (師三)
			大給 (師三)		沢辺 (師三)
			熊田 (師三)		鈴木 (師三)
6		牧生(聴)			

オルガンの教授は101、58 あるいは60 教室を使用。

1941 (昭和 16) 年 3 月の卒業学年試業成績資料²⁶⁵によれば、本科三年周慶淵と豫科秋元 道雄、武藤カヅ子の試験は 58 室で行われた。担当は眞篠、立会は岡野である。本科一年の 高島貞充、中村アサ子の試験も、教官眞篠、立合岡野で行われた。

表 3-33 1941 (昭和 16) 年~1942 (昭和 17) 年のオルガン履修生と受持

研究科	周慶淵	眞篠
聴講	牧野俊成	
本科二年	中村アサ子	真篠
本科一年	秋元道雄 武藤カヅコ	眞篠
豫科	伊藤信夫 成末美代子	眞篠
師範科三年	海老原 大原 吉島 鈴木 副島 兼田 上池 式部 高木 髙西 髙山大河原	眞篠
	小島 近藤 粟生 青山 入江 白田 田中 玉川 西 林	
	保坂 増成 水野 村尾 森田 前田 高田 當別三 山上 永田 二階堂 長	
	谷川 服部 廣川 堀川 牧野 松田 安田 吉竹 渡邊	
師範科二年	小方 岡本 大島 安東 柏葉 斉藤 梅津 佐賀 高沢 宮口 尾崎	真篠
	大西 高橋 永光 春日 兼松 北浦 國保 中山 倉敷 重松 川内	
	塩聖 對馬 田中 嶋崎 千田	
選科研究生	木村寛子	
聴講二	板生 鷲巣ふじ	眞篠

265 [049] 昭和 16 年 3 月 (三ノー) 卒業學年試業成績内「試業委員 昭和 16 年 2 月 教務課」

230

聴講一	荘田ひろ	眞篠
選科	山田百合子 岳野慶作 青島美千恵 前川昭代 高釣拿 永島允子	
	相澤光 長谷川聖 大竹和嘉子 我部愛子	

- 〔206〕 『十六年度 授業時間割表』
- [312] 『昭和十六年 時間表教務課 永久保存』
- [468] 『定期試験書類綴 昭和十一年至昭和二十一年』[選科]

師範科二年と聴講二年の板生は〔312〕による。選科は〔468〕に掲載。師範科三年のオルガンは「試業が行われない」と通達がでている²⁶⁶が、実際には翌年より適用されたようでこの年の眞篠の時間割にはまだ師範科三年生の履修生がいる。

この年の眞篠の時間割267は以下である。

表 3-34 1941 (昭和16) 年度 眞篠時間割

	月	火	水	木	金
8-9		伊藤 (師三)		高木 (師三)	栗生(師三)
		原賀 (師三)		髙西 (師三)	青山 (師三)
		岩佐(師三)		高山 (師三)	入江 (師三)
9-10	秋元 (本一)	伊藤 (予)	鈴木 (師三)	大河原 (師三)	
	武藤 (本一)	成末 (予)	副島 (師三)	小島 (師三)	
				近藤 (師三)	
10-11	中村 (本二)	周 (研一)	兼田(師三)	秋元 (本一)	伊藤 (予)
			上池 (師三)	武藤 (本一)	成末 (予)
			式部 (師三)		
11-12		木元 (師三)		中村(本二)	白田(師三)
		工藤 (師三)			
		隅田 (師三)			
1-2		海老原(師三)			
		大原 (師三)			
		吉島 (師三)			
2-3		牧野 (聴二)			荘田 (聴一)
		鷲巣 (聴二)			

この年からは、本科生のレッスン時間も一時間につき二人となっている。

真篠は1942 (昭和17) 年1月から4月にかけて、師範科二年のオルガンも受け持っていた²⁶⁸。土曜日まで授業があり、かなり多忙であった様子である。

^{266 [049]} 昭和 16年3月 (三ノ一) 卒業學年試業成績内「試業委員 昭和 16年2月 教務課」

^{267 〔206〕 『}十六年度 授業時間割表』

表 3-35 1942 (昭和 27) 年 1 月 ~ 4 月 眞篠時間割

	月	火	水	木	金	土
8-9	小方 (師二)	田中(師三)		服部 (師三)	宮口(師二)	
	岡本(師二)	玉川 (師三)		廣川 (師三)	尾崎 (師二)	
	大島 (師二)	西 (師三)		長谷川(")	大西 (師二)	
				川内 (師二)		
				塩聖 (師二)		
9-10	秋元 (本一)	伊藤 (予)	前田(師三)	堀川 (師三)		高橋 (師二)
	武藤 (本一)	成末 (予)	高田(師三)	牧野 (師三)		永光 (師二)
			當別三(")	松田 (師三)		春日(師二)
10-11	中村 (本二)	周 (研一)	兼松 (師二)	秋元 (本一)	伊藤 (予)	
			北浦 (師二)	武藤 (本一)	成末 (予)	
			國保 (師二)			
11-12	安藤 (師二)	林 (師三)	山上(師三)	中村 (本二)		
		保坂 (師三)	永田 (師三)			
	斉藤 (師二)	増成 (師三)	二階堂(")			
			中山(師二)			
			倉敷 (師二)			
			重松 (師二)			
1-2		水野 (師三)	安田 (師三)	對馬 (師二)	嶋崎 (師二)	
		村尾 (師三)	吉武 (師三)	田中(師二)	千田(師二)	
		森田 (師三)	渡邊 (師三)			
2-3		梅津 (師二)			荘田 (聴)	
		佐賀 (師二)				
		高沢 (師二)				

本科の教室に101とある。

表 3-36 1942 (昭和17) 年~1943 (昭和18) 年のオルガン履修生と受持

研究科二年	周慶淵	眞篠
本科二年	秋元道雄 中村アサ子 武藤カヅ子	眞篠
本科一年	伊藤信夫 成末美代子	眞篠
豫科	長谷川聖	眞篠
師範科二年	石田 阿部 浅野 飯田 鈴木 佐藤 小林 後藤 近藤 小川 大沢 東風平	眞篠
	池島 石田 鴛原 伊藤 井上 岡田 入江 石橋 甲斐 」加藤 小山田 岸	
	田 並島 黒田	
聴講生	荘田ひろ 木村寛子	眞篠
選科	林紀枝 栗原喜代子 大竹和嘉子 小川誠治 天野えつ	眞篠
	青島美千恵 徳田美代子 脇屋寛子 野崎律子 諏訪裕子 由木 恭	
	内野一男	

^{268 [312] 『}昭和十六年 時間表教務課 永久保存』記載。

- [126] 『昭和十六年十二月 昭和十七年三月 卒業成績』 [昭和 16~18年]
- 〔313〕 『昭和十七年十月ヨリ変更 教務掛』
- [468] 『定期試験書類綴 昭和十一年至昭和二十一年』[選科]

師範科二年は〔313〕、選科は〔468〕による。

次頁は昭和十七年十月~とされる眞篠の授業時間割表である269。

表 3-37 1932 (昭和17) 年10月~ 眞篠時間割

	月	火	水	木	金	土
1	中村 (本二)		小林 (師二)		伊藤 (本一)	岡田(師二)
			後藤 (師二)		成末(本一)	入江 (師二)
			近藤 (師二)			石橋 (師二)
2	石田(師二)	長谷川(予)	小川 (師二)	秋元 (本二)		
	阿部 (師二)	周 (研二)	大澤 (師二)	武藤 (本二)		
	浅野 (師二)		東風平(師二)			
3	秋元 (本二)	伊藤 (本一)		長谷川(予)	伊藤 (師二)	甲斐(師二)
	武藤 (本二)	成末 (本一)			井上(師二)	加藤 (師二)
						小山田(師二)
4				池島 (師二)	中村 (本二)	岸田 (師二)
				石田(師二)		並島(師二)
				鴛原 (師二)		黒田(師二)
5		飯田(師二)			荘田 (聴二)	
		鈴木 (師二)				
		佐藤 (師二)				

師範科生の教室は 60 室、本科豫科聴講生の教室は 101 室であった²⁷⁰。豫科および入学試験は 58 室で行われている²⁷¹。

昭和17年入試資料には、入学試験受験前の履歴書が添付されている²⁷²。その中にオルガン履修履歴のある人が二名いた。一名は奥田耕天氏についてオルガンを習っており、一名は駿河台女學院音楽部オルガン科に在籍、というものであった。

٠

^{269 〔313〕 『}昭和十七年十月ヨリ変更 教務掛』

^{270〔313〕『}昭和十七年十月ヨリ変更 教務掛』記載。

^{271〔127〕『}昭和十七年、十八年成績』記載。

^{272 [091] 『}昭和十七年 入試』記載。

表 3-38 1943 (昭和18) 年~1944 (昭和19) 年のオルガン履修生と受持

研究科	周慶淵	眞篠
本科三年	秋元道雄 中村アサ子 武藤カヅ子	真篠
本科二年	伊藤信夫 成末美代子	真篠
師範科二年	石井 加藤 菊池 小林 小牧 近藤 藤沢 辻沢 木村 藤井 細	真篠
	酒井 林 田島 丸山 宮村 熊田 串田 中村 渡辺	
豫科	猪狩良雄 天野えつ	真篠
聴講生	木村寛子	真篠
選科	平岩幸子 入江照子 青島美千恵 我部愛子 村田治子	真篠
	高釣合手 深山カヲル 我部洋子 式場千枝子	
	村林式子 岡部美津代 星野春子 貫名登美子 金子晃子	
	松崎啓	

- [127] 『昭和十七年、十八年成績』 [昭和十八年度生徒名簿]
- [055] 『昭和十八年九月(甲)卒業學年試業成績 東京音樂學校』
- [314] 『時間表 自昭和十八年十月至昭和十九年三月 永久保存』
- [468] 『定期試験書類綴 昭和十一年至昭和二十一年』[選科]

本科三年、二年、豫科は〔127〕、研究科の周は〔055〕、師範科は〔314〕、選科は [468] による。

この年は修了年限が繰り上げられ、半年前倒しの9月に研究科器楽部の周慶淵、本科器楽部の秋元道雄、中村アサ子、武藤カヅ子が修了し、同時に秋元、武藤の二名は研究科に入学している²⁷³。

この年の眞篠の時間割は以下である274。

表 3-39 1943 (昭和18) 年度 眞篠時間割

	20 05 15 to (AHTH 10) 20 20 18 18 18 18 18					
	月	火	水	木	金	土
1	成末(本二)		小林 (師二)	伊藤 (本一)	藤井(師二)	丸山 (師二)
			小牧 (師二)	成末 (本一)	細 (師二)	宮村 (師二)
			近藤 (師二)			熊田(師二)
						串田(師二)
2	武藤 (研一)	猪狩 (予)		武藤 (研一)		
		天野 (予)				
3	秋元 (研一)	石井(師二)	藤沢 (師二)	秋元 (研一)	酒井(師二)	
	伊藤 (本二)	加藤 (師二)	辻沢 (師二)		林 (師二)	
		菊地 (師二)	木村 (師二)		田島 (師二)	

^{273 [538] 『}昭和三年以降 卒業者氏名名簿』 [昭和6年~昭和19年] 記載。

^{274 [314] 『}時間表 自昭和十八年十月至昭和十九年三月 永久保存』に掲載。

4			猪狩 (予)	中村(師二)渡辺(師二)
			天野 (予)	渡辺 (師二)
5				
6				
7	分[教場]		分 [教場]	

オルガン室は60と101。

昭和19年3月の進級の時点で、本科二年の伊藤信夫は仮卒業となった。聴講生の木村寛子は9月に修了している²⁷⁵。

表 3-40 1944 (昭和 19) 年~1945 (昭和 20) 年のオルガン履修生と受持

本科一年	高橋正子 深山カヲル	眞篠
[豫科]	一名	眞篠
選科	野崎律子 本澤ゆかり	眞篠

- [100] 『昭和十九年 本科第一学年 臨時試験成績 本一』
- [468] 『定期試験書類綴 昭和十一年至昭和二十一年』 [選科]
- [100] 『昭和十九年本科第一学年 臨時試験成績 本一』では、学年氏名不明のもう一名が オルガンで試験を受けている。おそらく豫科の林佑子かと思われる。

試験の書類にはいずれも眞篠と高折のサインがある。高折宮次はピアノ教授であった。 この年の情報は極めて少ない。

表 3-41 1945 (昭和 20) 年~1946 (昭和 21) 年のオルガン履修生と受持

聴講	秋元	眞篠
本科二年	高橋 深山	眞篠
本科一年	林佑子	眞篠
師範一年	伊藤	眞篠
聴講	船橋	眞篠

〔316〕 『授業時間割永久保存[昭和20年]』

真篠の時間割は以下である²⁷⁶。

表 3-42 1945 (昭和 20) 年度 眞篠の授業時間割

-	-					
		月	火	水	木	金
	1					

^{275 [538] 『}昭和三年以降 卒業者氏名名簿』 [昭和6年~昭和19年] 記載。

^{276 [316] 『}授業時間割 永久保存 [昭和 20 年]』掲載。

2	高橋 (本二)		高橋 (本二) 深山 (本二)
	深山 (本二)		深山 (本二)
3	林 (本一)		伊藤 (師一)
4	船橋 (聴)		林 (本一)
5			秋元 (聴)

授業は火曜日と金曜日に集中している。一時限は8時~、二時限は9時~、三時限は10時~、四時限は11時~であった²⁷⁷。

表 3-43 1946 (昭和 21) 年~1947 (昭和 22) 年のオルガン履修生と受持

本科三年	高橋正子 深山カオル	眞篠/秋元
本科二年	林佑子	真篠/秋元

[056] 『昭和二十二年三月(二ノ一)卒業學年試業成績 東京音樂學校』

この時の在学生から、本科は四年制となり、オルガン科の教員に秋元道雄が加わった。

表 3-44 1947 (昭和 22) 年~1948 (昭和 23) 年のオルガン履修生と受持

本科四年	高橋正子 深山カオル	秋元
本科三年	林佑子	秋元
本科一年	吉田さかえ	秋元
研究二年	伊藤信夫	眞篠
聴講一年	河野鶴代	眞篠

[552] 『昭和二十二年度 平常点調 東京音楽学校』

時間割が残っている²⁷⁸。この年より、秋元と眞篠の分担がはじまった。月金を秋元、火 土を眞篠が担当している。

表 3-45 1947 (昭和 22) 年度 時間割

	月	火	水	木	金	土
1						
2	高橋 (本四)				吉田(本一)	
	深山 (本四)					
3	林 (本三)				高橋 (本四)	
	林 (本三) 吉田(本一)				深山 (本四)	
4		伊藤 (研二)			林 (本三)	河野 (聴一)
5						

^{277 〔319〕 『}昭和二十年度 授業時間割』 記載。

278 〔232〕 『昭和二十二年度 時間割 教務課』 記載。

一時限は8:30~9:20、二時限9:30~10:20、三時限は10:30~11:20、四時限は11:30~12:20 であった。

この年の入試課題は、「シュナイデルの Op. 67」か「ラインハルトの Op. 74番」の修了程度、ピアノで受験することもできた 279 。

表 3-46 1948 (昭和 23) 年~1949 (昭和 24) 年のオルガン履修生と受持

研究科一年	高橋正子 深山カオル	眞篠
本科四年	林佑子	秋元
本科二年	吉田さかえ	秋元
本科一年	小林俊子 島田麗子	秋元
師範科二年	二俣松四郎	秋元
聴講	河野鶴代 伊藤信夫	眞篠

- [063] 『昭和二十四年二月(三ノ一)卒業進級試験成績 東京音楽学校』
- [555] 『昭和二十三年度(六月) 平常点調 東京音楽学校』

研究、本科は〔063〕、師範科、聴講は〔555〕による。この年から、主任は秋元、立会が 眞篠になっている²⁸⁰。

7月14日 (水) に本科四年生の試演会が101 教室で行われた。演奏に引き続き批評会があった²⁸¹。

本科一年生の試験と、入試は58室で行われている282。

この年の入試課題は、

第一回 シュナイデル作品第六十七番オルガン練習曲第一篇(Schneider, Op. 67 Studien, Band I)又はラインハルト作品七十四番オルガン練習曲巻一(Reinhard Op. 74 Studien Band I)中より練習曲一曲及び以上の曲以外の自由選択曲一曲(練習曲でないもの)

第二回 第一回の曲及び簡単な新曲と、ピアノで練習曲一曲(自由選択)を弾くであった²⁸³。

^{279 〔554〕 『}昭和二十二年度 入學試業成績 東京音楽学校』記載。

^{280 [061] 『}昭和二十三年度 三ノー 入学試験成績 東京音楽学校』記載。

^{281 〔556〕 『}昭和二十三年 二ノー 臨時試験成績 東京音楽学校』記載。

^{282 [061] 『}昭和二十三年度 三ノ一 入学試験成績 東京音楽学校』記載。

²⁸³ 同前のうち「昭和二十三年度 入學課題曲 東京音楽学校」。

表 3-47 1949 (昭和 24) 年~1950 (昭和 25) 年のオルガン履修生と受持

研究科二年	高橋正子	眞篠
研究科一年	林佑子	秋元
本科三年	吉田さかえ	秋元
本科二年	小林俊子 島田麗子	秋元
師範科三年	二俣松四郎	秋元
専攻外	石川治子	秋元
聴講	森	
選科	松崎啓 村林式子 三木英子 貫名登美子	真篠
	齋藤真 西田博 木村ケイ	

- [559] 『昭和二十五年二月 卒業学年試験成績 東京音楽学校』
- [557] 『昭和二十四年十一月十五日 平常成績調 東京音楽学校』
- [285] 『継続在学願綴』[選科生 昭和 24~25 年]

研究科~専攻外までは〔559〕、聴講の森は〔557〕、選科は〔285〕による。

この年の卒業並びに進級試験は2月18日に行われた284。

10:30~ 研究科2名と専攻外生

11:30~ 本科三年生、本科二年生

いずれも 101 教室であった。

この年から大学制が同時進行している。大学のオルガン一年次には、嘉手納二郎、富永哲郎、吉田梓がいる²⁸⁵。

表 3-48 1950 (昭和 25) 年~1951 (昭和 26) 年のオルガン履修生と受持

研究二	林佑子	秋元
本科三年	小林俊子 島田麗子 吉田さかえ	秋元
師範科四年	二俣松四郎	秋元
聴講一	高橋正子	眞篠

〔476〕 『平常成績調 昭和二十五年』

^{284 〔559〕 『}昭和二十五年二月 卒業学年試験成績 東京音楽学校』記載。

^{285 〔557〕 『}昭和二十四年十一月十五日 平常成績調 東京音楽学校』記載。

[067] 『昭和二十五年度 卆業学年試験成績 東京音楽学校 旧制』 師範科四年の二俣は [067] による。オルガンの担当は秋元と真篠であった²⁸⁶。

表 3-49 1952 (昭和 26) 年~1953 (昭和 27) 年のオルガン履修生と受持

本科四年	小林俊子	島田麗子	秋元

〔558〕 『昭和二十二年~二十七年 試験成績』

1949 (昭和24) 年より、四年制の大学が開始した。前年までに入学した小林、島田の両名が東京音楽学校オルガン科最後の卒業生となった。

^{286 〔476〕 『}平常成績調 昭和二十五年』記載。

3-2 昭和期のオルガン受持教師の変遷

明治期大正期と同様に、第三章 第三節 3-1 「昭和期のオルガン履修生と受持」をもとに、オルガン受持ち教師の変遷を表にしたものが以下である。

表 3-50 昭和期における各科受持教師

	研 <i>聴</i>	本四	本三	本 二	本一	甲師3	甲師2	. 甲師1	乙師	· <i>豫科</i>	選科	四臨
S1-2			?	0	0						-	真篠
S2-3			ļ			-			Ţ	中田	;	-
S3-4	}	(0	0	真篠/島崎		7			-	1	眞篠
S4-5			0	眞篠	-	-				真篠 島崎	杉生	真篠
S5-6	-		眞篠	}-	:真篠	}	}	-	-	-	杉生	真篠
S6-7	眞篠	(-	眞篠	}-	-	7			-	杉生	真篠
S7-8	真篠		眞篠	-	-					-	眞篠 杉生	
S8-9	真篠	}				·}		····}		眞篠	真篠	
S9-10	真篠				真篠					真篠	真篠	:
S10-11				真篠	真篠	真篠					真篠	:
S11-12			眞篠	眞篠	真篠	眞篠					真篠	
S12-13	真篠		真篠	真篠		真篠					真篠	
S13-14	真篠		真篠	真篠		眞篠				眞篠	真篠	
S14-15	眞篠		眞篠	眞篠	眞篠	眞篠				眞篠	眞篠	
S15-16	真篠		眞篠		真篠	真篠				眞篠	真篠	
S16-17	真篠			眞篠	真篠	真篠	真篠			真篠	真篠	-
S17-18	眞篠		眞篠	眞篠	真篠	-	真篠 真篠			眞篠	真篠	
S18-19	真篠		真篠	眞篠		-	真篠			真篠	眞篠	
S19-20					真篠			真篠			真篠	
S20-21	眞篠	(;	眞篠	真篠			真篠		-	眞篠	
S21-22			真篠	真篠								
			秋元	秋元								
S22-23	}-	秋元	秋元	-	秋元	-	- }		}		眞篠	
S23-24	秋元	秋元	1.	秋元	秋元		秋元				秋元	
S24-25			秋元			師4 秋元					眞篠	-

S=昭和

昭和期は、明治、大正期に比べ、オルガン履修者が減少した。それに伴い、オルガン教授陣はかなりコンパクトになった。留学から帰ってきた真篠俊雄が中心となって教授が行われていたが、1931 (昭和6)年に中田章、1933 (昭和8)年に島崎赤太郎が相次いで他界し、以後東京音楽学校のオルガン教授は1946 (昭和21)年に秋元道雄が参加するまで、完全に真篠一人体制になった。試験時の立合教員は、それまで、オルガン科内の教員が行っていたが、真篠一人体制になったのちはピアノ科の教員が代わりにこれを行っている。

1937 (昭和 12) 年から、甲種師範科生のオルガン履修 (一部必修) が復活し、オルガン 履修者の数が増えたが真篠の一人体制は変わらず、後継の秋元道雄が加わるまで続いた。 昭和期東京音楽学校のオルガン教授が、真篠によって支えられていたことがわかる。

こののち東京藝術大学へと移行し、教授の中心は後継の秋元へとうつったが、眞篠はその後もしばらく講師として教授陣に残り、東京藝術大学オルガン科生のオルガン指導にあたった。

3-3 真篠俊雄の活動、留学、関連資料 3-3-1 真篠俊雄の活動

真篠俊雄(1893-1978) は、地元群馬での小学校教員ののち、1910(明治 43)年に東京音楽学校乙種師範科に入学。翌年卒業し、千葉県師範学校の教師嘱託となった。1913(大正元)年、再び東京音楽学校に入学し選科生となる傍ら、東京私立音楽院、正則英語学校に通学した。翌 1913(大正 2)年に豫科生、1914(大正 3)年より本科生となり 1917(大正 6)年に卒業。そのまま研究生となり、授業補助の傍ら、成城小学校訓導兼成城中学校教諭を務めている。1919(大正 8)年に研究生を修了し、教務嘱託となる。1920(大正 9)年に一旦職を解かれ、ベルリンに留学した。1924(大正 13)年に帰国、第四臨時教員養成所の講師嘱託を経て1926(昭和 2)年から助教授、1930(昭和 5)年から教授となり1946(昭和 21)年までその任にあたった。以降講師として指導を続け1956(昭和 31)年まで東京音楽学校で教えた。その後は学芸大学、玉川大学、洗足学園、清和女子短期大学、日本音楽学校等で教鞭をとった²⁸⁷。

東京音楽学校での乙種師範科時、豫科、本科一年時の受持ちは不明だが、本科の二、三年時は島崎赤太郎に師事、本科三年時の課題が「Karg-Elert: Fuga aus der Sonate (Karg-Elert: Erste Sonate h-moll für Harmonium Op. 36 三楽章 Fuga)」だったことがわかっている²⁸⁸。

学生時代の眞篠による東京音楽学校での演奏は以下である289。

1914 (大正3) 年10月17日18日

学友会恤兵演奏会 ラインハルト: ソナティーネ イ短調作品第38 オーガン獨奏

本科一年時の演奏。演奏評が残っている。

「上出来であった 一年生の同氏が斯くも公開の席でやってのけたのは将来大に嘱望すべきものがある」²⁹⁰

²⁸⁷ 本人筆履歴書からの抜粋。眞篠俊雄のご子孫、眞篠幸雄氏所蔵。

²⁸⁸ 本文 第二章 第四節「大正期の東京音楽学校におけるオルガン課題の変遷」、177 頁参照。

²⁸⁹ 東京芸術大学百年史編纂委員会編『東京芸術大学百年史 演奏会編 第一巻』東京:音楽之友社、1990 (以下『芸大百年史 演奏会編 第一巻』と略記) 掲載分。

1915 (大正4) 年10月29日30日

学友会秋季演奏会 バッハ:パッサカーリア 風琴獨奏

1915 (大正4) 年12月23日-29日

御大礼奉祝演奏会(洋楽) バッハ:ハ短調パッサカーリア 風琴獨奏

御大礼奉祝演奏会は、名古屋、京都、大阪での演奏旅行であった。本科二年時の二度の 「バッハ:パッサカーリア」の演奏は、手だけで弾く形だったようである。

1916 (大正5) 年12月9日

学友会第18回土曜演奏会 リンク:英国国歌の主題とその變奏曲 風琴獨奏

1917 (大正6) 年3月24日

卒業式 バッハ:ハ短調二重フーガ (レグレンツイの主題) オルガン獨奏

本科三年時の演奏。リンクはペダル教則本中の曲である。卒業演奏とともに、ペダル付で演奏した可能性がある。

続けて研究生として、以下の演奏会に出演している291。

1918 (大正7) 年2月23日

学友会第 22 回土曜演奏会 ラインベルガー: 奏鳴樂 イ短調 作品 98 い、モデラート ろ、アンダンティーノ は、フーガクロマティーカ 風琴獨奏

ラインベルガーのソナタ第4番を全曲演奏している。

1919 (大正8) 年3月25日

卒業式 バッハ:ニ短調トッカータ及フーガ オルガン獨奏

 $^{^{290}}$ 『月刊楽譜』第 3 巻第 11 号、大正 3 年 11 月、26~27 頁、『芸大百年史 演奏会篇 第一巻』、397~398 頁 に再録、引用は同所より。

²⁹¹ 引き続き『芸大百年史 演奏会篇 第一巻』掲載。

引き続きペダルを用いた可能性がある。

こののち、1920 (大正 9) 年より 1924 (大正 13) 年まで眞篠は渡独、ベルリンの高等音楽学校に留学した。眞篠の留学については次項 本文 第三章 第三節 3-3-2「眞篠俊雄の留学」で述べる。

帰国後、教員として再び東京音楽学校で演奏している292。

1927 (昭和3) 年11月17日18日

学友会御大典奉祝演奏会 バッハ:フーガト短調 オルガン獨奏

1930 (昭和5) 年6月21日

皇太后陛下行啓御前演奏 ラインベルゲル: イ短調ソナタ (作品 98) 第一楽章 (中庸に早く) オルガン獨奏

1934 (昭和9) 年4月21日

皇后陛下行啓演奏会 ヘンデル:フーゲ パイプ・オルガン演奏

これらの演奏は、南葵音楽堂より移設されたアボット&スミス社製 パイプ・オルガンを 使って行われた。二度の行啓演奏については写真が残っている²⁹³。

この後、1935 (昭和 10) 年にかけて、オーケストラや合唱との演奏に積極的に参加している。

1934 (昭和9) 年10月30日31日

²⁹² 東京芸術大学百年史編纂委員会編『東京芸術大学百年史 演奏会編 第二巻』東京:音楽之友社、1998。 (以下『芸大百年史 演奏会篇 第二巻』と略記)。

²⁹³ 「昭和5年6月21日皇太后陛下行啓御前演奏」の写真は、本文288頁掲載。「昭和9年4月21日皇太后陛下行啓御前演奏会」の写真は、『昭和九年四月二十一日 恩賜記念 寫眞帖 東京音樂學校』(眞篠家所蔵) に掲載があった。

第72回定期演奏会 リヒアルト・シュトラウス:交響楽詩「ツァラツストラ」 アルプス交響曲

1935 (昭和10) 年6月15日

第75回定期演奏会 バッハ: 教会カンターテ・第51「神を讃へよ」 聖母讃歌 (マグニフィカート)

1935 (昭和10) 年10月13日

第76回定期演奏会 リスト:「ダンテの神曲に據る」交響曲

1935 (昭和10) 年12月14日

第77回定期演奏会 ヘンデル: 救世主

これらの演奏は、日比谷公会堂で行われた。

日比谷公会堂での定期演奏会にオルガンが参加するスタイルは、このあとも続き、奏者は奥田耕天に引き継がれた。1937(昭和12)年6月19日第83回定期演奏会でバッハ: 馬太受難曲(マタイ受難曲)、1938(昭和13)年12月17日第86回定期演奏会でモーツァルト:鎮魂曲(レクイエム)が演奏されている²⁹⁴。

東京音楽学校内での眞篠の演奏記録は以上だが、玉川学園での演奏記録がある。

真篠俊雄と玉川学園の創立者の小原國芳は、成城小学校教員時代の同僚であった。以来親交があり、真篠は玉川学園創立期に関わっている²⁹⁵。玉川学園では、1931 (昭和 6) 年にアメリカ、シカゴのキンボール社製 (W. W. Kimball Company) のパイプ・オルガンを購入、礼拝堂に設置された。真篠家に現存する資料の中にはキンボール社のコンサートパンフレットがあり、玉川学園のパイプ・オルガン購入に真篠が関わっていたことを示している²⁹⁶。

^{294 『}芸大百年史 演奏会篇 第二巻』に掲載。

²⁹⁵ 玉川学園五十年史編纂委員会編『玉川学園五十年史』東京:玉川学園、1980年、108頁。

²⁹⁶ 1925 年 2 月 17 日 Chicago Kimball Hall での Charles Marie Courboin(1884-1973)による Organ Recital の パンフレット。Kimball Hall の新しいオルガンを紹介する意味合いの強いパンフレットで、裏名いっぱい

オルガンの仕様は、「ストップ十二、パイプ数七七四本、チャイム二十、二段鍵盤、フルペダル付、Cスケールの礼拝用オルガン…電空式」²⁹⁷であった。 真篠俊雄はこのオルガンで以下の演奏をしている。

1931 (昭和 6) 年 9 月 13 日の披露演奏では冒頭に「バッハ:トッカータとフーゲ」、間に独唱をはさみ、最後にふたたびバッハを演奏した²⁹⁸。そのほかに、1932 (昭和 7) 年 6 月、8 月、1933 (昭和 8) 年 6 月、1936 (昭和 11) 年 6 月に行われた労作教育研究会中の「音楽の夕べ」でもパイプ・オルガンを演奏している²⁹⁹。

にオルガンの仕様と説明が掲載されている。 真篠は 1924 (大正 13) 年 9 月 30 日に帰国しているので、このコンサートを聴いてはいない。パンフレットの入手経路については不明で、真篠が資料として持ち帰ったものか、あるいは小原から意見を求められた際に預かったものか、まったく別のルートなのか、現時点ではわからない。

²⁹⁷ 玉川学園五十年史編纂委員会編『玉川学園五十年史』東京:玉川学園、1980年、111頁。

²⁹⁸ 同前、111 頁。

²⁹⁹ 同前、117~119 頁。

3-3-2 眞篠俊雄の留学

真篠俊雄は1920 (大正9) 年~1924 (大正13) 年の間、ドイツに留学した。 自身による履歴書³⁰⁰には以下の記述がある。

大正9年12月31日に独逸國渡航

大正10年4月より独逸國立高等音楽学校在学「オルガン」及音楽理論を研究。

大正13年7月迄在学

大正13年9月30日に帰朝

真篠俊雄が所蔵していた資料が現存するということが、このたびご子孫のご協力により明らかになった³⁰¹。洋書、和書、楽譜が数点と履歴に関する多数の書類のほかに、ベルリン留学時に関係するとみられる資料が見つかった。

まず、音楽学校の在学証明である。1924 年 7 月 10 日付で、Staatliche Akademische Hochschule für Musik in Berlin に 1921 年 4 月から 1924 年 7 月まで在学したことが証明されている。主科はオルガン、副科として音楽理論、音楽史、ピアノを履修した。副学長だった Georg Schünemann(1884-1945)の署名がある。

そして、ベルリン高等音楽学校の 1920 年~1921 年の年報の中身がみつかった。表紙は、 後述する「真篠文庫: 真篠俊雄関連楽譜群」にあった³⁰²。

「Staatl. Akad. Hochschule für Musik in Berlin zu Charlottenburg Jahresbericht 1920-1921」³⁰³ この冊子には、該当期間の教員名簿、異動退職等、年間の公演、学生名簿などが掲載されている。

³⁰⁰ 眞篠俊雄のご子孫、眞篠幸雄氏所蔵。2021 年 7 月 28 日調査にお伺いし、一部の資料をお預かりした。

³⁰¹ 同前。資料⑥-1「真篠俊雄所蔵楽譜リスト」/ 資料⑥-2「Staatliche Akademische Hochschule für Musik in Berlin 1920-1921 演奏会プログラム」/ 資料⑥-3「真篠俊雄ベルリン時代オルガン関係演奏会プログラム」

^{302 [}眞篠文庫 474]、資料⑦「眞篠文庫:眞篠俊雄関連楽譜群」。

^{303 30} 頁迄。以下「Berlin 1920-1921」と略記。

1920 年 10 月から 1921 年 10 月までに在籍した学生のリスト³⁰⁴の中に真篠の名前がある。「236. Mashino Toshio (Gumma, Japan)」専攻はオルガンとなっている³⁰⁵。

在籍者リストからはオルガンの専攻生は眞篠の外に 12 人が在籍していたことが読み取れる。³⁰⁶オルガンを担当した教師は「Herr Professor Walter Fischer」一人であった³⁰⁷。 眞篠を含む 13 人はすべて Walter Fischer (1872-1931) ³⁰⁸の弟子だったことになる。

教師陣と担当科目についての記載がある³⁰⁹。 真篠が履修した「音楽理論」の教員には Engelbert Humperdinck(1854-1921)、Friedrich E. Koch(1862-1927)、Paul Juon(1872-1940)、 Robert Kahn(1865-1951)、Leo Schrattenholz(1872-1955)、Otto Taubmann(1859-1929)、 Leopold Carl Wolf(1859-1932)、「音楽史」には Karl Krebs(1857–1937)、「ピアノ」には Heinrich Barth(1847-1922)、Richard Rössler(1880-1962)ほか 10 人³¹⁰がいた。

学内の Konzertsaal で行われたコンサートについても記載がある³¹¹。この年の記念演奏会は、ベートーヴェン生誕 150 年記念、Siegfried Ochs 教授の退官記念、Heinrich Barth 教授の50 周年記念の三公演であった。1921 年 5 月 19 日に行われた Siegfried Ochs 教授の退官記念演奏会では、Bach の教会カンタータ 4 番、53 番、104 番と、Mendelssohn のカンタータ『最初のワルプルギスの夜』が演奏され、Walter Fischer が通奏低音を担当している。1921

³⁰⁴ 「Berlin 1920-1921」、25~30 頁。

³⁰⁵ 同前、28 頁。

³⁰⁶ 眞篠以外のオルガン専攻生:()は出身地:41. Brust Herbert (Königsberg)/102. Grosse Kurt (Berlin)/106. Grumann Vinzenz (Jacobsdorf)/119. Haberland Martin (Neu-Ruppin)/180. Kleiner Fritz (Zobten, Schules.)/187. Knorr Erich (Döbeln)/252. Muus Frida (Karby)/255. Neumann Martha (Altreetz)/270. Pallmann Lotte (Dresden)/332. Sens Rudolf (Magdeburg)/399. Ulm Joachim (Bunzlau)/404. Voss Elisabeth (Lüdenscheid)。

³⁰⁷ 「Berlin 1920-1921」、4 頁。

³⁰⁸ Walter Fischer(1872-1931): 1894 年から 1896 年まで、Akademische Institut für Kirchenmusik zu Berlin に通い、Robert Radecke(1831-1911)と Karl Thiel(1862-1939)、のちに Heinrich Reimann(1850-1906)に師事した。1900 年には Berliner Neuen evangelischen Garnisonkirche のオルガニストとなり、当時まだ知られていなかった Max Reger の作品を演奏し、好評をえた。Reimann の死後、後任として Kaiser-Wilhelm-Gedächtniskirche のオルガニストになり、ソリストを迎えた定期的なコンサートをはじめ、Bach や Regerを中心とした演奏を行った。ベルリン大聖堂のオルガニストと、ベルリン高等音楽学校のオルガン教師を務めた。

³⁰⁹ 「Berlin 1920-1921」、3~4 頁。

³¹⁰ Marie Bender, Curt Börner, Waldemar Lütschg, Meta Lippold, Adelgunde Hanne, Charles Bünte, Stefan Jeidels, Alice Kayser, Walter Moldenhauer, Max Trapp.

^{311 「}Berlin 1920-1921」、17 頁。

年 7月 11 日に行われた Heinrich Barth 教授の 50 周年記念演奏会の冒頭では、Walter Fischer によるオルガン独奏で、Bach の Fantasie und Fuge in g-moll が演奏された。

その他の公演と発表会は年間に28回を数え312、そのうち8公演にオルガンが入っていた。

1920年12月7日第1回公開演奏会

Beethoven の Missa solemnis で、学生の Kurt Grosse がオルガンパートを弾いている。

1921年1月18日第2回公開演奏会

前年の 10 月 2 日に亡くなった Max Bruch の追悼の意味を込めたコンサートでは、Bach 教会カンタータの 60 番と 159 番、および Bruch の Kyrie Sanctus und Agnus Dei für Doppelchor, zwei Sopran-soli, Orchester und Orgel Op. 35 において、Walter Fischer が通奏低音 およびオルガンパートを担当している。

1921年3月20日第4回公開演奏会

Bach の教会カンタータ、34 番、4 番、53 番、104 番、50 番の演奏で、学生の Kurt Grosse が通奏低音を弾いている。

1921年5月21日第8回発表会

A. Dvořak: Zwei biblische Lieder Op. 99 のオルガン伴奏を、学生の Fritz Kleiner が担当 している。

1921年5月28日第9回発表会

学生の Fritz Kleiner が M. Reger: Choralfantasie über "Wachet auf, ruft uns die Stimme" Op. 52 Nr. 2 für die Orgel を、演奏会の冒頭で演奏している。

1921年6月8日 第10回発表会

M. Reger: Zweite Sonate (in d-moll) für Orgel, Op. 60 を、学生の Rudolf Sens が弾いている。

³¹² 「Berlin 1920-1921」、18~24 頁。

1921年6月29日第13回発表会

M. Reger: Phantasie über den Choral "Wie schön leucht" uns der Morgenstern" für Orgel Op. 40 Nr. 1を Lilli Wieruszowski が演奏している。

1921年7月4日第5回新作演奏会

Bernhard Henking のカンタータにおいて、Fritz Kleiner がオルガンパートを演奏している。 この資料の中には真篠自身の演奏や、教授内容の記録はないが、ベルリン高等音楽学校 内でのオルガン科の活動の一端を垣間見ることができる。

真篠はベルリンで、教会の演奏会によく足を運んだようである。当時の演奏会プログラムが東で保管されていた³¹³。

師である Warter Fischer の演奏会プログラムは 3 件あった。いずれもベルリン大聖堂での演奏会である。

Orgel=Konzert von Professor Walter Fischer in der Domkirche

1922年9月14日(木)20時開演

- 1. Trauermarsch auf den Tod eines Helden aus der Sonate Op. 26: L. v. Beethoven
- Sonate für Violin und Orgel Largo Allemande Adagio quasi Andante Allegretto Moderato : Locatelli
- 3. Arie für Sopran aus Joshua: "O hätt' Ich Jubals Harf": G. F. Händel
- 4. Variationen über den Basso ostinato aus der Kantate "Weinen, Klagen, Sorgen, Zagen, Angst und Not, sind der Christen Tränenbrot" von Bach : F. Liszt
- 5. a) Aria für Violine und Orgel (Op. 103a): M. Reger
 - b) Andante aus dem D-dur Konzert: Mozart
- 6. a) "Gott ist Liebe" geistliches Lied: Hugo Rasch
 - b) "Gebet": Hugo Wolf

³¹³ 詳細は付録 資料⑥-3「真篠俊雄ベルリン時代オルガン関係演奏会プログラム」に記載。

7. Passacaglia in d-moll: Dietrich Buxtehude

8. Geistliches Abendlied für Sopran "Der Mond ist aufgegangen" : Volkslied

Fischer のオルガン独奏は 1. Beethoven: Klavier-Sonata Nr. 12 三楽章の葬送行進曲をオルガンで、4. Liszt: Weinen, Klagen, Sorgen, Zagen…、8. Buxtehude: Passacaglia in d-moll の三曲であった。ソプラノの Maria More v. Goek とヴァイオリンの Géza v. Kresz が共演している。

Orgel=Konzert von Professor Walter Fischer in der Domkirche

1922年10月5日(木)20時開演

1. Präludium und Tripelfuge Es-dur: J. S. Bach

2. Sonate für Violin und Orgel F-dur (Adagio-Allegro-Largo-Allegro) : Händel

3. Aus dem "Deutschen Requiem" Ihr habt nun Traurigkeit: J. Brahms

4. Fuge Op. 60 Nr. 6: R. Schumann

5. Geistliche Lieder: J. W. Frank

このプログラムは大きく破損しており、5 番目の演目までしかわからないが、この中でオルガンの独奏は、1. Bach: Praeludium et Fuga Es-dur BWV552 と、4. Schumann: Sechs Fugen über den Namen BACH Op. 60 Nr. 6 である。ソプラノの Rose Walter と、バリトンの Hans Butze-Haffe が共演している。

以上の二公演は同タイトルで、いずれも Fischer 主体の演奏会であった。

もう一つは、Dom-Konzert zum Beten des Kinder-Rettungs-Vereins で、子供の為のチャリティーコンサートであった。

1923年10月17日(水)19時半開演

1. a) Psalm 54: Albert Becker

b) Fürchte dich nicht: Albert Becker

c) Erquicke mich mit deinem Licht

2. Adagio aus dem d-moll Quartett: J. Haydn

3. Arie aus Elias: Felix Mendelssohn

4. a) Psalm 126: Karl Reinthaler

b) Hebe deine Augen auf: Felix Mendelssohn

5. Orgel-solo: Praeludium und Fuge a-moll: J. S. Bach

6. Arie aus Elias: Felix Mendelssohn

7. Adagio aus dem Hagen-Quartett: Beethoven

Fischer は 5. Orgel-solo: Praeludium und Fuge a-moll: J. S. Bach のほかは、伴奏で参加している。Hugo Rüdel 指揮による Dom の合唱団、Klingler-Quartetts、Vocal: Julius vom Scheidtが出演した。

1922 年 9 月 14 日のプログラムのデザインには、壮大な Sauer Organ の写真が使われている。 真篠はここで、当時最大級のオルガン³¹⁴の響きに触れたと思われる。

また、当時ベルリンの Kaiser Wilhelm-Gedächtnis-Kirche では頻繁に演奏会が行われていたようで、真篠家には 1920 年 1 月 8 日から 1923 年 10 月 17 日まで、62 公演分のプログラムが保管されていた 315 。真篠自身の履歴には 1920 年(大正 9)年 12 月 31 日に独逸國渡航と書いてあるので、1920 年 1 月から 12 月までの分は渡航前のものということになる。その場合、なぜその期間のプログラムを所持しているのかは不明である。資料として持ち帰ったのかもしれない 316 。

西暦	月	日付(曜日)
1920	1	8(木)
	2	12(木)
	3	25(木)
	4	15(木)、22(木)、29(木)
	5	6(木)
	6	17(木)、24(木)
	-	
	9	9(木)、30(木)

^{314 1905} 年設置、4 段鍵盤 113 ストップ。

-

³¹⁵ 詳細は付録 資料⑥-3「真篠俊雄ベルリン時代オルガン関係演奏会プログラム」参照。

 $^{^{316}}$ 眞篠は 1919(大正 8)年で研究科を修了、それまで師範科学生の受持ちを一部担っていたが、1920(大正 9)年には受持ちを外れている。東京音楽学校内の履修の状況からは、眞篠が 1920年の初めから渡航していた可能性が全くないわけではないと考えるが、このあたりの事情については現時点で不明である。

	11	18(木)、25(木)
	12	9(木)
1921	1	13(木)、20(木)
1)21	2	2(木)、24(木)
	3	3(木)、17(木)、31(木)
	4	7(木)、21(木)
	5	12(木)
	6	2(木)、23(木)、30(木)
	U	2(水)、23(水)、30(水)
	9	1(木)、15(木)
		1(/K), 13(/K)
	11	3(木)、10(木)、17(木)
	12	1(木)、15(木)
1922	1	19(木)、
1722	1	19(/\`)``
	3	2(木)、30(木)
	4	
	5	6(木)、20(木)、27(木) 9(水)、18(木)
	6	15(木)、29(木)
	U	13(水)、29(水)
	8	8(日)
	9	10(日)、17(日)、24(日)
	10	1(日) 1(日)
	11	5(日)、22(水)
	12	i
1923	1	15(金)
1943	3	30(金)
	4	15(日)、29(日)
	5	
	6	6(日)、13(日)、20(日)、27(日) 3(日)、10(日)、17(日)
	U	3(日)、10(日)、17(日)
	10	17(水)
	10	1/(//\)

1922 年前半までは木曜日、以降は日曜日の、20 時から 21 時の 1 時間プログラムが多い。62 公演のタイトルの内訳は、Geistliche Abendmusik 38 回、Orgel-Vorträge 9 回、Abendmusik 8 回、Bach-Abend、Johann Sebastian Bach、Deutsche Passion、Himmelfahrts-Vesper、Bußtags-Konzert、Winter-Konzert、Karfreitags-Konzert が各 1 回であった。1918 年からオルガニストを務めている Fritz Heitmann が最も多く出演している³¹⁷。

³¹⁷ オルガニストの出演は他に、N. O. Raasted(1888-1966)、i. V. Kurt Rosenhauer、Emilie Schild、Fritz König、Walter Drmensti、Rudolf Czach であった。

コンサートの構成はほぼ決まっており、オルガン奏者 1名、声楽 1名、Violin(あるいは Fl. Vc.)などのソロ楽器 1名のチームで演奏している。冒頭、中間と最後にオルガンの独奏があり、あいだに Geistliches Lied や Cantate-Aria の歌唱、Sonata などの器楽曲、オブリガート付き Aria などの三人でのアンサンブルなどを挟んでいた。

真篠所蔵のプログラムにおける Fritz Heitmann のオルガン独奏は以下である。曲名はプログラム表記に拠った。また()内には演奏回数を記した。

J. S. Bach の自由作品

Toccata und Fuge F-dur (5) / Präludium und Fuge A-dur / Präludium und Fuge a-moll (2) / Fantasie und Fuge g-moll (2) / Präludium und Fuge d-moll / Passacaglia c-moll (4) / Fantasie und Fuge c-moll (3) / Präludium und Fuge C-dur (9) / Präludium und Fuge g-moll (3) / Dorische Toccata und Fuge (4) / Fantasie G-dur (5) / Präludium und Fuge h-moll / Toccata und Fuge d-moll (5) / Präludium und Fuge e-moll (3) / Präludium und Tripelfuge Es-dur / Sonata Nr. 3 d-moll / Toccata Adagio und Fuge / Präludium und Fuge D-dur

J. S. Bach のコラール作品

Mit Fried und Freud ich fahr dahin / Herzlich tut mich verlangen (3) / O Mensch, bewein dein Sünde groß (3) / Ich hab' mein Sach' Gott heimgestellt / Fuga sopra Magnificat (2) / Nun komm, der Heiden Heiland (2) / Christe, du Lamm Gottes / Durch Adams Fall ist ganz verderbt / Erstanden ist der heilig Christ / Heut' triumphieret Gottes Sohn / Wenn wir in höchsten Nöten sein (2) / In dir ist Freude / Liebster, wir sind hier / Erbarm' dich mein, o Herre Gott (5) / Jesus Christus, unser Heiland / O Lamm Gottes, unschuldig / O Haupt voll Blut und Wunden / O Gott, du frommer Gott / O Welt, ich muß dich lassen / Aus tiefer Not schrei' ich zu dir / Komm' heiliger Geist, Herre Gott (3) / Schmücke dich, o liebe Seele (2) / Herr Jesu Christ, dich zu uns wend / Valat will ich dir geben (3) / Wir glauben all' an einen Gott / Kyrie, Gott heiliger Geist (2) / Wachet auf, ruft uns die Stimme (4) / Ich ruf' zu dir, Herr Jesu Christ (2) / Nun freut euch, lieben Christen gemein (2)

Bach 以外のバロック作品

Buxtehude: Ciacona e-moll / Passacaglia d-moll

Pachelbel: Toccata und Pastorale / Vater unser im Himmelreich / Pastorale

Muffat: Passacaglia g-moll (3)

ロマン派以降の作品

Mendelssohn: Sonate A-dur (2) / Sonate d-moll

Liszt: Evocation á la Chapelle Sixtine (3) / Fantasie und Fuge über BACH (3)

Reger: Fantasie über den Choral Hallelujah Op. 52 (2) / Mach's mit mir, Gott, nach deiner Güt / Seelenbräutigam / Fantasie über den Choral "Wachet auf, ruft uns die Stimme" Op. 52 / Kyrie eleison Op. 59 (2) / Benedictus Op. 59 / Fantasie über BACH Op. 46 (2) / Choralvorspiel "Jauchz, Erd, und Himmel, juble Op. 67 (2) / Invocation Op. 63 / Sonate d-moll 1. Satz / Melodia Op. 59 (2) / Fantasie über den Choral Ein' feste Burg Op. 27 / Introduktion, Passacaglia und Fuge e-moll Op. 127

Franck: Choral E-dur / Choral a-moll (2)

Friedrich Klose (1862-1942): Präludium und Doppelfuge c-moll

Heinrich Rietsch (1860-1927): Variationen und Fuge über ein eigenes Thema

Bruno Weigl (1881-1938): Fantasie B-dur Op. 16

Adolf Busch (1891-1952): Fantasie und Fuge Op. 21

Emil von Reznicek (1860-1945): Präludium und Chromatic Fuge cis-moll / Präludium und Fuge (2)

ドイツの作品がほとんどだが、フランスものではフランクを演奏している。バッハ、レーガーが群を抜いて多い中でさまざまな曲を演奏しているほか、新作の演奏も行っている。

他のオルガニストによるオルガン独奏は以下である。

Kurt Rosenhauer (?-?)

Bach : Fantasie und Fuge c-moll / Toccata F-dur / Präludium und Fuge D-dur / Präludium und Fuge C-dur / Ich ruf' zu dir, Herr Jesu Christ / Nun freut euch, lieben Christen gemein

Bach-Reger: Chromatische Fantasie und Fuge (2)

Reger: Introduktion und Passacaglia Op. 127 / Intermezzo Op. 80 / Toccata Op. 59 / Toccata und Fuge d-moll Op. 59 / Jesu meine Freude Op. 67 / O Welt, ich muß dich lassen Op. 67 / Wachet auf, ruft uns die Stimme Op. 67

Karg-Elert: Crucifixus / Angelus

Mozart: Andante aus der Fantasie in f-moll

Josef Haas (1879-1960): Passacaglia / Intermezzo Op. 25 / Romanze / Capriccio Op. 25

Paul Gerhardt (1607-1676): Aus tiefer Not schrei ich zu dir

Roderich von Mojsisovics (1877-1953): Prologus solemnis

Josef Kromolicki (1882-1961): Intermezzo

Niels Otto Raasted (1888-1966)

Raasted: Sonate Op. 16 / Sonate Op. 33 / Toccata Adagio und Fuge Op. 21 / Fantasie über des dänische Osterlied Christ ist vom Tode erstanden Op. 10 / Präludium und Fuge a-moll

Bach: Präludium und Fuge D-dur

Bruhns: Nun komm' der Heiden Heiland

Buxtehude: Präludium und Fuge g-moll

Jens Laursøn Emborg (1876-1957): Der Helle Tag vergangen ist / Der große Meister kommt / Lieblich ist der Himmel blau / Nun geht die Sonne im Osten auf / Sei im Kreuze fromm und still Sonntagmorgen von den Toten Christus auferstanden ist / Nun ruhen alle Wälder

Otto Olsson (1879-1964) : Vexilla regis prodeunt / O quot undis lacrimarum / Creator ahne siderum

Emilie Schild (?-?)

Bach: Canzone d-moll

Fritz König

Bach: Präludium und Fuge c-moll

Rudolf Czach

Buxtehude: Ciacona e-moll

Bach: Präludium und Fuge e-moll

Thomas [手書き部分、判読難]

Reger: Introduktion und Passacaglia d-moll

奏者不明[同上]

Baca: Toccata und Fuge in d-moll

Buxtehude: Passacaglia

真篠がベルリンに滞在していた時、Kaiser Wilhelm-Gedächtnis-Kirche には 103 ストップをもつ Sauer Organ があり 318 、Fritz Heitmann を中心にオルガンの演奏が盛んにおこなわれていた。プログラムのところどころには、真篠のものと思われる印がついていた。バッハの曲に多くみられたが一部レーガーのものにもみられた。

このほかに、プログラム冊子(発表会)の一部分[1923年1月26日から4月13日]がある。歌と伴奏、あるいはピアノの独奏がほとんどで、ここにはオルガンの演奏はない。ピアノ独奏の数か所(バッハのフランス組曲からの抜粋、ショパンのノクターンなど)に印がついていた。

演奏会プログラムの外には、フィリップ大学(マールブルク)のシラバスがあった。 1924-1925 年の冬学期のもので、これは真篠の帰国後の学期にあたる。したがって実際に そこに通ったわけではないが、哲学のページには Martin Heidegger (1889-1976) の講義を 中心にかなり書込みがあり、興味があった様子がうかがえる。

³¹⁸ 「ハイトマン、フリッツ Heitmann, Fritz」、『ニューグローブ世界音楽辞典』東京:講談社、1994年、12巻、422頁。

3-3-3 真篠文庫: 真篠俊雄関連楽譜群

真篠俊雄に関連する重要な資料として「真篠文庫: 真篠俊雄関連楽譜群」(以下真篠文庫) がある。

これは、長年東京藝術大学音楽学部のオルガン科研究室に保管されてきた、段ボール 4 箱分の楽譜資料である。2006 年にオルガン科研究室の引越し作業に伴い、一部開梱と整理が行われたが、全貌が明らかにされないまま再びしまいこまれていた。2014 年から整理作業を開始し、4 箱の中に保管されている資料をすべて確認した。中にはあきらかに後の時代のものも含まれるが、大半は真篠俊雄と関係する資料であることがわかった。2020 年 6 月、玉川大学の中村岩城教授の証言により、この資料が以前玉川学園にあったことが新たにわかった³¹⁹。第三章 第三節 3-3-1「真篠俊雄の活動」のところで述べたように、真篠俊雄は玉川学園の創立時から関わっており、私物を置いておける環境があった可能性がある。この資料がいつから玉川学園にあったのかは不明である。

「真篠文庫」には開梱順に〔整理番号〕を付した。整理番号順の書誌情報を巻末に資料 ⑦「真篠文庫: 真篠俊雄関連楽譜群」として付録した。整理番号 1 番から 486 番までのう ち、61-130 番はこの資料群とは関連性がないと考えられるものが混入していた³²⁰。464-469 番は整理の都合で欠番である。それらを除くと 410 点になる。

そこからさらに、 真篠以外の所蔵印および所蔵サインのあるもの 8 点321を除外すると 402 点となるが、この中には一つの冊子だったものが劣化により分解し、別々な場所に収まってしまったものが含まれる。できうる限りそれらを整合させた結果、208 冊のほぼ完全な状態の楽譜、48点の断片、35点の表紙が存在することがわかった。このうち 234点には真篠印か「Mashino」、あるいは「T. Mashino」のサインが入っており、真篠俊雄の所蔵だったことを示している。

³¹⁹ 学生時代に「富永哲郎先生の指示で眞篠先生の楽譜を梱包し、東京藝術大学に送るのを手伝った」とのこと [2020 年 6 月 14 日直接聞き取り]。追記「学部二年時、1985 (昭和 60) 年のことだった」とのこと [2022 年 6 月 4 日直接聞き取り]。

 $^{^{320}}$ 1980 年代の図書館資料等。 $61\sim77$: 芸大図書館蔵書印及び 81 年度受入印あり、 $78\sim103$: 82 年度受入印あり、 $104\sim128$: 印はないが $61\sim103$ と同シリーズ、129 声楽譜、130 芸大図書館蔵書印および分類番号付与。

³²¹ 7. 中田印、188. Toraji Ohnaka、194. S. Takashina、246-248. 秋元道雄、414. 分類番号 N88 / 14、444. Yoshida。

真篠文庫の大部分はオルガン独奏用の楽譜で、そのほかには、オルガンとソロ楽器による器楽アンサンブルの楽譜、歌を含む楽譜(歌曲、合唱)、ピアノの楽譜がある。ここではオルガンに関する楽譜について扱う。

作曲家毎にみていくと、特に多いのは Johann Sebastian Bach、Sigfrid Karg-Elert、Max Reger、Josef Rheinberger のものである。

Johann Sebastian Bach (1685-1700) の楽譜

オリジナルのオルガン曲は Breitkopf & Härtel 社の全集がメインで 3 巻から 8 巻、その他に Steingräber-Verlag の Homeyer 版 3 巻がある。Homeyer 版の 2 巻は真篠家にあった。真篠文庫の Bach の楽譜には編曲ものも多く、Zellner 版の Passacaglia や、Rob. Forberg 版のオルガン曲の 2 手編曲(ピアノ版)がある。逆に Bach の鍵盤曲(Klavier 用)をオルガン編曲したものもあり、Universal-Edition の Reger 編曲版の 1.2.5 巻と同シリーズの単独の 2 曲(Jos Aibl Verlag:Reger 版)がある。

Sigfrid Karg-Elert の楽譜

ほとんどが Carl Simon Musikverlag のもので、Harmonium 用の楽譜の割合が多い。

表 3-52 真篠文庫: Sigfrid Karg-Elert の楽譜

Op.	Title	出版社	整理
			番号
14-1	Sonatinen für Harmonium Nr. 1 G-dur	Carl Simon	10
14-2	Sonatinen für Harmonium Nr. 2 e-moll (□冊)	Carl Simon	144
			145
14-3	Sonatinen für Harmonium Nr. 3 a-moll	Carl Simon	9
18-3	Bearbeitungen für Harmonium Nr. 3	Carl Simon	149
33	Monologe fünf Stücke für Harmonium	Carl Simon	148
34	Improvisation E-dur für Harmonium	Carl Simon	6
36	Erste Sonate h-moll für Harmonium	Carl Simon	146
37	Partita D-dur in 8 Sätzen für Harmonium	Carl Simon	147
39	Phantasie und Fuge D-dur	Carl Simon	3
47	Tröstungen	Carl Simon	1
50	Erste Klavier-Sonate fis-moll	Carl Simon	327
57	Renaissance	Carl Simon	150
58	Innere Stimmen	Carl Simon	2

65	Choral Improvisationen [表紙]	Carl Simon	374
70-1	Tondichtungen für Harmonium Nr. 1 Eine Jagdnovellette E-dur	Carl Simon	151
70-2	Tondichtungen für Harmonium Nr. 2 Totentanz g-moll	Carl Simon	5
87-3	Drei symphonische Choräle für Orgel Nr. 3 [表紙]	Carl Simon	396
95-2	20 leichtere Etüden für Harmonium		8
95-3	Die Ersten Studien im Polyphonen Spiel für Harmonium	Carl Simon	4
95-4	25 Etüden zur Vorbereitung für die hohe Schule des Ligatospieles für Harmonium	Carl Simon	451
102	Impressionen	Ed. Peters	13
-	Klassische Meisterstudien für Harmonium Heft I	Carl Simon	11
-	Klassische Meisterstudien für Harmonium Heft II	Carl Simon	325
-	Klassische Meisterstudien für Harmonium Heft III	Carl Simon	326
	Klassische Meisterstudien für Harmonium Heft IV	Carl Simon	12
-	Bunte Blätter Eine Anthologie von 100 stücken für Harmonium Heft I [表紙]	Gebrüder Hug & Co	435
	Bunte Blätter Eine Anthologie von 100 stücken für Harmonium Heft II	Gebrüder Hug & Co	152
	Bunte Blätter Eine Anthologie von 100 stücken für Harmonium Heft III [一部]	Gebrüder Hug & Co	330
-	Bunte Blätter Eine Anthologie von 100 stücken für Harmonium Heft IV	Gebrüder Hug & Co	153

Max Reger の楽譜

表 3-53 真篠文庫: Max Reger の楽譜

Op.	Title	出版社	整理
			番号
7~16	Compositionen von Max Reger	Augener	51
		& Co.	
30	Phantasie über den Choral "Freu dich sehr, o meine Seele"	Universal Ed.	37
33	1. Sonate	Jos. Aibl	45
		Verlag	
40-1	Zwei Phantasie über den Choral "Wie schön leucht uns der	Universal Ed.	43
	Morgenstern"		
40-2	Zwei Phantasie über den Choral "Straf mich nicht in deinem	Universal Ed.	42
	Zorn"		
46	Fantasie und Fuge über den Namen Bach	Universal Ed.	44
47	Sechs Trios	Universal Ed.	41
52-1	Phantasie über den Choral "Alle Menschen müßen sterben"	Universal Ed.	443
	[表紙のみ]		
52-2	Phantasie über den Choral "Wachet auf, ruft uns die Stimme"	Universal Ed.	39
52-3	Phantasie über den Choral "Halleluja! Gott zu loben, bleib meine	Universal Ed.	38
	Seelenfreud!"		
56 (1)	Fünf leicht ausführbare Präludium und Fugen Heft I	Jos. Aibl	46
	, and the second	Verlag	
56 (2)	Fünf leicht ausführbare Präludium und Fugen Heft II	Jos. Aibl	47
		Verlag	

57	Symphonische Phantasie und Fuge	Universal Ed.	40
59-9	Benedictus Op. 59 No. 9 Harmonium	Ed. Peters	35
60	Zweite Sonate in d-moll für Orgel	F. E. C.	48
		Leuckart	
60-2	Invocation (Op. 60-2) [一部]	F. E. C.	366
		Leuckart	
63 (1)	Zwölf Stücke für Orgel Heft I	F. E. C.	49
		Leuckart	
63 (3)	Zwölf Stücke für Orgel Heft III	F. E. C.	50
		Leuckart	
65 (1)	Zwölf Stücke Heft I	Ed. Peters	57
65 (2)	Zwölf Stücke Heft II	Ed. Peters	60
67 (1)	Vorspiele für die Orgel Heft I	Bote & G.	32
		Bock	
67 (2)	Vorspiele für die Orgel Heft II	Bote & G.	33
		Bock	
67 (3)	Vorspiele für die Orgel HeftⅢ	Bote & G.	34
		Bock	
69 (1)	Zehn Stücke für die Orgel Heft I	Bote & G.	29
		Bock	
69 (2)	Zehn Stücke für die Orgel Heft II	Bote & G.	28
		Bock	
73	Variationen und Fuge	Lauterbach &	52
5 01		Kuhn	2.5
79b	Sieben Vorspiele	Hermann	36
0.5	Date 12	Beyer	5 0
85	Präludien und Fugen	Ed. Peters	59
59,60	Präludien und Fugen	Ed. Peters	56
80,85	I + 114' D I' 1E 6'' 1' O 1	D 4 0 C	20
127	Introduktion Passacaglia und Fuge für die Orgel	Bote & G.	30
129	Noun Stücke für die Orgal 1 4	Bock Bote & G.	26
(1)	Neun Stücke für die Orgel 1-4	Bock	20
129	Neun Stücke für die Orgel 5-9	Bote & G.	27
(2)	Neuri Stucke für die Orger 3-9	Bock	21
135a	Dreißig kleine Choralvorspiele für Harmonium (von Karl	Simrock	53
155a	-	Dilliock	55
1250	Kämph) Dreißig kleine Choralvorspiele für Orgel	Cimno als	E 1
135a		Simrock	54
-	Präludium und Fuge fis-moll	Bote & G. Bock	31
	Fantasie und Fuge		55
-	Tamasic und ruge	Simrock	55

Reger の楽譜はほとんどがペダル付のオルガン用だが、Op. 59-9 と Op. 135a(2 冊のうち 1 冊)は Harmonium 用に編曲されたものである。

Josef Rheinberger の楽譜

すべて Rob. Forberg 版である。

表 3-54 眞篠文庫: Josef Rheinberger の楽譜

Op.	Title	出版社	整理
			番号
49 (1)	Compositionen für die Orgel [Trios] Nr. 6, 7	Rob. Forberg	168
49 (2)	[Trios] Nr. 10 [一部]	Rob. Forberg	369
98	Sonata Nr. 4	Rob. Forberg	178
146	Sonata Nr. 10	Rob. Forberg	165
167-1	Meditationen Zwölf Orgelvorträge Entrata	Rob. Forberg	171
167-4	Meditationen Zwölf Orgelvorträge Andantino	Rob. Forberg	172
167-5	Meditationen Zwölf Orgelvorträge Preludio	Rob. Forberg	173
167-6	Meditationen Zwölf Orgelvorträge Aria	Rob. Forberg	174
167-7	Meditationen Zwölf Orgelvorträge Intermezzo	Rob. Forberg	175
167-10	Meditationen Zwölf Orgelvorträge Passacaglia [表紙]	Rob. Forberg	164
167-11	Meditationen Zwölf Orgelvorträge Fugato	Rob. Forberg	176
167-12	Meditationen Zwölf Orgelvorträge Finale	Rob. Forberg	177
168	Sonata Nr. 15 [一部]	Rob. Forberg	364
175	Sonata Nr. 16	Rob. Forberg	166
189 (1)	Zwölf Trios für Orgel Heft I	Rob. Forberg	169
189 (2)	Zwölf Trios für Orgel Heft II	Rob. Forberg	304
189 (3)	Zwölf Trios für Orgel Heft III	Rob. Forberg	170
193	Sonata Nr. 19	Rob. Forberg	167

Guilmant、Lemmens、Reinhard のものは、東京音楽学校の蔵書とほぼ重なる。

表 3-55 真篠文庫: Guilmant、Lemmens、Reinhard の楽譜

作曲者	Title	出版社	整理
			番号
Alexandre Guilmant	L'Organiste pratique 4e Liv. Canzona Op. 47	B. Schott's Söhne	277
	Canzonetta Op. 28 [表紙]	B. Schott's Söhne	404
	Seconde Sonate pour Orgue Op. 50 [表紙]	B. Schott's Söhne	415
Jacques-Nicolas	Morceaux de Salon pour Harmonium	B. Schott's Söhne	154
Lemmens	Nocturne		
	Morceaux de Salon pour Harmonium	B. Schott's Söhne	155
	Cantabile		
	Morceaux de Salon pour Harmonium	B. Schott's Söhne	156
	Romance sans paroles [二冊]		157
	Morceaux de Salon pour Harmonium	B. Schott's Söhne	158
	Fanfare		
	Ecole d'Orgue Basse sur le Plain-Chant	B. Schott's Söhne	159
	Romain		
August Reinhard	Drei Sonatinen für Harmonium Op. 38	Carl Simon	302
	Studien 50 Übungs und Vortragsstücke für	Heinrichshofen's	437
	Harmonium Op. 74 [表紙]		
	Duos für Harmonium, Canzonetta	Carl Simon	472

次に、ここまでに触れた Bach、Karg-Elert、Reger、Rheinberger、Guilmant、Lemmens、Reinhard 以外の楽譜をまとめる。真篠文庫にはドイツロマン派を中心にした様々な作曲家による Harmonium および Orgel の為の作品が揃い、充実したコレクションとなっている。内容を判別できた楽譜について作曲家のアルファベット順に紹介する。

表 3-56 眞篠文庫:B

作曲	Title	出版社	整理
			番号
Otto Barblan	Andante mit Variationen Op. 1	J. Rieter-	261
(1860-1943)		Biedermann	
	Cinq Pièces Op. 5	C. F. Peters	251
Richard Bartmuss (1859-1910)	Concert No. 2 Op. 33 [表紙]	Gebrüder Hug	438
	Charakterstück Op. 36 Heft II	Gebrüder Hug	255
	Sonate No. 4 Op. 46	Gebrüder Hug	268
Ludwig Baumann (1866-1944)	Andante religioso Op. 12	Chr. Friedrich Vieweg	470
Bror Beckman (1866-1929)	Zwei Stücke für Harmonium Op. 16	Carl Simon	266
Max Birn (1863-1926)	Konzert Fantasie Op. 7	Rob. Forberg	267
Ludwig Böhner (1787-1860)	Fantasie für Orgel	F. E. C. Leuckart	254
Ludwig Bonvin (1850-1939)	Drei Tondichtungen für Orgel Op. 8	F. E. C. Leuckart	260
	Andante cantabile Op. 77a	F. E. C. Leuckart	262
Johannes Brahms	Elf Choral Vorspiele Op. 122	N. Simrock	252
	Choralvorspiel und Fuge für Orgel über "O Traurigkeit, o Herzeleid" Dasselbe für Pianoforte [ピアノ版]	C. F. W. Siegel	253
Dietrich Buxtehude	Orgelcompositionen	Breitkopf & Härtel	141
	Drei Grosse Orgelstücke	Rob. Forberg	283
Marco Enrico Bossi	Orgelwerke Band 1 (Op. 92 / Op. 94 / Op. 104 / Op. 115/ Op. 128)	Edition Peters	19
	Orgelwerke Band 2 (Op. 130 / Op. 132)	Edition Peters	20
	Thema et Variations Op. 115	J. Rieter- Biedermann	22
	Adagio ed Allegro [Galuppi]	Carisch & Jänichen	23
	Siciliana [Martini]	Carisch & Jänichen	24
Moritz Brosig	Drei Präludien und Fugen Op. 1	F. E. C. Leuckart	256

Fantas	ie No. 1 Op. 53	F. E. C. Leuckart	257
Ausge	wählte Orgel-Compositionen Band 2	F. E. C. Leuckart	258
Ausge	wählte Orgel-Compositionen Band 5	F. E. C. Leuckart	259

表 3-57 眞篠文庫: C

Filippo Capocci	5me Sonate ut mineur pour Orgue	J. Rieter-	269
(1811-1887)		Biedermann	

表 3-58 真篠文庫: F

Hans Fährmann (1860-1940)	Sonate in g-moll Op. 5	J. Rieter- Biedermann	270
(1000 17 10)	Drei größere Choralvorspiele Op. 36	Otto Junne	271
Carl Augst Fischer (1828-1892)	Pfingsten Concert für die Orgel Op. 26	Fritz Schuberth	272
Gustav Flügel (1812-1900)	Fantasie "Sollt ich meinem Gott nicht singen" Op. 88	C. F. Kahnt	273
César Franck	Prière	Durand	274

P. C 24 12/12 4/ 1 .			
Alexander Wilhelm	Ave Maria Op. 17 No. 1 [Robert Franz]	C. F. W. Siegel	275
Gottschalg			
(1827-1908)			
	Variationen über den Choral "Wer nur den	J. Schuberth & Co	276
	lieben Gott lässt walten"		
Friedrich Gernsheim	Fantasie und Fuge für Orgel Op. 76	F. E. C. Leuckart	278
(1839-1916)			
Edvard Grieg	Sarabande, Air, Morgenstimmung, Ases Tod,	C. F. Peters	279
(1843-1907)	Trauermarsch (Peer Gynt)		

表 3-60 眞篠文庫:H

Georg Händel	Fughettes	C. F. Peters	333
Hans Matthison-	Fantasie für Orgel Nr. 2	Wilhelm Hansens	339
Hansen			
(1807-1890)			
[Hans Matthison-]	Fantasie für Orgel Nr. 5	Wilhelm Hansens	294
Hansen			
Adolph Hesse	Variationen über ein Original Thema in As-dur	Schlesinger	280
(1809-1863)	Op. 34		
	Präludium und Fuge Op. 88	F. E. C. Leuckart	281
	77 leicht und mitteschwere Orgelstücke	F. E. C. Leuckart	16
	33 grössere Vor- und Nachspiele	F. E. C. Leuckart	17
	Achtzehen grössere Kompositionen	F. E. C. Leuckart	18

表 3-61 眞篠文庫: J

Salomon Jadassohn	Phantasie für Orgel Op. 95	Fr. Kistner	282	
(1831-1902)				

表 3-62 眞篠文庫: K

Hugo Kaun (1863-1932)	Introduction und Doppelfuge Op. 62 No. 1	C. F. Kahnt	287
	Fantasie und Fuge [Op. 62 No. 2]	C. F. Kahnt	286
Friedrich Klos (1862-1942)	Präludium und Doppelfuge für Orgel	C. F. Peters	284

表 3-63 眞篠文庫:L

Samuel de Lange Jr.	Variationen über das Volkslied "God save the	J. Rieter-	288
(1840-1911)	Queen" Op. 34	Biedermann	
Max Laurischkus (1876-1929)	Elegie e-moll Op. 2	Carl Simon	292
Karl Lichtwark (1859-1931)	Toccata und Fuge für Orgel Op. 5	C. F. Kahnt	243
Johannes Barend	Einleitung und Doppelfuge Op. 14	J. Rieter-	290
Litzau		Biedermann	
(1822-1893)			
	Fantasie in Variationen-form über das	Breitkopf & Härtel	142
	Hildebrand-lied Op. 20	_	
Franz Liszt (1811-	Orgelcompositionen (Straube) Band 2	C. F. Peters	58
1886)			
	Andante religioso [他] bearb. Gottschalg	J. Schuberth	293
	Einleitung [他] bearb. Gottschalg	J. Schuberth	293
	Orpheus bearb. Gottschalg	J. Schuberth	293
	Praeludium und Fuge über BACH	J. Schuberth	293

表 3-64 眞篠文庫: M

Gustav Merkel	Merkel Album für Orgel	C. F. Peters	160
	Sonate Nr. 4 in f-moll Op. 115	J. Rieter-	161
		Biedermann	
	Sonate Nr. 5 in d-moll Op. 118	C. F. Peters	162
	Fantasie Nr. 5 in d-moll Op. 176	C. F. Peters	25
	Sonate Nr. 9 in c-moll Op. 183	J. Rieter-	163
	_	Biedermann	
Carl Müller-Hartung (1848-1922)	Drei Sonaten für die Orgel II in f-moll	T. F. A. Kühn	295

表 3-65 眞篠文庫:N

Horace Wadham	Präludi	ım und Fuge As-dur Op.	35 Nr. 1	Edition Peters	296
1101acc wadilalli	I Taluuli	iiii uiiu i ugo As-uui Op.	JJ 111. 1	Lumon i cicis	270

Nicholl		
(1848-1922)		

表 3-66 眞篠文庫:P

Carl Piutti	Sonate g-moll Op.22	Edition Peters	297

表 3-67 眞篠文庫: R

Georg Riemenschneider (1848-1913)	Stimmungsbilder Op. 29	Steingräber	300
Emil Nikolaus Joseph von Reznicek (1860-1945)	Präludium und Fuge für Orgel	N. Simrock	298
August Gottfried Ritter	Sonate A-dur Op. 31	Carl Simon	301
	Praktische Orgelschule Band 1 Op. 15	C. F. Peters	191
	Orgel-Schule Band 2	C. F. Peters	198
Ludwig Roselius (1902-1977)	Variationen über das Volkslied Op. 7	Carl Simon	299
Wilhelm Rudnick (1850-1927)	Sechs Vortragsstücke Op. 119	Eugen Feuchtinger	303

表 3-68 眞篠文庫:S

Camille Saint-Saëns	Fantasie pour Grand Orgue Op. 101	Durand	309
Ferdinand Saffe	20 Choralvorspiele für die Orgel Op. 18	Collection Litolff	308
(1867-1951)			
Josef Scheel (1879-	Fantasie Sonate in c-moll Op. 37	Anton Böhm &	306
1946)		Sohn	
Camillo Schumann (1872-1946)	Suite F-dur für Harmonium	Carl Simon	305
Bernhard Surze (1829-1889)	Kleine Fantasien für Orgel Op. 85	B. Schott's Söhne	310

Gustav Adolf Thomas (1842-1870)	Concert Fantasie für die Orgel	C. F. Peters	311
Ludwig Thiele	Variationen über die Russische Volks Hymne	Bote & Bock	285
(1816-1848)			

表 3-70 眞篠文庫:W

Hermann Wenzel	Allerseelen	120	Vortrags	und	Fantasiestücke	Fr. Portius	312
(1863-1944)	Band 4						

Allerseelen 120 Vortrags und Fantasiestücke	Fr. Portius	313
Band 5		
Liederabend am Harmonium Band 1	Fr. Portius	321

このほかに、オルガン独奏用としては20冊ほどの選集がある。

オルガンを含むアンサンブルの楽譜も揃っている。

表 3-71 眞篠文庫: オルガンと歌

Hermann Gustav	Gesang der Verklärten Op. 12	Georg Bratfisch	239
Götze (1840-1876)			
Eugen Hildach (1849-1924)	Wo du hingehst, da will auch ich hingehen	[手書き]	250
Max Reger	Geistliche Lieder Op. 137	C. F. Peters	234

表 3-72 眞篠文庫: オルガンと器楽

Albert Becker (1834-1899)	Adagio Op. 20 Violin und Orgel oder Klavier	C. F. Peters	220
Carlo Fiorelli (fl. 1709-fl. ca. 1790)	Adagio und Allegro Moderato Violin und Orgel	Hermann Beyer & Söhne	231
Carl Fischer (1828-1892)	Ave Maria Meditation on the 1st Prelude (Bach / Gounod)	Carl Fischer Edition	221
A. W. Gottschalg	Abendlied Ph. Scharwenka aus Op. 53 Heft II No. 4	Praeger & Meier	240
Georg Händel	Orgel Konzert Nr. 6	Breitkopf & Härtel	242
Georg Hoffmann (c. 1679-1715)	Drei Sonaten aus Op. 5 von Arcangelo Corelli Violine mit Harmonium oder mit Orgel oder Klavier Nr. 1	Carl Simon	229
	Drei Sonaten aus Op. 5 von Arcangelo Corelli Violine mit Harmonium oder mit Orgel oder Klavier Nr. 3	Carl Simon	230
Corns Immig Jr	Andante religioso Op. 15 [Viool / Orgel]	W. F. Lichtenauer	226
Felix Mendelssohn	Andante aus dem Violinconcert Violin und Orgel	Carl Simon	236
Amadeus Mozart	Serenade Nr. 7 Violoncello und Bass [表紙]	Breitkopf & Härtel	414
Tavadar Nachéz (1859-1930)	Antonio Vivaldi Konzert in a-moll Violine, Streichorchester und Orgel [Vn / Org]	B. Schott's Söhne	237
Max Reger	Largo aus der Suite Op. 93 Violin und Orgel	Ed. Bote & G. Bock	218
August Reinhard	Zwei Romanzen von L. van Beethoven Op. 40	Carl Simon	219

	Op. 50 Violine mit Begleitung des Harmoniums		
Josef Rheinberger	Pastorale Instrumental Werke	Rob. Forberg	222
	Abendlied Musik für Violoncello	Rob. Forberg	233
Carl Rundnagel (1835-1911)	Meditation (Ave Maria) (Bach / Gounod)	Edition Schott	132
Jozua Schravesande (1844-1911)	Elegie Op. 5 voor Violoncello met Begeleiding van Orgel	W. F. Lichtenauer	225
Hans Sitt (1850-1922)	romanie op. 17 violencene internatione		
	Andante Tranquillo Op. 21a Violin und Orgel oder Harmonium	F. E. C. Leuckart	228
Johann S. Svendsen (1840-1911)	Andante funèbre pour Orgue, Violon et Violoncelle	Wilhelm Hansen	227

前項で述べたように、ベルリン高等音楽学校での演奏会や、師のフィッシャーおよび Kaiser Wilhelm-Gedächtnis-Kirche のハイトマンの演奏からは、当時のベルリンでオルガンを 含むアンサンブルの演奏が盛んだったことがわかる。その影響が真篠のコレクションに現れていると考えられる。

「真篠文庫」の楽譜の出版年は 1800 年代後半から 1922 年までのものがほとんどで、1900 年前後に活躍したドイツを中心とする作曲家の Harmonium、Orgel に関係するものが集中的に集められている。真篠のベルリン留学時代に集められたものが大半であると想像される。ベルリンで入手可能だった Harmonium、Orgel に関する作品を丹念に収集したのではないだろうか。当時オルガン作品、とくに Harmonium 用の作品が多様であったことをうかがい知ることができる、貴重な資料群となっている。このほかに真篠家には楽譜が 18点保管されていた322が、「真篠文庫」と関連しているものがあった。

_

³²² 資料⑥-1「眞篠俊雄所蔵楽譜リスト」

真篠所蔵楽譜整理番号 1 番の Joh. Seb. Bach. *Orgelwerke 2 (Ed. Homeyer)* Leipzig: Steingräber-Verlag の表紙は〔真篠文庫 482〕にある。また、同シリーズの *Orgelwerke 3* は〔真篠文庫 192〕にある。この二冊はいずれも非常によく使用された形跡があり、ドイツ語の書込みも多い。留学期に使用された可能性が高い。



〔眞篠所蔵楽譜1〕

めくりによる破れを何重にも補修して使用されている。この資料の書込みは、休符を大切にする丸印や、フレーズの終わりの「rit.」や、曲の終盤のテンポ表示「Langsam」「etwas schnell」などが多い。

真篠所蔵楽譜整理番号 14番の *Musica Sacra Band I*. Berlin: Bote は〔真篠文庫 316〕の一部である。「3-3-2 真篠俊雄の留学」で扱った『Staatl. Akad. Hochschule für Musik in Berlin zu Charlottenburg Jahresbericht 1920-1921』の冊子も、真篠家の資料と真篠文庫の両方に分かれていたが、本来は一つのものである。真篠家所蔵の資料と真篠文庫とは、一つの資料群としてとらえられるべきものであると考えられる。

真篠家保管の楽譜もあわせて、これらの楽譜群の中には書込みが見られるものがあり、 真篠による楽譜の利用実態を垣間見ることができる。

	3-73	
整理 番号	楽譜 Title	書込み
	Sigfried Karg=Elert: Etüden für	赤字で訂正
8	Fortgeschrittene	Gefesselte Doppelgriffe→ 「Etüde」
14	Kahnts Orgel-Album 1	5. J. S. Bach / Choralvorspiel Schmücke dich, o liebe Seele にペダリングの書込み(赤、青)他8. W. F. Bach / Fuga in F-dur に丸印 目次部分にも
		「grosse artig」との書込みあり
15	Kahnts Orgel-Album 2	3. Pachelbel / Ciacona in D 赤でアーティキュレーション クレッシェンド松葉 装飾音 ダイナミクス等書込み 7. Händel / Fuge in h-moll に×印(目次) 8. Bach Philipp Emanuel / Fantasia con Fuga in c-moll レジストレーション 鍵盤指示
28	Max Reger : Zehn Stücke für die Orgel Op. 69-2	6. Toccata に×印
33	Max Reger: Vorspiele für die Orgel Op. 67-2	レジスト指示あり (筆跡薄)
49	Max Reger: Zwölf Stücke für Orgel Op. 63-1	最初に×印
57	Max Reger: Zwölf Stücke Op. 65-1	4. Consolation にペダリング、強弱、注意他
59	Max Reger: Praeludien und Fugen Op. 85	1曲目に書込み テンポ、鍵盤指示等
60	Max Reger: Orgelstücke Op. 65-2	9曲目に書込みペダリング
143	Konzert für die Orgel mit zwei Manualen und Pedal BWV596	レジスト、鍵盤指示
146	Sigfrid Karg=Elert: Erste Sonate h-moll für Harmonium	指遣い、頁数、×印等、青字で多数(校正 用?)
154	J. Lemmens: Morceaux de Salon pour Harmonium	フェルマータ、消した跡
155	J. Lemmens: Morceaux de Salon pour Harmonium	赤字で指遣い、表紙に「Cantabile」
162	Gustav Merkel : Sonate Nr. 5 in d-moll für Orgel	タイトル上に「Schönesten werk [ママ]」
178	Jos. Rheinberger: Sonate Nr. 4 Op. 98	ペダリング、鍵盤指示等
180	Choral-Buch Melodien für das Evangelische Gesangbuch	目次に数字、和声分析他
182	Joh. Seb. Bach's Werke für Orgel Band III (Breitkopf)	Toccata und Fuge に、鍵盤指示、クレッシェンド、テンポ、フェルマータ、指遣い、ペダリング
183	Joh. Seb. Bach's Werke für Orgel Band IV (Breitkopf)	赤線、ペダリング、クレッシェンド
186	Joh. Seb. Bach's Werke für Orgel Band VII (Breitkopf)	Orgelbüchlein
187	Joh. Seb. Bach's Werke für Orgel Band Ⅷ	赤線
	_	

	(Breitkopf)	
192	Joh. Seb. Bach Orgelwerke 3. Band	Toccata と Passacaglia にテンポ、スラー、ダイ
	(Homeyer)	ナミクス、レジストレーション
193	J. S. Bach Choralgesänge Band I	和声分析
196	Alte Meister des Orgelspiels Teil I	ペダリング
197	Choralvorspiele alter Meister	めくり跡、書込み多数
198	Ritter Orgel-Schule Band II	目次にチェック
221	Sacred Songs Carl Fischer Edition Series 1	音符の訂正、ダイナミクス
222	Josef Rheinberger I . Instrumental-Werke	パート譜に指番号、総譜にペダリング、鍵盤指
		示、拍等
239	Gustav Goetze: Gesang der Verklärten	ペダリング、×印、線他
244	選集 [表紙落ち]	20. Reger / Introduction und Passacaglia にフェル
		マータ、ペダル、ダイナミクス、Presto、ブレ
		ス、松葉、スラー、「Langsam」、指遣い、等
255	Richard Bartmuss: Zehn Charakterstücke für	No. 7. 9. 10 レジスト指示、鍵盤指示、ダイナミ
	Orgel Heft. II	クス、音の訂正
269	Filippo Capocci : 5me Sonate ut mineur pour	表紙に「Śeher schöne Sonata」
	Orgue	
270	Hans Fährmann: Sonate in g-moll	表紙に「Ďise schöne Sonate」
275	A. W. Gottschalg: Ave Maria	アーティキュレーション、×印
277	Alexandre Guilmant: L'Organiste pratique	校正用書込み
293	F. Liszt / A. W. Gottschalg : Andante	BACH に書込み、フレージング、鍵盤指示、ア
273	religioso	ーティキュレーション他
302	August Reinhard: Drei Sonatinen für	校正用書込み、指番号他
	Harmonium	
313	Hermann Wenzel: Allerseelen 120 Vortrags	No. 11 指番号他、校正用
314	und Fantasiestücke J. S. Bach / L. A. Zellner: Passacaglia	音高の訂正、省略等
346	Karl Straube 編:Alte Meister	目向の訂正、有略等 Pachelbel の Ciacona に指番号
<u></u> [1	大落[Joh. Seb. Bach Orgelwerke 2?]	1. 独語書込み多数 2. 日本語、Legato、松葉、rit.
県 I	八倍[Juli. Seu. Dacii Olgelweike 2!]	1. 独語音込み多数 2. 日本語、Legato、松栗、fit. 4. f p 松葉、rit. 独語 5. 強弱 、rit. Sehr rit. 6. テ
		4.1 p 仏衆、Ht. 独語 3. 独切 、Ht. Sell Ht. 6. / ーマに赤線 7. 指使いと主に日本語の書込み、
		一部独語とストップ 8. 独語含む書込み 9. rit. 強
		弱
真 2		「独逸版」と手書き、校正用書込み多数
眞 11	Dienel: Vortrags-Stücke	「Fuga」として出版校正、指使い他
7 11	Diener. Formage bracke	- M2m1 C C KH/W W T / 14 K / 16

真: 真篠所蔵楽譜

〔眞篠文庫 15〕 Kahnts Orgel-Album や、〔眞篠文庫 192〕 Homeyer 版のバッハにはドイツ語の書込みが多い。留学時、およびレッスン時のものの可能性がある。



写真 3-7 眞篠文庫: 書込みのある楽譜 C. P. E. Bach: Fantasia con Fuga

〔眞篠文庫 15〕

C. P. E. Bach の Fantasia con Fuga の冒頭に書込まれているのは、三段鍵盤を持つオルガンのレジストレーションと、Rollschweller の指示である。この曲はそれらの機能を持った楽器でレッスンを受けた可能性を示している。



[眞篠文庫 15]

赤字でアーティキュレーションやスラー、音の訂正、指使いなどが書込まれている。



写真 3-9 真篠文庫:書込みのある楽譜 Bach:Toccata

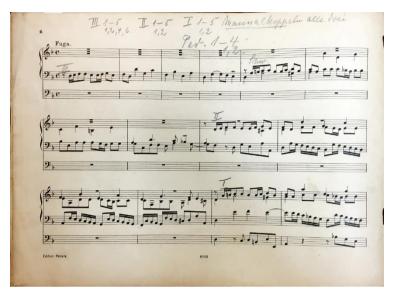
〔眞篠文庫 192〕

Bach: Toccata に書かれたレジストレーションは、前頁の〔眞篠文庫 15〕 C. P. E. Bach の Fantasia con Fuga とは別のオルガンを対象としている可能性が高い。曲の全体を通してスラーの書込みがある。



写真 3-10 眞篠文庫: 書込みのある楽譜 Bach: Concerto (1)

[眞篠文庫 143]



〔眞篠文庫 143〕

Bach: Concerto のレジストレーションの書込みは、前掲〔眞篠文庫 15〕 C. P. E. Bach の Fantasia con Fuga と同類のものである。同じ楽器が想定されるとともに、書込みをした人物 も同一と思われる。眞篠自身による可能性もあるが、筆致からは指導者なのではないかと の印象を受ける。



写真 3-12 眞篠文庫:書込みのある楽譜 Merkel: Sonate

〔眞篠文庫 162〕

〔眞篠文庫 162〕 Merkel、〔眞篠文庫 269〕 Capocci、〔眞篠文庫 270〕 Fährmann の楽譜には、「Schönesten werk [ママ]」、「Śeher schöne Sonata」「Ďise schöne Sonate」といった書込みがある。特にお勧めされたのかもしれない。



写真 3-13 真篠文庫:書込みのある楽譜 Bach: O Mensch, bewein dein Sünde gross.

[眞篠文庫 186]

レガートで奏することが可能なペダリングの書込みとなっている。楽譜全体にわたる書 込みからは、この曲目の習得に励んだ様子が読み取れる。タイトル上部のメモについては 後述する³²³。

³²³ 本文 第三章 第五節 「昭和期の東京音楽学校における演奏の記録」、293 頁。



[眞篠文庫 57]

冒頭には「中央は明音なること」と書かれており、内声を意識する書込みとなっている。 また、ペダリングが丁寧に付されている。



〔眞篠文庫 146〕



〔眞篠文庫 155〕

〔眞篠文庫 146〕〔眞篠文庫 155〕の書込みは校正用のものとみられる。海外出版の楽譜をもとに、国内での需要にあわせて支持を加えたり、省いたりして国内版を出版するということがあった。ここでは指使いを書き加え、ハルモニウム用のストップ指示を省いている。東京音楽学校受入れの楽譜にもこのような書込みはみられた324。

この楽譜の書込みは、眞篠の帰国後の教育活動に付随するものなのではないかと考えられる。

「眞篠文庫: 眞篠俊雄関連楽譜群」の書込みからは、眞篠による楽譜の使用状況を窺うことができる。そこにはベルリン留学時とみられるものも含まれ、眞篠の取り組みを知る貴重な手掛かりとなっている。

³²⁴ 第二章 第四節 「大正期の東京音楽学校におけるオルガンの課題」176頁。

コレクションとしての価値も高いと考えられる。1900 年前後のオルガン及びハルモニウムの作品がドイツの作曲家を中心に取り揃えられている。当時のドイツでは多くの作曲家たちが、オルガンやハルモニウムの曲を作曲しており、それだけの需要があったことがうかがえる。 真篠がベルリンで入手可能だったオルガン、ハルモニウムの楽譜の中でも比較的新しい作品を丹念に買い集めたのではないかと想像される。

第四節 昭和期の東京音楽学校におけるオルガンの課題の変遷

昭和期の課題は、眞篠による第四臨時教員養成所および選科学生へのものだけが残っている。

表 3-74 1928 (昭和 3) 年の課題

四臨	尾形登美	眞篠	島崎オルガン教則本五六
	岡田香積	眞篠	ラインハルトステューデン一七
	海峰義美	眞篠	ラインハルト ステューデン二五
	矢澤クニ	眞篠	ラインハルト ステューデン九

[085] 『昭和三年五月入學(第七回)昭和五年卒業 第四臨時教員養成所生徒入學試験書類 學年試験書類』 四臨=第四臨時教員養成所

表 3-75 1930 (昭和5) 年3月の課題

選科	佐々孝	杉生	Reinhard: No. 5 Studien
	竹内要也	杉生	Reinhard: No. 10 Studien

[108] 『自昭和五年三月 至昭和八年三月 選科定期試験成績 東京音樂學校分教場』 「昭和五年三月第一、二及修了 試験成績」

表 3-76 1930 (昭和5) 年 6 月の課題

選科	橋村新	杉生	Studien No. 25
----	-----	----	----------------

[108] 『自昭和五年三月 至昭和八年三月 選科定期試験成績 東京音樂學校分教場』 「昭和五年六月一七日試験成績」

表 3-77 1931 (昭和 6) 年 7 月の課題

選科	砥目民子	眞篠	Reinhard: Studien 50
	佐藤清徳	杉生	Reinhard: No. 2、49番
	大原とき	眞篠	Bach: Präludium und Fuge g-moll
	的場久美	眞篠	Bach: Präludium und Fuge d-moll

[108] 『自昭和五年三月 至昭和八年三月 選科定期試験成績 東京音樂學校分教場』 「昭和六年七月定期試験成績表」

表 3-78 1931 (昭和6年) 12月の課題

[108] 『自昭和五年三月 至昭和八年三月 選科定期試験成績 東京音樂學校分教場』 「昭和六年十二月 修了試験」

表 3-79 1932 (昭和7) 年 3 月の課題

選科	隅田喜代子	眞篠	Händel: Fughette C-dur
	佐々孝	杉生	Lemmens: Nocturne No. 2
	岡田正義	杉生	Lemmens: No. 6 Fanfare

[108] 『自昭和五年三月 至昭和八年三月 選科定期試験成績 東京音樂學校分教場』 「昭和七年三月 第一回 第二回」

表 3-80 1932 (昭和7) 年7月の課題

選科	古坂さな江	眞篠	初等オルガン教科書 76番
	橋村寿修	杉生	Mendelssohn: Praeludium B-dur
			島崎赤太郎:リードオルガンアルバム

[108] 『自昭和五年三月 至昭和八年三月 選科定期試験成績 東京音樂學校分教場』 「昭和七年七月 定期試験成績」

表 3-81 1933 (昭和8) 年3月の課題

[108] 『自昭和五年三月 至昭和八年三月 選科定期試験成績 東京音樂學校分教場』 「昭和八年三月定期試験成績」

表 3-82 1933 (昭和8年) 7月の課題

選科	岡田正義	眞篠	Bach: Variationen g-moll
選科	砥目民子	眞篠	Kistler: Grosse Fantasie g-moll

[286] 『自昭和八年六月至昭和十年三月 選科 定期試験成績 東京音樂學校分教場』 「昭和八年七月三日 第二試験成績」

表 3-83 1934 (昭和9) 年の課題

	選科	御供うめ	眞篠	Lemmens: Invocation
ĺ		岡山正義	眞篠	Guilmant: Canzonetta

[286] 『自昭和八年六月至昭和十年三月 選科 定期試験成績 東京音樂學校分教場』 「昭和九年三月五日 第二試験成績 オルガン科修了試験成績」

表 3-84 1935 (昭和10) 年の課題

選科	神長康	眞篠	中田氏オルガン教科書4
	鷲巣ふじ	眞篠	ラインハルト ステゥディエン

[286] 『自昭和八年六月至昭和十年三月 選科 定期試験成績 東京音樂學校分教場』 「昭和十年三月十五日 オルガン科試験成績」

表 3-85 1936 (昭和11) 年 3 月の課題

選科	御供うめ	真篠	バッハ:パッサカリア ハ短調
	鷲巣ふじ	真篠	バッハ:フーゲイ短調

[289] 『昭和十一年三月 定期試験成績』[選科]

表 3-86 1936 (昭和11) 年一学期末の課題

- 1				
	選科	工藤雅子	真篠	ラインハルト:ステゥデン 巻一、二十二番

[288] 『昭和十一年度第一學期 定期試験成績 分教場掛』

表 3-87 1936 (昭和11) 年12月の課題

選科	木村寛子	眞篠	レーメンス曲集 一番
----	------	----	------------

〔290〕 『昭和十一年十二月 定期試験成績』

表 3-88 1937 (昭和12) 年の課題

選科	荘田ひろ	眞篠	カルクエラー [ト]: Sonata 第三楽章
----	------	----	-------------------------

〔291〕 『昭和十二年三月 定期試験成績』

表 3-89 1938 (昭和13) 年 3 月の課題

(選科) I	髙島貞充	眞篠	バッハ:プレリュード及フーゲ
(選科)研	御供うめ	眞篠	カルクエラート:パッサカリア
(選科) 修	鷲巣ふじ	眞篠	ギルマン:プレリュードハ短調

[294] 『昭和十三年三月 定期試験成績』[選科]

表 3-90 1938 (昭和13) 年7月の課題

(選科)Ⅱ	工藤雅子	眞篠	バッハ:パストラル F長調
(選科) I	山田百合子	眞篠	レーマン:インボーケーション

[295] 『昭和十三年七月 定期試験成績』[選科]

表 3-91 1938 (昭和13) 年12月の課題

(選科)Ⅱ	木村寛子	眞篠	スケルツォー ヘ長調
(選科) I	武野慶作	眞篠	プレリュードとフーゲ へ長調

[296] 『昭和十三年十二月施行 定期試験成績』[選科]

表 3-92 1939 (昭和14) 年 3 月の課題

(選科)修	荘田ひろ	眞篠	Bach: Fuge (C)
(選科) I	中村アカ子	眞篠	Bach: P. u. Fuge (g)
	原田輝子	眞篠	Vandenplas: Toccata A

[297] 『定期試験成績 昭和十四年三月施行』[選科]

表 3-93 1939 (昭和14) 年7月の課題

_				
	>== < </th <th>ナルボ フ</th> <th>上 於</th> <th></th>	ナルボ フ	上 於	
	選科		盲篠	レラインバルト・11
	送竹	尚 州		/ 1 / 2 / 9 1 . 11

[298] 『定期試験成績 昭和十四年七月施行』[選科]

表 3-94 1939 (昭和14) 年12月の課題

選科 I	平岩幸子	眞篠	ラインハルト氏:スツゥディエン40
------	------	----	-------------------

[299] 『定期試験成績 昭和十四年十二月施行』[選科]

表 3-95 1930 (昭和15) 年 3 月の課題

選科研	鷲巣ふじ	眞篠	ラインベルガー:ロマンツェ (Es)
選科修	木村寛子	眞篠	ギルマン:スケルツォー (C)
選科 I	秋元道雄	眞篠	シナイダー教則本:24
			Bach: プレリュードとフーゲ (C)
	武藤カヅ子	眞篠	シナイダー教則本:17
			Bach: プレリュードとフーゲ

[300] 『昭和十五年三月 定期試験成績』[選科]

表 3-96 1930 (昭和15) 年12月の課題

選科Ⅱ	岳野慶作	眞篠	Bach: フーゲ (h)
選科 I	小川誠治	眞篠	Bach: プレリュード及フーゲ (d)

[301] 『昭和十五年十二月 定期試験成績』[選科]

表 3-97 1931 (昭和 16) 年の課題

選科研九	荘田ひろ	眞篠	Bach: Prelude u. Fuge (d)
選科I	野崎律子	眞篠	Reinhard: Studien 3
	成末美代子	眞篠	Bach: Prelude u. Fuge (F)
	脇屋寛子	眞篠	教則本 巻二 46

[302] 『定期試験成績 昭和十六年三月施行』[選科]

昭和期の選科学生、第四臨時教員養成所の学生の課題は明治大正期のものを踏襲している。明治期大正期で培った学習ノウハウが使われていると思われる。それぞれのレベルにみあったさまざまな課題が用意されている印象である。選科学生の中には、何年も在籍して演奏の技能向上に励んだものもいた。大正期の専攻生と近い課題が与えられているケースもあった。

学内に残されている記録は、以上のように第四臨時教員養成所と選科生のものだけであるが、昭和期に本科生として東京音楽学校で学んだ奥田耕天が、のちに東京音楽学校のころのことを回想している³²⁵。断片的ではあるが昭和期の本科生の課題を知ることができる。奥田耕天の豫科入学は 1934 (昭和 9) 年であった。翌 1935 (昭和 10) 年から本科生となり、1938 (昭和 13) 年に卒業後、研究科に 2 年在籍した。当時の入試課題でよく弾かれるのは (バッハの)「八つの小さい前奏曲とフーガ」であったが、奥田は (バッハの)変ホ長調の「フーガ」を弾き、審査の岡野貞一から「それだけ弾けるなら、入らなくてもいいくらいだね」と褒められている。平均的な進度としては卒業時に (バッハの)「トッカータとフーガ」ニ短調あたりを弾く、というものだった。奥田自身は、本科一年次に「前奏曲とフーガ」ト長調、本科二年で「パッサカリア」を勉強し、これを土曜演奏会で披露、それからフランク、ギルマン、ヴィドール、ラインベルガーなどを勉強したという。「奏楽堂のオルガンは、音色はよいが、音が遅れて聴こえるので、フランクのイ短調のコラールの

³²⁵ 奥田耕天「回想」、『Organist』 15 巻、1988 年、6 頁。

速いところなどは苦労しました。」と回想している。フランクのコラール3番が演奏会の曲目として登場するのは、1943(昭和18)年以降であるが、この頃すでに課題として取り組まれていたことがわかる。

東京音楽学校には、1928(昭和 3)年にアボット&スミス社製のパイプ・オルガンが寄贈されたが、それに合わせるように 1931(昭和 6)年~1937(昭和 12)年にかけて、ペダル付のオルガンすなわち大オルガン用の楽譜が集中的に受入れられた。その中には奥田の回想にあるラインベルガー、フランク、ギルマン、ヴィドールが多く含まれている。

以下は、東京音楽学校で昭和期受入れた、ラインベルガー、フランク、ギルマン、ヴィ ドールの楽譜である。

1930 (昭和5) 年

[Org-Ped 39 1/2] Josef Gabriel Rheinberger(1839-1901): Sonate Nr. 4 Op. 98 [消失]

[Org-Ped 40] [Org-Ped 41] César Franck: 3 Pièces pour le Grand Orgue

[Org-Ped 49] 「ヴィドール作曲作品七十二番サンフォニーロマンス」[消失]

[Org-Ped 50] Charles-Marie Widor: Sinfonia Sacra Op. 81

1931 (昭和6) 年

[Org-Ped 58] Alexandre Guilmant: L'Organiste pratique 1^{er} Liv. Op. 39

[Org-Ped 59] 「ヴィドール: サンフォニー Op.13、42 オルグ」[消失]

[Org-Ped 60] Alexandre Guilmant: L'Organiste pratique 3me Liv. Op. 46

[Org-Ped 61 1/2 2/2] Alexandre Guilmant: L'Organiste pratique 2me Liv. Op. 41 [同本二冊]

[Org-Ped 62 1/2] Alexandre Guilmant: L'Organiste liturgiste 1er Liv. Op. 65 [消失]

[Org-Ped 62 2/2] Alexandre Guilmant: L'Organiste liturgiste 2me Liv. Op. 65

1937 (昭和12) 年

[Org-Ped 66 1/4-4/4] César Franck : Orgel Werke Band $I \sim IV$. Leipzig : C. F. Peters

ギルマンの楽譜は寄贈楽譜で書込みがない。ヴィドールの楽譜は、ことごとく失われて しまっているのでわからないが、フランクの楽譜にはだいぶ熱心に学習された痕跡があっ た。 奥田耕天の東京音楽学校における演奏記録は、バッハのもののみが残っている。しかし 課題としてラインベルガー、フランク、ギルマン、ヴィドールにも取り組んだという。課 題の記録および演奏記録からは示せないが、実際には奥田のように多彩な課題に取り組ん だ学生が他にもいた可能性がある。

第五節 昭和期の東京音楽学校における演奏の記録

昭和期東京音楽学校での演奏会の記録は、『東京芸術大学百年史 演奏会篇 第二巻』326から得ることができる。昭和期にオルガンが関わった演奏会は、「卒業式」と「学友会」の演奏会が中心で、ほかに「定期演奏会」「奉祝演奏会」「皇后行啓演奏会」と、「通俗演奏会」「演奏旅行」そして、「選科生徒演奏会」があった。

ほとんどは東京音楽学校内の奏楽堂で開催されたが、「奉祝演奏会」「演奏旅行」が地方での演奏、「選科生徒演奏会」は神田一ツ橋分教場で行われた。付録の表には、合奏内でのオルガンについても掲載したが、ここでは、オルガンのみの演奏についてとりあげる。

表 3-98 昭和期におけるオルガン演奏

	研究/講師/教授	専修 器楽	師範	選科/四臨
S3	バッハ:フーガト短調(眞篠俊雄)			
S5	ラインベルゲル:イ短調ソナタ(作品98) 第一楽章(真篠俊雄)	ブツクステフーデ:パッサカリア(鳥居善 次郎)		ギルマン:カンツォネッタ(海鉾義美)
S7		バッハ:トッカータニ短調(松本寛郎)		
S9	ヘンデル:フーゲ(眞篠俊雄)			
S10				シルトクネヒト: 變奏曲へ長調 (荘田ひろ)
S11		ラインベルガー:ソナタイ短調作品98-1 (牧野敏成)		バッハ・ツェルナー:パッサカリア (御供うめ)
				バッハ:パルティータハ短調(荘田ひろ)
S12		レーガー: 遁走曲ニ長調作品56 (青山まさ)		ギルマン:スケルツォニ短調(荘田ひろ)
		バッハ:パッサカリア(奥田耕天)		ギルマン:カンツオネツタへ長調 (御供うめ)
		トッカータとフーガニ短調(木岡梅子)		
S13		バッハ:フーゲ「聖アン」變ホ長調		
		(奥田耕天)		
		バッハ:パルティータト短調(木村寛子) ギルマン:スケルツォー(木村寛子)		
		バッハ:幻想曲と遁走曲 イ短調		
		(木岡梅子)		
S14	バッハ:トッカータとフーガニ短調 (奥田耕天)	バッハ:フーゲ變ホ長調(木岡梅子)		
S15	バッハ:パッサカリア(奥田耕天)	バッハ:トッカータとフーガニ短調(周慶淵)		フランク:パストラーレ(荘田ひろ)
				レーマン:ファンファーレト短調(荘田ひろ)
S16		バッハ:幻想曲と遁走曲イ短調(周慶 淵)		
S17		バッハ:コラール前奏曲(武藤かづ子)		バッハ:パルティータ(平岩幸子)
		バッハ:遁走曲變ホ長調(中村アサ子)		
		バッハ:幻想曲と遁走曲ハ短調(秋元道 雄)		
S18	バッハ:トッカータとフーゲニ短調(周慶淵)	バッハ:トッカータとフーゲニ短調(武藤 かづ子)		
		バッハ:幻想曲と遁走曲イ短調(中村ア サ子)		
		フランク:コラールイ短調(秋元道雄)		
S21	フランク:コラールイ短調(秋元道雄)			
S23		ラインベルガー:ソナタイ短調作品98より 第一楽章(高橋正子)		
S24		バッハ:パッサカリア(林佑子)		
S27		フランク:コラールイ短調(小林俊子)		
		バッハ:パッサカリアハ短調(島田麗子)		

S=昭和

326 東京芸術大学百年史編纂委員会編『東京芸術大学百年史 演奏会編 第二巻』東京:音楽之友社、1998。

1928 (昭和3) 年9月15日 にアボット&スミス社製のパイプ・オルガンが寄贈された。 奏楽堂の舞台上に設置され、以後の演奏に使用された。 昭和期の奏楽堂での演奏記録は本科生研究生によるものが中心だが、これらはこのアボット&スミス社製のパイプ・オルガンを用いたものと考えられる。一方、神田一ツ橋分教場での選科生の演奏、および第四臨時教員養成所の演奏は、引き続きリード・オルガン、ハルモニウムが用いられていたようである。

表 3-99 1928 (昭和 3) 年のオルガン演奏

11/17	学友会御大典奉祝	バッハ:フーガト短調	真篠俊雄	教授	オルガン
, 18	演奏会				獨奏

「バッハ:フーガト短調」

[Org-Ped 1 4/9] [Org-Ped 26 3/4] Bach : Fuga g-moll BWV578

〔Org-Ped 1 4/9〕には指、 I II、〔Org-Ped 26 3/4〕にはテンポ表記 J=88、指使い、スラー、フレーズの区切り、ペダリングなどの書込みが多数みられる。

表 3-100 1930 (昭和5) 年のオルガン演奏

2/15	第 3 回校内演	ギルマン:カンツォネッタ	海鋒義美	四臨	ハルモニ
	奏会			(眞篠)	ウム獨奏
6/21	皇后陛下行啓	ラインベルゲル:イ短調ソナタ	真篠俊雄	教授	オルガン
	御前演奏会	(作品 98)			獨奏
		第一楽章(中庸に早く)			
12/13	学友会第 55 回	ブツクステフーデ:パッサカリ	鳥居善次郎	本三	オルガン
	土曜演奏会	ア		(眞篠)	獨奏

四臨:第四臨時教員養成所

「ギルマン:カンツォネッタ」

[Org-sol 123] Guilmant: Morceaux pour Harmonium

Guilmant: Canzonetta Op. 28

明治、大正期からたびたび演奏されている。

「ラインベルゲル:イ短調ソナタ (作品98) 第一楽章 (中庸に早く)」

〔眞篠文庫 178〕Rheinberger: Sonate Op. 98

ペダリング、鍵盤指示などの書込みがある。 真篠が自身の楽譜を使用した可能性がある。 この時の演奏の様子は写真が残っている。

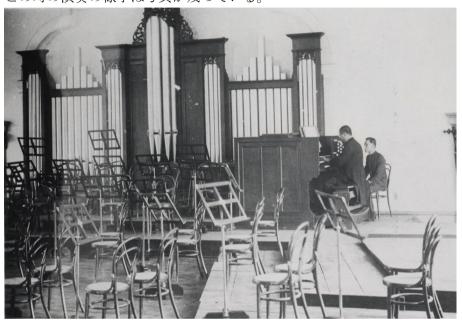


写真 3-17 奏楽堂アボット&スミス社パイプ・オルガン演奏

[昭和5年6月21日皇太后陛下行啓御前演奏 東京藝術大学大学史史料室所蔵]

「ブツクステフーデ:パッサカリア」

[Org-Ped 38] Straube: Alte Meister des Orgelspiels

D. Buxtehude: Passacaglia d

指使いとテンポ表記 J=60。(演奏時間) 9 分、 I II 、フレーズの区切り、強弱など、書込みが多数ある。

表 3-101 1932 (昭和7) 年のオルガン演奏

12/11	第 65 回学友	バッハ:トッカータニ短調	松本寛郎	本二	オルガン
	会演奏会			(眞篠)	獨奏

「バッハ:トッカータニ短調」

明治大正期にも演奏されている曲である。複数の楽譜に掲載されている。

[Org-sol 1 4/9] [Org-Ped 26 4/4] [OH 223 2/3] [OH 276 3/9]

Toccata et Fuga d-moll BWV565

[Org-Ped 26 4/4] には、-solo の書込みがあるが、昭和期のアボット&スミスのパイプ・オルガンを想定したものとみられる。

表 3-102 1934 (昭和9) 年のオルガン演奏

4/21	皇后陛下行啓	ヘンデル:フーゲ	真篠俊雄	教授	パイプ・オルガン
	演奏会				演奏

「ヘンデル:フーゲ」

ヘンデルのフーガは [OH 35] Westbrook: *Fugen-Album* に複数の掲載がある。加えて、[真篠文庫 15] *Kahnts Orgel-Album* Nr. 7 Händel: Fuge in h-moll もある。

この時のことを本科生だった牧野敏成が回想している。「皇后陛下がおいでになった時は、 真篠先生がヘンデルの小品をお弾きになりましたが、ずいぶん選曲の相談を受けました。 327」この回想から小曲だったことが推定できるが、曲目の特定には至らない。

『昭和九年四月二十一日 恩賜記念 寫眞帖 東京音樂學校』には、このときのパイプ・オルガン演奏の様子が残っている³²⁸。前頁の昭和 5 年時の演奏とほぼ同じアングルで、男性一人をアシスタントに従えて演奏している姿が写っている。

表 3-103 1935 (昭和10) 年のオルガン演奏

6/8	春季選科洋	シルトクネヒト:變奏曲へ長調	荘田ひろ	選科	オルガン
	楽演奏会			(眞篠)	獨奏

「シルトクネヒト:變奏曲・ヘ長調」

大正期からよく演奏されていたが、昭和期には選科生が演奏するようになっている。

[OH 203] Schildknecht: Harmonium-Schule に、Jos. Schildknecht: O Sanctissima の掲載がある。

表 3-104 1936 (昭和11) 年のオルガン演奏

5/30	春季選科洋	バッハ・ツェルナー:パッサ	御供うめ	選科	オルガン
	楽演奏会	カリア・ハ短調		(眞篠)	獨奏

 $^{^{327}}$ 牧野敏成「オルガンと格闘した青春」、谷根千工房編『よみがえれ!パイプオルガン―永遠に響け上野の杜に―』東京:谷根千工房、1985 年、10 頁。

289

³²⁸ 真篠家真篠幸雄氏所蔵[前述]。

6/14	第 90 回学友	ラインベルガー:ソナタ	牧野俊成	本三	オルガン
	会演奏会	イ短調 作品 98 の 1		(眞篠)	獨奏
11/21	秋季選科洋	バッハ:パルティータ	荘田ひろ	選科	オルガン
	楽演奏会	ハ短調		(眞篠)	獨奏

「バッハ・ツェルナー:パッサカリア・ハ短調」はすでに定番だが、ここでは選科生が演奏しているのが注目される。選科には様々なレベルの人が存在したが、中には長年在籍し技術の向上をはかるものもあった。大正期までに培われた様々なレパートリーが選科生に受け継がれており、中には難易度の高いものに挑んでいるものもいる。

「ラインベルガー:ソナタイ短調作品98の1」

Rheinberger: Organ Sonata Nr. 4 Op. 98 は、本科学生にっと定番の曲目となりつつある。大正期から演奏されるようになっていたが、東京音楽学校の楽譜は所在がわからなかった。 1930 (昭和 5) 年の7月に [Org-Ped 39 1/2] Rheinberger: Organ Sonata Nr. 4 Op. 98 の受入れがあった。全体的に書込みがある。 (Oboe off) 指使い、ペダリング、Solo -close などの書込みからは、アボット&スミスのパイプ・オルガンを想定していることがわかる。

この演奏会に向けて学校長宛に提出した、牧野の練習願が残っている。

今般学友会演奏会出演二就キ、来六月七日午后 及 九日、十日、十一日、十二日、十 三日ノ午后五時ヨリ六時迄、パイプ・オルガン練習致度候□ 何卒御許可相成度此段及 御願候成³²⁹

演奏会にむけて、特別に奏楽堂のオルガンの使用を申請し、練習に励んだようである。

「バッハ:パルティータ・ハ短調」

[Org-Ped 1 5/9] [消失]

Partite diverse sopra: O Gott, du frommer Gott (Manualiter) BWV767

大正期から課題として扱われている。

³²⁹「楽器練習願 昭和 11 年 6 月 6 日付」『昭和十一年度 樂器往復書類』東京音楽学校 楽器掛〔東音文 26-1〕。 東京藝術大学附属図書館所蔵。

表 3-105 1937 (昭和12) 年のオルガン演奏

5/22	選科洋楽演	ギルマン:スケルツォ	荘田ひろ	選科	オルガン
	奏会	二短調		(眞篠)	獨奏
6/?	第 98 回学友	マックス・レーガー: 遁走曲	青山まさ	本三	-
	会演奏会	二長調 作品 56		(眞篠)	
11/20	秋季選科洋	ギルマン:カンツォネッタ	御供うめ	選科	オルガン
	楽演奏会	〜長調		(眞篠)	獨奏
11/?	第 102 回学	バッハ:パッサカリア	奥田耕天	本三	オルガン
	友会演奏会			(眞篠)	獨奏
12/11	第 103 回学	バッハ:トッカータとフーガ	木岡梅子	本二	オルガン
	友会演奏会	二短調		(眞篠)	獨奏

「ギルマン:スケルツォ・ニ短調」「ギルマン:カンツォネッタへ長調」

「バッハ:パッサカリア」「バッハ:トッカータとフーガニ短調」はこれまでも頻出してい る。

「マックス・レーガー: 遁走曲 二長調 作品 56」

オルガン演奏記録の中に、レーガーが初めて登場する。

Op. 56 には D-dur の曲が見当たらない。この表記が何かしらの誤植で、Op. 56-Nr. 2 dmoll のフーガか、Op. 59-6 Fuga D-dur なのではないかと推測する。Op. 56、Op. 59 は、いず れも東京音楽学校の受入れ楽譜の中にはないが、「真篠文庫: 真篠俊雄関連資料」に存在す る³³⁰。

表 3-106 1938 (昭和13) 年のオルガン演奏

3/22	卒業式	バッハ:フーゲ「聖アン」	奥田耕天	本三	オルガン
		變朩長調		(眞篠)	獨奏
6/4	春季選科洋	バッハ:パルティータ	木村寛子	選科	オルガン
	楽演奏会	卜短調		(眞篠)	獨奏
11/26	秋季選科洋	ギルマン:スケルツォー	木村寛子	選科	オルガン
	楽演奏会			(眞篠)	獨奏
12/10	第 112 回学	バッハ:幻想曲と遁走曲	木岡梅子	本三	オルガン
	友会演奏会	イ短調		(眞篠)	獨奏

³³⁰ Op. 56 掲載: [真篠文庫 46] Max Reger: Fünf leicht ausführbare Präludium und Fugen Heft I、Op. 59 掲 載:[眞篠文庫 56] Max Reger: Präludien und Fugen。本文 第三章 第三節 3-3-3「眞篠文庫:眞篠俊雄 関連楽譜群」参照。

「バッハ: フーゲ 聖アン・變ホ長調」は、この年から以後頻繁に演奏されるようになった。 Bach: Praeludium et Fuga Es-dur BWV552

[Org-Ped 1 3/5] [消失] [OH 223 2/3] [OH 276 3/9] など複数の楽譜に掲載されていた。 [OH 276 3/9] は特にフーガ部分の使用度が高く、以下の書込みがある。

「バッハ:パルティータ・ト短調」

[Org-Ped 1 5/9] [消失] XI Variationen über: Sei gegrüßet, Jesu gütig BWV768

バッハのパルティータは、明治期後期から演奏曲としてたびたび登場しているが、明治期のものは調性表記がなく、詳細がわからなかった。大正期に課題として用いられたのは手鍵盤のみで演奏可能なものが中心であった。昭和期に入り、パルティータの中でも2段の手鍵盤およびペダルを用いる曲がいよいよ演奏されたようである。

「ギルマン:スケルツォー」「バッハ:幻想曲と遁走曲イ短調」は既出である。

表 3-107 1939 (昭和14) 年のオルガン演奏

3/22, 23	卒業式	バッハ:フーゲ變ホ長調	木岡梅子	本三	パイプ・
				(眞篠)	オルガン
					獨奏
11/23	創立 60 周	バッハ:トッカータとフーガ	奥田耕天	研究	パイプ・
	年記念式	二短調			オルガン
					獨奏

表 3-108 1940 (昭和15) 年のオルガン演奏

5/4	研究科修了	バッハ・フーゲ變ホ長調	青山まさ	聴講	パイプ・オ
	演奏会			(眞篠)	ルガン獨奏
		バッハ:パッサカリア	奥田耕天	研究	パイプ・オ
					ルガン獨奏
5/25	学友会第	バッハ・トッカータと	周慶淵	本三	オルガン
	123 回洋楽	フーガニ短調		(眞篠)	獨奏
	演奏会				
6/1	春季選科洋	フランク:パストラーレ	荘田ひろ	選科	オルガン
	楽演奏会			(眞篠)	獨奏

12/7	秋季選科洋	レーマン:	荘田ひろ	選科	パイプ・オ
	楽演奏会	フアンフアーレ ト短調		(眞篠)	ルガン獨奏
					331

表 3-109 1941 (昭和16) 年のオルガン演奏

3/25,	卒業式	バッハ:幻想曲と遁走曲	周慶淵	本三	パイプ・オ
26		イ短調		(眞篠)	ルガン獨奏

ここまで定番の曲が続いている。

バッハの大きな曲が頻繁に演奏されている。

表 3-110 1942 (昭和 17) 年のオルガン演奏

10/24	第 139 回報	J.S. バッハ:コラール前奏曲	武藤かづ子	本二	オルガン
	国団演奏会	1.是等は聖なる十戒なり		(眞篠)	獨奏
		2. おゝ人よ汝の大なる罪を悲め			
10/25	第 140 回報	J.S.バッハ: 遁走曲變ホ長調	中村アサ子	本二	オルガン
	国団演奏会			(眞篠)	獨奏
11/21	秋季選科洋	バッハ:パルティータ	平岩幸子	選科	オルガン
	楽演奏会			(眞篠)	獨奏
11/28	第 141 回報	バッハ:幻想曲と追復曲 ハ短調	秋元道雄	本二	オルガン
	国団演奏会			(眞篠)	獨奏

「J.S. バッハ:コラール前奏曲 1. 是等は聖なる十戒なり 2. おゝ人よ汝の大なる罪を悲め」 バッハのコラールは、明治期の初期に課題として取り上げられていたことがあったが、 演奏曲としては初出である。

[Org-Ped 1 5/9] [消失]

Dies sind die heilgen zehn Gebot BWV635

O Mensch, bewein dein Sünde groß BWV622

〔眞篠文庫 186〕 Bach: *Orgelbüchlein* の O Mensch, bewein dein Sünde groß BWV622 のページに、「Dies sind die heilgen zehn Gebot」という書込みがあり³³²、この演奏の曲目と一致している。この演奏と関連があるのかもしれない。東京音楽学校でのオルガン教授に真篠の楽譜が使用された可能性もある。

³³¹ 選科生でパイプ・オルガン独奏となっている唯一の例である。場所は奏楽堂であった『芸大百年史 演奏会篇 第二巻』623 頁。昭和期の選科生演奏会は奏楽堂で行われている。

³³² 本文 第三章 第三節 3-3-3「眞篠文庫: 眞篠俊雄関連楽譜群」、275 頁に写真掲載。

「バッハ:幻想曲と追復曲 ハ短調」

[Org-Ped 1 3/9] [消失] [OH 276 3/9] Fantasia et Fuga c-moll BWV537

[OH 276 3/9] には G-P のストップ指示がある。

表 3-111 1943 (昭和 18) 年のオルガン演奏

3/30	研究科修了	バッハ:トッカータとフーゲ	周慶淵	研究	オルガン
	演奏会	二短調			獨奏
9/23-	卒業式	バッハ:トッカータと遁走曲	武藤かづ子	本三	オルガン
25		二短調		(眞篠)	獨奏
		バッハ:幻想曲と遁走曲	中村アサ子	本三	オルガン
		イ短調		(眞篠)	獨奏
		セザールフランク:コラール	秋元道雄	本三	オルガン
		イ短調		(眞篠)	獨奏
	第 149 回報	バッハ:遁走曲 變ホ長調	伊藤信夫	本二	オルガン
	国団演奏会			(眞篠)	獨奏

フランクのコラールが登場する。フランクの作品は、明治期のペリーによって教授に取り入れられたが、それはハルモニウムの曲が中心であった。大オルガンの曲は明治期大正期を通して扱われてこなかったようだが、楽譜自体は明治期から受入れがあり主だったものは揃っていた。昭和期には需要に応じてさらに受入れがあり、フランクの蔵書は充実していたようである。

[Org-Ped 15] Franck: Trois Chorals pour Grand Orgue

[Org-Ped 66] Franck: Drei Choräle [C. F. Peters]

いずれもコラール3番には、よくめくられた跡が残っている。

表 3-112 1946 (昭和 21) 年のオルガン演奏

11/10	第一回芸術祭 洋樂演	セザールフランク:	秋元道雄	教員	オルガン
	奏会 教官演奏會	コラールイ短調			獨奏

表 3-113 1948 (昭和 23) 年のオルガン演奏

3/30	卒業式	ラインベルガー:ソナタ イ短調	高橋正子	本三	オルガン
		作品 98 より第一楽章		(秋元)	獨奏
		テンポ・モデラート			

表 3-114 1949 (昭和 24) 年のオルガン演奏

2/25	卒業式	J.S. バッハ:パッサカリア ハ短調	林佑子	本三	オルガン
				(秋元)	獨奏

表 3-115 1952 (昭和 27) 年のオルガン演奏

3/27	卒業演奏会	フランク:コラールイ短調	小林俊子	本三	オルガン
	第一日			(秋元)	獨奏
3/28	卒業演奏会	バッハ:パッサカリア	島田麗子	本三	オルガン
	第二日	ハ短調		(秋元)	獨奏

「バッハのパッサカリア」、「ラインベルガーのソナタ 4 番」、「フランクのコラール 3 番」 など、人気の曲が固まってきている。

楽器の項でふれたように、1928(昭和 3)年 9 月 15 日 にアボット&スミス社製のパイプ・オルガンが寄贈された。これは東京音楽学校初のパイプ・オルガンであった。3 段鍵盤、26 ストップ、1379 本のパイプを有するこの楽器によって、オルガン演奏の環境が飛躍的に整えられた。以降、奏楽堂でのオルガン演奏は「パイプ・オルガン」で行うことが可能になった。これまで唯一のペダル付オルガンであった 34 号 Mason & Hamlin 社製ペダル付リード・オルガンは、練習用として使用されるようになった³³³。1912(大正 14)年 3 月に受入れられたペダル・ピアノも加え、オルガンのペダルを習得するための環境が次第に整っていった。また、1934(昭和 9)年には練習室に YAMAHA 製のパイプ・オルガンも設置されている。

このようにペダルを備えた楽器数が増えたことにより、より多くの学生がペダル技術を 習得できるようになったと考えられる。昭和期は本科生の二年生と三年生のほとんどが、 ペダルを用いた演奏を行っている。曲目も、「バッハのパッサカリア」、「ラインベルガーの ソナタ 4番」に加え、「トッカータとフーガニ短調」や、「幻想曲とフーガイ短調」、「聖ア ンのフーガ」がよく演奏されるようになる。中にはレーガーの演奏もあり、真篠の留学の

 $^{^{333}}$ 奥田耕天「練習は練習室のオルガンでしました。そのほかペダル付きのリード・オルガンも使われることがありました」『Organist』 15 巻、1988 年、6 頁。

影響を感じられる。東京音楽学校としての最後期には「フランクのコラール」も演奏されるようになった。

ペダルを伴わないオルガン演奏のほうは、それまでのレパートリーを選科生が受け継いでいる。手鍵盤だけの演奏に関しては、大正期までにある程度のノウハウが確立されたとみることができる。

第六節 まとめ

昭和期は、オルガン履修生の数がかなり落ち着いた。師範科生のオルガン履修数は減少し、オルガンを専門的に履修するものの割合が増えている。本科生の数を見ると、1935 (昭和 10) 年ころから安定している。

1928 (昭和 3) 年に、アボット&スミス製のパイプ・オルガンが寄贈されたことで、以降パイプ・オルガンの演奏が可能になった。また、それまで使用されていた Mason & Hamlin 社製リード・オルガンが練習用として使えるようになっただけでなく、1912 (大正14) 年 3 月にはペダル・ピアノ、1934 (昭和 9) 年には練習室に YAMAHA 製のパイプ・オルガンも設置され、オルガンの練習環境、特にペダル技術の習得に必要な環境が飛躍的に整っていった。

本科生の二年生、三年生はこぞってペダルを伴うレパートリーの習得に励むようになる。学友会の演奏会にむけて、奏楽堂の楽器の使用願いが出されている例を本文で紹介したが、同時期の1936 (昭和11)年3月の春休みには、3月9日~4月10日までの楽器使用願いが奥田耕天から出されている。また同年夏休みの楽器使用願いがいずれも本科生の、牧野、奥田、青山、木岡の四名から連名で出されている³³⁴。東京音楽学校内の整えられた環境を充分に活用しようとしている姿勢が見て取れる。昭和期の本科生はこのような貴重な練習時間を重ねて、ペダルを含むオルガン演奏の技術を向上させていった。変わらず人気のパッサカリア、イ短調の幻想曲とフーガ、ニ短調トッカータとフーガ、ラインベルガーのソナタは大正期から踏襲され、新たに聖アンのフーガが好んで演奏されるようになる。真篠の留学の影響とみられるレーガーの演奏も行われている。東京音楽学校の最後期にはフランクのコラール3番が演奏されるようになった。

最後に木岡英三郎 (1895-1982) の存在について触れておきたい。木岡は東京音楽学校ではピアノを専攻しており、オルガンを履修した履歴は確認できなかったが、東京音楽学校卒業後に渡米、渡欧。各地でオルガンの研鑽を積んで帰国後に、パイプ・オルガンの演奏を積極的に行った。フランスでの経験を生かした、フランクやヴィドールを扱ったプログラムが印象的である³³⁵。東京音楽学校では 1928 (昭和 3) 年からアボット&スミス製のパ

^{334 「}号外 7月 14日 夏季休業中パイプオルガン使用願ノ件」『昭和十一年度 樂器往復書類』東京音楽学校 楽器掛〔東音文 26-1〕。東京藝術大学附属図書館所蔵。

³³⁵ 森田真理子「木岡英三郎―日本におけるオルガン開拓者 その伝記と揺るぎない遺産―」、 『オルガン研究』38巻、2010年、18~22頁。

イプ・オルガンが寄贈されたタイミングで、事務嘱託・楽器掛となっている。東京音楽学校で、昭和期に Franck や Widor の大オルガンを想定した楽譜が多く受入れられていることや、フランクのコラール 3 番を積極的に演奏するようになる背景には、木岡の影響が少なからずあったと考えられるが、東京音楽学校内での木岡の教授記録は確認できなかった。あるいは、学内で短期の講義活動などがあった可能性もあるが、現在のところ不明である。今回調査した学内の記録からは情報を得られず、対象から外れてしまったが、東京音楽学校内外での動きも併せて、今後研究されるべき課題である。

結論

本研究では、東京音楽学校におけるオルガン演奏の実態について「東京音楽学校で受入れた楽譜」「東京音楽学校で受入れた楽器」「東京音楽学校におけるオルガン履修生と教師」「東京音楽学校におけるオルガンの課題」「東京音楽学校における演奏の記録」の観点から現在東京藝術大学に残されている資料の中からオルガンに関するものを可能な限り抽出し、明治期(1887-1912)、大正期(1912-1925)、昭和期(1925-1952)のそれぞれでまとめ、その変遷を明らかにすることを試みた。

「東京音楽学校で受入れた楽譜」に関しては、会計資料である『楽譜原簿』『圖書出納簿』 『圖書出納帳』に受入れ記録があるほか、実際に当時使われていた楽譜の 9 割が現存する ことが明らかになった。Org-Ped 分類楽譜 142 冊と、OH、Org-sol 分類楽譜 783 冊は現在東 京藝術大学附属図書館に旧分類楽譜として所蔵されている。

「東京音楽学校で受入れた楽器」は、会計資料である『楽器器械原簿』『楽器機械出納帳』 『楽器機械出納簿』『楽器監守簿』の記載から楽器の受入れ時期や台数などが明らかとなり、 118 台のオルガンを受入れたことがわかった。その中には、2 台のパイプ・オルガンと、1 台のアメリカ製二段鍵盤ペダル付リード・オルガン、2 台のフランス製ハルモニウムが含まれる。当時使われていた楽器のほとんどは現在東京藝術大学に存在しないが、現存する中には演奏会でよく使われた「ペダル付オルガン」「ハルモニウム」があり、特にペダル付オルガンは近年修復され演奏可能な状態である。パイプ・オルガンのうちの一台も台東区の旧東京音楽学校奏楽堂内にあり現在も演奏で使用されている。

「東京音楽学校におけるオルガン履修生と教師」は東京音楽学校関係公文書(教務関係) 文書綴に含まれる「成績関係資料」を中心に『東京音樂學校一覧』も併せて調査を行い、 オルガン履修生はその内訳を変えながらも明治期大正期昭和期を通して継続的に存在した ことが明らかになった。オルガンを受持った教師のうち、明治期の中心となった島崎赤太郎、大正期に演奏を中心に活躍した中田章、昭和期の中心であった真篠俊雄について、それぞれまとめたが、島崎赤太郎については東京音楽学校の所蔵楽譜の中に、島崎の留学と関係が見られる、島崎のサインの入った楽譜が一定数あることがわかった。中田章はその蔵書が若干数現存することが、今回ご子孫のご協力によって明らかになった。中田の蔵書は東京音楽学校での教授内容と一致し、学生として教師として東京音楽学校と深くかかわっていた中田章の活動の一端を表している。真篠俊雄に関しては、東京藝術大学音楽学部 オルガン科研究室に保管されていた楽譜資料群の内容が明らかになった。また、ご子孫の ご協力により、自宅に残されていた蔵書の存在がわかり、その中には留学期の眞篠を知る 手掛かりがあった。

「オルガン履修に出された課題」は東京音楽学校関係公文書(教務関係)文書綴に含まれる「成績関係資料」の中に残っているものを探しだした。すべての課題が保管されているわけではなく網羅的なものではないが、比較的多くの課題が残されていた。演奏の記録だけではわからないレパートリーの層が明らかとなり、オルガン演奏の変遷を探るうえで重要な情報となった。

「オルガン演奏の記録」は、東京芸術大学百年史の演奏会編からオルガンの演奏を抽出 し、その時までに受入れていた楽譜の中から曲目の特定を図り、その時使用可能だった楽 器の情報と合わせて、演奏実態を考察した。

明治期のはじめ、東京音楽学校の前身である音楽取調掛においてオルガン演奏は唱歌教 育の一部であった。東京音楽学校におけるオルガン演奏のはじめは、唱歌演奏である。し かし、唱歌教育の範疇にとどまらないオルガンの演奏は、かなり早い段階で始まった。 1890 (明治 23) 年から東京音楽学校のオルガン教育に携わった外国人教師のディットリヒ がオルガンの専門知識と技術を持っていたことで、オルガン演奏の目標点は唱歌から一気 に脱却した。ディットリヒ在任中の東京音楽学校には一段鍵盤の小型のリード・オルガン しかなかったが、音楽取調掛時代からの蔵書であった Peters 版のバッハ・オルガン全集を 課題にとりいれ、専門的なオルガン曲へ積極的なアプローチを行っている。また、オルガ ンを二台並べて演奏する「連奏」によって声部の確保や表現力の拡大を狙い、限られた楽 器環境の中でオルガン演奏がより充実したものになる工夫を行った。このような取り組み と姿勢は弟子の島崎赤太郎に引き継がれ、バッハのオルガン曲の演奏や連奏はその後も積 極的に行われている。1899(明治 32)年の Mason & Hamlin 社製ペダル付二段鍵盤のリー ド・オルガンの導入によりペダル演奏が可能になり、主に島崎によってバッハやメンデル スゾーンのオルガン曲がペダルを用いて演奏された。同時に、音楽教師の需要拡大に伴い 増加した履修生への対応としてオルガンの教本が整備され、オルガン教育の土台が構築さ れた。1901 (明治 34) 年からオルガン教育に携わったフランス人のノエル・ペリーによっ てフランク、ギルマン、レメンスなどのフランスのレパートリーが演奏されるようになる のに伴い、編曲ものが目立っていた手鍵盤用の演奏レパートリーが、オリジナルのハルモ

ニウム用の曲へとシフトし始める。また、1904 (明治 37) 年には Rodolphe Fils & Debain 製のハルモニウムの受入れによって、それらのレパートリーがより専門的に演奏できる環境になった。1906 (明治 39) 年に留学から帰国し島崎によって手鍵盤を主体とした演奏レパートリーはさらに拡充された。また、手鍵盤用編曲楽譜の受入れによって、ペダルを弾ける環境のあるなしにかかわらず、バッハのオルガン曲を独奏できる機会が拡がった。明治期のおわりには本科生だけでなく、師範科生もバッハを演奏している。明治期の初期から始まったオルガンの専門的な演奏へのアプローチは、明治期をとおして段階的にその幅を広げた。ペダル付の楽器を演奏する場面もみられたが、一台しかないペダル付楽器の不調もあり、後期は手鍵盤のレパートリー拡充と演奏技術向上への傾倒がみられた。

大正期は、島崎の留学の影響が東京音楽学校のオルガン演奏に現れ始め、ラインベルガ ーが演奏されるようになる。ラインベルガーの楽譜は島崎が帰国してから受入れが進み、 新たな演奏レパートリーを構築していった。また、不調だった Mason & Hamlin 社製ペダ ル付リード・オルガンは1911(明治44)年に修理が行われ、演奏可能となった。中田章、 **賃篠俊雄を中心に行われたペダルを用いた演奏は、バッハ演奏のレパートリーの拡充にも** 貢献している。これらのペダルを用いた演奏とレパートリーの拡大は島崎の留学による影 響が大きいと考えられる。一方で、手鍵盤のレパートリーの拡充は大正期にさらに進んだ。 明治期から演奏されるようになったギルマンの「カンツォネッタ」や「スケルツォ」、レメ ンスの作品集に加え、シルトクネヒトの「オーサンクティシマ」、ベルグやベネットの「フ ーガ」、さらにカルク=エラートの「ソナタ」や「パッサカリア」など、聴きごたえのある 曲が演奏されるようになった。バッハの演奏も盛んにおこなわれ、明治期から人気の高い 「パッサカリア」が手鍵盤版によって多くの学生に演奏されているほか、バッハの「パル ティータ [Manualiter]」も多くの学生に取り組まれている。大正期までに広げられたハルモ ニウムのレパートリーは、のちに名曲集となって一般向けに出版されるなど、学外に向け ても広がっていった。東京音楽学校におけるオルガン演奏のうち、手鍵盤で行う演奏に関 しては、ハルモニウムおよびリード・オルガンの演奏技術とレパートリーが明治期より 徐々に積み上げられ、大正期にある程度の完成をみていたとみることができるだろう。

昭和期は、1928(昭和 3)年に、アボット&スミス製のパイプ・オルガンが寄贈されたことで、オルガン演奏の中心は次第にペダルを伴う演奏となっていった。大正期に活躍した Mason & Hamlin 社製ペダル付リード・オルガンは引き続き練習用として用いられたほか、1925(大正 14)年 3月にはペダル・ピアノが受入れられ、1934(昭和 9)年には

YAMAHA 製のパイプ・オルガンが練習室に設置され、ペダルを伴う演奏の練習環境が整った。「真篠文庫:真篠俊雄関連楽譜群」の中にみられる真篠がベルリンで学んだ痕跡は、ペダルに関する書込みを多く含み、ペダル技術の習得に励んだとみられる。昭和期の本科生はペダルを伴うレパートリーに取り組むようになるが、真篠が留学で習得した技術が直接的に教授されていったと考えられる。明治期から人気のバッハの「パッサカリア」は、ペダル付のオリジナルの形での演奏が定着する。バッハの「イ短調の幻想曲とフーガ」、「二短調トッカータとフーガ」に加え、新たに「聖アンのフーガ」が好んで演奏されるようになった。真篠の留学の影響とみられるレーガーの演奏のほか、バッハの「ハ短調の幻想曲とフーガ」、最後期にはフランクの「コラール3番」が演奏されるようになった。東京音楽学校の最後期になって、オルガン演奏はパイプ・オルガンが中心となった。

現在の東京藝術大学音楽学部オルガン科ではパイプ・オルガンの演奏が主であるが、その形は東京音楽学校の昭和期に到達したものであることがみえてきた。そこに至るまでには、明治期から積み上げられてきた工夫と土台作りがある。バッハのオルガン曲を中心とするパイプ・オルガンのレパートリーの演奏は明治期からすでに試みられていたが、ペダル付で演奏する機会は限られていた。一方で、手鍵盤による演奏が探求され、大正期までにかなりのレパートリーが構築された。二つの潮流は互いに関係しながら、昭和期のパイプ・オルガンを中心とする演奏の礎を築いた。

本研究では現在東京藝術大学に残っている資料を中心に扱った。その中で明治期の資料は特に量が多く、密度も濃い印象であった。教務関係資料の中のオルガンに関する記述の出現率は高く、東京音楽学校内でのオルガンの比重が大きかったことを感じた。大正期、昭和期になるにつれ学内の分野は増え、専攻の種類も多彩になり、多くの資料の中からオルガンに関する記述をみつけるのが困難になった。楽譜、楽器の受入れに関しても、明治期の数の多さは群を抜いていた。このように資料が潤沢な明治期については一度修士論文で扱ったが、情報の多さを処理しきれなかった感があった。特に、課題内容、演奏内容について、楽譜の情報との十分な照合ができなかったため、今回改めて楽譜資料と向き合い、それらについて考察した。また、大正・昭和期を研究対象に加えることで、明治期の受入れ楽譜が大正期昭和期の蔵書の一部になっていくこと、それがその後のオルガン演奏の支えとなっていくことを改めて確認することができた。

大正・昭和期の新規の資料は明治期に比べると少なくなるが、明治期からの蓄積と合わせて考えると、得られる情報は少なくないと感じた。また今回特に、東京音楽学校のオルガン演奏および教授と縁の深い中田章、真篠俊雄について資料提供をいただいたが、当時の資料が案外多く残されていることと、そこからえられる情報の多さにも気づかされた。「真篠文庫:真篠俊雄関連楽譜群」には1900年前後のオルガン及びハルモニウムの作品がドイツの作曲家を中心に取り揃えられており、真篠がベルリンで入手可能だったオルガン、ハルモニウムの楽譜を丹念に買い集めたのではないかとも想像され、コレクションとしての価値も高い。ベルリンでの演奏会プログラム、高等音楽学校の要項も、当時を知る貴重な手がかりとなっている。このような道標は、他にも眠っている可能性がある。また今回手にした資料から読み取れることはまだまだあるだろう。今回調査対象としなかった学外の動きについても、今後合わせて調査されるべきである。東京音楽学校のオルガン履修生の学外での活動や、学外での学びの中にはオルガン演奏に関わるものもあり、東京音楽学校のオルガン演奏にも影響していると考えられる。

また、現存する楽器の中には、明治期から演奏会の表舞台にあったものが含まれる。そのうちの一台 Mason & Hamlin 社製ペダル付リード・オルガンは修復され演奏可能な状態にある。2018年12月21日実施『第二回博士リサイタル』、2020年2月10日実施『研究発表と演奏 真篠俊雄 関連資料をめぐって』、および2022年2月16日実施『学位審査演奏会』では、実際にこのオルガンを用いた演奏を行い、演奏実態について実践をもって考察する機会を得た。現在演奏できる状態ではない当時のハルモニウムが、将来的に修復されて演奏可能な状況になることも切に願っている。東京音楽学校時代のオルガン曲のレパートリーが明らかになった今、それらの演奏実践をさらに重ねて、今後より演奏実態に迫っていきたいと考えている。

本研究でまとめた資料の情報が、今後のさらなる研究の一助になることを願う。

参考文献

《一次資料》

〈東京藝術大学附属図書館所蔵資料〉

『楽譜原簿』高等師範学校附属音楽学校 明治廿八年四月一日改 『圖書楽譜出納簿』 自明治三十八年度 至 同四十四年度 洋書及楽譜ノ部 『圖書出納簿』明治四十五年度以降 洋書及樂譜ノ部 『圖書出納簿 樂譜』自昭和四年度 至 同二十六年度

『昭和十一年度 樂器往復書類』東京音楽学校 楽器掛〔東音文 26-1〕 『楽器品目員数表 (付 オルガンリスト No.1~83)』明治 40 年 9 月 〔東音文 26-2〕 『分教場備付品支給簿』楽器掛 図書掛 大正六年十月起〔東音文 27〕

『東京音樂學校一覧 従明治廿二年至明治廿三年』東京音樂學校 『東京音樂學校一覧 従明治廿三年至明治廿四年』東京音樂學校 『東京音樂學校一覧 従明治廿四年至明治廿五年』東京音樂學校 『東京音樂學校一覧 従明治廿五年至明治廿六年』東京音樂學校 『東京音樂學校一覧 従明治廿六年至明治廿七年』東京音樂學校 『東京音樂學校一覧 従明治廿七年至明治廿八年』 東京音樂學校 『東京音樂學校一覧 従明治廿八年至明治廿九年』東京音樂學校 『東京音樂學校一覧 従明治廿九年至明治三十年』東京音樂學校 『東京音樂學校一覧 従明治三十年至明治三十一年』東京音樂學校 『東京音樂學校一覧 従明治三十一年至明治三十二年』 東京音樂學校 『東京音樂學校一覧 従明治三十二年至明治三十三年』 東京音樂學校 『東京音樂學校一覧 従明治三十三年至明治三十四年』 東京音樂學校 『東京音樂學校一覧 従明治三十四年至明治三十五年』 東京音樂學校 『東京音樂學校一覧 従明治三十五年至明治三十六年』 東京音樂學校 『東京音樂學校一覧 従明治三十六年至明治三十七年』東京音樂學校 『東京音樂學校一覧 従明治三十七年至明治三十八年』 東京音樂學校 『東京音樂學校一覧 従明治三十八年至明治三十九年』東京音樂學校 『東京音樂學校一覧 従明治三十九年至明治四十年』東京音樂學校

『東京音樂學校一覧 従明治四十年至明治四十一年』東京音樂學校 『東京音樂學校一覧 従明治四十一年至明治四十二年』東京音樂學校 『東京音樂學校一覧 従明治四十二年至明治四十三年』東京音樂學校 『東京音樂學校一覧 従明治四十三年至明治四十四年』東京音樂學校 『東京音樂學校一覧 従明治四十四年至明治四十五年』 東京音樂學校 『東京音樂學校一覧 従明治四十五年大正元年至大正二年』東京音樂學校 『東京音樂學校一覧 従大正二年至大正三年』東京音樂學校 『東京音樂學校一覧 従大正三年至大正四年』東京音樂學校 『東京音樂學校一覧従大正四年至大正五年』東京音樂學校 『東京音樂學校一覧従大正五年至大正六年』東京音樂學校 『東京音樂學校一覧 従大正六年至大正七年』東京音樂學校 『東京音樂學校一覧 従大正七年至大正八年』東京音樂學校 『東京音樂學校一覧従大正八年至大正九年』東京音樂學校 『東京音樂學校一覧 従大正九年至大正十年』東京音樂學校 『東京音樂學校一覧 従大正十年至大正十一年』東京音樂學校 『東京音樂學校一覧 従大正十一年至大正十二年』東京音樂學校 『東京音樂學校一覧 従大正十三年至大正十四年』 東京音樂學校 『東京音樂學校一覧 従大正十四年至大正十五年』 東京音樂學校 『東京音樂學校一覧 従大正十五年至大正十六年』 東京音樂學校 『東京音樂學校一覧 従昭和二年至昭和三年』東京音樂學校 『東京音樂學校第四臨時教員養成所一覧 従昭和三年至昭和四年』東京音樂學校 『東京音樂學校第四臨時教員養成所一覧 自昭和四年至昭和五年』東京音樂學校 『東京音樂學校第四臨時教員養成所一覧 自昭和五年至昭和六年』東京音樂學校 『東京音樂學校第四臨時教員養成所一覧 自昭和六年至昭和七年』東京音樂學校 『東京音樂學校一覧自昭和七年至昭和八年』東京音樂學校 『東京音樂學校一覧自昭和八年至昭和九年』東京音樂學校 『東京音樂學校一覧自昭和九年至昭和十年』東京音樂學校 『東京音樂學校一覧 自昭和十年至昭和十一年』東京音樂學校 『東京音樂學校一覧 自昭和十一年至昭和十二年』 東京音樂學校 『東京音樂學校一覧 自昭和十二年至昭和十三年』東京音樂學校

『東京音樂學校一覧補遺 自昭和十三年至昭和十四年』東京音樂學校 『東京音樂學校一覧補遺 自昭和十四年至昭和十五年』東京音樂學校

「東京音楽学校時代受入旧分類楽譜」

「Org-Ped 分類楽譜」

詳細については資料①-1「現存楽譜リスト〔Org-Ped〕分類楽譜」参照「OH, Org-sol 分類楽譜」

詳細については資料①-2「現存楽譜リスト〔OH、Org-sol〕分類楽譜」参照

〈東京藝術大学大学史史料室所蔵資料〉

『學事年報』(明治20年~明治38年)

『経費推算簿』(明治27年~明治45年)年度每分冊

『歳出内譯簿』(明治21年~明治45年)年度每分冊

『消耗品出納帳』(明治38年、明治40年)年度每分冊

『徴収内譯簿』(明治40年~明治45年)年度毎分冊

『東京音楽学校公文書(教務関係)文書綴』 []内は資料番号[請求番号]

- [003] 『明治二十三年七月 學年末試験書類綴 東京音楽學校』
- [005] 『明治二十四年三月 期末試験書類綴 東京音楽學校』
- [006] 『明治二十五年七月 學年大試験成績 生徒掛』
- [008] 『明治二十六年七月 學年試業成績書類 生徒掛』
- [009] 『明治二十七年 學年試業成績』
- [011] 『明治二十八年 試業成績 生徒掛』
- [013] 『明治二十九年 學年試験成績』
- [014] 『明治三十年 學年試業成績』
- [015] 『明治三十一年七月 學年試業成績』
- [016] 『明治三十二年七月 學年試業成績』
- [017] 『明治三十三年七月 學年試業成績』
- [540] 『明治三十三年九月以降 生徒入退学通知』
- [018] 『明治三十四年七月 學年試業成績』

- [019] 『明治三十五年七月 學年試験成績』
- [020] 『明治三十六年三月 甲種師範科 學年試験成績』
- [021] 『明治三十六年七月 學年試験成績』
- [304] 『特待生書類 賞品授与書類 教務課』[明治 36年~昭和 18年]
- [023] 『明治三十七年七月 學年試験成績』
- [024] 『明治三十八年三月甲種師範科學年試験成績』
- [025] 『明治三十八年六月 各科學年試験成績』
- [027] 『明治三十九年三月 甲種師範科學年試験成績及問題』
- [028] 『明治三十九年七月本科豫科乙種師範科學年試験成績』
- [029] 『明治四十年三月 各科學年試験成績』
- [030] 『明治四十一年三月 各科學年試験成績』
- [493] 『明治四十一年四月 入学試験書類』
- [031] 『明治四十二年三月 學年試験成績』
- [494] 『明治四十二年四月 入学試験答成績』
- [033] 『明治四十三年三月 學年試験成績』
- [495] 『明治四十三年四月 入学試験成績』
- [034] 『明治四十四年三月 各學科學年試験成績』
- [496] 『明治四十四年四月 入学試験成績』
- [035] 『明治四十五年三月 各科學年試験成績』
- [497] 『明治四十五年四月 入学試験成績』
- [102] 『大正二年 卒業及學年成績』
- [498] 『大正二年 入學試験成績』
- [104] 『大正三年 卒業学年試験成績』
- [129] 『大正三年 入學試験成績』
- [069]『大正四年 入學試験成績』
- [070] 『大正五年 入學卒業試験成績 東京音楽学校』
- [071] 『大正六年 卒業學年試験成績』
- [072] 『大正七年 卒業及學年成績』
- [073] 『大正八年 卒業及學年成績』
- [074] 『大正九年 卒業及學年成績』

- [075] 『大正十年 卒業及學年成績』
- [076] 『大正十一年 學年試験書類』
- [378]『自大正十一年度至仝十五年度 教務関係文書 第四臨時教員養成所』
- [077] 『大正十二年三月 卒業試験書類』
- [078]『大正十二年三月以降卒業迄ノ分(第一面教員養成所生徒ノ分) 第四臨時教員養成 所學年試験書類』
- [079] 『臨教 入學試験學年試験書類 (大正十二年入学第二面修教生)』
- [080] 『大正十三年 學年試験成績』
- [081] 『大正十三年四月入学 第四臨時教員養成所生徒入学試験書類 學年試験(第三回生徒)』
- [082]『大正十四年 學年試験成績』
- [083] 『大正十五年 學年試験成績 東京音樂學校』
- [084]『大正十五年四月入學(第五回)第四臨時教員養成所生徒 入學試験書類學年試験書 類』
- [263] 『入学案内の訂正関係 掲示案 等』[大正 15年~昭和7年度]
- [535] 『本科卒業生名簿』 [大正 15~昭和 10]
- [469] 『昭和二年度 入学臨時試験成績』
- [036] 『昭和三年度 學年試験成績 東京音楽学校』(度に赤で斜線)
- [085] 『昭和三年五月入學(第七回)昭和五年卒業 第四臨時教員養成所生徒入學試験書類 學年試験書類』
- [086] 『昭和四年三月 學年試験書類 東京音樂學校』
- [105] 『昭和四年五月入學(第八回)第四臨時教員養成所生徒試験書類』
- [108]『自昭和五年三月至昭和八年三月 選科定期試験成績 東京音樂學校分教場』
- [106] 『昭和五年度 入學臨時試験成績 東京音楽学校』
- [253] 『昭和五年度 時間割 [他]』
- [402] 『昭和五年 生徒に関する件』 [至昭和十四年度]
- [191] 『各科擔任表』 [昭和五年~昭和十二年度]
- [088] 『昭和六年 卒業及學年試験成績』
- [089] 『昭和六年(第十回)卒業及學年試験成績 第四臨時教員養成所』
- [090] 『昭和六年度 入学、臨時試験成績東京音楽学校』

- [538] 『昭和三年以降 卒業者氏名名簿』 [昭和6年~昭和19年]
- [039] 『昭和七年(第十一回)卒業試験成績 第四臨時教員養成所』
- [202] 『タイトルなし』 [昭和七年度]
- [038] 『昭和七年度 入学、臨時試験成績東京音楽学校』
- [286] 『自昭和八年六月至昭和十年三月 選科 定期試験成績 東京音樂學校分教場』
- [041] 『昭和八年 卒業及學年試験成績 東京音楽学校』
- [042] 『昭和九年 卒業及學年試験成績 東京音楽学校』
- [043] 『昭和十年 卒業及學年成績 東京音楽學校』
- [336] 『東京音楽学校入学案内』[昭和10年度用]
- [546] 『昭和十年 入學、臨時試験成績 東京音樂學校』
- [137] 『昭和十一年 入學、臨時試業成績 東京音楽學校』
- [261] 『昭和十一年度』 [担任表、時間割、学則など]
- [288] 『昭和十一年度第一學期 定期試験成績 分教場掛』
- [290] 『昭和十一年十二月 定期試験成績』
- [468] 『定期試験書類綴 昭和十一年至昭和二十一年』 [選科]
- [044] 『昭和十二年 卒業及學年試業成績』
- [291] 『昭和十二年三月 定期試験成績』
- [548] 『昭和十二年 入学 臨時試業成績 東京音楽学校』
- [046] 『昭和十三年 卒業及學年試験成績 東京音楽学校』
- [205] 『豫科「生徒時間割」昭和十三年』
- [294] 『昭和十三年三月 定期試験成績』[選科]
- [260] 『時間表』 [昭和13年] 東京音楽学校
- [295] 『昭和十三年七月 定期試験成績』[選科]
- [296] 『昭和十三年十二月施行 定期試験成績』[選科]
- [297] 『定期試験成績 昭和十四年三月施行』[選科]
- [363] 『タイトルなし』 [掲示案 昭和 13年~16年、他]
- [252] 『試験書類』[昭和十三年度 教官担任表 教務課]
- [311] 『本三 師三』 [昭和 13 年度 本科三年、師範科三年 各生徒の時間割綴]
- [048] 『昭和十四年 卒業及學年試験成績 東京音楽学校』
- [255] 『昭和十四年度 教務課』[教官担任綴]

- [298] 『定期試験成績 昭和十四年七月施行』[選科]
- [299] 『定期試験成績 昭和十四年十二月施行』[選科]
- [300] 『昭和十五年三月 定期試験成績』[選科]
- [471] 『昭和十五年三月七日施行 入学、臨時、試業成績綴 東京音楽学校』
- [510] 『昭和十五年三ノー 卒業及學年試業成績 東京音楽学校』
- [511] 『昭和十五年三ノ二 卒業及學年試業成績 東京音楽学校』
- [551] 『昭和十五年三ノ三 卒業及學年試業成績 東京音楽学校』
- [315] 『時間表 永久保存』 [昭和 15年]
- [301] 『昭和十五年十二月 定期試験成績』[選科]
- [302] 『定期試験成績 昭和十六年三月施行』[選科]
- [206] 『十六年度 授業時間割表』
- [312] 『昭和十六年 時間表教務課 永久保存』
- [126] 『昭和十六年十二月 昭和十七年三月 卒業成績』 [昭和 16~18年]
- [049] 『昭和十六年三月 (三ノ一) 卒業學年 試業成績 東京音楽学校』
- [050] 『昭和十六年三月 (三ノ二)卒業學年 試業成績 東京音楽学校』
- [051]『昭和十六年三月 (三ノ三)卒業學年 試業成績 東京音楽学校』
- 〔512〕『昭和十六年七月 臨時試業成績 東京音楽学校』[豫科]
- [052] 『昭和十六年十二月 卒業成績』
- [138] 『昭和十三年 卒業生関係』 [昭和 16、17年]
- [093] 『昭和十七年三月 卒業 進級試業成績 二ノー』
- [318] 『昭和十七年四月 時間表台本 教務課』
- [095] 『昭和十七年七月 臨時試業成績 東京音楽学校』
- [096] 『昭和十七年七月九日施行 甲 卒業學年試業成績 東京音楽学校』
- [091] 『昭和十七年 入試』
- 〔313〕 『昭和十七年十月ヨリ変更 教務掛』
- [127] 『昭和十七年、十八年成績』
- [054] 『昭和十八年二月 試験成績』
- [055] 『昭和十八年九月(甲)卒業學年試業成績 東京音樂學校』
- [314] 『時間表 自昭和十八年十月至昭和十九年三月 永久保存』
- 〔111〕 『昭和十九年三月[成績]』

- [100] 『昭和十九年 本科第一学年 臨時試験成績 本一』
- [101] 『昭和十九年 甲ノ乙』
- 〔491〕 『昭和二十年度入学者選抜方法』
- [319] 『昭和二十年度 授業時間割』
- [316] 『授業時間割永久保存[昭和20年]』
- [492] 『昭和廿一年度入学試験合格者(假入学)』
- [513] 『昭和二十一年十二月 入學試業成績』
- [056] 『昭和二十二年三月(二ノ一)卒業學年試業成績 東京音樂學校』
- [058] 『昭和二十三年三月(三ノ一)卒業学年試業成績 東京音楽学校』
- [474] 『昭和二十二年 臨時試験成績二ノー 東京音楽学校』
- [554] 『昭和二十二年度 入學試業成績 東京音楽学校』
- [558] 『昭和二十二年~二十七年 試験成績』
- [553] 『昭和二十二年度 二ノ二 臨時試験成績 東京音楽学校』
- [552] 『昭和二十二年度 平常点調 東京音楽学校』
- [232] 『昭和二十二年度 時間割 教務課』
- 〔556〕 『昭和二十三年 二ノー 臨時試験成績 東京音楽学校』
- 〔475〕『昭和二十三年度 臨時試験成績 東京音楽学校 二ノ二』
- [059] 『昭和二十三年度 三ノ二 卒業学年試業成績 東京音楽学校』
- [061] 『昭和二十三年度 三ノー 入学試験成績 東京音楽学校』
- 〔149〕 『昭和二十三年度 三ノ二 入学試験成績 東京音楽学校』
- [062] 『昭和二十三年度 三ノ三 入学試験成績 東京音楽学校』
- [555] 『昭和二十三年度(六月)平常点調 東京音楽学校』
- [063] 『昭和二十四年二月 (三ノ一) 卒業進級試験成績 東京音楽学校』
- [064] 『昭和二十四年二月 (三ノ二) 卒業進級試験成績 東京音楽学校』
- [066] 『昭和二十四年 成績一覧表 生徒掛』
- [557] 『昭和二十四年十一月十五日 平常成績調 東京音楽学校』
- [285] 『継続在学願綴』[選科生 昭和 24~25 年]
- [559] 『昭和二十五年二月 卒業学年試験成績 東京音楽学校』
- 〔476〕 『平常成績調 昭和二十五年』
- [067] 『昭和二十五年度 卆業学年試験成績 東京音楽学校 旧制』

『島崎教授寄贈 音楽會曲目 東京音楽學校』

(島崎赤太郎 ライプツィヒ留学中の演奏会プログラム 明治36年~39年)

詳細は資料④「島崎赤太郎ライプツィヒ時代オルガン関係演奏会プログラム」参照

〈東京藝術大学教演奏企画室楽器係所蔵資料〉

『楽器器械原簿』(明治26年~明治38年)

『楽器機械出納帳』(明治39年~)

『楽器監守簿』(大正13年~)

『楽器機械出納簿』(昭和3年~)

詳細は 資料②「東京音楽学校購入オルガンリスト」参照

『寄附関係資料 自明治二十四年 至昭和九年』

〈中田章関連資料〉

詳細は 資料⑤「中田章所蔵楽譜リスト」参照

〈眞篠俊雄関連資料〉

詳細は以下を参照。

資料⑥-1「真篠俊雄所蔵楽譜リスト」

資料⑥-2「Staatliche Akademische Hochschule für Musik in Berlin 1920-1921 演奏会プログラム」

資料⑥-3「眞篠俊雄ベルリン時代オルガン関係演奏会プログラム」

資料(7)「真篠文庫: 真篠俊雄関連楽譜群」

《二次資料》

Gellerman, Robert F., Gellerman's International Reed Organ Atlas Second Edition Lanham: Vestal Press, 1998

Katalog der Edition Peters. Leipzig: C. F. Peters. 1900

Nachtrag zum Haupt-Katalog der Edition Peters. Leipzig: C. F. Peters. 1906.

赤井励『オルガンの文化史』東京:青弓社、2006年。

秋元道雄『パイプ・オルガン歴史とメカニズム』東京: (株)ショパン、2002年。

生田澄江『瓜生繁子――もう一人の女子留学生』東京:株式会社文藝春秋、2009年。

牛山剛『夏がくれば思い出す 評伝 中田喜直』東京:新潮社、2009年。

活水学院百年史編集員会『活水学院百年史』長崎:活水学院、1980年。

草川宣雄『オルガン奏法の研究』東京:京文社、1929年。

草川宣雄編『世界音楽全集 第五巻』東京:春秋社、1931年。

倉田喜弘[他]『昭和前期音楽家総覧-現代音楽大観-下巻』東京:ゆまに書房、2008年。

玉川学園五十年史編纂委員会編『玉川學園五十年史』東京:玉川学園、1980年。

東京芸術大学音楽取調掛研究班『音楽教育成立への軌跡』東京:音楽之友社、1976年。

東京芸術大学芸術資料館『東京芸術大学芸術資料館 蔵品目録 音楽資料』東京:第一法規出版株式会社、1994年。

東京芸術大学奏楽堂記録委員会『レクイエムを聴け』東京:博英社、1983年。

東京芸術大学附属図書館『音楽取調掛時代(明治 13 年~明治 20 年)所蔵目録(1)洋書・楽譜』東京:東京芸術大学附属図書館、1969 年。

東京芸術大学百年史編纂委員会編『東京芸術大学百年史 演奏会篇 第一巻』東京:音楽之友社、1990年。

東京芸術大学百年史編纂委員会編『東京芸術大学百年史 演奏会篇 第二巻』東京:音楽之友 社、1998 年。

東京芸術大学百年史編纂委員会編『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第一巻』東京:音楽之友社、1987年。

東京芸術大学百年史編纂委員会編『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第二巻』東京:音楽之友社、2003年。

東京都台東区『旧東京音楽学校奏楽堂移築修理工事報告書』1987年。

徳川頼貞『薈庭楽話』東京:中央公論社、2021 年。

中村理平『キリスト教と日本の洋楽』東京:大空社、1996年。

南葵音楽文庫アカデミー『南葵文華』創刊号、和歌山:和歌山県立図書館、2020年。

日外アソシエーツ株式会社『明治大正人物事典 Ⅱ 文学・芸術・学術編』東京:紀伊國屋書店、2011年。

真篠俊雄[他]編『世界名曲体系 オルガン名曲全集3』東京:京文社、1932年。

松本雄二郎『明治の楽器製造者物語』東京:三省堂書店、1997年。

マナ オルゲルバウ『旧東京音楽学校 奏楽堂 1987 年修復』東京:マナ オルゲルバウ、リーフレット、発行年不明。

三浦啓市『ヤマハ草創譜』静岡:按可社、2012年。

村上紀史郎『音楽の殿様・徳川頼貞 1500 億円の〈ノーブレス・オブリージュ〉』東京:藤原書店、2012年。

諸星洪『玉川のおやじ 弟子の見たる小原先生』東京:玉川大学出版部、1978年。

谷根千工房編『よみがえれ!パイプ・オルガン永遠に響け上野の杜に―』東京:谷根千工房、1985年。

山根硯州『オルガン使用法及修理法』東京:東洋社、1903年。

吉田實[他]『日本のオルガン』東京:シャローム印刷出版事業部、1985年。

吉田實[他]『日本のオルガン Ⅱ』東京:シャローム印刷出版事業部、1992年。

和歌山県教育委員会『紀州徳川 400 年 南葵音楽文庫案内』東京:中央公論新社、2021 年。

秋元道雄「日本のオルガンの黎明」、『Organist』 3 巻、1976 年、13~15 頁。

安部規子「修猷館の英語教師・菊池武信の履歴について」、『日本英語教育史研究』25 巻、 2010年、23~48頁。

奥田耕天「回想」『Organist』15巻、1988年、4~9頁。

植村幸生「東京音楽学校公文書(教務関係)資料の概要」、『近代日本における音楽専門教育の成立と展開』平成 17~19 年度科学研究費補助金・基盤研究(B)研究成果報告書課題番号17320026、2008年、111~187頁。

小野亮祐「ライプツィヒ時代の嶋崎赤太郎:ライプツィヒ音大に残された資料を中心に」、 『広島大学大学院教育学研究科 音楽文化教育学研究紀要』24 巻、2012 年、39~45 頁。

- 小野亮祐「ドイツのオルガン教授と洋楽黎明期日本との接点についての試論-島崎赤太郎の「オルガン留学」を通しての検討-」、『関西楽理研究』30号、2013、46~56頁。
- 學校音楽研究會「學校音楽」四月號(島崎赤太郎先生追悼號) 東京:共益商社書店、1934 年。
- 金子純子「わが国におけるオルガンの歩み―明治初年から昭和 22 年まで―」、『オルガン研究』8巻、1980、61~73頁。
- 佐藤泰平 「日本の古いリードオルガン――現存する明治・大正・昭和初期のリードオルガン――」、『立教女学院短期大学紀要』 第26号、1994年、91~138頁。
- 周東美材「成城小学校の童謡教育」、『成城大学共通教育論集』3巻、2010年。
- 鈴木治「島崎赤太郎研究――留学の足跡――」、『音楽教育史研究』16 号、2013 年、1~12 頁。
- 鈴木治「島崎赤太郎研究(3) ―ライプツィヒ留学時代に聴いた演奏会―」、『礼拝音楽研究』 13 巻、2013 年、27~36 頁。
- 関根和江「音楽取調掛から東京音楽学校への軌跡――音楽取調掛時代楽譜受入・所蔵状況」、 『近代日本における音楽専門教育の成立と展開』平成 17~19 年度科学研究費補助 金・基盤研究(B)研究成果報告書課題番号 17320026、2008 年、10~39 頁。
- 竹中亨「明治期の洋楽留学生と外国人教師:ドイツとの関係を中心に」、『大阪大学大学院 文学研究科紀要』47巻、2007年、1~25頁。
- 田邊祐司「日本英語音声教育史:『英語発音秘訣』の著者 菊池武信の足跡を求めて」、『日本英語教育史研究』24巻、2009年、23~43頁。
- 中田恵子「旧東京音楽学校奏楽堂のアボット&スミス・オルガン」、『Japan Organist』 45 巻、2018 年、20~28 頁。
- 平沢博子「西洋音楽の真髄を伝えたお雇い外国人の生涯 ルドルフ・ディットリヒ物語」、 『おんかん』東京:音楽鑑賞教育、1998年10月~2003年3月。
- 藤井百合「玉川学園における 2 台のパイプ・オルガン比較考察及び歴史的背景-」『玉川学園女子短期大学紀要:論叢』8巻、1983年、57~83頁。
- 松本晴子「教育者としての小林宗作の成長の過程―5人との出会いをとおして―」『宮城学院女子大学発達科学研究』13巻、2013年、33~46頁。
- 森田真理子「木岡英三郎―日本におけるオルガン開拓者 その伝記と揺るぎない遺産―」、 『オルガン研究』38巻、2010年、1~37頁。

村田武雄「今はなき大オルガニスト / フリッツ・ハイトマン」、『シャルロッテンブルク宮 殿エオザンダー礼拝堂のアルプ・シュニットガー・オルガン』東京:キングレコー ド株式会社、1966 年。

「ハイトマン、フリッツ Heitmann, Fritz」、『ニューグローブ世界音楽大事典』東京:講談 社、1994年、12巻、422頁。

ヤマハ | 仕事の歴史 - パイプ・オルガン (yamaha.com)

https://jp.yamaha.com/products/contents/keyboards/pipeorgan/history/accessed October 20, 2021

謝辞

本論文を執筆するにあたりご指導をいただきました廣江理枝先生、塚原康子先生、大塚直哉先生、廣野嗣雄先生、大角欣矢先生に心より感謝申し上げます。多くの一次資料の閲覧に際しご助力いただきました、東京藝術大学大学史史料室の橋本久美子先生に御礼申し上げます。貴重な資料のご提供をいただきました中田章ご子孫中田基彦様、眞篠俊雄ご子孫真篠幸雄様、中田章関連情報のご提供をいただきました中田順子様、植田義子先生、釜萢善作関連情報のご提供をいただきました徳田佑子様、眞篠俊雄と玉川学園を中心に情報のご提供いただきました中村岩城様、眞篠俊雄関連および東京藝術大学最初期の情報をご提供いただきました松平郁子様に深く御礼申し上げます。

資料の閲覧および調査に際し東京藝術大学大学史史料室、楽器関係会計資料の調査に際東京藝術大学教務課演奏企画室、楽譜調査に際し東京藝術大学附属図書館、現存楽器調査に際し東京藝術大学大学美術館、横田宗隆オルガン制作研究所、信濃町教会、一部の会計資料閲覧に際し東京藝術大学音楽学部楽理科研究室のご協力をいただきました。ここに記して御礼申し上げます。

2021年10月29日 千田寧子